

大臣の、「今はなまじらひそ」と制しのたまふをだに聞き入れず、まじらひ出でてものしたまふ。いかなる折にかありけむ、殿上人あまた、おぼえことなる限り、この女御の御方に参りて物の音など調べ、なつかしきほどの拍子打ち加へてあそぶ。秋の夕べのただならぬに、宰相中将も寄りおはして、例ならず乱れてものなどのたまふを、人びとめづらしがりて、「なほ人よりことにも」とめづるに、この近江の君、人びとの中を押し分けて出でゐたまふ。「あなうたてや。こはなぞ」と引き入るれど、いとさがなげににらみて、張りゐたれば、わづらはしくて、「あうなきことやのたまひ出でむ」とつき交はすに、この世に目馴れぬまめ人をしも、「これぞな」などめでて、ささめき騒ぐ声いとしるし。人びといと苦しと思ふに、声いときはやかにて、

「沖つ舟よるべ波路に漂はば棹さし寄らむ泊り教へよ

棚なし小舟漕ぎ返り同じ人をや。あなわるや」と言ふを、いとあやしう、この御方には、かう用意なきこと聞こえぬものを、と思ひまはすに、この聞く人なりけり、とをかしうて、

よるべなみ風の騒がす舟人も思はぬ方に磯伝ひせず

とて、はしたなかめりとや。

いよ呆け疾れてものしたまふ。大将殿のおほかたの訪らひ、何ごとをも詳しう思しおきて、君達をば変はらず思ひかしづきたまへば、えしもかけ離れたまはず、まめやかなる方の頼みは同じことにてなむものしたまひける。姫君をぞ堪へがたく恋ひきこえたまへど、絶えて見せたてまつりたまはず。若き御心のうち、この父君を誰れも誰れも許しなう恨みきこえて、いよいよ隔てたまふことのみまされば、心細く悲しきに、男君たちは常に参り馴れつつ、かむの君の御ありさまなどを、おのづからことにふれてうち語りて、「まろらをも、らうたくなつかしうなむしたまふ。明け暮れをかしきことを好みてものしたまふ」など言ふに、うらやましう、かやうにても安らかに振る舞ふ身ならざりけむを嘆きたまふ。あやしう男女につけつつ、人にものを思はするかむの君にぞおはしける。

その年の十一月に、いとをかしき稚児をさへ抱き出でたまへれば、大将も思ふやうにめでたし、ともてかしづきたまふこと限りなし。そのほどのありさま、言はずとも思ひやりつべきことぞかし。父大臣も、おのづから思ふやうなる御宿世と思したり。わざとかしづきたまふ君達にも、御かたちなどは劣りたまはず。頭中将も、このかむの君をいとなつかしきはらからにて、睦びきこえたまふものから、さすがなる御けしきうちませつつ、宮仕ひにかひありてものしたまはましものをと、この若君のうつくしきにつけても、「今まで御子たちのおはせぬ嘆きを見たてまつるに、いかに面目あらまし」と、あまりのことをぞ思ひてのたまふ。公事はあるべきさまに知りなどしつつ、参りたまふことぞ、やがてかくてやみぬべかめる。さてもありぬべきことなりかし。

まことや、かの内の大殿の御むすめの、尚侍のぞみし君も、さるものの癖なれば、色めかしうさまよふ心さへ添ひて、もてわづらひたまふ。女御も、つひにあはあはしきことこの君ぞ引き出でむ、とともすれば御胸つぶしたまへど、

の御前をうち捨てて、こなたに渡りて御覽ず。呉竹の籬に、わぎとなう咲きかかりたるにほひ、いとおもしろし。「色に衣を」などのたまひて、

「思はずに井手の中道隔つとも言はでぞ恋ふる山吹の花

顔に見えつつ」などのたまふも、聞く人なし。かくさすがにもて離れたることは、このたびぞ思しける。げにあやしき御心のすさびなりや。かりの子のいと多かるを御覽じて、柑子、橘などやうに紛らはして、わぎとならずたてまつれたまふ。御文は、あまり人もぞ目立つるなど思して、すくよかに、

おぼつかなき月日も重なりぬるを、思はずなる御もてなしなりと恨みきこゆるも、御心ひとつにのみはあるまじう聞きはべれば、ことなるついでならでは、対面の難からむを口惜しう思ひたまふる。

など、親めき書きたまひて、

同じ巢にかへりしかひの見えぬかなる人か手ににぎるらむ
 などかさしもなど、心やましうなむ。

などあるを、大将も見たまひて、うち笑ひて、「女は、まことの親の御あたりにも、たはやすくうち渡り見えたてまつりたまはむこと、ついでなくてあるべきことにあらず。まして、なぞこの大臣のをりをり思ひ放たず恨み言はしたまふ」とつぶやくも、憎しと聞きたまふ。「御返りここにはえ聞こえじ」と、書きにくくおぼいたれば、「まろ聞こえむ」と代はるもかたはらいたしや。

巢隠れて数にもあらぬかりの子をいづ方にかは取り隠すべき

よろしからぬ御けしきにおどろきて。すぎずきしや。

と聞こえたまへり。「この大将の、かかるはかなしごと言ひたるも、まだこそ聞かざりつれ。めづらしう」とて笑ひたまふ。心のうちには、かく領じたるを、いとからしと思す。

かのもとの北の方は、月日隔たるままに、あさましとものを思ひ沈み、いよ

えのたまはぬ親にて、げにいかでかは対面もあらむ、とあはれなり。時々むつかしかりし御けしきを、心づきなう思ひきこえしなどは、この人にも知らせたまはぬことなれば、心ひとつに思し続くれど、右近はほのけしき見けり。いかなりけることならむとは、今に心得がたく思ひける。御返り、聞こゆるも恥づかしけれど、おぼつかなくやは、とて書きたまふ。

ながめする軒の雫に袖ぬれてうたかた人を偲ばざらめや

ほどふるころは、げにことなるつれづれもまさりはべりけり。あなかしこ。と、ゐやゐやしく書きなしたまへり。

引き広げて、玉水のこぼるるやうに思さるるを、人も見ばうたてあるべしと、つれなくもてなしたまへど、胸に満つ心地して、かの昔の、かむの君を朱雀院の後の切に取り籠めたまひし折など思し出づれど、さしあたりたることなればにや、これは世づかずぞあはれなりける。好いたる人は、心からやすかるまじきわざなりけり、今は何につけてか心をも乱らまし、似げなき恋のつまなりや、とさましわびたまひて、御琴掻き鳴らして、なつかしう弾きなしたまひし爪音思ひ出でられたまふ。あづまの調べをすが掻きて、「玉藻はな刈りそ」と歌ひすさびたまふも、恋しき人に見せたらば、あはれ過ぐすまじき御さまなり。

内にも、ほのかに御覽ぜし御かたちありさまを心にかけてたまひて、「赤裳垂れ引き去にし姿を」と、憎げなる古事なれど、御言種になりてなむ眺めさせたまひける。御文は忍び忍びにありけり。身を憂きものに思ひしみたまひて、かやうのすさびごとをもあいなく思しければ、心とけたる御いらへも聞こえたまはず、なほかのありがたかりし御心おきてを、かたがたにつけて思ひしみたまへる御ことぞ忘れざりける。

三月になりて、六条殿の御前の、藤、山吹のおもしろき夕ばえを見たまふにつけても、まづ見るかひありてみたまへりし御さまのみ思し出でらるれば、春

なれば」とぞ聞こえたまひける。

六条殿ぞ、いとゆくりなく本意なしと思せど、などかはあらむ。女も、塩やく煙のなびきけるかたをあさまし、と思せど、盗みもて行きたらましと思しなずらへて、いとうれしく心地おちるぬ。かの入りみさせたまへりしことを、いみじう怨じきこえさせたまふも心づきなく、なほなほしき心地して、世には心解けぬ御もてなし、いよいよけしきあし。かの宮にも、さこそたけうのたまひしか、いみじう思しわぶれど、絶えて訪れず、ただ思ふことかなひぬる御かしづきに、明け暮れいとなみて過ぐしたまふ。

二月にもなりぬ。大殿は、さてもつれなきわぎなりや、いとかう際々しうとしも思はでたゆめられたるねたさを、人わろく、すべて御心にかからぬ折なく、恋しう思ひ出でられたまふ。宿世などいふものおろかならぬことなれど、わがあまりなる心にて、かく人やりならぬものは思ふぞかし、と起き臥し面影にぞ見えたまふ。大将のをかしやかにわららかなるけもなき人に添ひるたらむに、はかなき戯れごとまつましようあいなく思されて念じたまふを、雨いたう降りていとのとやかなるころ、かやうのつれづれも紛らはし所に渡りたまひて、語らひたまひしさまなどのいみじう恋しければ、御文たてまつりたまふ。右近がもとに忍びて遣はすも、かつは思はむことを思すに、何ごともえ続けたまはで、ただ思はせたることどもぞありける。

かきたれてのどけきころの春雨にふるさと人をいかに偲ぶや

つれづれに添へて、うらめしう思ひ出でらるること多うはべるを、いかでかわき聞こゆべからむ。

などあり。

隙に忍びて見せたてまつれば、うち泣きて、わが心にもほど経るままに、思ひ出でられたまふ御さまを、まほに、恋しや、いかで見たてまつらむ、などは

「さらば。物懲りしてまた出だし立てぬ人もぞある。いとこそからけれ、人より先に進みにし心ぎしの、人に後れてけしき取り従ふよ。昔のなにがしが例も引き出でつべき心地なむする」とて、まことにいと口惜しと思し召したり。聞こし召ししにもこよなき近まさを、はじめよりさる御心なからむにてだにも、御覧じ過ぐすまじきを、まいていとねたう飽かず思さる。されど、ひたぶるに浅き方に思ひ疎まれじとて、いみじう心深きさまにのたまひ契りてなつけたまふも、かたじけなう、われはわれと思ふものと思す。御輦車寄せて、こなたかなたの御かしづき人ども心もとながり、大将もいとのむつかしうたち添ひ騒ぎたまふまで、えおはしまし離れず、「かういと厳しき近き守りこそむつかしけれ」と憎ませたまふ。

九重に霞隔てば梅の花ただ香ばかりも匂ひ来じとや

ことなることなき言なれども、御ありさまけはひを見たてまつるほどは、をかしくもやありけむ。「野をなつかしみ明かいつべき夜を、惜しむべかめる人も、身をつみて心苦しうなむ。いかでか聞こゆべき」と思し悩むも、いとかたじけなしと、見たてまつる。

かばかりは風にもつてよ花の枝に立ち並ぶべき匂ひなくとも

さすがにかけ離れぬけはひをあはれと思しつつ、返り見がちにて渡らせたまひぬ。

やがて、今宵かの殿にと思しまうけたるを、かねては許されあるまじきにより、漏らしきこえたまはで、「にはかにいと乱り風邪の悩ましきを、心やすき所にうち休みはべらむほど、よそよそにてはいとおぼつかなくはべらむを」と、おいらかに申しないたまひて、やがて渡したてまつりたまふ。父大臣、にはかなるを、儀式なきやうにやと思せど、あながちにさばかりのことを言ひ妨げむも、人の心おくべしと思せば、「ともかくも。もとより進退ならぬ人の御こと

たまふ。

月の明かきに、御かたちはいふよしなくきよらにて、ただかの大臣の御けはひに違ふところなくおはします。かかる人はまたもおはしけり、と見たてまつりたまふ。かの御心ばへは浅からぬも、うたてもの思ひ加はりしを、これはなごかはさしもおぼえさせたまはむ。いとなつかしげに思ひしことの違ひにたる怨みをのたまはするに、面おかむかたなくぞおぼえたまふや。顔をもて隠して、御いらへもえ聞こえたまはねば、「あやしうおぼつかなきわざかな。よろこびなども、思ひ知りたまはむと思ふことあるを、聞き入れたまはぬさまにのみあるは、かかる御癖なりけり」とのたまはせて、

「などでかくはひあひがたき紫を心に深く思ひそめけむ

濃くなり果つまじきにや」と仰せらるるさま、いと若くきよらに恥づかしきを、違ひたまへるところやある、と思ひ慰めて聞こえたまふ。宮仕への労もなくて、今年加階したまへる心にや、

「いかならむ色とも知らぬ紫を心してこそ人は染めけれ

今よりなむ思ひたまへ知るべき」と聞こえたまへば、うち笑みて、「その今より染めたまはむこそかひなかべいことなれ。愁ふべき人あらば、ことわり聞かまほしくなむ」といたう怨みさせたまふ御けしきの、まめやかにわづらはしければ、いとうたてもあるかなとおぼえて、をかしきさまをも見えたてまつらじ、むつかしき世の癖なりけりと思ふに、まめだちてさぶらひたまへば、え思すさまなる乱れごともうち出でさせたまはで、やうやうこそは目馴れめと思しけり。

大将はかく渡らせたまへるを聞きたまひて、いとど静心なければ、急ぎまどはしたまふ。みづからも似げなきことも出で来ぬべき身なりけり、と心憂きに、えのどめたまはず。まかでさせたまふべきさまつきづきしきことづけども作り出でて、父大臣など、かしこくたばかりたまひてなむ、御暇許されたまひける。

ひ乱れたるさまして、竹河謡ひけるほどを見れば、内の大殿の君達は四五人ばかり、殿上人のなかに声すぐれ、かたちきよげにてうち続きたまへる、いとめでたし。童なる八郎君は、むかひ腹にて、いみじうかしづきたまふが、いとうつくしうて、大将殿の太郎君と立ち並みたるを、かむの君もよそ人と見たまはねば、御目とまりけり。やむごとなくまじらひ馴れたまへる御方々よりも、この御局の袖口、おほかたのけはひ今めかしう、同じものの色あひ重なりなれど、ものよりことにはなやかなり。正身も女房たちも、かやうに御心やりてしばしは過ぐいたまはましと思ひあへり。皆同じごとかづけわたす綿のさまも、匂ひ香ことにらうらうじうしないたまひて、こなたは水駅なりけれど、けはひにぎははしく、人びと心懸想しそして、限りある御あるじなどのことどももしたるさま、ことに用意ありてなむ大将殿せさせたまへりける。

宿直所にゐたまひて、日一日聞こえ暮らしたまふことは、「夜さりまかでさせたてまつりてむ。かかるついでにと思し移るらむ御宮仕へなむやすからぬ」とのみ、同じことを責めきこえたまへど、御返りなし。さぶらふ人びとぞ、「大臣の、心あわたたしきほどならで、まれまれの御参りなれば、御心ゆかせたまふばかり、許されありてをまかでさせたまへ、と聞こえさせたまひしかば、今宵は、あまりすがすがしうや」と聞こえたるを、いとつらしと思ひて、「さばかり聞こえしものを、さも心かなはぬ世かな」と、うち嘆きてゐたまへり。兵部卿宮、御前の御遊びにさぶらひたまひて、静心なく、この御局のあたり思ひやられたまへば、念じあまりて聞こえたまへり。大将は司の御曹司にぞおはしける、これよりとて取り入れたれば、しぶしぶに見たまふ。

深山木に羽うち交はしゐる鳥のまたなくねたき春にもあるかな

さへづる声も耳とどめられてなむ。

とあり。いとほしう面赤みて、聞こえむかたなく思ひゐたまへるに、上渡らせ

さまに思したなり。兵部卿宮なども怨じたまふと聞きしを、さいへど思ひやり深うおはする人にて、聞きあきらめ、恨み解けたまひにたなり。おのづから人の仲らひは、忍ぶることと思へど、隠れなきものなれば、しか思ふべき罪もなしとなむ思ひはべる」とのたまふ。

かかることどもの騒ぎに、かむの君の御けしきいよいよ晴れ間なきを、大将はいとほしと思ひあつかひきこえて、この参りたまはむとありしことも絶え切れて、妨げきこえつるを、内にもなめく心あるさまに聞こしめし、人びとも思すところあらむ、公人を頼みたる人はなくやはある、と思ひ返して、年返りて参らせたてまつりたまふ。男踏歌ありければ、やがてそのほどに、儀式いといまめかしく二なくて参りたまふ。かたがたの大臣たち、この大将の御勢ひさへさしあひ、宰相中将ねむごろに心しらひきこえたまふ。せうとの君達も、かかる折にと集ひ、追従し寄りて、かしづきたまふさまいとめでたし。承香殿の東面に御局したり。西に宮の女御はおはしければ、馬道ばかりの隔てなるに、御心のうちは遙かに隔たりけむかし。御方々いづれとなく挑み交はしたまひて、内わたり心にくくをかしきころほひなり。ことに乱りがはしき更衣たち、あまたもさぶらひたまはず。中宮、弘徽殿の女御、この宮の女御、左の大殿の女御などさぶらひたまふ。さては、中納言、宰相の御むすめ二人ばかりぞさぶらひたまひける。

踏歌は方々に里人参り、さまことにけにぎははしき見物なれば、誰も誰もきよらを尽くし、袖口の重なりこちたくめでたくとのへたまふ。春宮の女御も、いとほなやかにもてなしたまひて、宮はまだ若くおはしませど、すべていと今めかし。御前、中宮の御方、朱雀院とに参りて、夜いたう更けにければ、六条の院には、このたびは所狭しとはぶきたまふ。朱雀院より帰り参りて、春宮の御方々めぐるほどに夜明けぬ。ほのぼのとをかしき朝ぼらけに、いたく酔

「何か。ただ時に移る心の、今はじめて変はりたまふにもあらず。年ごろ思ひうかれたまふさま聞きわたりても久しくなりぬるを、いづくをまた思ひ直るべき折とか待たむ。いとどひがひがしきさまにのみこそ見え果てたまはめ」と諫め申したまふ、ことわりなり。「いと若々しき心地もしはべるかな。思ほし捨つまじき人びともはべればと、のどかに思ひはべりける心のおこたりを、かへすがへす聞こえてもやるかたなし。今は、ただなだらかに御覧じ許して、罪さりどころなう、世人にもことわらせてこそ、かやうにももてないたまはめ」など、聞こえわづらひておはす。「姫君をだに見たてまつらむ」と聞こえたまへれど、出だしたてまつるべくもあらず。男君たち、十なるは殿上したまふ、いとうつくし。人にほめられて、かたちなどようはあらねど、いとらうらうじう、ものの心やうやう知りたまへり。次の君は、八つばかりにて、いとらうたげに、姫君にもおぼえたれば、かき撫でつつ、「あこをこそは、恋しき御形見にも見るべかめれ」など、うち泣きて語らひたまふ。宮にも御けしき賜はらせたまへど、「風邪おこりて、ためらひはべるほどにて」とあれば、はしたなくて出でたまひぬ。

こ君達をば車に乗せて、語らひおはす。六条殿にはえ率ておはせねば、殿にとどめて、「なほここにあれ。来て見むにも心やすかるべく」とのたまふ。うち眺めていと心細げに見送りたるさまどもいとあはれなるに、もの思ひ加はりぬる心地すれど、女君の御さまの見るかひありてめでたきに、ひがひがしき御さまを思ひ比ぶるにもこよなくて、よろづを慰めたまふ。

うち絶えて訪れもせず、はしたなかりしにことづけ顔なるを、宮にはいみじうめざましがり嘆きたまふ。春の上も聞きたまひて、「ここにさへ恨みらるるゆゑになるが苦しきこと」と嘆きたまふを、大臣の君、いとほしと思して、「難きことなり。おのが心ひとつにもあらぬ人のゆかりに、内にも心おきたる

ことどももありしか。それをこの生の面目にてやみぬべきなめり」とのたまふに、いよいよ腹立ちて、まがまがしきことなどを言ひ散らしたまふ。この大北の方ぞ、さがな者なりける。

大将の君、かく渡りたまひにけるを聞きて、いとあやしう、若々しき仲らひのやうに、ふすべ顔にてもものしたまひけるかな、正身は、しかひききりに際々しき心もなきものを、宮のかく軽々しうおはする、と思ひて、君達もあり、人目もいとほしきに思ひ乱れて、かむの君に、「かくあやしきことなむはべる。なかなか心やすくは思ひたまへなせど、さて片隅に隠ろへてもありぬべき人の心やすさを、おだしう思ひたまへつるに、にはかにかの宮ものしたまふならむ。人の聞き見ること情けなきを、うちほのめきて参り来なむ」とて出でたまふ。よき上の御衣、柳の下襲、青鈍の綺の指貫着たまひて引きつくろひたまへる、いとものものし。などかは似げなからむと人びとは見たてまつるを、かむの君は、かかることどもを聞きたまふにつけても、身の心づきなう思し知らるれば、見もやりたまはず。

宮に恨み聞こえむとて参うでたまふままに、まづ殿におはしたれば、木工の君など出で来て、ありしさま語りきこゆ。姫君の御ありさま聞きたまひて、男々しく念じたまへど、ほろほろとこぼるる御けしき、いとあはれなり。「さても、世の人にも似ずあやしきことどもを見過ぐすここの年ごろの心ざしを、見知りたまはずありけるかな。いと思ひのままならむ人は、今までも立ちとまらるべくやはある。よし、かの正身は、とてもかくても、いたづら人と見えたまへば、同じことなり。幼き人びとも、いかやうにもてなしたまはむとすらむ」とうち嘆きつつ、かの真木柱を見たまふに、手も幼けれど、心ばへのあはれに恋しきままに、道すがら涙おしのごひつつ参うでたまへれば、対面したまふべくもあらず。

御前なる人びとも、さまざまに悲しく、さしも思はぬ木草のもとさへ、恋しからむことと目とどめて、鼻すすりあへり。木工の君は、殿の御方の人にてとどまるに、中將の御許、

「浅けれど石間の水は澄み果てて宿もる君やかけ離るべき

思ひかけざりしことなり。かくて別れたてまつらむことよ」と言へば、木工、

「ともかくも岩間の水の結ばほれかけとむべくも思ほえぬ世を

いでや」とてうち泣く。御車引き出でて振り返るも、またはいかで見むとはかなき心地す。梢をも目とどめて、隠るるまでぞ返り見たまひける。君が住むゆゑにはあらで、ここら年経たまへる御住みかの、いかでか偲びどころなくはあらむ。

宮には待ち取り、いみじう思したり。母北の方泣き騒ぎたまひて「太政大臣をめでたきよすがと思ひきこえたまへれど、いかばかりの昔の仇敵にかおはしけむとこそ思ほゆれ。女御をも、ことに触れはしたなくもてなしたまひしかど、それは、御仲の恨み解けざりしほど、思ひ知れとにこそはありけめと思しのたまひ、世の人も言ひなしだに、なほさやはあるべき、人一人を思ひかしづきたまはむゆゑは、ほとりまでもにほふ例こそあれと心得ざりしを、ましてかく末に、すずろなる継子かしづきをして、おのれ古したまへるいとほしみに、実法なる人のゆるぎどころあるまじきをとて、取り寄せもてかしづきたまふは、いかがつらからぬ」と言ひ続けののしりたまへば、宮は、「あな聞きにくや。世に難つけられたまはぬ大臣を、口にまかせてなおとしめたまひそ。かしこき人は、思ひおき、かかる報いもがなと思ふことこそはものせられけめ。さ思はるるわが身の不幸なるにこそはあらめ。つれなうて、皆かの沈みたまひし世の報いは、浮かべ沈め、いとかしこくこそは思ひわたいたまふめれ。おのれ一人をば、さるべきゆかりと思ひてこそは、一年もさる世の響きに、家よりあまる

は見果てつれば、この世に跡とむべきにもあらず、ともかくもさすらへなむ。生ひ先遠うて、さすがに散りぼひたまはむありさまどもの、悲しうもあべいかな。姫君は、となるともかうなるとも、おのれに添ひたまへ。なかなか男君たちは、えさらず参うで通ひ見えたてまつらむに、人の心とどめたまふべくもあらず、はしたなうてこそただよはめ。宮のおはせむほど、かたのやうに交じらひをすとも、かの大臣たちの御心にかかれる世にて、かく心おくべきわたりぞとさすがに知られて、人にもなり立たむこと難し。さりとして山林に引き続きまじらむこと、後の世までいみじきこと」と泣きたまふに、みな深き心は思ひ分かねど、うちひそみて泣きおはさうず。「昔物語などを見るにも、世の常の心ざし深き親だに、時に移ろひ、人に従へば、おろかにのみこそなりけれ。ましてかたのやうにて、見る前にだに名残なき心は、かかりどころありてももてないたまはじ」と、御乳母どもさし集ひて、のたまひ嘆く。

日も暮れ、雪降りぬべき空のけしきも心細う見ゆる夕べなり。「いたう荒れはべりなむ。早う」と、御迎への君達そそのかしきこえて、御目おし拭ひつつ眺めおはす。姫君は、殿いとななうしたてまつりたまふならひに、見たてまつらではいかでかあらむ、今なども聞こえて、また会ひ見ぬやうもこそあれ、と思ほすに、うつぶし伏して、え渡るまじ、と思ほしたるを、「かく思したるなむいと心憂き」などこしらへきこえたまふ。ただ今も渡りたまはなむと待ちきこえたまへど、かく暮れなむに、まさに動きたまひなむや。常に寄りゐたまふ東面の柱を人に譲る心地したまふもあはれにて、姫君、椀皮色の紙の重ね、ただいささかに書いて、柱の干割れたるはさまに、笄の先して押し入れたまふ。今はとて宿かれぬとも馴れ来つる真木の柱はわれを忘るな
えも書きやらで泣きたまふ。母君、「いでや」とて、

馴れきとは思ひ出づとも何により立ちとまるべき真木の柱ぞ

りさまに、いとど心を分くべくもあらずおぼえて心憂ければ、久しう籠もりたまへり。修法などし騒げど、御もののけこちたくおこりてののしるを聞きたまへば、あるまじき疵もつき、恥ぢがましきことかならずありなむ、と恐ろしうて、寄りつきたまはず。

殿に渡りたまふ時も、異方に離れるたまひて、君達ばかりをぞ、呼び放ちて見たてまつりたまふ。女一所、十二三ばかりにて、また次々男二人なむおはしける。近き年ごろとなりては、御仲も隔たりがちにてならはしたまへれど、やむごとなう立ち並ぶ方なくてならひたまへれば、今は限りと見たまふに、さぶらふ人びともいみじう悲し、と思ふ。

父宮聞きたまひて、「今は、しかかけ離れてもて出でたまふらむに、さて心強くものしたまふ、いとおもなう人笑へなることなり。おのがあらむ世の限りは、ひたぶるにしも、などか従ひくづほれたまはむ」と聞こえたまひて、にはかに御迎へあり。北方、御心地すこし例になりて、世の中をあさましよう思ひ嘆きたまふに、かくと聞こえたまへれば、しひて立ちとまりて、人の絶え果てむさまを見果てて思ひとぢめむも、今すこし人笑へにこそあらめ、など思し立つ。御せうとの君達、兵衛督は上達部におはすればことごとしとて、中将、侍従、民部大輔など、御車三つばかりしておはしたり。さこそはあべかめれ、とかねて思ひつることなれど、さしあたりて今日を限りと思へば、さぶらふ人びとも、ほろほろと泣きあへり。年ごろならひたまはぬ旅住みに、狭くはしたなくては、いかでかあまたはさぶらはむ、かたへはおのおの里にまかでて、しづませたまひなむに、など定めて、人びとおのがじしはかなきものどもなど里に払ひやりつつ、乱れ散るべし。御調度どもは、さるべきは皆したため置きなどするまに、上下泣き騒ぎたるは、いとゆゆしく見ゆ。君たちは、何心もなくてありきたまふを、母君みな呼び据ゑたまひて、「みづからは、かく心憂き宿世、今

心さへ空に乱れし雪もよにひとり冴えつる片敷の袖

堪へがたくこそ。

と、白き薄様につつやかに書いたまへれど、ことにをかしきところもなし。手はいときよげなり。才かしくくなどぞものしたまひける。かむの君、夜がれを何とも思されぬに、かく心ときめきしたまへるを見も入れたまはねば、御返りなし。男胸つぶれて、思ひ暮らしたまふ。

北の方はなほいと苦しげにしたまへば、御修法など始めさせたまふ。心のうちにも、このころばかりだに、ことなくうつし心にあらせたまへ、と念じたまふ。まことの心ばへのあはれなるを見ず知らずは、かうまで思ひ過ぐすべくもなきけうときかな、と思ひゐたまへり。

暮るれば、例の急ぎ出でたまふ。御装束のことなども、めやすくしなしたまはず、世にあやしううちあはぬさまにのみむつかりたまふを、あぎやかなる御直衣などもえ取りあへたまはで、いと見苦し。よべのは焼けとほりて、疎ましげに焦がれたるにほひなどもことやうなり。御衣どもに移り香もしみたり。ふすべられけるほどあらはに、人も倦じたまひぬべければ、脱ぎ替へて、御湯殿など、いたうつくろひたまふ。木工の君、御薰物しつつ、

「ひとりゐて焦がるる胸の苦しきに思ひあまれる炎とぞ見し

名残なき御もてなしは、見たてまつる人だに、ただにやは」と、口おほひてゐたるまみ、いといたし。されど、いかなる心にてかやうの人にもものを言ひけむなどのみぞおぼえたまひける、情けなきことよ。

「憂きことを思ひ騒げばさまざまにくゆる煙ぞいとど立ちそふ

いとことのほかなることどもの、もし聞こえあらば、中間になりぬべき身なめり」とうち嘆きて、出でたまひぬ。

一夜ばかりの隔てだに、まためづらしうをかしさまさりておぼえたまふあ

れど、いとあぎやかに男々しきさまして、ただ人と見えず、心恥づかしげなり。

侍に人びと声して、「雪すこし隙あり。夜は更けぬらむかし」など、さすがにまほにはあらで、そそのかしきこえて、声づくりあへり。中将、木工などに「あはれの世や」などうち嘆きつつ語らひて臥したるに、正身はいみじう思ひしづめて、らうたげに寄り臥したまへりと見るほどに、にはかに起き上がりて、大きな籠の下なりつる火取りを取り寄せて、殿の後ろに寄りて、さと沃かけたまふほど、人のややみあふるほどもなう、あさましきに、あきれてものしたまふ。さるこまかなる灰の目鼻にも入りて、おぼはれてものもおぼえず。払ひ捨てたまへど、立ち満ちたれば、御衣ども脱ぎたまひつ。うつし心にてかくしたまふぞと思はば、またかへりみすべくもあらずあさましけれど、例の御ものけの人に疎ませむとするわざと、御前なる人びともいとほしう見たてまつる。立ち騒ぎて御衣どもたてまつり替へなどすれど、そこらの灰の鬢のわたりにも立ちのぼり、よろづの所に満ちたる心地すれば、きよらを尽くしたまふわたりには、さながら参うでたまふべきにもあらず。心違ひとはいひながら、なほめづらしう見知らぬ、人の御ありさまなりや、と爪弾きせられ、疎ましうなりて、あはれと思ひつる心も残らねど、このころ荒立てては、いみじきこと出で来なむと思ししづめて、夜中になりぬれど、僧など召して加持参り騒ぐ。呼ばひののしりたまふ声など、思ひ疎みたまはむにことわりなり。

夜一夜、打たれ引かれ泣きまどひ明かしたまひて、すこしうち休みたまへるほどに、かしこへ御文たてまつれたまふ。

よべにはかに消え入る人のはべしにより、雪のけしきもふり出でがたく、やすらひはべしに、身さへ冷えてなむ。御心をばさるものにて、人いかに取りなしはべりけむ。

と、きすくに書きたまへり。

むや。人の御親げなくこそものしたまふべかめれ。かかることの聞こえあらば、いとど苦しかるべきこと」など、日一日入りみて語らひ申したまふ。

暮れぬれば、心も空に浮きたちて、いかで出でなむと思ほすに、雪かきたれて降る。かかる空にふり出でむも人目いとほしう、この御けしきも憎げにふすべ恨みなどしたまはば、なかなかことつけて、われもむかひ火つくりであるべきを、いとおいらかにつれなうもてなしたまへるさまの、いと心苦しければ、いかにせむ、と思ひ乱れつつ、格子などもさながら、端近ううち眺めてゐたまへり。北の方けしきを見て、「あやにくなめる雪を、いかで分けたまはむとすらむ。夜も更けぬめりや」とそそのかしたまふ。今は限り、とどむとも、と思ひめぐらしたまへるけしきいとあはれなり。「かかるには、いかでか」とのたまふものから、「なほこのころばかり。心のほどを知らで、とかく人の言ひなし、大臣たちも左右に聞き思さむことを憚りてなむ、とだえあらむはいとほしき。思ひしづめてなほ見果てたまへ。ここになど渡しては心やすくはべりなむ。かく世の常なる御けしき見えたまふ時は、ほかさまに分くる心も失せてなむ、あはれに思ひきこゆる」など語らひたまへば、「立ちとまりたまひても、御心のほかならむは、なかなか苦しうこそあるべけれ。よそにても、思ひだにおこせたまはば、袖の氷も解けなむかし」など、なごやかに言ひゐたまへり。

御火取り召して、いよいよ焚きしめさせたてまつりたまふ。みづからは萎えたる御衣ども、うちとけたる御姿、いとど細うか弱げなり。しめりておはする、いと心苦し。御目のいたう泣き腫れたるぞすこしものしけれど、いとあはれと見る時は、罪なう思して、いかで過ぐしつる年月ぞと、名残なう移ろふ心のいと軽きぞやとは思ふ思ふ、なほ心懸想は進みて、そら嘆きをうちしつつ、なほ装束したまひて、小さき火取り取り寄せて、袖に引き入れてしめゐたまへり。なつかしきほどに萎えたる御装束に、かたちもかの並びなき御光にこそおさる

ものを思ひはべらず」とて、うち背きたまへる、らうたげなり。いとささやかなる人の、常の御悩みに瘦せ衰へ、ひはづにて髪いとけうらにて長かりけるが、わけたるやうに落ち細りて、削ることもをささしたまはず、涙にまつはれたるはいとあはれなり。こまかに匂へるところはなくて、父宮に似たてまつりてなまめいたるかたちしたまへるを、もてやつしたまへれば、いづこのはなやかなるけはひかはあらむ。「宮の御ことを軽くはいかが聞こゆる。恐ろしう、人聞きかたはになのたまひなしそ」とこしらへて、「かの通ひはべる所のいとまばゆき玉の台に、うひうひしう、きすくなるさまにて出で入るほども、かたがたに人目たつらむとかたはらいなければ、心やすく移ろはしてむ、と思ひはべるなり。太政大臣の、さる世にたぐひなき御おぼえをばさらにも聞こえず、心恥づかしういたり深うおはすめる御あたりに、憎げなること漏り聞こえは、いとなむいとほしうかたじけなかるべき。なだらかにて、御仲よくて語らひてものしたまへ。宮に渡りたまへりとも、忘るることははべらじ。とてもかうても、今さらに心ざしの隔たることはあるまじけれど、世の間こえ人笑へに、まろがためにも軽々しうなむはべるべきを、年ごろの契り違へず、かたみに後見むと思せ」とこしらへ聞こえたまへば、「人の御つらさは、ともかくも知りきこえず。世の人にも似ぬ身の憂きをなむ、宮にも思し嘆きて、今さらに人笑へなることと御心を乱りたまふなれば、いとほしういかで見えたてまつらむとなむ。大殿の北の方と聞こゆるも、他人にやはものしたまふ。かれは知らぬさまにて生ひ出でたまへる人の、末の世にかく人の親だちもてないたまふつらさをなむ思ほしのたまふなれど、ここにはともかくも思はずや。もてないたまはむさまを見るばかり」とのたまへば、「いとようのたまふを、例の御心違ひにや、苦しきことも出で来む。大殿の北の方の知りたまふことにもはべらず。いつき女のやうにてものしたまへば、かく思ひ落とされたる人の上までは知りたまひな

を、親の御あたりといひながら、今は限りの身にて、たち返り見えたてまつらむこと、と思ひ乱れたまふに、いとど御心地もあやまりて、うちはへ臥しわづらひたまふ。本性はいと静かに心よく子めきたまへる人の、時々心あやまりして人に疎まれぬべきことなむうち混じりたまひける。

住まひなどのあやしうしどけなく、もののきよらもなくやつして、いと埋れいたくもてなしたまへるを、玉を磨ける目移しに心もとまらねど、年ごろの心ざしひき替ふるものならねば、心にはいとあはれと思ひきこえたまふ。「昨日今日のいと浅はかなる人の御仲らひだに、よろしき際になれば、皆思ひのどむる方ありてこそ見果つなれ。いと身も苦しげにもてなしたまひつれば、聞こゆべきこともうち出で聞こえにくくなむ。年ごろ契りきこゆることにはあらずや。世の人にも似ぬ御ありさまを、見たてまつり果てむとこそはこころ思ひしづめつつ過ぐし来るに、えさしもあり果つまじき御心おきてに、思し疎むな。幼き人びともはべれば、とぎまかうぎまにつけておろかにはあらじと聞こえわたるを、女の御心の乱りがはしきままに、かく恨みわたりたまふ。ひとわたり見果てたまはぬほど、さもありぬべきことなれど、まかせてこそ今しばし御覧じ果てめ。宮の聞こし召し疎みて、さはやかにふと渡したてまつりてむ、と思しのたまふなむ、かへりていと軽々しき。まことに思しおきつることにやあらむ、しばし勘事したまふべきにやあらむ」とうち笑ひてのたまへる、いとねたげに心やまし。御召人だちて仕うまつり馴れたる木工の君、中將の御許などいふ人びとだに、ほどにつけつつやすからずつらし、と思ひきこえたるを、北の方はうつし心ものしたまふほどにて、いとなつかしううち泣きてゐたまへり。「みづからをほけたり、ひがひがしとのたまひ恥ぢしむるは、ことわりなることになむ。宮の御ことをさへ取り混ぜのたまふぞ、漏り聞きたまはむはいとほしう、憂き身のゆかり軽々しきやうなる。耳馴れにてはべれば、今はじめていかにも

えたまふ。かしこに渡りたまはむことを、とみにも許しきこえたまふまじき御けしきなり。

内へ参りたまはむことを、やすからぬことに大将思せど、そのついでにや、まかでさせたてまつらむの御心つきたまひて、ただあからさまのほどを許しきこえたまふ。かく忍び隠ろへたまふ御ふるまひも、ならひたまはぬ心地に苦しければ、わが殿のうち修理ししつらひて、年ごろは荒らし埋もれ、うち捨てたまへりつる御しつらひ、よろづの儀式を改めいそぎたまふ。

北の方の思し嘆くらむ御心も知りたまはず、かなしうしたまひし君達をも目にもとめたまはず、なよびかに情け情けしき心うちまじりたる人こそ、とぎまかうぎまにつけても、人のため恥がましからむことをば推し量り思ふところもありけれ、ひたおもむきにすくみたまへる御心にて、人の御心動きぬべきこと多かり。女君、人に劣りたまふべきことなし。人の御本性も、さるやむごとなき父親王のいみじうかしづきたてまつりたまへる、おぼえ世に軽からず、御かたちなどもいとようおはしけるを、あやしう執念き御もののけにわづらひたまひて、この年ごろ人にも似たまはず、うつし心なき折々多くものしたまひて、御仲もあくがれてほど経にけれど、やむごとなきものとはまた並ぶ人なく思ひきこえたまへるを、めづらしう御心移る方の、なのめにだにあらず人にすぐれたまへる御ありさまよりも、かの疑ひおきて皆人の推し量りしことさへ、心きよくて過ぐいたまひけるなどを、ありがたうあはれと思ひましきこえたまふもことわりになむ。

式部卿宮間こし召して、「今は、しか今めかしき人を渡してもてかしづかむ片隅に、人悪ろくて添ひものしたまはむも人聞きやさしかるべし。おのがあらむこなたは、いと人笑へなるさまに従ひなびかでもものしたまひなむ」とのたまひて、「宮の東の対を払ひしつらひて、渡したてまつらむ」と思しのたまふ

ないたまひて、すくよかなる折もなくしをれたまへるを、かくて渡りたまへれば、すこし起き上がりたまひて、御几帳にはた隠れておはす。殿も用意ことに、すこしけけしきさまにもてないたまひて、おほかたのことどもなど聞こえたまふ。すくよかなる世の常の人にならひては、まして言ふ方なき御けはひありさまを見知りたまふにも、思ひのほかなる身の置きどころなく恥づかしきにも、涙ぞこぼれける。やうやうこまやかなる御物語になりて、近き御脇息に寄りかかりて、すこしのぞきつつ聞こえたまふ。いとをかしげに、面瘦せたまへるさまの、見まほしうらうたいことの添ひたまへるにつけても、よそに見放つもありなる心のすさびぞかし、と口惜し。

「おりたちて汲みは見ねども渡り川人の瀬とはた契らざりしを

思ひのほかなりや」とて、鼻うちかみたまふけはひ、なつかしうあはれなり。女は顔を隠して、

みつせ川渡らぬさきにいかでなほ涙の滲の泡と消えなむ

「心幼なの御消えどころや。さても、かの瀬は避き道なかなるを、御手の先ばかりは引き助けきこえてむや」とほほ笑みたまひて、「まめやかには、思し知ることあらむかし。世になき痴れ痴れしさも、またうしろやすさも、この世にたぐひなきほどを、さりともとなむ頼もしき」と聞こえたまふを、いとわりなう聞き苦しと思いたれば、いとほしうて、のたまひ紛らはしつつ、「内におたまはすることなむいとほしきを、なほあからさまに参らせたてまつらむ。おのがものと領じ果てては、さやうの御交じらひもかたげなめる世なめり。思ひそめきこえし心は違ふさまなめれど、二条の大臣は心ゆきたまふなれば、心やすくなむ」など、こまかに聞こえたまふ。あはれにも恥づかしくも聞きたまふこと多かれど、ただ涙にまつはれておはす。いとかう思したるさまの心苦しければ、思すさまにも乱れたまはず、ただあるべきやう、御心づかひを教へきこ

かう忍びたまふ御仲らひのことなれど、おのづから人のをかしきことに語り
伝へつつ、次々に聞き洩らしつつ、ありがたき世語りにぞささめきける。内に
も聞こし召してけり。「口惜しう、宿世異なりける人なれど、さ思しし本意も
あるを、宮仕へなど、かけかけしき筋ならばこそは思ひ絶えたまはめ」などの
たまはせけり。

霜月になりぬ。神事などしげく、内侍所にもこと多かるころにて、女官ども、
内侍ども参りつつ、今めかしう人騒がしきに、大将殿、昼もいと隠ろへたるさ
まにもてなして籠もりおはするを、いと心づきなく、尚侍の君は思したり。

宮などは、まいていみじう口惜し、と思す。兵衛督は、妹の北の方の御こと
をさへ、人笑へに思ひ嘆きて、とり重ねもの思ほしけれど、をこがましう恨み
寄りても今はかひなし、と思ひ返す。大将は、名に立てるまめ人の、年ごろい
ささか乱れたるふるまひなくて過ぐしたまへる名残なく、心ゆきて、あらざり
しさまに好ましう、宵暁のうち忍びたまへる出で入りも艶にしなしたまへるを、
をかすと人びと見たてまつる。

女は、わららかににぎははしくもてなしたまふ本性ももて隠して、いといた
う思ひ結ばほれ、心もてあらぬさまはしるきことなれど、大臣の思すらむこと、
宮の御心ぎまの心深う情け情けしうおはせしなどを思ひ出でたまふに、恥づか
しう、口惜しうのみ思ほすに、もの心づきなき御けしき絶えず。

殿も、いとほしう人びとも思ひ疑ひける筋を、心きよくあらはしたまひて、
わが心ながら、うちつけにねぢけたることは好まずかすと、昔よりのことも思
し出でて、紫の上にも、「思し疑ひたりしよ」など聞こえたまふ。今さらに人
の心癖もこそ、と思しながら、ものの苦しう思されし時、さてもやと思し寄り
たまひしことなれば、なほ思しも絶えず。

大将のおはせぬ昼つ方、渡りたまへり。女君、あやしう悩ましげにのみもて

「内に聞こし召さむこともかしこし。しばし人にあまねく漏らさじ」と諫めきこえたまへど、さしもえつつみあへたまはず。ほど経れど、いささかうちとけたる御けしきもなく、思はずに憂き宿世なりけり、と思ひ入りたまへるさまのたゆみなきを、いみじうつらし、と思へど、おぼろけならぬ契りのほど、あはれにうれしく思ふ。見るままにめでたく、思ふさまなる御かたちありさまを、よそのものに見果ててやみなましよ、と思ふだに胸つぶれて、石山の仏をも、弁の御許をも、並べて戴かまほしう思へど、女君の深くものし、と疎みにければ、え交じらばで籠もりゐにけり。げにそこら心苦しげなることどもを、とりどりに見しかど、心浅き人のためにぞ、寺の験も現はれける。大臣も、心ゆかず口惜し、と思せど、いふかひなきことにて、誰れも誰れもかく許しそめたまへることなれば、引き返し許さぬけしきを見せむも、人のためいとほしうあいなし、と思して、儀式いと二なくもてかしづきたまふ。

いつしかと、わが殿に渡いたてまつらむことを思ひいそぎたまへど、軽々しくふとうちとけ渡りたまはむに、かしこに待ち取りてよくも思ふまじき人のものしたまふなるがいとほしきなことづけたまひて、「なほ心のどかに、なだらかなるさまにて、音なく、いづ方にも人のそしり恨みなかるべくをもてなしたまへ」とぞ聞こえたまふ。父大臣は、「なかなかめやすかめり。ことにこまかなる後見なき人の、なまほの好いたる宮仕へに出で立ちて、苦しげにやあらむとぞうしろめたかりし。心ざしはありながら、女御かくてもものしたまふをおきて、いかがもてなさまし」など、忍びてのたまひけり。げに帝と聞こゆとも、人に思し落とし、はかなきほどに見えたてまつりたまひて、ものものしくももてなしたまはずは、あはつけきやうにもあべかりけり。三日の夜の御消息ども、聞こえ交はしたまひけるけしきを伝へ聞きたまひてなむ、この大臣の君の御心を、あはれにかたじけなく、ありがたしと思ひきこえたまひける。

真
木
柱

思しだに知らば、慰む方もありぬべくなむ。

とて、いとかしけたる下折れの霜も落とさず持て参れる、御使さへぞうちあひたるや。式部卿宮の左兵衛督は、殿の上の御はらからぞかし。親しく参りなどしたまふ君なれば、おのづからいとよくものの案内も聞きて、いみじくぞ思ひわびける。いと多く怨み続けて、

忘れなむと思ふもものの悲しきをいかさまにしていかさまにせむ

紙の色、墨つき、しめたる匂ひもさまざまなるを、人びとも、「皆思し絶えぬべかめるこそ、さうぎうしけれ」など言ふ。宮の御返りをぞ、いかが思すらむ、ただいささかにて、

心もて光に向かふ葵だに朝おく霜をおのれやは消つ

と、ほのかなるを、いとめづらしと見たまふに、みづからはあはれを知りぬべき御けしきにかけたまひつれば、つゆばかりなれど、いとうれしかりけり。かやうに何となけれど、さまざまなる人びとの御わびごとも多かり。「女の御心ばへは、この君をなむもとにすべき」と、大臣たち定めきこえたまひけりとや。

大將は、この中將は同じ右のすけなれば、常に呼び取りつつ、ねむごろに語らひ、大臣にも申させたまひけり。人柄もいとよく、おほやけの御後見となるべかめる下形なるを、などかはあらむと思しながら、かの大臣のかくしたまへることを、いかがは聞こえ返すべからむ、さるやうあることにこそと心得たまへる筋さへあれば、任せきこえたまへり。この大將は、春宮の女御の御はらからにぞおはしける。大臣たちをおきたてまつりて、さしつぎの御おぼえいとやむごとなき君なり。年三十二三のほどにものしたまふ。北の方は紫の上の御姉ぞかし。式部卿宮の御大君よ。年のほど三つ四つがこのかみは、ことなるかたはにもあらぬを、人柄やいかがおはしけむ、姫とつけて心にも入れず、いかで背きなむ、と思へり。その筋により、六条の大臣は、大將の御ことは、似げなくいとほしからむ、と思したるなめり。色めかしくうち乱れたるところなきさまながら、いみじくぞ心を尽くしありきたまひける。かの大臣も、もて離れても思したらざなり、女は宮仕へをも憂げに思いたなり、とうちうちのけしきもさる詳しきたよりあれば、漏り聞きて、「ただ大殿の御おもむけの異なるにこそはあなれ。まことの親の御心だに違はずは」と、この弁の御許にも責ためたまふ。

九月にもなりぬ。初霜むすぼほれ、艶なる朝に、例のとりどりなる御後見どもの引きそばみつつ持て参る御文どもを見たまふこともなくて、読みきこゆるばかりを聞きたまふ。大將殿のには、

なほ頼み来しも、過ぎゆく空のけしきこそ、心尽くしに、

数ならば厭ひもせまし長月に命をかくるほどぞはかなき

月たたばとある定めを、いとよく聞きたまふなめり。兵部卿宮は、

いふかひなき世は、聞こえむ方なきを、

朝日さす光を見ても玉笹の葉分けの霜を消たずもあらなむ

よからむ。何ごとも人目に憚りて、え参り来ず、聞こえぬことをなむ、なかなかいぶせく思したる」など、語りきこえたまふついでに、「いでや、をこがましきことも、えぞ聞こえさせぬや。いづ方につけても、あはれをば御覧じ過ぐすべくやはありけると、いよいよ恨めしさも添ひはべるかな。まづは今宵などの御もてなしよ。北面だつ方に召し入れて、君達こそめざましくも思し召さめ、下仕へなどやうの人びととだにうち語らはばや。またかかるやうはあらじかし。さまざまにめづらしき世なりかし」とうち傾きつつ、恨み続けたるもをかしければ、かくなむと聞こゆ。「げに、人聞きをうちつけなるやうにやと憚りはべるほどに、年ごろの埋れいたさをもあきらめはべらぬは、いとなかなかなること多くなむ」とただすくよかに聞こえなしたまふに、まばゆく、よろづおしこめたり。

「妹背山深き道をば尋ねずてをだえの橋に踏み迷ひけるよ」と恨むるも、人やりならず。

惑ひける道をば知らず妹背山たどどしくぞ誰も踏み見し

「いづ方のゆゑとなむ、え思し分かぎめりし。何ごともわりなきまでおほかたの世を憚らせたまふめれば、え聞こえさせたまはぬになむ。おのづからかくのみもはべらじ」と聞こゆるも、さることなれば、「よし、長居しはべらむもさまざまきほどなり。やうやう労積もりてこそは、かことをも」とて、立ちたまふ。

月隈なくさし上がりて、空のけしきも艶なるに、いとあてやかにきよげなるかたちして、御直衣の姿、好ましくはなやかにていとをかし。宰相の中將のけはひありさまには、え並びたまはねど、「これもをかしかめるは。いかでかかる御仲らひなりけむ」と、若き人びとは、例のさるまじきことをも取り立ててめであへり。

えたまふ人びとは、誰も誰もいと口惜しくて、この御参りの先にと心寄せのよすががよすがに責めわびたまへど、吉野の滝を堰かむよりも難きことなれば、「いとわりなし」とおのおのいらふ。中将も、なかなかなることをうち出でて、いかに思すらむ、と苦しきままに、駆けりありきて、いとねむごろにおほかたの御後見を思ひあつかひたるさまにて、追従しありきたまふ。たはやすく軽らかにうち出でては聞こえかかりたまはず、めやすくもてしづめたまへり。まことの御はらからの君たちは、え寄り来ず、宮仕へのほどの御後見を、とおのおの心もとなくぞ思ひける。頭の中將、心を尽くしわびしことはかき絶えにたるを、うちつけなりける御心かな、と人びとはをかしがるに、殿の御使にておはしたり。なほもて出でず、忍びやかに御消息なども聞こえ交はしたまひければ、月の明かき夜、桂の蔭に隠れてものしたまへり。見聞き入るべくもあらざりしを、名残なく南の御簾の前に据ゑたてまつる。

みづから聞こえたまはむことはしも、なほつつましかければ、宰相の君していらへ聞こえたまふ。「なにがしらを選びてたてまつりたまへるは、人伝てならぬ御消息にこそはべらめ。かくもの遠くては、いかが聞こえさすべからむ。みづからこそ数にもはべらねど、絶えぬたとひもはべなるは。いかにぞや、古代のことなれど、頼もしくぞ思ひたまへける」とて、ものしと思ひたまへり。「げに、年ごろの積もりも取り添へて、聞こえまほしけれど、日ごろあやしく悩ましくはべれば、起き上がりなどもえしはべらでなむ。かくまでとがめたまふも、なかなか疎々しき心地なむしはべりける」と、いとまめだちて聞こえ出だしたまへり。「悩ましく思さるらむ御几帳のもとをば、許させたまふまじくや。よしよし。げに聞こえさするも心地なかりけり」とて、大臣の御消息ども忍びやかに聞こえたまふ。用意など人には劣りたまはず、いとめやすし。「参りたまはむほどの案内、詳しくさまもえ聞かぬを、うちうちのにたまはむなむ

いとよかるべし。今めかしくいとなまめきたるさまして、さすがにかしこく、過ちすまじくなどして、あはひはめやすからむ。さてまた宮仕へにもいとよく足らひたらむかし。かたちよくらうらうじきものの、公事などにもおぼめかしからず、はかばかしくて、上の常に願はせたまふ御心には違ふまじ」などのたまふけしきの見まほしければ、「年ごろ、かくて育みきこえたまひける御心ざしを、ひがさまにこそ人は申すなれ。かの大臣もさやうになむおもむけて、大将のあなたさまのたよりにけしきばみたりけるにも、応へける」と聞こえたまへば、うち笑ひて、「かたがたいと似げなきことかな。なほ宮仕へをも、御心許してかくなむと思されむさまにぞ従ふべき。女は三つに従ふものにこそあれど、ついでを違へて、おのが心にまかせむことはあるまじきことなり」とのたまふ。「うちうちにも、やむごとなきこれかれ年ごろを経てものしたまへば、えその筋の人数にはものしたまはで、捨てがてらにかく譲りつけ、おほぞうの宮仕への筋に領ぜむと思しおきつる、いとかしこくかどあることなり、となむよろこび申されけると、たしかに人の語り申しはべりしなり」と、いとうるはしきさまに語り申したまへば、げにさは思ひたまふらむかし、と思すに、いとほしくて、「いとまがまがしき筋にも思ひ寄りたまひけるかな。いたり深き御心ならひならむかし。今おのづから、いづ方につけても、あらはなることありなむ。思ひ隈なしや」と笑ひたまふ御けしきはげやかなれど、なほ、疑ひは置かる。大臣も、さりや、かく人の推し量る、案に落つることもあらましかば、いと口惜しくねぢけたらまし、かの大臣に、いかでかく心清きさまを知らせたてまつらむ、と思すにぞ、げに宮仕への筋にて、げぎやかなるまじく紛れたるおぼえを、かしこくも思ひ寄りたまひけるかな、とむくつけく思さる。

かくて、御服など脱ぎたまひて、「月立たば、なほ参りたまはむこと忌あるべし。十月ばかりに」と思しのたまふを、内にも心もとなく聞こし召し、聞こ

ものを」とて、かかるついでに、今すこし漏らさまほしけれど、「あやしくなやましくなむ」とて、入り果てたまひぬれば、いといたくうち嘆きて立ちたまひぬ。

なかなかにもうち出でてけるかな、と口惜しきにつけても、かの今すこし身にしみておぼえし御けはひを、かばかりの物越しにても、ほのかに御声をだに、いかならむついでにか聞かむ、とやすからず思ひつつ、御前に参りたまへれば、出でたまひて、御返りなど聞こえたまふ。「この宮仕へを、しづげにこそ思ひたまへれ。宮などの練じたまへる人にて、いと心深きあはれを尽くし、言ひ悩ましたまふになむ心やしみたまふらむ、と思ふになむ心苦しき。されど、大原野の行幸に、上を見たてまつりたまひては、いとめでたくおはしけり、と思ひたまへりき。若き人は、ほのかにも見たてまつりて、えしも宮仕への筋もて離れじ。さ思ひてなむ、このこともかくものせし」などのたまへば、「さても人ざまは、いづ方につけてかは、足らひてものしたまふらむ。中宮かく並びなき筋にておはしまし、また、弘徽殿やむごとなく、おぼえことにてものしたまへば、いみじき御思ひありとも、立ち並びたまふことかたくこそはべらめ。宮はいとねむごろに思したなるを、わざとさる筋の御宮仕へにもあらぬものから、ひき違へたらむさまに御心おきたまはむも、さる御仲らひにては、いといとほしくなむ聞きたまふる」とおとなおとなしく申したまふ。「かたしや。わが心ひとつなる人の上にもあらぬを、大将さへ我をこそ恨むなれ。すべてかかることの心苦しきを見過ぐさで、あやなき人の恨み負ふ、かへりては軽々しきわざなりけり。かの母君のあはれに言ひおきしことの忘れざりしかば、心細き山里になど聞きしを、かの大臣はた聞き入れたまふべくもあらずと愁へしに、いとほしくてかく渡しはじめたるなり。ここにかくものめかすとて、かの大臣も人めかいたまふなめり」とつきづきしくのたまひなす。「人柄は、宮の御人にて

との、また心得がたきにこそはべれ。この御あらはし衣の色なくは、えこそ思ひたまへ分くまじかりけれ」とのたまへば、「何ごとも思ひ分かぬ心には、ましてともかくも思ひたまへたどられはべらねど、かかる色こそあやしくものはれなるわざにはべりけれ」とて、例よりもしめりたる御けしき、いとらうたげにをかし。かかるついでにとや思ひ寄りけむ、蘭の花のいとおもしろきを持たまへりけるを、御簾のつまよりさし入れて、「これも御覧すべきゆゑはありけり」とて、とみにも許さで持たまへれば、うつたへに思ひ寄らで取りたまふ御袖を引き動かしたり。

同じ野の露にやつるる藤袴あはれはかけよかことばかりも道の果てなるとかや、いと心づきなくうたてなりぬれど、見知らぬさまに、やをら引き入りて、

「尋ぬるにはるけき野辺の露ならば薄紫やかことならまし

かやうにて聞こゆるより、深きゆゑはいかが」とのたまへば、すこしうち笑ひて、「浅きも深きも思し分く方ははべりなむと思ひたまふる。まめやかには、いとかたじけなき筋を思ひ知りながら、えしづめはべらぬ心のうちを、いかでかしろしめさるべき。なかなか思し疎まむがわびしきに、いみじく籠めはべるを、今はた同じと思ひたまへわびてなむ。頭の中將のけしきは御覧じ知りきや。人の上になんと思ひはべりけむ。身にてこそいとをこがましく、かつは思ひたまへ知られけれ。なかなか、かの君は思ひさまして、つひに御あたり離るまじき頼みに思ひ慰めたるけしきなど見はべるも、いとうらやましくねたきに、あはれとだに思しおけよ」など、こまかに聞こえ知らせたまふこと多かれど、かたはらいたければ書かぬなり。

かむの君、やうやう引き入りつつ、むつかしと思したれば、「心憂き御けしきかな。過ちすまじき心のほどは、おのづから御覧じ知らるるやうもはべらむ

り、ものまめやかに心寄せきこえたまへば、もて離れて疎々しきさまにはもてなしたまはざりしならひに、今あらざりけりとて、こよなく変はらむもうたてあれば、なほ御簾に几帳添へたる御対面は、人づてならでありけり。殿の御消息にて、内より仰せ言あるさま、やがてこの君のうけたまはりたまへるなりけり。

御返り、おほどかなるものから、いとめやすく聞こえなしたまふけはひの、らうらうじくなつかしきにつけても、かの野分の朝の御朝顔は心にかかりて恋しきを、うたてある筋に思ひし、聞き明らかめて後は、なほもあらぬ心地添ひて、この宮仕ひをおほかたにしも思し放たじかし、さばかり見所ある御あはひどもにて、をかしきさまなることのわづらはしき、はたかならず出で来なむかし、と思ふに、ただならず胸ふたがる心地すれど、つれなくすくよかにて、「人に聞かすまじとはべりつることを聞こえさせむに、いかがはべるべき」とけしき立てば、近くさぶらふ人も、すこし退きつつ、御几帳のうしろなどにそばみあへり。そら消息をつきづきしくとり続けて、こまやかに聞こえたまふ。上の御けしきのただならぬ筋を、さる御心したまへ、などやうの筋なり。いらへたまはむこともなくて、ただうち嘆きたまへるほど、忍びやかにうつくしくいとなつかしきに、なほえ忍ぶまじく、「御服も、この月には脱がせたまふべきを、日ついでなむよろしからざりける。十三日に河原へ出でさせたまふべきよしたまはせつ。なにがしも御供にさぶらふべくなむ思ひたまふる」と聞こえたまへば、「たぐひたまはむもことごとしきやうにやはべらむ。忍びやかにてこそよくはべらめ」とのたまふ。この御服などの詳しきさまを、人にあまねく知らせじ、とおもむけたまへるけしき、いと労あり。中将も、「漏らさじとつつませたまふらむこそ心憂けれ。忍びがたく思ひたまへらるる形見なれば、脱ぎ捨てはべらむこともいとも憂くはべるものを、さてもあやしうもて離れぬこ

尚侍の御宮仕へのことを、誰れも誰れもそそのかしたまふも、いかならむ、親と思ひきこゆる人の御心だにうちとくまじき世なりければ、ましてきやうの交じらひにつけて、心よりほかに便なきこともあらば、中宮も女御も、方がたにつけて心おきたまはば、はしたなからむに、わが身はかくはかなきさまにて、いづ方にも深く思ひとどめられたてまつれるほどもなく、浅きおぼえにて、ただならず思ひ言ひ、いかで人笑へなるさまに見聞きなさむとうけひたまふ人びとも多く、とかくにつけてやすからぬことのみありぬべきを、もの思し知るまじきほどにしあらねば、さまざまに思ほし乱れ、人知れずもの嘆かし。さりて、かかるありさまも悪しきことはなけれど、この大臣の御心ばへのむつかしく心づきなきも、いかなるついでにかは、もて離れて、人の推し量るべかめる筋を、心きよくもあり果つべき、まことの父大臣も、この殿の思さむところ憚りたまひて、うけばりてとり放ち、けぎやぎたまふべきことにもあらねば、なほとてもかくても見苦しう、かけかけしきありさまにて心を悩まし、人にもて騒がるべき身なめり、となかなかこの親尋ねきこえたまひて後は、ことに憚りたまふけしきもなき大臣の君の御もてなしを取り加へつつ、人知れずなむ嘆かしかりける。思ふことを、まほならずとも、片端にてもうちかすめつべき女親もおはせず、いづ方もいづ方もいと恥づかしげにいとうるはしき御さまどもには、何ごとをかは、さなむかくなむとも聞こえ分きたまはむ。世の人に似ぬ身のありさまをうち眺めつつ、夕暮の空のあはれげなるけしきを、端近うて見出だしたまへるさま、いとをかし。

薄き鈍色の御衣、なつかしきほどにやつれて、例に変はりたる色あひにしも、かたちはいとほなやかにもてはやされておはするを、御前なる人びとはうち笑みて見たてまつるに、宰相中将、同じ色の今すこしまやかなる直衣姿にて、櫻卷きたまへる姿しも、またいとなまめかしくきよらにておはしたり。初めよ

藤

袴

も続けはべりなむ。むねむねしき方のことはた、殿より申させたまはば、つま
声のやうにて、御徳をもかうぶりはべらむ」とて、手を押しすりて聞こえぬた
り。御几帳のうしろなどにて聞く女房、死ぬべくおぼゆ。もの笑ひに堪へぬは、
すべり出でてなむ慰めける。女御も御面赤みて、わりなう見苦しと思したり。
殿も、「ものむつかしき折は、近江の君見るこそ、よろづ紛るれ」とて、ただ
笑ひ種につくりたまへど、世人は、「恥ぢがてら、はしたなめたまふ」など、
さまざま言ひけり。

る方にも、類ひなき御ありさまを、おろかにはよも思さじ。御心しづめたまうてこそ。堅き巖もあわ雪になしたまうつべき御けしきなれば、いとよう思ひかなひたまふ時もありなむ」と、ほほ笑みて言ひるたまへり。中將も、「天の岩門鎖し籠もりたまひなむや。めやすく」とて、立ちぬれば、ほろほろと泣きて、「この君達さへ皆すげなくしたまふに、ただ御前の御心のあはれにおはしませばさぶらふなり」とて、いとかやすく、いそしく、下臈、童女などの仕うまつりたらぬぎふやくをも、立ち走りやすく惑ひありきつつ、心ぎしを尽くして宮仕へしありきて、「尚侍におれを申しなしたまへ」と責めきこゆれば、あさましう、いかに思ひて言ふことならむ、と思すに、ものも言はれたまはず。

大臣、この望みを聞きたまひて、いとはなやかにうち笑ひたまひて、女御の御方に参りたまへるついでに、「いづら、この、近江の君、こなたに」と召せば、「を」と、いとけぎやかに聞こえて出で来たり。「いと、仕へたる御けはひ、公人にて、げにいかにあひたらむ。尚侍のことは、などかおのれに疾くはものせぎりし」と、いとまめやかにてのたまへば、いとうれしと思ひて、「さも御けしき賜はらまほしうはべりしかど、この女御殿など、おのづから伝へ聞こえさせたまひてむと、頼みふくれてなむさぶらひつるを、なるべき人ものしたまふやうに聞きたまふれば、夢に富したる心地しはべりてなむ、胸に手を置きたるやうにはべる」と申したまふ舌ぶりいともさはやかなり。笑みたまひぬべきを念じて、「いとあやしう、おぼつかなき御癖なりや。さも思しのたまはましかば、まづ人の先に奏してまし。太政大臣の御むすめやむごとなくとも、ここに切に申さむことは、聞こし召さぬやうあらざらまし。今にても、申し文を取り作りて、びびしう書き出だされよ。長歌などの心ばへあらむを、御覽ぜむには、捨てさせたまはじ、上は、そのうちに情け捨てずおはしませば」など、いとようすかしたまふ。人の親げなく、かたはなりや。「大和歌は、あしあし

えたまへど、「内より御けしきあることかへさひ奏し、またまた仰せ言に従ひてなむ、異ざまのことはともかくも思ひ定むべき」とぞ聞こえさせたまひける。父大臣は、ほのかなりしさまを、いかでさやかにまた見む、なまかたほなること見えたまはば、かうまでことごとしうもてなし思さじなど、なかなか心もとなう恋しう思ひきこえたまふ。今ぞ、かの御夢も、まことに思しあはせける。女御ばかりには、さだかなることのさまを聞こえたまうけり。

世の人聞きに、しばしこのこと出ださじ、と切に籠めたまへど、口さがなきものは世の人なりけり。自然に言ひ漏らしつつ、やうやう聞こえ出で来るを、かのさがな者の君聞きて、女御の御前に、中将、少将さぶらひたまふに出でて、「殿は御むすめまうけたまふべかなり。あなめでたや。いかなる人、二方にもてなさるらむ。聞けばかれも劣り腹なり」とあふなげにのたまへば、女御、かたはらいたしと思して、ものものたまはず。中将、「しかかしづかるべきゆるこそものしたまふらめ。さても誰が言ひしことを、かくゆくりなくうち出でたまふぞ。もの言ひただならぬ女房などこそ耳とどむれ」とのたまへば、「あなま。皆聞きてはべり。尚侍になるべかなり。宮仕へにと急ぎ出で立ちはべりしことは、さやうの御かへりみもやとてこそ、なべての女房たちだに仕うまつらぬことまで、おりたち仕うまつれ。御前のつらくおはしますなり」と恨みかくれば、皆ほほ笑みて、「尚侍あかば、なにがしこそ望まむと思ふを、非道にも思しかけるかな」などのたまふに、腹立ちて、「めでたき御仲に、数ならぬ人は混じるまじかりけり。中将の君ぞつらくおはする。さかしらに迎へたまひて、軽めあざけりたまふ。せうせうの人は、え立てるまじき殿の内かな。あなかしこあなかしこ」と、後へさまにるざり退きて見おこせたまふ。憎げもなければ、いと腹悪しげに目尻引き上げたり。中将は、かく言ふにつけても、げにし過ちたること、と思へば、まめやかにてものしたまふ。少将は、「かか

も、いかが添へはべらざらむ」と聞こえたまふ。

恨めしや沖つ玉藻をかづくまで磯がくれける海人の心よ

とて、なほつつみもあへずしほたれたまふ。姫君は、いと恥づかしき御さまどものさし集ひ、つつましきに、え聞こえたまはねば、殿、

「よるべなみかかる渚にうち寄せて海人も尋ねぬ藻屑とぞ見し

いとわりなき御うちつけごとになむ」と聞こえたまへば、「いとことわりになむ」と、聞こえやる方なくて出でたまひぬ。

親王たち、次々、人びと残るなく集ひたまへり。御懸想人もあまた混じりたまへれば、この大臣、かく入りおはしてほど経るを、いかなることにかと疑ひたまへり。かの殿の君達、中将、弁の君ばかりぞ、ほの知りたまへりける。人知れず思ひしことを、からうも、うれしうも思ひなりたまふ。弁は、「よくぞうち出でざりける」とささめきて、「さま異なる大臣の御好みどもなめり。中宮の御類ひに仕立てたまはむと思すらむ」など、おのおの言ふよしを聞きたまへど、「なほしばしは御心づかひしたまうて、世にそしりなきさまにもてなさせたまへ。何ごとも心やすきほどの人こそ、乱りがはしう、ともかくもはべかめれ、こなたをもそなたをも、さまざま、人の聞こえ悩まきむ、ただならむよりはあぢきなきを、なだらかに、やうやう人目をも馴らすなむ、よきことにははべるべき」と申したまへば、「ただ御もてなしになむ従ひはべるべき。かうまで御覽ぜられ、ありがたき御育みに隠ろへはべりけるも、前の世の契りおろかならじ」と申したまふ。御贈物など、さらにもいはず、すべて引出物、祿ども、品々につけて、例あること限りあれど、またこと加へ二なくせさせたまへり。大宮の御悩みにことづけたまうし名残もあれば、ことことしき御遊びなどはなし。

兵部卿宮、「今はことづけやりたまふべき滞りもなきを」と、おりたち聞こ

御手は、昔だにありしを、いとわりなうしじかみ、彫深う強う堅う書きたまへり。大臣、憎きものの、をかしさをばえ念じたまはで、「この歌詠みつらむほどこそ。まして今は力なくて、所狭かりけむ」といとほしがりたまふ。「いで、この返りこと、騒がしうともわれせむ」とのたまひて、

あやしう、人の思ひ寄るまじき御心ばへこそ、あらでもありぬべけれ。

と、憎さに書きたまうて、

唐衣また唐衣唐衣かへすがへすも唐衣なる

とて、「いとまめやかに、かの人の立てて好む筋なれば、ものしてはべるなり」とて、見せたてまつりたまへば、君いとにほひやかに笑ひたまひて、「あないとほし。弄じたるやうにもはべるかな」と苦しがりたまふ。ようなしごといと多かりや。

内大臣は、さしも急がれたまふまじき御心なれど、めづらかに聞きたまうし後は、いつしかと御心にかかりたれば、疾く参りたまへり。儀式など、あべい限りにまた過ぎて、めづらしきさまにしなさせたまへり。げにわざと御心とどめたまうけること、と見たまふも、かたじけなきものから、やう変はりて思さる。亥の時にて、入れたてまつりたまふ。例の御まうけをばさるものにて、内の御座いと二なくしつらはせたまうて、御肴参らせたまふ。御殿油、例のかかる所よりは、すこし光見せて、をかしきほどにもてなしきこえたまへり。いみじうゆかしう思ひきこえたまへど、今宵はいとゆくりかなべければ、引き結びたまふほど、え忍びたまはぬけしきなり。あるじの大臣、「今宵はいにしへぎまのことはかけはべらねば、何のあやめも分かせたまふまじくなむ。心知らぬ人目を飾りて、なほ世の常の作法に」と聞こえたまふ。「げにさらに聞こえさせやるべき方はべらずなむ」。御土器参るほどに、「限りなきかしまりをば、世に例なきことと聞こえさせながら、今までかく忍びこめさせたまひける恨み

くものにごそありけれ。いとからく御手ふるひにけり」など、うち返し見たまうて、「よくも玉櫛笥にまつはれたるかな。三十一字の中に、異文字は少なく添へたることのかたきなり」と忍びて笑ひたまふ。

中宮より、白き御裳、唐衣、御装束、御髪上の具など、いと二なくて、例の壺どもに、唐の薫物、心ことに香り深くてたてまつりたまへり。御方々皆心々に、御装束、人びとの料に、櫛、扇まで、とりどりにし出でたまへるありさま、劣りまさらず、さまざまにつけて、かばかりの御心ばせどもに、挑み尽くしたまへれば、をかしう見ゆるを、東の院の人びとも、かかる御いそぎは聞きたまうけれども、訪らひきこえたまふべき数ならねば、ただ聞き過ぐしたるに、常陸の宮の御方、あやしうものうるはしう、さるべきことの折過ぐさぬ古代の御心にて、いかでかこの御いそぎをよそのこととは聞き過ぐさむ、と思して、形のごとなむし出でたまうける。あはれなる御心ざしなりかし。青鈍の細長一襲、落栗とかや、何とかや、昔の人のめでたうしける袷の袴一具、紫のしらきり見ゆる霰地の御小桂と、よき衣箱に入れて、包いとうるはしうてたてまつれたまへり。御文には、

知らせたまふべき数にもはべらねば、つつましけれど、かかる折は思たまへ忍びがたくなむ。これいとあやしけれど、人にも賜はせよ。

とおいらかなり。殿、御覧じつけて、いとあきましう例のと思すに、御顔赤みぬ。「あやしき古人にごそあれ。かくものづつみしたる人は、引き入り沈み入りたるこそよけれ。さすがに恥ぢがましや」とて、「返りことはつかはせ。はしたなく思ひなむ。父親王のいとかなしうしたまひける、思ひ出づれば、人に落さむはいと心苦しき人なり」と聞こえたまふ。御小桂の袂に、例の同じ筋の歌ありけり。

わが身こそ恨みられけれ唐衣君が袂に馴れずと思へば

なさず、さすがにわづらはしう、ものの聞こえを思ひて、かく明かしたまふなめり、と思すは口惜しけれど、それを疵とすべきことかは、ことさらにもかの御あたりに触ればはせむに、などかおぼえの劣らむ、宮仕へぎまにおもむきたまへらば、女御などの思さむこともあぢきなし、と思せど、ともかくも思ひ寄りのたまはむおきてを違ふべきことかは、とよろづに思しけり。

かくのたまふは二月ついたちころなりけり。十六日、彼岸の初めにて、いと吉き日なりけり。近うまた吉き日なしと勘へ申しけるうちに、宮、よろしうおはしませば、いそぎ立ちたまうて、例の渡りたまうても、大臣に申しあらはししきまなど、いとこまかにあべきことども教へきこえたまへば、あはれなる御心は、親と聞こえながらもありがたからむを、と思すものから、いとなむうれしかりける。かくて後は、中将の君にも、忍びてかかることの心のたまひ知らせけり。あやしのことどもや、むべなりけり、と思ひあはすることどもあるに、かのつれなき人の御ありさまよりも、なほもあらず思ひ出でられて、思ひ寄りざりけることよ、としれじれしき心地す。されど、あるまじうねじけたるべきほどなりけり、と思ひ返すことこそは、ありがたきまめしきなめれ。

かくてその日になりて、三条の宮より忍びやかに御使あり。御櫛の箱など、にはかなれど、ことどもいとよらにしたまうて、御文には、

聞こえむにもいまいましきありさまを、今日は忍びこめはべれど、さるかににても、長き例ばかりを思し許すべうや、とてなむ。あはれにうけたまはりあきらめたる筋を、かけきこえむもいかが。御けしきに従ひてなむ。

ふたかたに言ひもてゆけば玉櫛笥わが身はなれぬかけごなりけり

と、いと古めかしうわななきたまへるを、殿もこなたにおはしまして、ことども御覧じ定むるほどなれば、見たまうて、「古代なる御文書きなれど、いたしや、この御手よ。昔は上手にもものしたまひけるを、年に添へてあやしく老いゆ

りはべるにつけて、はかばかしからぬ者どもの、かたがたにつけてさまよひはべるを、かたくなしく見苦しと見はべるにつけても、またさるさまにて、数々に連ねては、あはれに思うたまへらるる折に添へても、まづなむ思ひたまへ出でらるる」とのたまふついでに、かのいにしへの雨夜の物語に、いろいろなりし御睦言の定めを思し出でて、泣きみ笑ひみ、皆うち乱れたまひぬ。

夜いたう更けて、おのおのあかれたまふ。「かく参り来あひては、さらに久しくなりぬる世の古事思うたまへ出でられ、恋しきことの忍びがたきに、立ち出でむ心地もしはべらず」とて、をさをさ心弱くおはしまさぬ六条殿も、酔ひ泣きにや、うちしほれたまふ。宮はたまいて、姫君の御ことを思し出づるに、ありしにまさる御ありさま、勢ひを見てまつりたまふに、飽かず悲しくて、とどめがたく、しほしほと泣きたまふ尼衣は、げに心ことなりけり。

かかるついでなれど、中將の御ことをば、うち出でたまはずなりぬ。ひとふし用意なしと思しおきてければ、口入れむことも人悪く思しとどめ、かの大臣はた、人の御けしきなきに、さし過ぐしがたくて、さすがにむすぼはれたる心地したまうけり。「今宵も御供にさぶらふべきを、うちつけに騒がしくもやとてなむ。今日のかしこまりは、ことさらになむ参るべくはべる」と申したまへば、さらば、この御悩みもよろしう見えたまふを、かならず聞こえし日違へさせたまはず、渡りたまふべきよし、聞こえ契りたまふ。御けしきどもようて、おのおの出でたまふ響き、いといかめし。君達の御供の人びと、何ごとありつるならむ、めづらしき御対面に、いと御けしきよげなりつるは、またいかなる御譲りあるべきにか、など、ひが心を得つつ、かかる筋とは思ひ寄らざりけり。大臣、うちつけにいといぶかしう、心もとなうおぼえたまへど、ふとしか受けとり、親がらむも便なからむ、尋ね得たまへらむ初めを思ふに、定めて心きよう見放ちたまはじ、やむごとなき方々を憚りて、うけばりてその際にはもて

ひては、かたみにいとあはれなることの数々思し出でつつ、例の隔てなく、昔今のことども、年ごろの御物語に日暮れゆく。御土器など勧め参りたまふ。

「さぶらはでは悪しかりぬべかりけるを、召しなきに憚りて、うけたまはり過ぐしてましかば、御勘事や添はまし」と申したまふに、「勘当は、こなたざまになむ。勘事と思ふこと多くはべる」などけしきばみたまふに、このことにやと思せば、わづらはしうて、かしこまりたるさまにてもものしたまふ。「昔より、公私のことにつけて、心の隔てなく大小のこと聞こえうけたまはり、羽を並ぶるやうにて、おほやけの御後見をも仕うまつるとなむ思うたまへしを、末の世となりて、そのかみ思うたまへし本意なきやうなることうち交りはべれど、うちうちの私事にこそは。おほかたの心ざしは、さらに移ろふことなくなむ。何ともなくて積もりはべる年齢に添へて、いにしへのことなむ恋しかりけるを、対面賜はることもいとまれにのみはべれば、こと限りありて、世だけき御ふるまひとは思ふたまへながら、親しきほどには、その御勢ひをも引きしじめたまひてこそは訪らひものしたまはめ、となむ、恨めしき折々はべる」と聞こえたまへば、「いにしへはげに面馴れて、あやしくたいだいしきまで馴れさぶらひ、心に隔つることなく御覽ぜられしを、おほやけに仕うまつりし際は、羽を並べたる数にも思ひはべらで、うれしき御かへりみをこそ、はかばかしからぬ身にて、かかる位に及びはべりておほやけに仕うまつりはべることに添へても、思うたまへ知らぬにははべらぬを、齢の積もりには、げにおのづからうちゆるぶことのみなむ多くはべりける」などかしこまり申したまふ。

そのついでに、ほのめかし出でたまひてけり。大臣、「いとあはれに、めづらかなることにもはべるかな」と、まづうち泣きたまひて、「そのかみより、いかになりにけむと尋ね思うたまへしさまは、何のついでにかはべりけむ、愁へに堪へず漏らし聞こしめさせし心地なむしはべる。今かくすこし人数にもな

と思しはすに、宮もかう御世残りなげにて、このことと切にのたまひ、大臣も憎からぬさまに一言うち出で恨みたまはむに、とかく申しかへさふことえあらじかし、つれなくて思ひ入れぬを見るにはやすからず、さるべきついであらば、人の御言になびき顔にて許してむ、と思す。御心をさしあはせてのたまはむこと、と思ひ寄りたまふに、いとど否びどころなからむが、またなかさしもあらむとやすらはるる、いとけしからぬ御あやにく心なりかし。されど、宮かくのたまひ、大臣も対面すべく待ちおはするにや、かたがたにかたじけなし、参りてこそは御けしきに従はめ、など思ほしなりて、御装束心にひきつくるひて、御前などもことしきさまにはあらで渡りたまふ。

君達いとあまた引きつれて入りたまふさま、ものものしう頼もしげなり。丈だちそそろかにものしたまふに、太さもあひて、いと宿徳に、面もち、歩まひ、大臣といはむに足らひたまへり。葡萄染の御指貫、桜の下襲、いと長うは裾引きて、ゆるゆるとことさらびたる御もてなし、あなきらきらしと見えたまへるに、六条殿は、桜の唐の綺の御直衣、今様色の御衣ひき重ねて、しどけなき大君姿、いよいよたとへむものなし。光こそまさりたまへ、かうしたたかにひきつくるひたまへる御ありさまになずらへても見えたまはざりけり。君達、次々にいとものきよげなる御仲らひにて、集ひたまへり。藤大納言、春宮大夫など今は聞こゆる子どもも、皆なり出でつつものしたまふ。おのづから、わざともなきに、おぼえ高くやむごとなき殿上人、蔵人頭、五位の蔵人、近衛の中少将、弁官など、人柄はなやかにあるべかしき十余人集ひたまへれば、いかめしう、次々のただ人も多くて、土器あまたたび流れ、皆酔ひになりて、おのおのかう幸ひ人にすぐれたまへる御ありさまを物語にしけり。

大臣も、めづらしき御対面に、昔のことと思し出でられて、よそよそにてこそ、はかなきことにつけて、挑ましき御心も添ふべかめれ、さし向かひきこえたま

とも申しあきらめまほしうはべる。ついでなくては対面はべるべきにもはべらず。やがてかかることなむとあらはし申すべきやうを思ひめぐらして消息申ししを、御悩みにことづけて、もの憂げにすまひたまへりし。げに折しも便なう思ひとまりはべるに、よろしうものせさせたまひければ、なほかう思ひおこせるついでに、となむ思うたまふる。さやうに伝へものせさせたまへ」と聞こえたまふ。宮、「いかにいかにはべりけることにか。かしこには、さまさまにかかる名のりする人を、厭ふことなく拾ひ集めらるるに、いかなる心にて、かくひき違へかこちきこえらるらむ。この年ごろうけたまはりてなりぬるにや」と聞こえたまへば、「さるやうはべることなり。詳しくさまは、かの大臣もおのづから尋ね聞きたまうてむ。くだくだしきなほ人の仲らひに似たることにはべれば、明かさむにつけても、らうがはしう人言ひ伝へはべらむを、中将の朝臣にだに、まだわきまへ知らせはべらず。人にも漏らさせたまふまじ」と、御口かためきこえたまふ。

内の大殿、かく三条の宮に太政大臣渡りおはしまいたるよし聞きたまひて、「いかに寂しげにていつかしき御さまを待ちうけきこえたまふらむ。御前どももてはやし、御座ひきつくろふ人も、はかばかしうあらじかし。中将は、御供にこそものせられつらめ」などおどろきたまうて、御子ども君達、睦まじうさるべきまうち君たちたてまつれたまふ。「御くだもの、御みきなどさりぬべく参らせよ。みづからも参るべきを、かへりてももの騒がしきやうならむ」などのたまふほどに、大宮の御文あり。

六条の大臣の訪らひに渡りたまへるを、もの寂しげにはべれば、人目のいとほしうもかたじけなうもあるを、ことごとしう、かう聞こえたるやうにはあらで、渡りたまひなむや。対面に聞こえまほしげなることもあなり。

と聞こえたまへり。何ごとにかはあらむ。この姫君の御こと、中将の愁へにや

う諫めたまふよしを見はべりし後、何にさまで言をもまぜはべりけむと人悪う悔い思うたまへてなむ。よろづのことにつけて、清めといふことはべれば、いかがはさもとり返しすすいたまはざらむとは思うたまへながら、かう口惜しき濁りの末に、待ちとり深う住むべき水こそ出で来がたかべい世なれ。何ごとにつけても末になれば、落ちゆくけぢめこそやすくはべめれ。いとほしう聞きたまふる」など申したまうて、「さるは、かの知りたまふべき人をなむ、思ひまがふることはべりて、不意に尋ね取りてはべるを、その折は、さるひがわざとも明かしはべらずありしかば、あながちにことの心を尋ね返さふこともはべらで、たださるものの種の少なきをかことにても、何かはと思うたまへ許して、をさをさ睦びも見はべらずして、年月はべりつるを、いかでか聞こしめしけむ、内に仰せらるるやうなむある。尚侍、宮仕へする人なくては、かの所のまつりごとしどけなく、女官なども、公事を仕うまつるにたづきなく、こと乱るるやうになむありけるを、ただ今上にさぶらふ古老のすけ二人、またさるべき人びと、さまざまに申さするを、はかばかしう選ばせたまはむ尋ねに類ふべき人なむなき。なほ家高う、人のおぼえ軽からで、家のいとなみたてたらぬ人なむ、いにしへよりなり来にける。したたかにかしこきかたの選びにては、その人ならでも、年月の労になりのおぼる類ひあれど、しか類ふべきもなしとならば、おほかたのおぼえをだに選らせたまはむとなむ、うちうちに仰せられたりしを、似げなきこととしも何かは思ひたまはむ。宮仕へはさるべき筋にて、上も下も思ひ及び出で立つこそ心高きことなれ。公様にて、さる所のことをつかさどり、まつりごとのおもぶきをしたため知らむことは、はかばかしからずあはつけきやうにおぼえたれど、なかまたさしもあらむ。ただわが身のありさまからこそよろづのことはべめれと、思ひ弱りはべりしついでになむ、齢のほどなど問ひ聞きはべれば、かの御尋ねあべいことになむありけるを、いかなべいことぞ

けくなりにてはべり。齡など、これよりまさる人、腰堪へぬまで屈まりありく例、昔も今もはべめれど、あやしうおれおれしき本性に添ふもの憂きになむはべるべき」など聞こえたまふ。「年の積もりの悩みと思うたまへつつ、月ごろになりぬるを、今年となりては、頼み少なきやうにおぼえはべれば、今一度かく見たてまつりきこえさすることもなくてや、と心細く思ひたまへつるを、今日こそまたすこし延びぬる心地しはべれ。今は惜しみとむべきほどにもはべらず。さべき人びとにも立ち後れ、世の末に残りとまれる類ひを、人の上にていと心づきなしと見はべりしかば、出で立ちいそぎをなむ思ひもよほされはべるに、この中將の、いとあはれにあやしきまで思ひあつかひ、心を騒がいたまふ見はべるになむ、さまさまにかけとめられて、今まで長びきはべる」と、ただ泣きに泣きて、御声のわななくもをこがましけれど、さることどもなればいとあはれなり。

御物語ども、昔今のとり集め聞こえたまふついでに、「内の大臣は、日隔てず参りたまふことしげからむを、かかるついでに対面のあらばいかにうれしからむ。いかで聞こえ知らせむと思ふことのはべるを、さるべきついでなくては対面もありがたければ、おぼつかなくてなむ」と聞こえたまふ。「公事のしげきにや、私の心ぎしの深からぬにや、さしもとぶらひものしはべらず。のたまはすべからむことは、何さまのことにかは。中將の恨めしげに思はれたることもはべるを、初めのことは知らねど、今はけに聞きにくくもてなすにつけて、立ちそめにし名の取り返さるるものにもあらず、をこがましきやうに、かへりては世人も言ひ漏らすなるを、などものしはべれば、立てたるところ、昔よりいと解けがたき人の本性にて、心得ずなむ見たまふる」と、この中將の御ことと思してのたまへば、うち笑ひたまひて、「いふかひなきに許し捨てたまふこともやと聞きはべりて、ここにさへなむかすめ申すやうありしかど、いと厳し

臣にも、やがてこのついでにや知らせたてまつりてましと思し寄れば、いとめでたくなむ。

年返りて二月にと思す。女は聞こえ高く名隠したまふべきほどならぬも、人の御むすめとて籠もりおはするほどは、かならずしも氏神の御つとめなどあらはならぬほどなればこそ、年月はまぎれ過ぐしたまへ、このもし思し寄ることもあらむには、春日の神の御心違ひぬべきも、つひには隠れてやむまじきものから、あぢきなくわざとがましき後の名までうたたあるべし、なほなほしき人の際こそ、今様とては、氏改むることのたはやすきもあれ、など思しめぐらすに、親子の御契り絶ゆべきやうなし、同じくはわが心許してを知らせたてまつらむ、など思し定めて、この御腰結には、かの大臣をなむ御消息聞こえたまうければ、大宮、去年の冬つ方より悩みたまふこと、さらにおこたりたまはねば、かかるに合はせて便なかるべきよし聞こえたまへり。中将の君も、夜昼三条にぞさぶらひたまひて、心の隙なくものしたまうて、折悪しきを、いかにせまし、と思す。世もいと定めなし、宮も亡せさせたまはば、御服あるべきを知らず顔にてもものしたまはむ、罪深きこと多からむ、おはする世にこのこと表はしてむ、と思し取りて、三条の宮に御訪らひがてら渡りたまふ。

今はまして、忍びやかにふるまひたまへど行幸に劣らずよそほしく、いよいよ光をのみ添へたまふ御かたちなどの、この世に見えぬ心地して、めづらしう見たてまつりたまふには、いとど御心地の悩ましきも取り捨てらるる心地して、起きるたまへり。御脇息にかかりて弱げなれど、ものなどいとよく聞こえたまふ。「けしうはおはしまさざりけるを、なにがしの朝臣の心惑はして、おどろおどろしう嘆ききこえさすめれば、いかやうにもせさせたまふにかとなむ、おぼつかながりきこえさせつる。内などにも、ことなるついでなき限りは参らず、おほやけに仕ふる人ともなくて籠もりはべれば、よろづうひうひしうよだ

小塩山深雪積もれる松原に今日ばかりなる跡やなからむ

と、そのころほひ聞きしことの、そばそば思ひ出でらるるは、ひがことにやあらむ。

またの日、大臣、西の対に、

昨日、上は見たてまつりたまひきや。かのことは、思しなびきぬらむや。

と聞こえたまへり。白き色紙に、いとうちとけたる文、こまかにけしきばみてもあらぬが、をかしきを見たまうて、あいなのことや、と笑ひたまふものから、よくも推し量らせたまふものかな、と思す。御返りに、

昨日は、

うちきらし朝ぐもりせし行幸にはさやかに空の光やは見し

おぼつかなき御ことどもになむ。

とあるを、上も見たまふ。「ささのことをそそのかししかど、中宮かくておはす、ここながらのおぼえには便なかるべし。かの大臣に知られても、女御かくてまたさぶらひたまへば、など思ひ乱るめりし筋なり。若人の、さも馴れ仕うまつらむに憚る思ひなからむは、上をほの見たてまつりて、えかけ離れて思ふはあらじ」とのたまへば、「あなうたて。めでたしと見たてまつるとも、心もて宮仕ひ思ひ立たむこそいとさし過ぎたる心ならめ」とて、笑ひたまふ。「いで、そこにしもぞ、めできこえたまはむ」などのたまうて、また御返り、

あかねさす光は空に曇らぬをなどて行幸に目をきらしけむ

なほ思し立て

など、絶えず勧めたまふ。

とてもかうても、まづ御裳着のことをこそは、と思して、その御まうけの御調度のこまかなるきよらども加へさせたまひ、何くれの儀式を御心にはいとも思ほさぬことをだに、おのづからよだけいかめしくなるを、まして、内の大

に、目移るべくもあらず。まして、かたちありや、をかしやなど、若き御達の消えかへり心うつす中少将、何くれの殿上人やうの人は、何にもあらず消えわたれるは、さらに類ひなうおはしますなりけり。源氏の大臣の御顔ざまは、異ものとも見えたまはぬを、思ひなしの今すこしいつかしう、かたじけなくめでたきなり。さはかかる類ひはおはしがたかりけり。あてなる人は、皆ものきよげに、けはひ異なべいものとのみ、大臣、中將などの御にほひに目馴れたまへるを、出で消えどものかたはなるにやあらむ、同じ目鼻とも見えず、口惜しうぞ庄されたるや。兵部卿宮もおはす。右大将の、さばかり重りかによしめくも、今日によそひいとなまめきて、やなぐひなど負ひて仕うまつりたまへり。色黒く鬚がちに見えて、いと心づきなし。いかでかは女のつくろひたてたる顔の色あひには似たらむ、いとわりなきことを、若き御心地には見おとしたまうてけり。大臣の君の思し寄りてのたまふことを、いかがはあらむ、宮仕へは心にもあらで、見苦しきありさまにや、と思ひつつみたまふを、馴れ馴れしき筋などをばもて離れて、おほかたに仕うまつり御覽ぜられむは、をかしうもありなむかし、とぞ思ひ寄りたまうける。

かうて、野におはしまし着きて、御輿とどめ、上達部の平張にももの参り、御装束ども、直衣、狩のよそひなどに改めたまふほどに、六条院より御みき御くだものなどたてまつらせたまへり。今日仕うまつりたまふべく、かねて御けしきありけれど、御物忌のよしを奏せさせたまへりけるなりけり。蔵人の左衛門尉を御使にて、雉一枝たてまつらせたまふ。仰せ言には何とかや、さやうの折のことまねぶに、わづらはしくなむ。

雪深き小塩山にたつ雉の古き跡をも今日は尋ねよ

太政大臣の、かかる野の行幸に仕うまつりたまへる例などやありけむ、大臣、御使をかしこまりもてなさせたまふ。

かく思しいたらぬことなく、いかでよからむことはと、思し扱ひたまへど、この音無の滝こそうたていとほしく、南の上の御推し量りごとになひて、軽々しかるべき御名なれ。かの大臣、何ごとにつけてもきはぎはしう、すこしもかたはなるさまのことを思し忍ばずなどもしたまふ御心ざまを、さて思ひ限なく、けぎやかなる御もてなしなどのあらむにつけては、をこがましうもや、など思し返さふ。

その師走に、大原野の行幸とて、世に残る人なく見騒ぐを、六条院よりも御方々引き出でつつ見たまふ。卯の時に出でたまうて、朱雀より五条の大路を西ざまに折れたまふ。桂川のもとまで、物見車ひまなし。行幸といへどかならずかうしもあらぬを、今日は親王たち、上達部も、皆心ことに御馬、鞍をととのへ、隨身、馬副の、かたち丈だち装束を飾りたまうつつ、めづらかにをかし。左右大臣、内大臣、納言より下はた、まして残らず仕うまつりたまへり。青色の袍、葡萄染の下襲を、殿上人、五位六位まで着たり。雪ただいささかづつうち散りて、道の空さへ艶なり。親王たち、上達部なども、鷹にかかづらひたまへるは、めづらしき狩の御よそひどもをまうけたまふ。近衛の鷹飼どもは、まして世に目馴れぬ摺衣を乱れ着つつ、けしきことなり。

めづらしうをかしきことに競ひ出でつつ、その人ともなくかすかなる足弱き車など、輪を押しひしがれあはれげなるもあり。浮橋のもとなどにも、好ましう立ちさまよふよき車多かり。

西の対の姫君も立ち出でたまへり。そこばく挑み尽くしたまへる人の御かたちありさまを見たまふに、帝の、赤色の御衣たてまつりて、うるはしう動きなき御かたはらめに、なずらひきこゆべき人なし。わが父大臣を、人知れず目をつけたてまつりたまへど、きらきらしうものきよげに、盛りにはものしたまへど、限りありかし。いと人にすぐれたるただ人と見えて、御輿のうちよりほか

行

幸

なかかかる所につけては、さるかたにてあはれなりける。内の大臣も参りたまへるに、御殿油など参りて、のどやかに御物語など聞こえたまふ。「姫君を久しく見たてまつらぬがあさましきこと」とて、ただ泣きに泣きたまふ。「今このごろのほどに参らせむ。心づからもの思はしげにて、口惜しう衰へにてなむはべめる。女こそ、よく言はば持ちはべるまじきものなりけれ。とあるにつけても、心のみなむ尽くされはべりける」など、なほ心解けず思ひおきたるけしきしてのたまへば、心憂くて切にも聞こえたまはず。そのついでにも、「いと不調なる娘まうけはべりて、もてわづらひはべりぬ」と愁へきこえたまひて笑ひたまふ。宮、「いであやし。むすめといふ名はして、さがなかるやうやある」とのたまへば、「それなむ見苦しきことになむはべる。いかで御覽ぜさせむ」と聞こえたまふとや。

心とめておしすり、筆の先うち見つ、こまやかに書きやすらひたまへる、いとよし。されど、あやしく定まりて、憎き口つきこそものしたまへ。

風騒ぎむら雲まがふ夕べにも忘るる間なく忘れぬ君

吹き乱れたる苜蓿につけたまへれば、人びと、「交野の少将は、紙の色にこそとのへはべりけれ」と聞こゆ。「さばかりの色も思ひ分かざりけりや。いつこの野辺のほとりの花」など、かやうの人びとも言少なに見えて、心解くべくもてなさず、いとすすくしう気高し。またも書いたまうて、馬の助に賜へれば、をかしき童、またいと馴れたる御隨身などに、うちささめきて取らするを、若き人びとただならずゆかしがる。

渡らせたまふとて、人びとうちそよめき、几帳引き直しなどす。見つる花の顔どもも思ひ比べまほしうて、例はものゆかしからぬ心地に、あながちに、妻戸の御簾を引き着て、几帳のほころびより見れば、もののそばよりただはひ渡りたまふほどぞ、ふとうち見えたる。人のしげくまがへば、何のあやめも見えぬほどに、いと心もとなし。薄色の御衣に、髪はまだ丈にははづれたる末の、引き広げたるやうにて、いと細く小さき様体、らうたげに心苦し。をととしばかりは、たまさかにもほの見たてまつりに、またこよなく生ひまさりたまふなめりかし、まして盛りいかならむ、と思ふ。かの見つる先々の桜、山吹といはば、これは藤の花とやいふべからむ、木高き木より咲きかかりて、風になびきたるにほひは、かくぞあるかし、と思ひよそへらる。かかる人びとを、心にまかせて明け暮れ見たてまつらばや、さもありぬべきほどながら、隔て隔てのけぎやかなるこそつらけれ、など思ふに、まめ心もなまあくがる心地す。

おば宮の御もとにも参りたまへれば、のどやかにて御行なひしたまふ。よろしき若人など、ここにもさぶらへど、もてなしけはひ装束どもも、盛りなるあたりには似るべくもあらず。かたちよき尼君たちの墨染にやつれたるぞ、なか

ぬ。御返り、

「下露になびかましかば女郎花荒き風にはしをれざらまし

なよ竹を見たまへかし」など、ひが耳にやありけむ、聞きよくもあらずぞ。

東の御方へ、これよりぞ渡りたまふ。今朝の朝寒なるうちとけわざにや、もの裁ちなどするねび御達、御前にあまたして、細櫃めくものに、綿引きかけてまさぐる若人どもあり。いときよらなる朽葉の羅、今様色の二なく擣ちたるなど、引き散らしたまへり。「中将の下襲か。御前の壺前裁の宴も止まりぬらむかし。かく吹き散らしてむには、何事かせられむ。すさまじかるべき秋なめり」などのたまひて、何にかあらむさまざまなるものの色どもの、いときよらなれば、かやうなる方は、南の上にも劣らずかし、と思す。御直衣、花文綾を、このころ摘み出だしたる花して、はかなく染め出でたまへる、いとあらまほしき色したり。「中将にこそ、かやうにては着せたまはめ。若き人のにてめやすかめり」などやうのことを聞こえたまひて渡りたまひぬ。

むつかしき方々めぐりたまふ御供に歩いて、中将はなま心やましよう、書かまほしき文など、日たけぬるを思ひつつ、姫君の御方に参りたまへり。「まだあなたになむおはします。風に懼ぢさせたまひて、今朝はえ起き上がりたまはざりつる」と、御乳母ぞ聞こゆる。「もの騒がしげなりしかば、宿直も仕うまつらむと思ひたまへしを、宮のいとも心苦しう思いたりしかばなむ。雛の殿はいかがおはすらむ」と問ひたまへば、人びと笑ひて、「扇の風だに参れば、いみじきことに思いたるを、ほとほとしくこそ吹き乱りはべりしか。この御殿あつかひに、わびにてはべり」など語る。「ことごとしからぬ紙やはべる。御局の硯」と乞ひたまへば、御厨子に寄りて、紙一卷、御硯の蓋に取りおろしてたてまつれば、「いな、これはかたはらいたし」とのたまへど、北の御殿のおぼえを思ふに、すこしなのめなる心地して、文書きたまふ。紫の薄様なりけり。墨、

品高く見えざりける。その他はつゆ難つくべうもあらず。

中将、いとこまやかに聞こえたまふを、いかでこの御かたち見てしがな、と思ひわたる心にて、隅の間の御簾の、几帳は添ひながらしどけなきを、やをら引き上げて見るに、紛るるものども取りやりたれば、いとよく見ゆ。かく戯れたまふけしきのしるきを、あやしのわざや、親子と聞こえながら、かく懐離れず、もの近かべきほどかは、と目とまりぬ。見やつけたまはむと恐ろしけれど、あやしきに心もおどろきて、なほ見れば、柱隠れにすこしそばみたまへりつるを、引き寄せたまへるに、御髪の並み寄りて、はらはらとこぼれかかりたるほど、女もいとむつかしく苦しと思うたまへるけしきながら、さすがにいとなごやかなるさまして寄りかかりたまへるは、ことと馴れ馴れしきにこそあめれ。いであなうたて、いかなることにかあらむ、思ひ寄らぬ隈なくおはしける御心にて、もとより見馴れ生ほしたてたまはぬは、かかる御思ひ添ひたまへるなめり、むべなりけりや、あな疎まし、と思ふ心も恥づかし。女の御さま、げにはらからといふとも、すこし立ち退きて、異腹ぞかしなど思はむは、などか心あやまりもせざらむ、とおぼゆ。昨日見し御けはひにはけ劣りたれど、見るに笑まるるさまは、立ちも並びぬべく見ゆる。八重山吹の咲き乱れたる盛り、露のかかれる夕映えぞふと思ひ出でらる。折にあはぬよそへどもなれど、なほうちおぼゆるやうよ。花は限りこそあれ、そそけたるしべなどもまじるかし、人の御かたちのよきは、たとへむ方なきものなりけり。御前に人も出で来ず、いとこまやかにうちささめき語らひ聞こえたまふに、いかがあらむ、まめだちてぞ立ちたまふ。女君、

吹き乱る風のけしきに女郎花しをれしぬべき心地こそすれ

詳しくも聞こえぬに、うち誦じたまふをほの聞くに、憎きものをかしければ、なほ見果てまほしけれど、近かりけりと見えたてまつらじと思ひて、立ち去り

はひするに寄りて、ものなど言ひ戯るれど、思ふことの筋々嘆かしくて、例よりもしめりてゐたまへり。

こなたより、やがて北に通りにて、明石の御方を見やりたまへば、はかばかしき家司だつ人なども見えず、馴れたる下仕ひどもぞ、草の中にまじりて歩く。童べなど、をかしき相姿うちとけて、心とどめ取り分き植ゑたまふ龍胆、朝顔のはひまじれる籬も、みな散り乱れたるを、とかく引き出で尋ぬるなるべし。もののははれにおぼえけるままに、箏の琴を掻きまさぐりつつ、端近うゐたまへるに、御前駆追ふ声のしければ、うちとけ萎えはめる姿に、小桂ひき落として、けぢめ見せたるいといたし。端の方についてゐたまひて、風の騒ぎばかりをとぶらひたまひて、つれなく立ち帰りましたまふ、心やましげなり。

おほかたに萩の葉過ぐる風の音も憂き身ひとつにしむ心地してとひとりごちけり。

西の対には、恐ろしと思ひ明かしたまひける名残に、寝過ぐして、今ぞ鏡なども見たまひける。「ことごとしく前駆な追ひそ」とのたまへば、ことに音せで入りたまふ。屏風なども皆畳み寄せ、ものしどけなくしなしたるに、日のはなやかにさし出でたるほど、けぎけぎとものきよげなるさましてゐたまへり。近くるたまひて、例の風につけても同じ筋にむつかしう聞こえ戯れたまへば、堪へずうたてと思ひて、「かう心憂ければこそ、今宵の風にもあくがれなまほしくはべりつれ」とむつかりたまへば、いとよくうち笑ひたまひて、「風につきてあくがれたまはむや、軽々しからむ。さりとも止まる方ありなむかし。やうやうかかる御心むけこそ添ひにけれ。ことわりや」とのたまへば、げにうち思ひのままに聞こえてけるかな、と思して、みづからもうち笑みたまへる、いとをかしき色あひ、つらつきなり。ほおづきなどいふめるやうにふくらかにて、髪のかかれる隙々うつくしうおぼゆ。まみのあまりわららかなるぞ、いとしも

りしに入り立ち馴れたまへる、女房などもいとけうとくはあらず。御消息啓せさせたまひて、宰相の君、内侍など、けはひすれば、私事も忍びやかに語らひたまふ。これはた、さいへど気高く住みたるけはひありさまを見るにも、さまざまにも思ひ出でらる。

南の御殿には、御格子参りわたして、よべ見捨てがたかりし花どもの、行方も知らぬやうにてしをれ伏したるを見たまひけり。中将、御階にゐたまひて、御返り聞こえたまふ。「荒き風をも防がせたまふべくやと、若々しく心細くおぼえはべるを、今なむ慰みはべりぬる」と聞こえたまへれば、「あやしくあえかにおはする宮なり。女どちはもの恐ろしく思しぬべかりつる夜のさまなれば、げにおろかなりとも思いつらむ」とて、やがて参りたまふ。御直衣などたてまつるとて、御簾引き上げて入りたまふに、短き御几帳引き寄せて、はつかに見ゆる御袖口は、さにこそはあらめ、と思ふに、胸つぶつぶと鳴る心地するもうたてあれば、他ざまに見やりつ。殿、御鏡など見たまひて、忍びて、「中将の朝けの姿はきよげなりな。ただ今はきびはなるべきほどを、かたくなしからず見ゆるも、心の闇にや」とて、わが御顔は古りがたくよしと見たまふべかめり。いといたう心懸想したまひて、「宮に見えたてまつるは、恥づかしうこそあれ。何ばかりあらはなるゆゑゆゑしきも見えたまはぬ人の、奥ゆかしく心づかひせられたまふぞかし。いとおほどかに女しきものから、けしきづきてぞおはするや」とて出でたまふに、中将ながめ入りて、とみにもおどろくまじきけしきにてゐたまへるを、心疾き人の御目にはいかが見たまひけむ、立ちかへり、女君に、「昨日風の紛れに、中将は見たてまつりやしてけむ。かの戸のあきたりしによ」とのたまへば、面うち赤みて、「いかでかさはあらむ。渡殿の方には、人の音もせざりしものを」と聞こえたまふ。「なほあやし」とひとりごちて、渡りたまひぬ。御簾の内に入りたまひぬれば、中将、渡殿の戸口に人びとのけ

はかなきことにつけても涙もろにものしたまへば、いと不便にこそはべれ」と申したまへば、笑ひたまひて、「今いくばくもおはせじ。まめやかに仕うまつり見えたてまつれ。内大臣はこまかにしもあるまじうこそ、愁へたまひしか。人柄あやしうはなやかに、男々しき方によりて、親などの御孝をも、いかめしきさまをば立てて、人にも見おどろかさむの心あり、まことにしみて深きころはなき人になむものせられける。さるは心の隈多く、いとかしこき人の、末の世にあまるまで才類ひなく、うるさながら、人としてかく難なきことはかたかりける」などのたまふ。「いとおどろおどろしかりつる風に、中宮に、はかばかしき宮司などさぶらひつらむや」とて、この君して御消息聞こえたまふ。「夜の風の音はいかが聞こし召しつらむ。吹き乱りはべりしに、おこりあひはべりて、いと堪へがたき、ためらひはべるほどになむ」と聞こえたまふ。

中将下りて、中の廊の戸より通りて参りたまふ。朝ぼらけのかたちいとめでたくをかしげなり。東の対の南のそばに立ちて、御前の方を見やりたまへば、御格子まだ二間ばかり上げて、ほのかなる朝ぼらけのほどに、御簾巻き上げて人びとゐたり。高欄に押しかかりつつ、若やかなる限りあまた見ゆ。うちとけたるはいかがあらむ、さやかならぬ明けぼののほど、色々なる姿はいづれともなくをかし。童べ下ろさせたまひて、虫の籠どもに露飼はせたまふなりけり。紫苑、撫子、濃き薄き相どもに、女郎花の汗衫などやうの、時にあひたるさまにて、四五人連れて、ここかしこの草むらに寄りて、色々籠どもを持ってさまよひ、撫子などのいとあはれげなる枝ども取り持て参る霧のまよひは、いと艶にぞ見えける。吹き来る追風は、しをにことごとくに匂ふ空も、香のかをりも、触ればひたまへる御けはひにやと、いと思ひやりめでたく心懸想せられて、立ち出でにくけれど、忍びやかにうちおとなひて歩み出でたまへるに、人びとけざやかにおどろき顔にはあらねど、皆すべり入りぬ。御参りのほどなど、童な

暮らさめ、限りあらむ命のほども、今すこしはかならず延びなむかし、と思ひ続けらる。

暁方に風すこししめりて、村雨のやうに降り出づ。「六条院には離れたる屋ども倒れたり」など、人びと申す。風の吹きまふほど、広くそこら高き心地する院に、人びと、おはしますおとどのあたりにこそしげけれ、東の町などは人少なに思されつらむ、とおどろきたまひて、まだほのぼのとするに参りたまふ。道のほど、横さま雨いと冷やかに吹き入る。空のけしきもすぎきに、あやしくあくがれたる心地して、何ごとぞや、またわが心に思ひ加はれるよ、と思ひ出づれば、いと似げなきことなりけり、あなもの狂ほしと、とぎまかうざまに思ひつつ、東の御方にまづまうでたまへれば、懼ぢ極じておはしけるに、とかく聞こえ慰めて、人召して所々つくろはすべきよしなど言ひおきて、南のおとどに参りたまへれば、まだ御格子も参らず。おはしますに当れる高欄に押しかかりて見わたせば、山の木どもも吹きなびかして、枝ども多く折れ伏したり。草むらはさらにもいはず、桧皮、瓦、所々の立部、透垣などやうのもの乱りがはし。日のわづかにさし出でたるに、憂へ顔なる庭の露きらきらとして、空はいとすぐく霧りわたれるに、そこはかとなく涙の落つるを、おし拭ひ隠して、うちしはぶきたまへれば、「中将の声づくるにぞあなる。夜はまだ深からむは」とて起きたまふなり。何ごとにかあらむ、聞こえたまふ声はせで、大臣うち笑ひたまひて、「いにしへだに知らせたてまつらずなりにし暁の別れよ。今ならひたまはむに、心苦しからむ」とて、とばかり語らひきこえたまふけはひどもいとをかし。女の御いらへは聞こえねど、ほのぼの、かやうに聞こえ戯れたまふ言の葉の趣きに、ゆるびなき御仲らひかな、と聞きゐたまへり。

御格子を御手づから引き上げたまへば、気近きかたはらいたさに、立ち退きてさぶらひたまふ。「いかにぞ。よべ、宮は待ちよろこびたまひきや」、「しか。

こと、世にあるまじきことなれど、げにさのみこそあれ」などあはれがりきこえたまひて、「かく騒がしげにはべめるを、この朝臣さぶらへばと、思ひたまへ譲りてなむ」と、御消息聞こえたまふ。

道すがらいりもみする風なれど、うるはしくものしたまふ君にて、三条の宮と六条院とに参りて御覧ぜられたまはぬ日なし。内の御物忌などにえさらず籠もりたまふべき日より外は、いそがしき公事、節会などの、暇いるべくことしげきにあはせても、まづこの院に参り、宮よりぞ出でたまひければ、まして今日、かかる空のけしきにより、風のさきにあくがれありきたまふもあはれに見ゆ。

宮、いとうれしう頼もしと待ち受けたまひて、「ここのらに、まだかく騒がしき野分にこそあはざりつれ」と、ただわななきにわななきたまふ。大きな木の枝などの折るる音もいとうたてあり、おとどの瓦さへ残るまじく吹き散らすに、「かくてもものしたまへること」と、かつはのたまふ。そこら所狭かりし御勢ひのしづまりて、この君を頼もし人に思したる、常なき世なり。今もおほかたのおぼえの薄らぎたまふことはなけれど、内の大殿の御けはひは、なかなかすこし疎くぞありける。

中将、夜もすがら荒き風の音にも、すずろにもあはれなり。心にかけて恋しと思ふ人の御ことはさしおかれて、ありつる御面影の忘れぬを、こはいかにおぼゆる心ぞ、あるまじき思ひもこそ添へ、いと恐ろしきこと、とみづから思ひ紛らはし、異事に思ひ移れど、なほふとおぼえつつ、来し方行く末ありがたくもものしたまひけるかな、かかる御仲らひに、いかで東の御方、さるもの数にて立ち並びたまひつらむ、たとしへなかりけりや、あないとほし、とおぼゆ。大臣の御心ばへをありがたしと思ひ知りたまふ。人柄のいとまめやかなれば、似げなさを思ひ寄らねど、さやうならむ人をこそ、同じくは見て明かし

びと押へて、いかにしたるにかあらむ、うち笑ひたまへる、いといみじく見ゆ。花どもを心苦しがりて、え見捨てて入りたまはず。御前なる人びとも、さまざまにもきよげなる姿どもは見わたさるれど、目移るべくもあらず。大臣のいと気遠くはるかにもてなしたまへるは、かく見る人ただにはえ思ふまじき御ありさまを、いたり深き御心にて、もしかかることもやと思すなりけり、と思ふに、けはひ恐ろしうて立ち去るにぞ、西の御方より、内の御障子引き開けて渡りたまふ。

「いとうたて、あわたたしき風なめり。御格子下ろしてよ。男どもあるらむを、あらはにもこそあれ」と聞こえたまふを、また寄りて見れば、もの聞こえて、大臣もほほ笑みて見たてまつりたまふ。親ともおぼえず若くきよげになまめきて、いみじき御かたちの盛りなり。女もねびととのひ、飽かぬことなき御さまどもなるを、身にしむばかりおぼゆれど、この渡殿の格子も吹き放ちて、立てる所のあらはになれば、恐ろしうて立ち退きぬ。今参れるやうにうち声づくりて、簀子の方に歩み出でたまへれば、さればよ、あらはなりつらむ、とて、かの妻戸のあきたりけるよ、と今ぞ見咎めたまふ。年ごろかかることのつゆなかりつるを、風こそげに巖も吹き上げつべきものなりけれ、さばかりの御心どもを騒がして、めづらしくうれしき目を見つるかな、とおぼゆ。

人びと参りて、「いとかめしう吹きぬべき風にはべり。丑寅の方より吹きはべれば、この御前はのどけきなり。馬場の御殿、南の釣殿などは、危ふげになむ」とて、とかくこと行なひののしる。「中将はいづこよりもものしつるぞ」、「三条の宮にはべりつるを、風いたく吹きぬべしと、人びとの申しつれば、おぼつかなきに参りはべりつる。かしこにはまして心細く、風の音をも、今はかへりて若き子のやうに懼ぢたまふめれば、心苦しさに、まかではべりなむ」と申したまへば、「げに、はやまうでたまひね。老いもていきて、また若うなる

中宮の御前に、秋の花を植ゑさせたまへること、常の年よりも見所多く、色種を尽くして、よしある黒木赤木の籬を結ひませつつ、同じき花の枝ざし、姿、朝夕露の光も世の常ならず玉かとかかやきて、作りわたせる野辺の色を見るに、はた春の山も忘られて、涼しうおもしろく、心もあくがるるやうなり。春秋の争ひに、昔より秋に心寄する人は数まさりけるを、名立たる春の御前の花園に心寄せし人びと、また引きかへし移ろふけしき、世のありさまに似たり。

これを御覧じつきて里居したまふほど、御遊びなどもあらまほしけれど、八月は故前坊の御忌月なれば、心もとなく思しつ々明け暮るるに、この花の色まさるけしきどもを御覧ずるに、野分、例の年よりもおどろおどろしく、空の色変りて吹き出づ。花どものしをるるを、いとさしも思ひしまぬ人だに、あなわりなと思ひ騒がるるを、まして草むらの露の玉の緒乱るるままに、御心惑ひもしぬべく思したり。おほふばかりの袖は、秋の空にしもこそ欲しげなりけれ。暮れゆくままに、ものも見えず吹きまよはしていとむくつけければ、御格子など参りぬるに、うしろめたくいみじと、花の上を思し嘆く。

南の御殿にも、前裁つくろはせたまひける折にしも、かく吹き出でて、もとあらの小萩はしたなく待ちえたる風のけしきなり。折れ返り露もとまるまじく吹き散らすを、すこし端近くて見たまふ。大臣は姫君の御方におはしますほどに、中将の君参りたまひて、東の渡殿の小障子の上より、妻戸の開きたる隙を何心もなく見入れたまへるに、女房のあまた見ゆれば、立ちとまりて音もせで見る。御屏風も、風のいたく吹きければ、押し畳み寄せたるに、見通しあらはなる廂の御座にゐたまへる人、ものに紛るべくもあらず、気高きよらに、さとはほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す。あぢきなく、見たてまつるわが顔にも移り来るやうに、愛敬はにはほひ散りて、またなくめづらしき人の御さまなり。御簾の吹き上げらるるを、人

野
分

さぶらひて灯しつけよ。夏の月なきほどは、庭の光なき、いとものむつかしくおぼつかなしや」とのたまふ。

「篝火にたちそふ恋の煙こそ世には絶えせぬ炎なりけれ

いつまでとかや、ふすぶるならでも、苦しき下燃えなりけり」と聞こえたまふ。女君、あやしのありさまやと思すに、

「行方なき空に消ちてよ篝火のたよりにたぐふ煙とならば

人のあやしと思ひはべらむこと」とわびたまへば、「くはや」とて出でたまふに、東の対の方に、おもしろき笛の音、箏に吹きあはせたり。「中将の例のあたり離れぬどち、遊ぶにぞあなる。頭中将にこそあなれ。いとわざとも吹きなる音かな」とて、立ちとまりたまふ。

御消息、「こなたになむ、いと影涼しき篝火にとどめられてものする」とのたまへれば、うち連れて三人参りたまへり。「風の音秋になりけり、と聞こえつる笛の音に、忍ばれでなむ」とて、御琴ひき出でて、なつかしきほどに弾きたまふ。源中将は、盤渉調にいとおもしろく吹きたり。頭中将、心づかひして出だし立てがたうす。「遅し」とあれば、弁少将、拍子打ち出でて、忍びやかに歌ふ声、鈴虫にまがひたり。二返りばかり歌はせたまひて、御琴は中将に譲らせたまひつ。げにかの父大臣の御爪音をさをさ劣らず、はなやかにおもしろし。「御簾のうちに、物の音聞き分く人ものしたまふらむかし。今宵は盃など心してを。盛り過ぎたる人は、酔ひ泣きのついでに、忍ばぬこともこそ」とのたまへば、姫君もげにあはれと聞きたまふ。絶えせぬ仲の御契りおろかなるまじきものなればにや、この君たちを人知れず目にも耳にもとどめたまへど、かけてさだに思ひ寄らず、この中将は心の限り尽くして、思ふ筋にぞ、かかるついでにも、え忍び果つまじき心地すれど、さまよくもてなして、さをさ心とけても搔きわたさず。

このごろ世の人の言種に、内の大殿の今姫君と、ことに触れつつ言ひ散らすを、源氏の大臣聞こしめして、「ともあれかくもあれ、人見るまじくて籠もりたるらむ女子を、なほざりのかことにても、さばかりにもめかし出でて、かく人に見せ言ひ伝へらるこそ、心得ぬことなれ。いと際々しうものしたまふあまりに、深き心をも尋ねずもて出でて、心にもかなはねば、かくはしたなきなるべし。よろづのこと、もてなしからにこそなだらかなるものなめれ」といとほしがりたまふ。

かかるにつけても、げによくこそと、親と聞こえながらも、年ごろの御心を知りきこえず馴れたてまつらましに、恥ぢがましきことやあらましと、対の姫君思し知るを、右近もいとよく聞こえ知らせけり。憎き御心こそ添ひたれど、さりとして御心のままに押したちてなどもてなしたまはず、いとど深き御心のみまさりたまへば、やうやうなつかしううちとけきこえたまふ。

秋になりぬ。初風涼しく吹き出でて、背子が衣もうらさびしき心地したまふに、忍びかねつつ、いとしばしば渡りたまひて、おはしまし暮らし、御琴なども習はしきこえたまふ。五六日の夕月夜は疾く入りて、すこし雲隠るるけしき、萩の音もやうやうあはれなるほどになりけり。御琴を枕にてもろともに添ひ臥したまへり。かかる類ひあらむやと、うち嘆きがちにて夜更かしたまふも、人の咎めたてまつらむことを思せば、渡りたまひなむとて、御前の篝火のすこし消えがたなるを、御供なる右近の大夫を召して、ともしつけさせたまふ。

いと涼しげなる遣水のほとりに、けしきことに広がり臥したる檀の木の下に、打松おどろおどろしからぬほどに置いて、さし退きて灯したれば、御前の方は、いと涼しくをかしきほどなる光に、女の御さま見るにかひあり。御髪の手あたりなど、いと冷やかにあてはかなる心地して、うちとけぬさまにものをつつましと思したるけしき、いとらうたげなり。帰り憂く思しやすらふ。「絶えず人

篝

火

と、青き色紙一重ねに、いと草がちに、いかれる手の、その筋とも見えすただよひたる書きざまも、下長に、わりなくゆゑばめり。くだりのほど、端ざまに筋かひて、倒れぬべく見ゆるを、うち笑みつつ見て、さすがにいと細く小さく巻き結びて、撫子の花につけたり。

樋洗童しも、いと馴れてきよげなる、今参りなりけり。女御の御方の台盤所に寄りて、「これ参らせたまへ」と言ふ。下仕へ見知りて、「北の対にさぶらふ童なりけり」とて、御文取り入る。大輔の君といふ、持て参りて、引き解きて御覽ぜさす。女御、ほほ笑みてうち置かせたまへるを、中納言の君といふ、近くゐて、そばそば見けり。「いと今めかしき御文のけしきにもはべめるかな」と、ゆかしげに思ひたれば、「草の文字はえ見知らねばにやあらむ、本末なくも見ゆるかな」とて賜へり。「返りこと、かくゆゑゆゑしく書かずは、わろしとや思ひおとされむ。やがて書きたまへ」と譲りたまふ。もて出でてこそあらね、若き人は、ものをかしくて、皆うち笑ひぬ。御返り乞へば、「をかしきことの筋にのみまつはれてはべめれば、聞こえさせにくくこそ。宣旨書きめきてはいとほしからむ」とて、ただ御文めきて書く。

近きしるしなきおぼつかなきは恨めしく。

常陸なる駿河の海の須磨の浦に波立ち出でよ筥崎の松

と書きて、読みきこゆれば、「あなうたて。まことにみづからのにもこそ言ひなせ」と、かたはらいたげに思したれど、「それは聞かむ人わきまへはべりなむ」とて、おし包みて出だしつ。

御方見て、「をかしの御口つきや。待つとのたまへるを」とて、いとあまえたる薫物の香を返す返す薫きしめりたまへり。紅といふもの、いと赤らかにかいつけて、髪けづりつくろひたまへる、さる方ににぎははしく、愛敬づきたり。御対面のほど、さし過ぐしたることもあらむかし。

身にこそあめれ」と、腹立ちたまふ顔やう、気近く愛敬づきて、うちそぼれたるは、さる方にをかしく罪許されたり。ただいと鄙び、あやしき下人の中に生ひ出でたまへれば、もの言ふさまも知らず。ことなるゆゑなき言葉をも、声のどやかに押ししづめて言ひ出だしたるは、うち聞き、耳異におぼえ、をかしからぬ歌語りをするも、声づかひつきづきしくて、残り思はせ、本末惜しみたるさまにてうち誦じたるは、深き筋思ひ得ぬほどのうち聞きには、をかしかなりと、耳もとまるかし。いと心深くよしあることを言ひゐたりとも、よろしき心地あらむと聞こゆべくもあらず、あはつけき声さまにのたまひ出づる言葉、こはごはしく言葉たみて、わがままに誇りならひたる乳母の懐にならひたるさまに、もてなしいとあやしきに、やつるるなりけり。いといふかひなくはあらず、三十文字あまり、本末あはぬ歌、口疾くうち続けなどしたまふ。

「さて女御殿に参れとのたまひつるを、しぶしぶなるさまならば、ものしくもこそ思せ。夜さりまうでむ。大臣の君、天下に思すとも、この御方々のすげなくしたまはむには、殿のうちには立てりなむはや」とのたまふ、御おぼえのほど、いと軽らかなりや。まづ御文たてまつりたまふ。

葦垣のま近きほどにはさぶらひながら、今まで影踏むばかりのしるしもはべらぬは、勿来の関をや据ゑさせたまへらむとなむ。知らねども、武蔵野といへばかしこけれども。あなかしこや、あなかしこや。

と、点がちにて、裏には、

まことや、暮にも参り来むと思うたまへ立つは、厭ふにはゆるにや。いでやいでや、あやしきは水無川にを。

とて、また端にかくぞ。

草若み常陸の浦のいかが崎いかであひ見む田子の浦波

大川水の。

かりけれ。ただその罪の報いななり。おし、言どもりとぞ、大乘誹りたる罪にも数へたるかし」とのたまひて、子ながら恥づかしくおはする御さまに、見えたとまつらむこそ恥づかしけれ、いかに定めて、かくあやしきけはひも尋ねず迎へ寄せけむと思し、人びともあまた見つぎ言ひ散らさむことと、思ひ返したまふものから、「女御里にもものしたまふ。時々渡り参りて、人のありさまなども見ならひたまへかし。ことなることなき人も、おのづから人に交じらひ、さる方になればさてもありぬかし。さる心して見えたてまつりたまひなむや」とのたまへば、「いとうれしきことにこそはべるなれ。ただいかでもいかでも、御方々に数まへしろしめされむことをなむ、寝ても覚めても、年ごろ何ごとを思ひたまへつるにもあらず。御許しだにはべらば、水を汲みいただきても、仕うまつりなむ」と、いとよげに今すこしさへづれば、いふかひなしと思して、「いとしかおりたちて薪拾ひたまはずとも、参りたまひなむ。ただかのあえものにしけむ法の師だに遠くは」と、をごとくにのたまひなすをも知らず、同じき大臣と聞こゆるなかにも、いとよげにもものしく、はなやかなるさまして、おぼろけの人見えにくき御けしきをも見知らず、「さて、いつか女御殿には参りはべらむずる」と聞こゆれば、「よろしき日などやいふべからむ。よし、ことごとしくは何かは。さ思はれば、今日にても」とのたまひ捨てて渡りたまひぬ。

よき四位五位たちの、いつききこえて、うち身じろきたまふにもいとかめしき御勢ひなるを見送りきこえて、「いで、あなめでたのわが親や。かかりける種ながら、あやしき小家に生ひ出でけること」とのたまふ。五節、「あまりことごとしく恥づかしげにぞおはする。よろしき親の、思ひかしづかむにぞ、尋ね出でられたまはまし」と言ふもわりなし。「例の君の、人の言ふこと破りたまひて、めざまし。今はひとつ口に、言葉な交ぜられそ。あるやうあるべき

中に思ひはありやすらむ、いとあさへたるさまでもしたり。かたちはひちちかに愛敬づきたるさまして、髪うるはしく、罪軽げなるを、額のいと近やかなると、声のあはつけきとにそこなはれたるなめり。取りたててよしとはなけれど、異人とあらがふべくもあらず、鏡に思ひあはせられたまふに、いと宿世心づきなし。

「かくてもものしたまふは、つきなくうひうひしくなどやある。ことしげくのみありて、訪らひまうでずや」とのたまへば、例のいと舌疾にて、「かくてさぶらふは、何のもの思ひかはべらむ。年ごろおぼつかなく、ゆかしく思ひきこえさせし御顔、常にえ見たてまつらぬばかりこそ、手打たぬ心地しはべれ」と聞こえたまふ。「げに、身に近く使ふ人もさをさなきに、さやうにても見ならしたてまつらむと、かねては思ひしかど、えさしもあるまじきわざなりけり。なべての仕うまつり人こそ、とあるもかかるも、おのづから立ち交らひて、人の耳をも目もかならずしもとどめぬものなれば、心やすかべかめれ。それだに、その人のむすめ、かの人の子と知らるる際になれば、親はらからの面伏せなる類ひ多かめり。まして」と、のたまひさしつる御けしきの恥づかしきも知らず、「何かそは、ことごとしく思ひたまひて交らひはべらばこそ所狭からめ、大御大壺取りにも仕うまつりなむ」と聞こえたまへば、え念じたまはで、うち笑ひたまひて、「似つかはしからぬ役ななり。かくたまさかに会へる親の孝せむの心あらば、このものたまふ声をすこしのどめて聞かせたまへ。さらば命も延びなむかし」と、をこめいたまへる大臣にて、ほほ笑みてのたまふ。「舌の本性にこそははべらめ。幼くはべりし時だに、故母の常に苦しがり教へはべりし。妙法寺の別当大徳の産屋にはべりける、あえものとなむ嘆きはべりたうびし。いかでこの舌疾さやめはべらむ」と思ひ騒ぎたるも、いと孝養の心深く、あはれなりと見たまふ。「その気近く入り立ちたりけむ大徳こそは、あぢきな

ぼつかなきことを恨みきこえたまへど、かくのたまふるがつつましくて、え渡り見たてまつりたまはず。

大臣、この北の対の今姫君を、いかにせむ、さかしらに迎へ率て来て、人かく誹るとて、返し送らむもいと軽々しく、もの狂ほしきやうなり、かくて籠めおきたれば、まことにかしづくべき心あるかと、人の言ひなすなるもねたし、女御の御方などに交じらはせて、さるをこのものにしないてむ、人のいとかたはなるものに言ひおとすなるかたちはた、いとさ言ふばかりにやはある、など思して、女御の君に、「かの人参らせむ。見苦しからむことなどは、老いしらへる女房などして、つつまず言ひ教へさせたまひて御覽ぜよ。若き人びとの言種には、な笑はせさせたまひそ。うたてあはつけきやうなり」と、笑ひつつ聞こえたまふ。「などか、いとさことのほかにははべらむ。中将などの、いと二なく思ひはべりけむかね言に足らずといふばかりにこそははべらめ。かくのたまひ騒ぐを、はしたなう思はるるにも、かたへはかかやかしきにや」と、いと恥づかしげにて聞こえさせたまふ。この御ありさまは、こまかにをかしげさはなく、いとあてに澄みたるものの、なつかしきさま添ひて、おもしろき梅の花の開けさしたる朝ぼらけおぼえて、残り多かりげにはほ笑みたまへるぞ、人に異なりけると見たてまつりたまふ。「中将の、いとさ言へど、心若きたどり少なさに」など申したまふも、いとほしげなる人の御おぼえかな。

やがてこの御方のたよりに、たたずみおはしてのぞきたまへば、簾高くおし張りて、五節の君とて、されたる若人のあると、双六をぞ打ちたまふ。手をいと切におしもみて、「せうさい、せうさい」とこふ声ぞ、いと舌疾きや。あなうたてと思して、御供の人の前駆追ふをも、手かき制したまうて、なほ妻戸の細目なるより、障子の開きあひたるを見入れたまふ。このいとこも、はたけしきはやれる、「御返しや、御返しや」と、筒をひねりて、とみに打ち出でず。

臥したまへるさま、暑かはしくは見えぬ、いとらうたげにささやかなり。透きたまへる肌つきなど、いとうつくしげなる手つきして、扇を持たまへりけるながら、かひなを枕にて、うちやられたる御髪のほど、いと長くこちたくはあらねど、いとをかしき末つきなり。人びともの後に寄り臥しつうち休みたれば、ふともおどろいたまはず。扇を鳴らしたまへるに、何心もなく見上げたまへるまみ、らうたげにて、つらつき赤めるも、親の御目にはうつくしくのみ見ゆ。「うたた寝はいさめきこゆるものを、などか、いとものはかなきさまにては大殿籠もりける。人びとも近くさぶらはで、あやしや。女は、身を常に心づかひして守りたむなむよかるべき。心やすくうち捨てざまにもてなしたる、品なきことなり。さりとして、いとさかしく身かためて、不動の陀羅尼誦みて、印つくりてゐたらむも憎し。うつつの人にもあまり気遠く、もの隔てがましきなど、気高きやうとても、人にくく心うつくしくはあらぬわざなり。太政大臣の后がねの姫君ならはしたまふなる教へは、よろづのことに通はしなだらめて、かどかどしきゆゑもつけじ、たどたどしくおぼめくこともあらじと、ぬるらかにこそ掟てたまふなれ。げにさもあることなれど、人として、心にもするわざにも、立ててなびく方は方とあるものなれば、生ひ出でたまふさまあらむかし。この君の人となり、宮仕へに出だし立てたまはむ世のけしきこそ、いとゆかしけれ」などのたまひて、「思ふやうに見たてまつらむと思ひし筋は難うなりにたる御身なれど、いかで人笑はれならずしなしたてまつらむとなむ、人の上のさまざまなるを聞くごとに、思ひ乱れはべる。試み事に、ねむごろがらむ人のねぎごとに、なしばしなびきたまひそ。思ふさまはべり」など、いとらうたしと思ひつつ聞こえたまふ。昔は何ごとく深くも思ひ知らで、なかなか、さしあたりていとほしかりしことの騒ぎにも、おもなくて見えたてまつりけるよ、と今ぞ思ひ出づるに、胸ふたがりて、いみじく恥づかしき。大宮よりも、常にお

臣のさることやととぶらひたまひしこと、語りきこゆれば、「さかし。そこにこそは、年ごろ音にも聞こえぬ山賤の子迎へ取りて、ものめかしたつれ。をさをさ人の上もどきたまはぬ大臣の、このわたりのことは耳とどめてぞおとしめたまふや。これぞおぼえある心地しける」とのたまふ。少将の、「かの西の対に据ゑたまへる人は、いとこともなきけはひ見ゆるわたりになむはべるなる。兵部卿宮など、いたう心とどめてのたまひわづらふとか。おぼろけにはあらじとなむ、人びと推し量りはべめる」と申したまへば、「いで、それは、かの大臣の御むすめと思ふばかりのおぼえのいといみじきぞ。人の心皆さこそある世なめれ。かならずさしもすぐれじ。人びとしきほどならば、年ごろ聞こえなまし。あたら大臣の、塵もつかず、この世には過ぎたまへる御身のおぼえありさまに、おもだたしき腹に、むすめかしづきて、げに疵なからむと思ひやりめでたきがものしたまはぬは。おほかたの、子の少なくて、心もとなきなめりかし。劣り腹なれど、明石の御許の産み出でたるはしも、さる世になき宿世にて、あるやうあらむとおぼゆかし。その今姫君は、ようせずは、実の御子にもあらじかし。さすがにいとけしきあるところつきたまへる人にて、もてないたまふならむ」と、言ひおとしたまふ。「さていかが定めらるなる。親王こそまつはし得たまはむ。もとより取り分きて御仲よし、人柄も警策なる御あはひどもならむかし」などのたまひては、なほ姫君の御こと飽かず口惜し、かやうに、心にくくもてなして、いかにしなさむなど、やすからずいぶかしがらせましものをとねたければ、位さばかりと見ざらむ限りは、許しがたく思すなりけり。大臣などもねむごろに口入れかへさひたまはむにこそは、負くるやうにてもなびかめと思すに、男方は、さらに焦られきこえたまはず、心やましくなむ。

とかく思しめぐらすまに、ゆくりもなく軽らかにはひ渡りたまへり。少将も御供に参りたまふ。姫君は昼寝したまへるほどなり。羅の単衣を着たまひて

てやすからぬもの思ひをすらむ、さ思はじとて、心のままにもあらば、世の人のそしり言はむことの軽々しき、わがためをばさるものにて、この人の御ためいとほしかるべし、限りなき心ざしといふとも、春の上の御おぼえに並ぶばかりは、わが心ながらえあるまじく思し知りたり。さてその劣りの列にては、何ばかりかはあらむ、わが身ひとつこそ人よりは異なれ、見む人のあまたが中にかかづらはむ末にては、何のおぼえかはたけからむ、異なることなき納言の際の、二心なくて思はむには、劣りぬべきことぞ、とみづから思し知るに、いとほしくて、宮、大将などにや許してまし、さてもて離れ、いざなひ取りては、思ひも絶えなむや、いふかひなきにて、さもしてむ、と思す折もあり。されど渡りたまひて、御かたちを見たまひ、今は御琴教へたてまつりたまふにさへことづけて、近やかに馴れ寄りたまふ。姫君も、初めこそむくつけくうたてとも思ひたまひしか、かくてもなだらかに、うしろめたき御心はあらざりけりとやうやう目馴れて、いとしも疎みきこえたまはず、さるべき御いらへも、馴れ馴れしからぬほどに聞こえかはしなどして、見るままにいと愛敬づき、薫りまさりたまへれば、なほさてもえ過ぐしやるまじく思し返す。さはまた、さてここながらかしづき据ゑて、さるべき折々に、はかなくうち忍び、ものをも聞こえて慰みなむや、かくまだ世馴れぬほどのわづらはしきこそ心苦しくはありけれ、おのづから関守強くとも、ものの心知りそめ、いとほしき思ひなくて、わが心も思ひ入りなば、しげくとも障はらじかし、と思し寄る、いとけしからぬことなりや。いよいよ心やすからず、思ひわたらむ、苦しからむ、なのめに思ひ過ぐさむことの、とぎまかくさまにもかたきぞ、世づかずむつかしき御語らひなりける。

内の大殿は、この今の御むすめのことを、殿の人も許さず軽み言ひ、世にもほきたることと誹りきこゆと聞きたまふに、少将の、ことのついでに、太政大

ひ知らずおもしろく聞こゆ。「いで、弾きたまへ。才は人になむ恥ぢぬ。想夫恋ばかりこそ、心のうちに思ひて紛らはす人もありけめ、おもなくて、かれこれに合はせつるなむよき」と、切に聞こえたまへど、さる田舎の隈にて、ほのかに京人と名のりける古大君女、教へきこえければ、ひがことにもやとつつましくて、手触れたまはず。しばしも弾きたまはなむ、聞き取ることもや、と心もとなきに、この御琴によりぞ、近くゐざり寄りて、「いかなる風の吹き添ひて、かくは響きはべるぞとよ」とて、うち傾きたまへるさま、火影にいとうつくしげなり。笑ひたまひて、「耳固からぬ人のためには、身にしむ風も吹き添ふかし」とて、押しやりたまふ。いと心やまし。

人びと近くさぶらへば、例の戯れごとくもえ聞こえたまはで、「撫子を飽かでもこの人びとの立ち去りぬるかな。いかで大臣にもこの花園見せたてまつらむ。世もいと常なきをと思ふに、いにしへも、ものついでに語り出でたまへりしも、ただ今のこととぞおぼゆる」とて、すこしのたまひ出でたるにも、いとあはれなり。

「撫子のとこなつかしき色を見ばもとの垣根を人や尋ねむ

このことのわづらはしさにこそ、繭ごもりも心苦しう思ひきこゆれ」とのたまふ。君うち泣きて、

山賤の垣ほに生ひし撫子のもとの根ざしを誰れか尋ねむ

はかなげに聞こえないたまへるさま、げにいとなつかしく若やかなり。「来ざらましかば」とうち誦じたまひて、いとどしき御心は、苦しきまでなほえ忍び果つまじく思さる。

渡りたまふことも、あまりうちしきり、人の見たてまつり咎むべきほどは、心の鬼に思しとどめて、さるべきことをし出でて、御文の通はぬ折なし。ただこの御ことのみ、明け暮れ御心にはかかりたり。なぞ、かくあいなきわざをし

ほど、いと奥深くはあらで、虫の声に掻き鳴らし合はせたるほど、気近く今め
 かしきものの音なり。ことことしき調べ、もてなししどけなしや。このものよ、
 さながら多くの遊び物の音、拍子を調べとりたるなむ、いとかしこき。大和琴
 とはかなく見せて、際もなくしおきたることなり。広く異国のことを知らぬ女
 のためとなむおぼゆる。同じくは、心とどめて、物などに掻き合はせて習ひた
 まへ。深き心とて、何ばかりもあらずながら、またまことに弾き得ることはか
 たきにやあらむ、ただ今は、この内大臣にならずらふ人なしかし。ただはかなき
 同じ菅搔きの音に、よろづのものの音籠もり通ひて、いふかたもなくこそ響き
 のぼれ」と語りたまへば、ほのぼの心得て、いかでと思すことなれば、いとど
 いぶかしくて、「このわたりにて、さりぬべき御遊びの折など、聞きはべりな
 むや。あやしき山賤などのなかにも、まねぶものあまたはべるることなれば、
 おしなべて心やすくやとこそ思ひたまへつれ。さは、すぐれたるはさまことに
 やはべらむ」と、ゆかしげに、切に心に入れて思ひたまへれば、「さかし。あ
 づまとぞ名も立ち下りたるやうなれど、御前の御遊びにも、まづ書の司を召す
 は、人の国は知らず、ここにはこれをものの親としたるにこそあめれ。そのな
 かにも、親としつべき御手より弾き取りたまへらむは、心ことなりなむかし。
 ここになども、さるべからむ折にはものしたまひなむを、この琴に、手惜しま
 ずなど、あきらかに掻き鳴らしたまはむことやかたからむ。ものの上手は、い
 づれの道も心やすからずのみぞあめる。さりともつひには聞きたまひてむかし」
 とて、調べすこし弾きたまふ。ことつひいと二なく、今めかしくをかし。これ
 にもまされる音や出づらむと、親の御ゆかしきたち添ひて、このことにてさへ、
 いかならむ世に、さてうちとけ弾きたまはむを聞かむなど、思ひるたまへり。
 「貫河の瀬々のやはらた」と、いとなつかしく謡ひたまふ。「親避くるつま」
 は、すこしうち笑ひつつ、わざともなく掻きなしたまひたる菅搔きのほど、い

ことしくなむ言ひ思ひなすべかめる。かたがたものすめれど、さすがに人の好きごとと言ひ寄らむにつきなしかし。かくてもものしたまふは、いかでさやうならむ人のけしきの深さ浅さをも見むなど、さうごうしきままに願ひ思ひしを、本意なむ叶ふ心地しける」など、ささめきつつ聞こえたまふ。御前に、乱れがはしき前裁なども植ゑさせたまはず、撫子の色をととのへたる、唐の、大和の、籬いとなつかしく結ひなして、咲き乱れたる夕ばえいみじく見ゆ。皆立ち寄りて、心のままにも折り取らぬを飽かず思ひつつやすらふ。「有職どもなりな。心もちるなども、とりどりにつけてこそめやすけれ。右の中将は、ましてすこし静まりて、心恥づかしき気まさりたり。いかにぞや。おとづれ聞こゆや。はしたなくもなさし放ちたまひそ」などのたまふ。中将の君は、かくよきなかにすぐれてをかしげになまめきたまへり。「中将を厭ひたまふこそ、大臣は本意なけれ。交じりものなく、きらきらしかめるなかに、大君だつ筋にて、かたくななりとにや」とのたまへば、「来まさばといふ人もはべりけるを」と聞こえたまふ。「いで、その御肴もてはやされむさまは願はしからず。ただ幼きどちの結びおきけむ心も解けず、年月隔てたまふ心むけのつらきなり。まだ下臈なり、世の聞き耳軽しと思はれば、知らず顔にて、ここに任せたまへらむに、うしろめたくはありなましや」など、うめきたまふ。さは、かかる御心の隔てある御仲なりけり、と聞きたまふにも、親に知られたてまつらむことのいつとなきは、あはれにいぶせく思す。

月もなきころなれば、燈籠に御殿油参れり。「なほ気近くて暑かはしや。篝火こそよけれ」とて、人召して、篝火の台一つ、「こなたに」と召す。をかしげなる和琴のある、引き寄せたまひて、掻き鳴らしたまへば、律にいとよく調べられたり。音もいとよく鳴れば、すこし弾きたまひて、「かやうのことは御心に入らぬ筋にやと、月ごろ思ひおとしきこえけるかな。秋の夜の月影涼しき

くきはひ、見出でまほしけれど、名のりももの憂き際とや思ふらむ、さらにこそ聞こえね。さても、もて離れたることはない。らうがはしくとかく紛れたまふめりしほどに、底清く澄まぬ水にやどる月は、曇りなきやうのいかでかあらむ」と、ほほ笑みてのたまふ。中将の君も詳しく聞きたまふことなれば、えしもまめだたず。少将と藤侍従とは、いとからしと思ひたり。「朝臣や、さやうの落葉をだに拾へ。人わろき名の後の世に残らむよりは、同じかざしにて慰めむに、なでふことかあらむ」と弄じたまふやうなり。かやうのことにてぞ、うはべはいとよき御仲の、昔よりさすがに隙ありける。まいて中将をいたくはしたなめて、わびさせたまふつらさを思しあまりて、なまねたしとも漏り聞きたまへかし、と思すなりけり。かく聞きたまふにつけても、対の姫君を見せたらむ時、またあなづらはしからぬ方にもてなされなむはや、いとものきらきらしく、かひあるところつきたまへる人にて、よしあしきげぢめも、けぎやかにもてはやし、またもて消ち軽むることも、人に異なる大臣なれば、いかにものしと思ふらむ、おぼえぬさまにて、この君をさし出でたらむに、え軽くは思さじ。いとぎびしくもてなしてむ、など思す。夕つけゆく風いと涼しくて、帰り憂く若き人びとは思ひたり。「心やすくうち休み涼まむや。やうやうかやうの中に厭はれぬべき齢にもなりにけりや」とて、西の対に渡りたまへば、君達皆御送りに参りたまふ。

たそかれ時のおぼおほしきに、同じ直衣どもなれば、何ともわきまへられぬに、大臣、姫君をすこし外出でたまへとて、忍びて、「少将、侍従など率てまうで来たり。いと翔けり来まほしげに思へるを、中将のいと実法の人にて率て来ぬ、無心なめりかし。この人びとは、皆思ふ心なきならじ。なほなほしき際をだに、窓の内なるほどは、ほどに従ひてゆかしく思ふべかめるわざなれば、この家のおぼえ、うちうちのくだくだしきほどよりは、いと世に過ぎて、こと

いと暑き日、東の釣殿に出でたまひて涼みたまふ。中將の君もさぶらひたまふ。親しき殿上人あまたさぶらひて、西川よりたてまつれる鮎、近き川のいしぶしやうのもの、御前にて調じて参らす。例の大殿の君達、中將の御あたり尋ねて参りたまへり。「さうざうしくねぶたかりつる、折よくものしたまへるかな」とて、大御酒参り、氷水召して、水飯など、とりどりにさうどきつつ食ふ。風はいとよく吹けども、日のどかに曇りなき空の、西日になるほど、蟬の声などもいと苦しげに聞こゆれば、「水の上無徳なる今日の暑かはしきかな。無礼の罪は許されなむや」とて、寄り臥したまへり。「いとかかるころは、遊びなどもすすまじく、さすがに暮らしがたきこそ苦しけれ。宮仕へする若き人びと堪へがたからむな。帯も解かぬほどよ。ここにてだにうち乱れ、このごろ世にあらむことの、すこし珍しくねぶたさ覚めぬべからむ、語りて聞かせたまへ。何となく翁びたる心地して、世間のこともおぼつかなしや」などのたまへど、珍しきこととて、うち出で聞こえむ物語もおぼえねば、かしこまりたるやうにて、皆いと涼しき高欄に背中押しつつさぶらひたまふ。

「いかで聞きしことぞや、大臣の、ほか腹の娘尋ね出でて、かしづきたまふなる、とまねぶ人ありしかば。まことにや」と、弁少將に問ひたまへば、「ことごとしく、さまで言ひなすべきことにもはべらざりけるを。この春のころほひ、夢語りしたまひけるを、ほの聞き伝へはべりける女の、われなむかこつべきことある、と名のり出ではべりけるを、中將の朝臣なむ聞きつけて、まことにさやうに触ればひぬべきしるしやある、と尋ねとぶらひはべりける。詳しくさまはえ知りはべらず。げにこのごろ珍しき世語りになむ、人びともしはべるなる。かやうのことにぞ、人のため、おのづからけそむなるわざにはべりけれ」と聞こゆ。まことなりけりと思して、「いと多かめる列に離れたらむ後るる雁を、強ひて尋ねたまふがふくつけきぞ。いとともしきに、さやうならむもの

常

夏

しきこと」と常にのたまひ出づ。中ごろなどはさしもあらず、うち忘れたまひけるを、人のさまぎまにつけて、女子かしづきたまへるたぐひどもに、わが思ほすにしもかなはぬが、いと心憂く本意なく思すなりけり。

夢見たまひて、いとよく合はする者召して合はせたまひけるに、「もし年ごろ御心に知られたまはぬ御子を、人のものになして、聞こしめし出づることや」と聞こえたりければ、「女子の人の子になることはをさをさなしかし。いかなることにかあらむ」など、このころぞ思しのたまふべかめる。

ちしほたれたたまひけり。さもありぬべきあたりには、はかなしごとものたまひ
触るるはあまたあれど、頼みかくべくもしなさず。さる方になどかは見ざらむ
と心とまりぬべきをも、強ひてなほざりごとにしなして、なほかの緑の袖を見
え直してしがなと思ふ心のみぞ、やむごとなき節にはとまりける。あながちに
などかかづらひまどはば、倒ふるる方に許したまひもしつべかめれど、つらし
と思ひし折々、いかで人にもことわらせたてまつらむと思ひおきし忘れがたく
て、正身ばかりには、おろかならぬあはれを尽くし見せて、おほかたには焦ら
れ思へらず。せうとの君達なども、なまねたしなどのみ思ふこと多かり。対の
姫君の御ありさまを、右中将はいと深く思ひしみて、言ひ寄るたよりもいとほ
かなければ、この君をぞかこち寄りけれど、「人の上にては、もどかしきわざ
なりけり」とつれなくいらへてぞものしたまひける。昔の父大臣たちの御仲ら
ひに似たり。

内の大臣は、御子ども腹々いと多かるに、その生ひ出でたるおぼえ、人柄に
従ひつつ、心にまかせたるやうなるおぼえ御勢にて、皆なし立てたまふ。女は
あまたもおはせぬを、女御もかく思ししことのとどこほりたまひ、姫君もかく
こと違ふさまにてもものしたまへば、いと口惜しと思す。かの撫子を忘れたまは
ず、ものの折にも語り出でたまひしことなれば、いかになりにけむ、ものはか
なかりける親の心に引かれて、らうたげなりし人を、行方知らずなりにたるこ
と、すべて女子といはむものなむ、いかにもいかにも目放つまじかりける、さ
かしらにわが子と言ひて、あやしきさまにてはふれやすらむ、とてもかくても
聞こえ出で来ば、とあはれに思しわたる。君達にも、「もしさやうなる名のり
する人あらば、耳とどめよ。心のすさびにまかせて、さるまじきことも多かり
しなかに、これは、いとしかおしなべての際にも思はざりし人の、はかなきも
のうむじをして、かく少なかりけるものくさはひ一つを失ひたることの口惜

りと見馴れたまはむぞゆゆしきや」とのたまふもこよなしと、対の御方聞きたまはば、心置きたまひつべくなむ。上、「心浅げなる人まねどもは、見るにもかたはらいたくこそ。宇津保の藤原君のむすめこそ、いと重りかにはかばかしき人にて、過ちなかめれど、すぐよかに言ひ出でたることもしわざも、女しきところなかめるぞひとやうなめる」とのたまへば、「うつつの人もさぞあるべかめる。人びとしく立てたる趣きことにて、よきほどにかまへぬや。よしなからぬ親の心とどめて生ほしたてたる人の、子めかしきを生けるしるしにて、おくれたること多かるは、何わざしてかしづきしぞと、親のしわざさへ思ひやるるこそいとほしけれ。げにさいへど、その人のけはひよと見えたるは、かひあり、おもだたしかし。言葉の限りまばゆくほめおきたるに、し出でたるわざ、言ひ出でたることのなかに、げにと見え聞こゆることなき、いと見劣りするわざなり。すべて、よからぬ人に、いかで人ほめさせじ」など、ただこの姫君の点つかれたまふまじくとよろづに思しのたまふ。継母の腹ぎたなき昔物語も多かるを、このころ、心見えに心づきなしと思せば、いみじく選りつつなむ、書きととのへさせ、絵などにもかかせたまひける。

中将の君を、こなたには気遠くもてなしきこえたまへれど、姫君の御方には、さしもさし放ちきこえたまはず、ならはしたまふ。わが世のほどは、とてもかくても同じことなれど、なからむ世を思ひやるに、なほ見つき思ひしみぬるところとどこそ、取り分きてはおぼゆべけれとて、南面の御簾の内は許したまへり。台盤所、女房のなかは許したまはず。あまたおはせぬ御仲らひにて、いとやむごとなくかしづききこえたまへり。おほかたの心もちるなども、いとものものしくまめやかにものしたまふ君なれば、うしろやすく思し譲れり。まだいはけたる御雛遊びなどのけはひの見ゆれば、かの人のもろともに遊びて過ぐしし年月の、まづ思ひ出でらるれば、雛の殿の宮仕へいとよくしたまひて、折々にう

かしこ違ふ疑ひを置きつべくなく、方等経の中に多かれど、言ひもてゆけば、ひとつ旨にありて、菩提と煩惱との隔たりなむ、この人のよきあしきばかりのことは変はりける。よく言へば、すべて何ごとも空しからずなりぬや」と、物語をいとわざとのことにのたまひなしつ。

「さてかかる古言の中に、まろがやうに実法なる痴者の物語はありや。いみじく気遠き、ものの姫君も、御心のやうにつれなく、そらおぼめきたるは世にあらじな。いざたぐひなき物語にして、世に伝へさせむ」と、さし寄りて聞こえたまへば、顔を引き入れて、「さらずとも、かく珍かなることは、世語りにこそはなりはべりぬべかめれ」とのたまへば、「珍かにやおぼえたまふ。げにこそまたなき心地すれ」とて寄りゐたまへるさま、いとあざれたり。

「思ひあまり昔の跡を訪ぬれど親に背ける子ぞたぐひなき不孝なるは、仏の道にもいみじくこそ言ひたれ」とのたまへど、顔ももたげたまはねば、御髪をかきやりつつ、いみじく怨みたまへば、からうして、

古き跡を訪ぬれどげになかりけりこの世にかかる親の心は
と聞こえたまふも、心恥づかしければ、いといたくも乱れたまはず。かくして
いかなるべき御ありさまならむ。

紫の上も、姫君の御あつらへにことつけて、物語は捨てがたく思したり。くまのの物語の絵にてあるを、「いとよくかきたる絵かな」とて御覧ず。小さき女君の何心もなくて昼寝したまへるところを、昔のありさま思し出でて、女君は見たまふ。「かかる童どちだに、いかにされたりけり。まろこそなほ例にしつべく、心のどけきは人に似ざりけれ」と聞こえ出でたまへり。げにたぐひ多からぬことどもは、好み集めたまへりけりかし。

「姫君の御前にて、この世馴れたる物語などな読み聞かせたまひそ。みそか心つきたるものの娘などは、をかしとはあらねど、かかること世にはありけ

を移し、はかられたまひて、暑かはしき五月雨の、髪の乱るるも知らで書きたまふよ」とて、笑ひたまふものから、また、「かかる世の古言ならでは、げに何をか紛るることなきつれづれを慰めまし。さてもこの偽りどものなかに、げにさもあらむとあはれを見せ、つきづきしく続けたる、はた、はかなしごとと知りながら、いたづらに心動き、らうたげなる姫君のもの思へる見るに、かた心つくかし。またいとあるまじきことかなと見る見る、おどろおどろしくとりなしけるが目おどろきて、静かにまた聞きたびぞ、憎けれどふとをかしき節あらはなるなどもあるべし。このごろ幼き人の、女房などに時々読まするを立ち聞けば、ものよく言ふものの世にあるべきかな。そらごとをよくしなれたる口つきよりぞ言ひ出だすらむとおぼゆれど、さしもあらじや」とのたまへば、「げに偽り馴れたる人や、さまざまにさも汲みはべらむ。ただいと真のこととこそ思うたまへられけれ」とて、硯をおしやりたまへば、「こちなくも聞こえ落としてけるかな。神代より世にあることを記しおきけるななり。日本紀などはただかたそばぞかし。これらにこそ道々しく詳しきことはあらめ」とて笑ひたまふ。

「その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなけれ、よきもあしきも世に経る人のありさまの、見るにも飽かず聞くにもあまることを、後の世にも言ひ伝へさせまほしき節々を、心に籠めがたくて言ひおき始めたるなり。よきさまに言ふとては、よきことの限り選り出でて、人に従はむとては、またあしきさまの珍しきことを取り集めたる、皆かたがたにつけたるこの世のほかのことならずかし。人のみかどの才、作りやう変はる。同じ大和の国のことなれば、昔今の変はるべし、深きこと浅きことのけぢめこそあらめ、ひたぶるにそら事と言ひ果てむも、ことの心違ひてなむありける。仏のいとうるはしき心にて説きおきたまへる御法も、方便といふことありて、悟りなきものは、ここ

く離れそめしぞと殿は苦しがりたまふ。おほかた何やかやともそばみきこえた
まはで、年ごろかく折ふしにつけたる御遊びどもを、人伝てに見聞きたまひけ
るに、今日めづらしかりつることばかりをぞ、この町のおぼえきらきらしと思
したる。

その駒もすさめぬ草と名に立てる汀の菖蒲今日や引きつる

とおほどかに聞こえたまふ。何ばかりのことにもあらねど、あはれと思したり。
鳩鳥に影をならぶる若駒はいつか菖蒲に引き別るべき

あいだちなき御ことどもなりや。「朝夕の隔てあるやうなれど、かくて見たて
まつるは心やすくこそあれ」。戯れごとなれど、のどやかにおはする人ざまな
れば、静まりて聞こえなしたまふ。床をば譲りきこえたまひて、御几帳引き隔
てて大殿籠もる。気近くななどあらむ筋をば、いと似げなかるべき筋に思ひ離れ
果てきこえたまへれば、あながちにも聞こえたまはず。

長雨例の年よりもいたくして、晴るる方なくつれづれなれば、御方々、絵物
語などのすさびにて明かし暮らしたまふ。明石の御方は、さやうのことをもよ
しありてしなしたまひて、姫君の御方にたてまつりたまふ。西の対にはまして
めづらしくおぼえたまふことの筋なれば、明け暮れ書き読みいとなみおはす。
つきなからぬ若人あまたあり。さまざまにめづらかなる人の上などを、真にや
偽りにや、言ひ集めたるなかにも、わがありさまのやうなるはなかりけりと見
たまふ。住吉の姫君のさしあたりけむ折はさるものにて、今の世のおぼえもな
ほ心ことなめるに、主計頭がほとほとしかりけむなどぞ、かの監がゆゆしさを
思しなずらへたまふ。

殿も、こなたかなたにかかるものどもの散りつつ、御目に離れねば、「あな
むつかし。女こそものうるさがらず、人に欺かれむと生まれたるものなれ。こ
こらのなかに、真はいと少なからむを、かつ知る知る、かかるすずろごとに心

下仕へは棟の裾濃の裳、撫子の若葉の色したる唐衣、今日のよそひどもなり。こなたのは濃き一襲に、撫子襲の汗衫などおほどかにて、おのおの挑み顔なるもてなし、見所あり。若やかなる殿上人などは、目をたててけしきばむ。未の時に、馬場のおとどに出でたまひて、げに親王たちおはし集ひたり。手結ひの公事にはさま変りて、すけたちかき連れ参りて、さまことに今めかしく遊び暮らしたまふ。女は、何のあやめも知らぬことなれど、舎人どもさへ艶なる装束を尽くして、身を投げたる手まどはしなどを見るぞをかしかりける。南の町も通してはるばるとあれば、あなたにもかやうの若き人どもは見けり。打毬楽、落蹲など遊びて、勝ち負けの乱声どものしるも、夜に入り果てて、何事も見えずなり果てぬ。舎人どもの禄品々賜はる。いたく更けて、人びと皆あかれたまひぬ。

大臣は、こなたに大殿籠もりぬ。物語など聞こえたまひて、「兵部卿宮の、人よりはこよなくものしたまふかな。かたちなどはすぐれねど、用意けしきなどよしあり、愛敬づきたる君なり。忍びて見たまひつや。よしといへど、なほこそあれ」とのたまふ。「御弟にこそものしたまへど、ねびまさりてぞ見えたまひける。年ごろかく折過ぐさず渡り睦びきこえたまふと聞きはべれど、昔の内わたりにてほの見たてまつりしのち、おぼつかなしかし。いとよくこそかたちなどねびまさりたまひにけれ。帥の親王よくものしたまふめれど、けはひ劣りて、大君けしきにぞものしたまひける」とのたまへば、ふと見知りたまひにけりと思せど、ほほ笑みて、なほあるを、良しともあしともかけたまはず。人の上を難つけ、落としめざまのこと言ふ人をば、いとほしきものにしたまへば、右大将などをだに、心にくき人にすめるを、何ばかりかはある、近きよすがにて見むは、飽かぬことにやあらむ、と見たまへど、言に表はしてもなたまはず。今はただおほかたの御睦びにて、御座なども異々にて大殿籠もる。などてか

宮より御文あり。白き薄様にて、御手はいとよしありて書きなしたまへり。見るほどこそをかしけれ、まねび出づれば、ことなることなしや。

今日さへや引く人もなき水隠れに生ふる菖蒲の根のみ泣かれむ

例にも引き出でつべき根に結びつけたまへれば、「今日の御返り」などそそのかしおきて出でたまひぬ。これかれも、なほと聞こゆれば、御心にもいかが思しけむ、

あらはれていとど浅くも見ゆるかな菖蒲もわかず泣かれける根の

若々しく。

とばかりほのかにぞあめる。手を今すこしゆゑつけたらばと、宮は好ましき御心に、いささか飽かぬことと見たまひけむかし。樂玉など、えならぬさまにて、所々より多かり。思し沈みつる年ごろの名残なき御ありさまにて、心ゆるびたまふことも多かるに、同じくは人のきずつくばかりのことなくてもやみにしかな、といかが思さざらむ。

殿は、東の御方にもさしのぞきたまひて、「中将の今日の司の手結ひのついでに、男ども引き連れてものすべきさまに言ひしを、さる心したまへ。まだ明きほどに来なむものぞ。あやしくここにはわぎとならず忍ぶることをも、この親王たちの聞きつけて、訪らひものしたまへば、おのづからことごとしくなむあるを、用意したまへ」など聞こえたまふ。

馬場の御殿は、こなたの廊より見通す、ほど遠からず。「若き人びと、渡殿の戸開けて物見よや。左の司にいとよしある官人多かるころなり。少々の殿上人に劣るまじ」とのたまへば、物見むことをいとをかしと思へり。対の御方よりも、童べなど物見に渡り来て、廊の戸口に御簾青やかに掛けわたして、今めきたる裾濃の御几帳ども立てわたし、童、下仕へなどさまよふ。菖蒲襲の相、二藍の羅の汗衫着たる童べぞ、西の対のなめる。好ましく馴れたる限り四人、

やうなれば、ゐたまひも明かきで、軒の雫も苦しきに、濡れ濡れ夜深く出でたまひぬ。ほととぎすなどかならずうち鳴きけむかし、うるさければこそ聞きも止めぬ。御けはひなどのなまめかしきは、いとよく大臣の君に似たてまつりたまへり、と人びともめできこえけり。よべいと女親だちてつくるひたまひし御けはひを、うちうちは知らで、「あはれにかたじけなし」と皆言ふ。

姫君は、かくさすがなる御けしきを、わがみづからの憂さぞかし、親などに知られたてまつり、世の人めきたるさまにて、かやうなる御心ばへならましかば、などかはいと似げなくもあらまし、人に似ぬありさまこそ、つひに世語りにやならむ、と起き臥し思しなやむ。さるは、まことにゆかしげなきさまにはもてなし果てじ、と大臣は思しけり。なほさる御心癖なれば、中宮なども、いとうるはしくや思ひきこえたまへる、ことに触れつつ、ただならず聞こえ動かしなごしたまへど、やむごとなき方のおよびなくわづらはしきに、おり立ちあらはし聞こえ寄りたまはぬを、この君は、人の御さまも気近く今めきたるに、おのづから思ひ忍びがたきに、折々人見たてまつりつけば疑ひ負ひぬべき御もてなしなどは、うち交じるわざなれど、ありがたく思し返しつつ、さすがなる御仲なりけり。

五日には、馬場のおとどに出でたまひけるついでに、渡りたまへり。「いかにぞや。宮は夜や更かしたまひし。いたくも馴らしきこえじ。わづらはしき氣添ひたまへる人ぞや。人の心破り、ものの過ちすまじき人は、かたくこそありけれ」など、活けみ殺しみ戒めおはする御さま、尽きせず若くきよげに見えたまふ。つやも色もこぼるばかりなる御衣に、直衣はかなく重なれるあはひも、いづこに加はれるきよらにかあらむ、この世の人の染め出だしたると見えず、常の色も変へぬあやめも、今日はめづらかにをかくおぼゆる薫りなども、思ふことなくはをかしかりぬべき御ありさまかな、と姫君思す。

ざまかうざまにわびしければ、すべり出でて、母屋の際なる御几帳のもとに、かたはら臥したまへる。何くれと言長き御いらへ聞こえたまふこともなく思しやすらふに、寄りたまひて、御几帳の帷子を一重うちかけたまふにあはせて、さと光るもの、紙燭をさし出でたるかとあきれたり。螢を薄きかたに、この夕つ方いと多く包みおきて、光をつつみ隠したまへりけるを、さりげなく、とかくひきつくるふやうにて、にはかにかく掲焉に光れるに、あさましくて、扇をさし隠したまへるかたはら目いとをかしげなり。おどろかしき光見えば、宮も覗きたまひなむ、わがむすめと思すばかりのおぼえに、かくまでのたまふなめり、人ざまかたちなど、いとかくしも具したらむとは、え推し量りたまはじ、いとよく好きたまひぬべき心惑はさむ、とかまへありきたまふなりけり。まことのわが姫君をば、かくしももて騒ぎたまはじ、うたてある御心なりけり。こと方より、やをらすべり出でて渡りたまひぬ。

宮は、人のおはするほど、さばかりと推し量りたまふが、すこし気近きけはひするに、御心ときめきせられたまひて、えならぬ羅の帷子の隙より見入れたまへるに、一間ばかり隔てたる見わたしに、かくおぼえなき光のうちほのめくを、をかしと見たまふ。ほどもなく紛らはして隠しつ。されどほのかなる光、艶なることのつまにもしつべく見ゆ。ほのかなれど、そびやかに臥したまへりつる様体のをかしかりつるを、飽かず思して、げにこのこと御心にしみにけり。

「鳴く声も聞こえぬ虫の思ひだに人の消つには消ゆるものかは
思ひ知りたまひぬや」と聞こえたまふ。かやうの御返しを、思ひまはさむもねぢけたれば、疾きばかりをぞ、

声はせで身をのみ焦がす螢こそ言ふよりまさる思ひなるらめ

など、はかなく聞こえなして、御みづからは引き入りたまひにければ、いとはるかにもてなしたまふ愁はしさを、いみじく怨みきこえたまふ。好き好きしき

も大人びたる人なれば、さるべき折々の御返りなど書かせたまへば、召し出でて、言葉などのたまひて書かせたまふ。ものなどのたまふさまをゆかしと思すなるべし。正身は、かくうたてあるもの嘆かしさの後は、この宮などはあはれげに聞こえたまふ時は、すこし見入れたまふ時もありけり。何かと思ふにはあらず、かく心憂き御けしき見ぬわざもがなと、さすがにされたるころつきて思しけり。

殿はあいなくおのれ心懸想して、宮を待ちきこえたまふも知りたまはで、よろしき御返りのあるをめぐらしがりて、いと忍びやかにおはしましたり。妻戸の間に御茵参らせて、御几帳ばかりを隔てにて、近きほどなり。いといたう心して、空薫物心にききほどに匂はして、つくろひおはするさま、親にはあらで、むつかしきさかしら人の、さすがにあはれに見えたまふ。宰相の君なども、人の御いらへ聞こえむこともおぼえず恥づかしくてゐたるを、埋もれたりとひきつみたまへば、いとわりなし。夕闇過ぎて、おぼつかなき空のけしきの曇らはしきに、うちしめりたる宮の御けはひも、いと艶なり。うちよりほのめく追風も、いとどしき御匂ひのたち添ひたれば、いと深く薫り満ちて、かねて思ししよりもをかしき御けはひを、心とどめたまひけり。うち出でて、思ふ心のほどをのたまひ続けたる言の葉おとなしく、ひたぶるに好き好きしくはあらで、いとけはひことなり。大臣、いとをかしとほの聞きおはす。

姫君は、東面に引き入りて大殿籠もりにけるを、宰相の君の御消息伝へにゐざり入りたるにつけて、「いとあまり暑かはしき御もてなしなり。よろづのこと、さまに従ひてこそめやすけれ。ひたぶるに若びたまふべきさまにもあらず。この宮たちをさへ、さし放ちたる人伝てに聞こえたまふまじきことなりかし。御声こそ惜しみたまふとも、すこし気近くだにこそ」など、諫めきこえたまへど、いとわりなくて、ことづけてもはひ入りたまひぬべき御心ばへなれば、と

今はかく重々しきほどに、よろづのどやかに思ししづめたる御ありさまなれば、頼みきこえさせたまへる人びと、さまざまにつけて、皆思ふさまに定まり、ただよはしからで、あらまほしくて過ぐしたまふ。対の姫君こそ、いとほしく、思ひのほかなる思ひ添ひて、いかにせむと思し乱るめれ。かの監が憂かりしさまにはなずらふべきけはひならねど、かかる筋に、かけても人の思ひ寄りきこゆべきことならねば、心ひとつに思しつつ、様ことに疎ましと思ひきこえたまふ。何ごとをも思し知りにたる御齡なれば、とぎまかうさまに思し集めつつ、母君のおはせずなりにける口惜しさも、またとりかへし惜しく悲しくおぼゆ。

大臣も、うち出でそめたまひては、なかなか苦しく思せど、人目を憚りたまひつつ、はかなきことをもえ聞こえたまはず、苦しくも思さるるままに、しげく渡りたまひつつ、御前の人遠くのどやかなる折は、ただならずけしきばみきこえたまふごとに、胸つぶれつつ、けぎやかにはしたなく聞こゆべきにはあらねば、ただ見知らぬさまにもてなしきこえたまふ。人さまのわららかに気近くものしたまへば、いたくまめだち、心したまへど、なほをかしく愛敬づきたるけはひのみ見えたまへり。

兵部卿宮などは、まめやかにせめきこえたまふ。御労のほどはいくばくならぬに、さみだれになりぬる愁へをしたまひて、「すこし気近きほどをだに許したまはば、思ふことをも片端はるけてしがな」と聞こえたまへるを、殿御覧じて、「なにかは、この君達の好きたまはむは、見所ありなむかし。もて離れてな聞こえたまひそ。御返り時々聞こえたまへ」とて、教へて書かせたてまつりたまへど、いとどうたておぼえたまへば、乱り心地あしとて聞こえたまはず。人びとも、ことにやむごとなく寄せ重きなどもをさをさなし。ただ母君の御叔父なりける宰相ばかりの人の娘にて、心ばせなど口惜しからぬが、世に衰へ残りたるを尋ねとりたまへる、宰相の君とて、手などもよろしく書き、おほかた

蚩

宮、大将などは、殿の御けしき、もて離れぬさまに伝へ聞きたまうて、いとねむごろに聞こえたまふ。この岩漏る中将も、大臣の御許しを見てこそ、かたよりにほの聞きて、まことの筋をば知らず、ただひとへにうれしくて、おりたち恨みきこえまどひありくめり。

けしきも悪しければ、人びと御心地悩ましげに見えたまふと、もて悩みきこゆ。「殿の御けしきのこまやかにかたじけなくもおはしますかな。まことの御親と聞こゆとも、さらにかばかり思し寄らぬことなくは、もてなしきこえたまはじ」など、兵部なども忍びて聞こゆるにつけて、いとど思はずに心づきなき御心のありさまを、疎ましう思ひ果てたまふにも、身ぞ心憂かりける。

またの朝、御文とくあり。悩ましがりて臥したまへれど、人びと御硯など参りて、「御返りとく」と聞こゆれば、しぶしぶに見たまふ。白き紙の、うはべはおいらかにすすくしきに、いとめでたう書いたまへり。

たぐひなかりし御けしきこそ、つらきしも忘れがたう。いかに人見たてまつりけむ。

うちとけて寝も見ぬものを若草のことあり顔にむすぼほるらむ
幼くこそものしたまひけれ。

とさすがに親がりたる御言葉も、いと憎しと見たまひて、御返り事聞こえざらむも人目あやしければ、ふくよかなる陸奥紙に、ただ、

うけたまはりぬ。乱り心地の悪しうはべれば、聞こえさせぬ。

とのみあるに、かやうのけしきはさすがにすぐよかなりとほほ笑みて、恨みどころある心地したまふ、うたてある心かな。

色に出でたまひてのちは、太田の松のと思はせたることなく、むつかしう聞こえたまふこと多かれば、いとど所狭き心地して、おきどころなきもの思ひつきて、いと悩ましうさへしたまふ。かくて、ことの心知る人は少なうて、疎きも親しきも、むげの親さまに思ひきこえたるを、かうやうのけしきの漏り出でば、いみじう人笑はれに、憂き名にもあるべきかな、父大臣などの尋ね知りたまふにても、まめまめしき御心ばへにもあらざらむものから、ましていとあはつけう、待ち聞き思さむこと、とよろづにやすげなう思し乱る。

さまもしめやかなるに、人びとはこまやかなる御物語にかしこまりおきて、気近くもさぶらはず。常に見たてまつりたまふ御仲なれど、かくよき折しもありがたければ、言に出でたまへるついでに御ひたぶる心にや、なつかしいほどなる御衣どものけはひは、いとよう紛らはしすべしたまひて、近やかに臥したまへば、いと心憂く、人の思はむこともめづらかに、いみじうおぼゆ。まことの親の御あたりならましかば、おろかには見放ちたまふとも、かくぎまの憂きことはあらまじや、と悲しきに、つつむとすれどこぼれ出でつつ、いと心苦しき御けしきなれば、「かう思すこそつらけれ。もて離れ知らぬ人だに、世のことわりにて皆許すわざなめるを、かく年経ぬる睦ましきに、かばかり見えたてまつるや、何の疎ましかるべきぞ。これよりあながちなる心はよも見せたてまつらじ。おぼろけに忍ぶるにあまるほどを慰むるぞや」とて、あはれげになつかう聞こえたまふこと多かり。まして、かやうなるけはひはただ昔の心地していみじうあはれなり。わが御心ながらも、ゆくりかにはあはつけきことと思し知らるれば、いとよく思し返しつつ、人もあやしと思ふべければ、いたう夜も更かさで出でたまひぬ。「思ひ疎みたまはば、いと心憂くこそあるべけれ。よその人は、かうほればれしうはあらぬものぞよ。限りなくそこひ知らぬ心ざしなれば、人の咎むべきさまにはよもあらじ。ただ昔恋しき慰めに、はかなきことをも聞こえむ。同じ心にいらへなどしたまへ」と、いとこまかに聞こえたまへど、我にもあらぬさまして、いといと憂しと思いたれば、「いとさばかりには見たてまつらぬ御心ばへを。いとこよなくも憎みたまふべかめるかな」と嘆きたまひて、「ゆめけしきなくてを」とて、出でたまひぬ。

女君も、御年こそ過ぐしたまひにたるほどなれ、世の中を知りたまはぬなかに、すこしうち世馴れたる人のありさまをだに見知りたまはねば、これより気近きさまにも思し寄らず、思ひの外にもありける世かなと嘆かしきに、いと

りけるを、起き上がりたまひて、恥ぢらひたまへる顔の色あひ、いとをかし。なごやかなるけはひのふと昔思し出でらるるにも、忍びがたくて、「見そめたてまつりしは、いとかうしもおぼえたまはずと思ひしを、あやしう、ただそれかと思ひまがへらるる折々こそあれ。あはれなるわざなりけり。中将の、さらに昔さまの匂ひにも見えぬならひに、さしも似ぬものと思ふに、かかる人もものしたまうけるよ」とて、涙ぐみたまへり。箱の蓋なる御果物の中に橘のあるをまさぐりて、

「橘の薰りし袖によそふれば変はれる身とも思ほえぬかな

世ととも心の心にかけて忘れがたきに、慰むことなく過ぎつる年ごろを、かくて見たてまつるは夢にやとのみ思ひなすを、なほえこそ忍ぶまじけれ。思し疎むなよ」とて、御手をとらへたまへれば、女、かやうにもならひたまはざりつるを、いとうたておぼゆれど、おほどかなるさまにてもものしたまふ。

袖の香をよそふるからに橘の身さへはかなくなりもこそすれ

むつかしと思ひてうつぶしたまへるさまいみじうなつかしう、手つきのつぶつぶと肥えたまへる身なり、肌つきのこまやかにうつくしげなるに、なかなかなるもの思ひ添ふ心地したまて、今日はすこし思ふこと聞こえ知らせたまひける。女は、心憂くいかにせむとおぼえて、わななかるけしきもしるけれど、「何か、かく疎ましとは思いたる。いとよくもて隠して、人に咎めらるべくもあらぬ心のほどぞよ。さりげなくてをもて隠したまへ。浅くも思ひきこえさせぬ心ざしに、また添ふべければ、世にたぐひあるまじき心地なむするを、この訪づれきこゆる人びとには、思し落とすべくやはある。いとかう深き心ある人は世にありがたかるべきわざなれば、うしろめたくのみこそ」とのたまふ。いとさかしらなる御親心なりかし。

雨はやみて、風の竹に鳴るほど、はなやかにさし出でたる月影をかしき夜の

なかなかこそはべらめ」と聞こえたまふを、いとあはれと思しけり。さるは、心のうちにはさも思はずかし。いかならむ折聞こえ出でむとすらむと、心もなくあはれなれど、この大臣の御心ばへのいとありがたきを、親と聞こゆとも、もとより見馴れたまはぬは、えかうしもこまやかならずやと、昔物語を見たまふにも、やうやう人のありさま、世の中のあるやうを見知りたまへば、いとつつましう、心と知られたてまつらむことはかたかるべう思す。

殿は、いとどらうたしと思ひきこえたまふ。上にも語り申したまふ。「あやしうなつかしき人のありさまにもあるかな。かのいにしへのはあまりはるけどころなくぞありし。この君はものありさまも見知りぬべく、気近き心ざま添ひて、うしろめたからずこそ見ゆれ」などほめたまふ。ただにしも思すまじき御心ざまを見知りたまへれば、思し寄りて、「ものの心得つべくはものしたまふめるを、うらなくしもうちとけ頼みきこえたまふらむこそ心苦しけれ」とのたまへば、「など頼もしげなくやはあるべき」と聞こえたまへば、「いでや、われにても、また忍びがたう、もの思はしき折々ありし御心さまの、思ひ出でらるるふしぶしなくやは」と、ほほ笑みて聞こえたまへば、あな心とおぼいて、「うたても思し寄るかな。いと見知らずしもあらじ」とて、わづらはしければ、のたまひさして心のうちに、人のかう推し量りたまふにも、いかがはあべからむと思し乱れ、かつはひがひがしう、けしからぬ我が心のほども思ひ知られたまうけり。

心にかかれるままに、しばしば渡りたまひつつ見たてまつりたまふ。雨のうち降りたる名残の、いとしめやかなる夕つつ方、御前の若楓、柏木などの、青やかに茂りあひたるが、何となく心地よげなる空を見出したまひて、「和してまた清し」とうち誦じたまうて、まづこの姫君の御さまの匂ひやかげさを思し出でられて、例の忍びやかに渡りたまへり。手習などしてうちとけたまへ

したまはめと思ふを、宮は、独りものしたまふやうなれど、人柄いたうあだめいて、通ひたまふ所あまた聞こえ、召人とか、憎げなる名のりする人どもなむ数あまた聞こゆる。さやうならむことは憎げなうて、見直いたまはむ人は、いとよなだらかにもて消ちてむ。すこし心に癖ありては、人に飽かれぬべきことなむおのづから出で来ぬべきを、その御心づかひなむあべき。大将は、年経たる人のいたうねび過ぎたるを、厭ひがてにと求むなれど、それも人びとわづらはしがるなり。さもあべいことなれば、さまさまになむ人知れず思ひ定めかねはべる。かうさまのことは、親などにも、さはやかにわが思ふさまとて語り出でがたきことなれど、さばかりの御齡にもあらず、今はなどか何ごとをも御心に分いたまはざらむ。まろを昔さまになずらへて、母君と思ひないたまへ。御心に飽かざらむことは心苦しく」など、いとまめやかにて聞こえたまへば、苦しうて御いらへ聞こえむとおぼえたまはず。いと若々しきもうたておぼえて、「何ごととも思ひ知りはべらざりけるほどより、親などは見ぬものにならひはべりて、ともかくも思うたまへられずなむ」と聞こえたまふさまのいとおいらかなれば、げにと思いて、「さらば世のたとひの後の親をそれと思いて、おろかならぬ心ぎしのほども見あらはし果てたまひてむや」などうち語らひたまふ。思すさまのことはまばゆければ、えうち出でたまはず。けしきある言葉は時々混ぜたまへど、見知らぬさまなれば、すずろにうち嘆かれて渡りたまふ。

御前近き呉竹の、いと若やかに生ひたちて、うちなびくさまのなつかしきに立ちとまりたまうて、

「ませのうちに根深く植ゑし竹の子のおのが世々にや生ひわかるべき思へば恨めしかべいことぞかし」と、御簾を引き上げて聞こえたまへば、ゐざり出でて、

「今さらにいかならむ世か若竹の生ひ始めけむ根をば尋ねむ

側目いとをかしげなり。撫子の細長に、このころの花の色なる御小桂、あはひ気近う今めきて、もてなしなども、さはいへど、田舎びたまへりし名残こそ、ただありにおほどかなる方にのみは見えたまひけれ、人のありさまをも見知りたまふままに、いとさまようなよびかに、化粧なども心してもてつけたまへれば、いとど飽かぬところなく、はなやかにうつくしげなり。こと人と見なさむはいと口惜しかべう思さる。右近もうち笑みつつ見たてまつりて、親と聞こえむには、似げなう若くおはしますめり、さし並びたまへらむはしもあはひめでたしかし、と思ひゐたり。「さらに人の御消息などは聞こえ伝ふることはべらず。先々も知らしめし御覧じたる三つ四つは、引き返しはしたなめきこえむもいかがとて、御文ばかり取り入れなどしはべるめれど、御返りはさらに。聞こえさせたまふ折ばかりなむ。それをだに苦しいことに思いたる」と聞こゆ。「さてこの若やかに結ばほれたるは誰がぞ。いといたう書いたるけしきかな」とほほ笑みて御覧ずれば、「かれは執念うとどめてまかりにけるにこそ。内の大殿の中将の、このさぶらふみるこそぞ、もとより見知りたまへりける伝へにてはべりける。また見入るる人もはべらざりしにこそ」と聞こゆれば、「いとらうたきことかな。下臆なりとも、かの主たちをば、いかがいときははしたなめむ。公卿といへど、この人のおぼえに、かならずしも並ぶまじきこそ多かれ。さるなかにもいとしづまりたる人なり。おのづから思ひあはする世もこそあれ。掲焉にはあらでこそ言ひ紛らはさめ。見所ある文書きかな」など、とみにもうち置きたまはず。

「かう何やかやと聞こゆるをも、思すところやあらむとややましきを、かの大臣に知られたてまつりたまはむことも、まだ若々しう何となきほどに、ここら年経たまへる御仲にさし出でたまはむことは、いかがと思ひめぐらしはべる。なほ世の人のあめる方に定まりてこそは、人びとしよう、さるべきついでなもの

聞こえたまへ。すこしもゆるゑあらむ女の、かの親王よりほかにまた言の葉を交はすべき人こそ世におぼえね。いとけしきある人の御さまぞや」と、若き人はめでたまひぬべく聞こえ知らせたまへど、つつましくのみ思いたり。

右大将の、いとまめやかにこととしきさましたる人の、恋の山には孔子の倒ふれまねびつべきけしきに愁へたるも、さる方にをかしと、皆見比べたまふ中に、唐の縹の紙の、いとなつかしう、しみ深う匂へるを、いと細く小さく結びたるあり。「これはいかなればかく結ばほれたるにか」とて、引きあけたまへり。手いとをかしうて、

思ふとも君は知らじなわきかへり岩漏る水に色し見えねば

書きざま今めかしうそぼれたり。「これはいかなるぞ」と問ひきこえたまへど、はかばかしうも聞こえたまはず。

右近を召し出でて、「かやうに訪づれきこえむ人をば、人選りしていらへなどはせさせよ。好き好きしうあざれがましき今やうの人の、便ないことし出でなどする、男の咎にしもあらぬことなり。我にて思ひしにも、あな情けな恨めしうもとその折にこそ、無心なるにや、もしはめざましかるべき際はけやけうなどもおぼえけれ、わぎと深からで、花、蝶につけたる便りごとは、心ねたうもてないたる、なかなか心立つやうにもあり。また、さて忘れぬるは、何の咎かはあらむ。ものの便りばかりのなほざりごとに、口疾う心得たるも、さらでありぬべかりける、後の難とありぬべきわざなり。すべて女のものづつみせず、心のままに、もののはれも知り顔づくり、をかしきことを見知らむなむ、その積りあぢきなかるべきを、宮、大将は、おほなおほなほざりごとをうち出でたまふべきにもあらず、またあまりもののほど知らぬやうならむも、御ありさまに違へり。その際より下は、心ざしのおもむきに従ひて、あはれをも分きたまへ。労をも数へたまへ」など聞こえたまへば、君はうち背きておはする、

西の対の御方は、かの踏歌の折の御対面の後は、こなたにも聞こえ交はしたまふ。深き御心もちろや、浅くもいかにもあらむ、けしきいと労あり、なつかしき心ばへと見えて、人の心隔つべくものしたまはぬ人ざまなれば、いづ方にも皆心寄せきこえたまへり。聞こえたまふ人いとあまたものしたまふ。されど、大臣、おぼろけに思し定むべくもあらず、わが御心にも、すくよかに親がり果つまじき御心や添ふらむ、父大臣にも知らせやしてましなど、思し寄る折々もあり。殿の中将は、すこし気近く、御簾のもとなどにも寄りて、御いらへみづからなどするも、女はつつましく思せど、さるべきほどと人びとも知りきこえたれば、中將はすくすくして思ひも寄らず。内の大殿の君たちは、この君に引かれて、よろづにけしきばみわびありくを、その方のあはれにはあらで、下に心苦しう、まことの親にさも知られたてまつりにしがなと、人知れぬ心にかけてたまへれど、さやうにも漏らしきこえたまはず、ひとへにうちとけ頼みきこえたまふ心むけなど、らうたげに若やかなり。似るとはなけれど、なほ母君のけはひにいとよくおぼえて、これはかどめいたるところぞ添ひたる。

更衣の今めかしう改まれるころほひ、空のけしきなどさへあやしう、そこはかとなくをかしきをのどやかにおはしませば、よろづの御遊びにて過ぐしたまふに、対の御方に人びとの御文しげくなりゆくを、思ひしことをかしう思いて、ともすれば渡りたまひつつ御覧じ、さるべきには御返りそそのかしきこえたまひなどするを、うちとけず苦しいことに思いたり。

兵部卿宮の、ほどなく焦られがましきわびごとどもを書き集めたまへる御文を、御覧じつけて、こまやかに笑ひたまふ。「はやうより隔つることなう、あまたの親王たちの御中に、この君をなむかたみに取り分きて思ひしに、ただかやうの筋のことなむいみじう隔て思うたまひてやみにしを、世の末にかく好きたまへる心ばへを見るがをかしうもあはれにもおぼゆるかな。なほ御返りなど

桜すこしうち散りまがふ。いとうららかに晴れて霞の間より立ち出でたるは、いとあはれになまめきて見ゆ。わざと平張なども移されず、御前に渡れる廊を楽屋のさまにして、仮に胡床どもを召したり。童べども御階のもとに寄りて花どもたてまつる。行香の人びと取り次ぎて、闕伽に加へさせたまふ。御消息、殿の中將の君して聞こえたまへり。

花園の胡蝶をさへや下草に秋待つ虫はうとく見るらむ

宮、かの紅葉の御返りなりけりと、ほほ笑みて御覽ず。昨日の女房たちも、「げに春の色は、え落とさせたまふまじかりけり」と、花におれつつ聞こえあへり。鶯のうらかなる音に、鳥の樂はなやかに聞きわたされて、池の水鳥もそこはかたなくさへづりわたるに、急になり果つるほど飽かずおもしろし。蝶はましてはかなきさまに飛び立ちて、山吹の籬のもとに、咲きこぼれたる花の蔭に舞ひ出づる。

宮の亮をはじめて、さるべき上人ども、禄取り続きで、童べに賜ふ。鳥には桜の細長、蝶には山吹襲賜はる。かねてしも取りあへたるやうなり。物の師どもは、白き一襲、腰差など、次ぎ次ぎに賜ふ。中將の君には、藤の細長添へて、女の装束かづけたまふ。御返り、

きのふは音に泣きぬべくこそは。

こてふにも誘はれなまし心ありて八重山吹を隔てざりせば

とぞありける。すぐれたる御労どもに、かやうのことは堪へぬにやありけむ、思ふやうにこそ見えぬ御口つきどもなめれ。まことや、かの見物の女房たち、宮のには、皆けしきある贈り物どもせさせたまうけり。さやうのことくはしければむつかし。明け暮れにつけても、かやうのはかなき御遊びしげく、心をやりて過ぐしたまへば、さぶらふ人も、おのづからもの思ひなき心地してなむ、こなたかなたにも聞こえ交はしたまふ。

え出でて、思しもしるく、心なびかしたまふ人多かるべし。わが身さばかりと思ひ上がりたまふ際の人こそ、便りにつけつけしきばみ、言出で聞こえたまふもありけれ、えしもうち出でぬ中の思ひに燃えぬべき若君達などもあるべし。そのうちに、ことの心を知らで、内の大殿の中將などは好きぬべかめり。

兵部卿宮はた、年ごろおはしける北の方も亡せたまひて、この三年ばかり、独り住みにてわびたまへば、うけばりて今はけしきばみたまふ。今朝もいたうそら乱れして、藤の花をかざして、なよびさうどきたまへる御さま、いとをかし。大臣も、思ししさまかなふと下には思せど、せめて知らず顔をつくりたまふ。御土器のついでに、いみじうもて悩みたまうて、「思ふ心はべらずは、まかり逃げはべりなまし。いと堪へがたしや」とすまひたまふ。

紫のゆゑに心をしめたれば淵に身投げむ名やは惜しけき

とて、大臣の君に同じかざしを参りたまふ。いといたうほほ笑みたまひて、

淵に身を投げつべしやとこの春は花のあたりを立ち去らで見よ

と切にとどめたまへば、え立ちあかれたまはで、今朝の御遊びましていとおもしろし。

けふは、中宮の御読経の初めなりけり。やがてまかだたまはで、休み所とりつつ、日の御よそひに替へたまふ人びとも多かり。障りあるはまかでなどもしたまふ。午の時ばかりに、皆あなたに参りたまふ。大臣の君をはじめたてまつりて、皆着きわたりたまふ。殿上人なども残るなく参る。多くは大臣の御勢ひにもてなされたまひて、やむごとなくいつくしき御ありさまなり。

春の上の御心ざしに、仏に花たてまつらせたまふ。鳥、蝶に装束き分けたる童べ八人、かたちなどことに整へさせたまひて、鳥には、銀の花瓶に桜をさし、蝶は、金の瓶に山吹を、同じき花の房いかめしう、世になき匂ひを尽くさせたまへり。南の御前の山際より漕ぎ出でて、御前に出づるほど、風吹きて、瓶の

風吹けば波の花さへ色見えてこや名に立てる山吹の崎

春の池や井手の川瀬にかよふらむ岸の山吹そこも匂へり

亀の上の山も尋ねじ舟のうちに老いせぬ名をばここに残さむ

春の日のうららにさしてゆく舟は棹のしづくも花ぞ散りける

などやうのはかなごとどもを、心々に言ひ交はしつつ、行く方も帰らむ里も忘れぬべう、若き人びとの心を移すに、ことわりなる水の面になむ。

暮れかかるほどに、皇じやうといふ楽、いとおもしろく聞こゆるに、心にもあらず釣殿にさし寄せられて下りぬ。ここのしつらひ、いとこと削ぎたるさまになまめかしきに、御方々の若き人どものわれ劣らじと尽くしたる装束、かたち、花をこき交ぜたる錦に劣らず見えわたる。世に目馴れずめづらかなる楽ども仕うまつる。舞人など心ことに選ばせたまひて。

夜に入りぬれば、いと飽かぬ心地して、御前の庭に篝火ともして、御階のものと苔の上に楽人召して、上達部、親王たちも、皆おのおの弾きもの、吹きものとりどりにしたまふ。物の師ども、ことにすぐれたる限り、双調吹きて、上に待ちとる御琴どもの調べ、いとはなやかにかき立てて、安名尊遊びたまふほど、生けるかひありと、何のあやめも知らぬしづの男も、御門のわたり隙なき馬、車の立ちどに混じりて、笑みさかえ聞きにけり。空の色、物の音も、春の調べ、響きはいとことにまさりけるけぢめを、人びと思し分くらむかし。夜もすがら遊び明かしたまふ。返り声に喜春楽立ちそひて、兵部卿宮、青柳折り返しおもしろく歌ひたまふ。あるじの大臣も言加へたまふ。

夜も明けぬ。朝ぼらけの鳥のさへづりを、中宮は、もの隔ててねたう聞こし召しけり。いつも春の光をこめ給へる大殿なれど、心をつくるよすがのまたなきを、飽かぬことに思す人びともありけるに、西の対の姫君、こともなき御ありさま、大臣の君もわざと思しあがめきこえたまふ御けしきなど、皆世に聞こ

弥生の二十日あまりのころほひ、春の御前のありさま、常よりことに尽くして匂ふ花の色、鳥の声、ほかの里には、まだ古りぬにやとめづらしう見え聞こゆ。山の木立、中島のわたり、色まさる苔のけしきなど、若き人びとののはつかに心もとなく思ふべかめるに、唐めいたる舟造らせたまひける、急ぎ装束かせたまひて、下ろし始めさせたまふ日は、雅楽寮の人召して、舟の楽せらる。親王たち上達部など、あまた参りたまへり。

中宮、このころ里におはします。かの「春待つ園は」と励ましきこえたまへりし御返りもこのころやと思し、大臣の君も、いかでこの花の折御覽ぜさせむと思しのたまへど、ついでなくて軽らかにはひわたり、花をもてあそびたまふべきならねば、若き女房たちの、ものめでしぬべきを舟に乗せたまうて、南の池の、こなたに通しかよはしなさせたまへるを、小さき山を隔ての関に見せたれど、その山の崎より漕ぎまひて、東の釣殿に、こなたの若き人びと集めさせたまふ。龍頭鷁首を、唐のよそひにことごとしうしつらひて、楫取の棹さす童べ、皆みづら結ひて、唐土だたせて、さる大きな池の中にさし出でたれば、まことの知らぬ国に来たらむ心地して、あはれにおもしろく、見ならはぬ女房などは思ふ。中島の入江の岩蔭にさし寄せて見れば、はかなき石のたたずまひも、ただ絵にかいたらむやうなり。こなたかなた霞みあひたる梢ども、錦を引きわたせるに、御前の方ははるばると見やられて、色をましたる柳、枝を垂れたる、花もえもいはぬ匂ひを散らしたり。ほかには盛り過ぎたる桜も、今盛りにはほほ笑み、廊をめぐれる藤の色もこまやかに開けゆきにけり。まして池の水に影を写したる山吹、岸よりこぼれていみじき盛りなり。水鳥どもの、つがひを離れず遊びつつ、細き枝どもを食ひて飛びちがふ、鴛鴦の波の綾に紋を交じへたるなど、ものの絵やうにもかき取らまほしき。まことに斧の柄も朽たいつべう思ひつつ、日を暮らす。

胡

蝶

やしう有職ども生ひ出づるころほひにこそあれ。いにしへの人は、まことにかしき方やすぐれたることも多かりけむ、情けだちたる筋は、このころの人にえしもまさらざりけむかし。中将などをば、すすくしき大やけ人にしなしてむとなむ思ひおきてし、みづからのいとあざればみたるかたくなしきをもて離れよと思ひしかども、なほ下にはほの好きたる筋の心をこそとどむべかめれ。もてしづめすくよかなるうはべばかりは、うるさかめり」などいとうつくしと思したり。「万春楽」と、御口ずさみにのたまひて、「人びとのこなたに集ひたまへるついでに、いかで物の音こころみてしかな。私の後宴すべし」とのたまひて、御琴どものうるはしき袋どもして秘めおかせたまへる、皆引き出でておし拭ひ、ゆるべる緒調へさせたまひなです。御方々、心づかひいたくしつつ、心懸想を尽くしたまふらむかし。

今年は男踏歌あり。内より朱雀院に参りて、次にこの院に参る道のほど遠くなどして、夜明け方なりにけり。月の曇りなく澄みまさりて、薄雪すこし降れる庭のえならぬに、殿上人なども物の上手多かるころほひにて、笛の音もいとおもしろう吹き立てて、この御前はことに心づかひしたり。御方々物見に渡りたまふべく、かねて御消息どもありければ、左右の対、渡殿などに、御局しつつおはさす。西の対の姫君は、寝殿の南の御方に渡りたまひて、こなたの姫君に御対面ありけり。上も一所におはしませば、御几帳ばかり隔てて聞こえたまふ。

朱雀院の後の御方などめぐりけるほどに、夜もやうやう明けゆけば、水駅にてこと削がせたまふべきを、例あることよりほかに、さまことに加へて、いみじくもてはやさせたまふ。影すさまじき暁月夜に、雪はやうやう降り積む。松風木高く吹きおろし、ものすさまじくもありぬべきほどに、青色のなえばめるに、白襲の色あひ、何の飾りかは見ゆる。かぎしの綿は何の匂ひもなきものなれど、所からにやおもしろく、心ゆき、命延ぶるほどなり。殿の中将の君、内の大殿の君達ぞ、ことにすぐれてめやすくはなやかなる。ほのぼのと明けゆくに、雪やや散りてそぞろ寒きに、竹河謡ひてかよれる姿、なつかしき声々の、絵にもかきとどめがたからむこそ口惜しけれ。御方々、いづれもいづれも劣らぬ袖口どもこぼれ出でたるこちたさ、物の色あひなども、曙の空に春の錦たち出でにける霞のうちかと見えわたさる。あやしく心のうちゆく見物にぞありける。さるは、高中子の世離れたるさま、寿詞の乱りがはしき、をこめきたることをことごとしくとりなしたる、なかなか何ばかりのおもしろかるべき拍子も聞こえぬものを。例の綿かづきわたりてまかでぬ。

夜明け果てぬれば、御方々帰りわたりたまひぬ。大臣の君すこし御殿籠もりて、日高く起きたまへり。「中将の声は、弁少将にをさをさ劣らざめるは。あ

かに局住みにしなして、仏ばかりに所得させたてまつりて、行なひ勤めけるさまあはれに見えて、経、仏の御飾り、はかなくしたる闕伽の具なども、をかしげになまめかしう、なほ心ばせありと見ゆる人のけはひなり。青鈍の几帳、心ばへをかしきに、いたく隠れて、袖口ばかりぞ色ことなるしもなつかしければ、涙ぐみたまひて、「松が浦島をはるかに思ひてぞやみぬべかりける。昔より心憂かりける御契りかな。さすがにかばかりの御睦びは、絶ゆまじかりけるよ」などのたまふ。尼君ものあはれなるけはひにて、「かかる方に頼みきこえさするしもなむ浅くはあらず思ひたまへ知られはべりける」と聞こゆ。「つらき折々重ねて、心惑はしたまひし世の報いなどを、仏にかしこまりきこゆるこそ苦しけれ。思し知るや。かくいと素直にもあらぬものと、思ひ合はせたまふこともあらじやはとなむ思ふ」とのたまふ。かのあさましかりし世の古事を聞き置きたまへるなめり、と恥づかしく、「かかるありさまを御覧じ果てらるるよりほかの報いはいづくにかはべらむ」とて、まことにうち泣きぬ。いにしへよりももの深く恥づかしげさまさりて、かくもて離れたることと思すしも、見放ちがたく思さるれど、はかなきことをのたまひかくべくもあらず、おほかたの昔今の物語をしたまひて、かばかりの言ふかひだにあれかすと、あなたを見やりたまふ。

かやうにても、御蔭に隠れたる人びと多かり。皆さしのぞきわたしたまひて、「おぼつかなき日数つもる折々あれど、心のうちはおこたらずなむ。ただ限りある道の別れのみこそうしろめたけれ。命を知らぬ」などなつかしくのたまふ。いづれをも、ほどほどにつけてあはれと思したり。我はと思しあがりぬべき御身のほどなれど、さしもことごとしくもてなしたまはず、所につけ、人のほどにつけつつ、さまざまあまねく、なつかしくおはしませば、ただかばかりの御心にかかりてなむ、多くの人びと年を経ける。

かあらむ。御鼻の色ばかり霞にも紛るまじうはなやかなるに、御心にもあらざうち嘆かれたまひて、ことさらに御几帳引きつくろひ隔てたまふ。なかなか女はさしも思したらず、今はかくあはれに長き御心のほどを、おだしきものにうちとけ頼みきこえたまへる御さま、あはれなり。かかる方にも、おしなべての人ならず、いとほしく悲しき人の御さまに思せば、あはれに、我だにこそはと御心とどめたまへるもありがたきぞかし。御声などもいと寒げにうちわななきつつ語らひきこえたまふ。見わづらひたまひて、「御衣どもの事など、後見きこゆる人ははべりや。かく心やすき御住まひは、ただいとうちとけたるさまに、含みなえたるこそよけれ。うはべばかりつくろひたる御よそひはあいなくなむ」と聞こえたまへば、こちごちしくさすがに笑ひたまひて、「醍醐の阿闍梨の君の御あつかひしはべるとて、衣どももえ縫ひはべらでなむ。皮衣をさへ取られにし後、寒くはべる」と聞こえたまふは、いと鼻赤き御せうとなりけり。心うつくしといひながら、あまりうちとけ過ぎたりと思せど、ここにてはいとまめにきすくの人にておはす。「皮衣はいとよし。山伏の蓑代衣に譲りたまひてあへなむ。さてこのいたはりなき白妙の衣は、七重にもなか重ねたまはざらむ。さるべき折々は、うち忘れたらむこともおどろかしたまへかし。もとよりおれおれしくたゆき心のおこたりに、まして方々の紛らはしき競ひにも、おのづからなむ」とのたまひて、向かひの院の御倉開けさせたまひて、絹、綾などたてまつらせたまふ。荒れたる所もなけれど、住みたまはぬ所のけはひは静かにて、御前の木立ばかりぞいとおもしろく、紅梅の咲き出でたる匂ひなど、見はやす人もなきを見わたしたまひて、

ふるさとの春の梢に訪ね来て世の常ならぬ花を見るかな

と独りごちたまへど、聞き知りたまはざりけむかし。

空蟬の尼衣にもさしのぞきたまへり。うけぱりたるさまにはあらず、かごや

ひたまへるが、我も劣らじともてなしたまへるなかにも、すこしなずらひなるだにも見えたまはぬものかな。とり放ちてはいと有職多くものしたまふころなれど、御前にては氣圧されたまふも、わるしかし。何の数ならぬ下部どもなどだに、この院に参る日は、心づかひことなりけり。まして若やかなる上達部などは、思ふ心などものしたまひて、すずろに心懸想したまひつつ、常の年よりもことなり。花の香誘ふ夕風のどやかにうち吹きたるに、御前の梅やうやうひもときて、あれは誰れ時なるに、物の調べどもおもしろく、この殿うち出でたる拍子いとはなやかなり。大臣も時々声うち添へたまへるさき草の末つ方、いとなつかしくめでたく聞こゆ。何ごともさしいらへしたまふ御光にはやされて、色をも音をも増すけぢめ、ことになむ分かれける。

かうののしる馬車の音を、もの隔てて聞きたまふ御方々は、蓮の中の世界にまだ開けざらむ心地もかくやと、心やましげなり。まして東の院に離れたまへる御方々は、年月に添へて、つれづれの数のみまされど、世の憂きめ見えぬ山路に思ひなずらへて、つれなき人の御心をば、何とかは見たてまつりとがめむ。その他の心もなく寂しきこと、はたなければ、行なひの方の人は、その紛れなく勤め、仮名のよろづの草子の学問、心に入れたまはむ人は、また願ひに従ひ、ものまめやかにはかばかしきおきてにも、ただ心の願ひに従ひたる住まひなり。騒がしき日ごろ過ぐして渡りたまへり。

常陸宮の御方は、人のほどあれば心苦しく思して、人目の飾りばかりは、いとよくもてなしきこえたまふ。いにしへ盛りと見えし御若髪も、年ごろに衰ひゆき、まして滝の淀み恥づかしげなる御かたはらめなどをいとほしと思せば、まほにも向かひたまはず。柳はげにこそすさまじかりけれと見ゆるも、着なしたまへる人からなるべし。光もなく黒き搔練のさみさゝりしく張りたる一襲、さる織物の桂着たまへる、いと寒げに心苦し。襲の衣などはいかにしなしたるに

かして物ごとにしめたるに、衣被香の香のまがへると艶なり。手習どもの乱れうちとけたるも、筋変はり、ゆゑある書きざまなり。ことことう草がちなどにもされ書かず、めやすく書きすましたり。小松の御返りをめづらしと見けるままに、あはれなる古事ども書きまぜて、

めづらしや花のねぐらに木づたひて谷の古巢を訪へる鶯

声待ち出でたる。

なども、

咲ける岡辺に家しあれば

など、ひき返し慰めたる筋など書きまぜつつあるを、取りて見たまひつつほほ笑みたまへる、恥づかしげなり。筆さし濡らして書きすさみたまふほどにゐざり出でて、さすがにみづからのもてなしはかしこまりおきて、めやすきよそひなるを、なほ人よりはことなりと思す。白きに、けぎやかなる髪のかかりの、すこしさはらかなるほどに薄らぎにけるも、いとどなまめかしき添ひてなつかしければ、新しき年の御騒がれもやとつつましけれど、こなたに泊りたまひぬ。なほおぼえことなりかし、と方々に心おきて思す。南の御殿には、ましてめざましがる人びとあり。

まだ曙のほどに渡りたまひぬ。かうしもあるまじき夜深さぞかしと思ふに、名残もただならずあはれに思ふ。待ちとりたまへる、はたなまけやけしと思すべかめる心のうち量られたまひて、「あやしきうたた寝をして、若々しかりけるいぎたなさを、さしもおどろかしたまはで」と、御けしきとりたまふもをかしく見ゆ。ことなる御いらへもなければわづらはしくて、そら寝をしつつ、日高く御殿籠もり起きたり。

今日は臨時客のことに紛らはしてぞ面隠したまふ。上達部、親王たちなど、例の残りなく参りたまへり。御遊びありて、引出物、禄など二なし。そこから集

軽き人の列にてわれに背きたまひなましかばなど、御対面の折々は、まづわが心の長きも、人の御心の重きをも、うれしく思ふやうなりと思しけり。こまやかにふる年の御物語などなつかしう聞こえたまひて、西の対へ渡りたまひぬ。

まだいたくも住み馴れたまはぬほどよりは、けはひをかしくしなして、をかしげなる童べの姿なまめかしく、人影あまたして、御しつらひ、あるべき限りなれど、こまやかなる御調度はいとしも調へたまはぬを、さる方にもいきよげに住みなしたまへり。正身も、あなをかしげとふと見えて、山吹にもてはやすたまへる御かたちなど、いとはなやかにここぞ曇れると見ゆるところなく、隈なく匂ひきらきらしく、見まほしきさまぞしたまへる。もの思ひに沈みたまへるほどのしわざにや、髪の裾すこし細りて、さはらかにかかれるしものいきよげに、ここかしこいとけぎやかなるさましたまへるを、かくて見ざらましかばと思すにつけても、えしも見過ぐしたまふまじ。かくいと隔てなく見たまつりなれたまへど、なほ思ふに、隔たり多くあやしきがうつつの心地もしたまはねば、まほならずもてなしたまへるもいとをかし。「年ごろになりぬる心地して、見たてまつるにも心やすく、本意かなひぬるを、つつみなくもてなしたまひて、あなたなどにも渡りたまへかし。いはけなき初琴習ふ人もあめるを、もろともに聞きならしたまへ。うしろめたくあはつけき心持たる人なき所なり」と聞こえたまへば、「のたまはせむままにこそは」と聞こえたまふ。さもあることぞかし。

暮れ方になるほどに明石の御方に渡りたまふ。近き渡殿の戸押し開くるより、御簾のうちの追風なまめかしく吹き匂はして、ものよりことに気高く思さる。正身は見えぬ、いづらと見まはしたまふに、硯のあたりにぎははしく、草子どもなど取り散らしたるなど取りつつ見たまふ。唐の東京錦のこととしき端さしたる茵にをかしげなる琴うち置き、わざとめきよしある火桶に侍従をくゆら

曇りなき池の鏡によろづ代をすむべき影ぞしるく見えける

何事につけても、末遠き御契りをあらまほしく聞こえ交はしたまふ。今日は子の日なりけり。げに千年の春をかけて祝はむにことわりなる日なり。

姫君の御方に渡りたまへれば、童、下仕へなど御前の山の小松引き遊ぶ。若き人びとの心地もおきどころなく見ゆ。北のおとどより、わざとがましくし集めたる鬚籠ども、破籠などたてまつれたまへり。えならぬ五葉の枝に移る鶯も思ふ心あらむかし。

年月をまつにひかれて経る人に今日鶯の初音聞かせよ

音せぬ里の。

と聞こえたまへるを、げにあはれと思し知る。事忌もえしあへたまはぬけしきなり。「この御返りはみづから聞こえたまへ。初音惜しみたまふべき方にもあらずかし」とて、御硯取りまかなひ書かせたてまつりたまふ。いとうつくしげにて、明け暮れ見たてまつる人だに飽かず思ひきこゆる御ありさまを、今までおぼつかなき年月の隔たりにけるも、罪得がましう心苦し、と思す。

ひき別れ年は経れども鶯の巢立ちし松の根を忘れめや

幼き御心にまかせてくださしくぞあめる。

夏の御住まひを見たまへば、時ならぬけにや、いと静かに見えて、わざと好ましきこともなくて、あてやかに住みたるけはひ見えわたる。年月に添へて、御心の隔てもなくあはれなる御仲なり。今はあながちに近やかなる御ありさまももてなしきこえたまはざりけり。いと睦ましくありがたからむ妹背の契りばかり聞こえ交はしたまふ。御几帳隔てたれど、すこし押しやりたまへば、またさておはす。縹はげにほひ多からぬあはひにて、御髪などもいたく盛り過ぎにけり。やさしき方にあらぬと、葡萄鬘してぞつくろひたまふべき、我ならざらむ人は見ざめしぬべき御ありさまを、かくて見るこそうれしく本意あれ、心

年立ちかへる朝の空のけしき、名残なく曇らぬうららかなげきには、数ならぬ垣根のうちだに、雪間の草若やかに色づきはじめ、いつしかとけしきだつ霞に、木の芽もうちけぶり、おのづから人の心ものびらかにぞ見ゆるかし。ましていとど玉を敷ける御前の、庭よりはじめ見所多く、磨きましたまへる御方々のありさま、まねびたてむも言の葉足るまじくなむ。

春のおとどの御前、とりわきて、梅の香も御簾のうちの匂ひに吹きまがひ、生ける仏の御国とおぼゆ。さすがにうちとけて、やすらかに住みなしたまへり。さぶらふ人びとも、若やかにすぐれたるは、姫君の御方にと選りたまひて、すこし大人びたる限り、なかなかよししく、装束ありさまよりはじめて、めやすくもてつけて、ここかしこに群れつつ、齒固めの祝ひして、餅鏡をさへ取り混ぜて、千年の蔭にしるき年のうちの祝ひ事どもしてそぼれあへるに、大臣の君さしのぞきたまへれば、懐手ひきなほしつつ、いとはしたなきわざかなとわびあへり。「いとしたたかなるみづからの祝ひ事どもかな。皆おのおの思ふことの道々あらむかし。すこし聞かせよや。われことぶきせむ」とうち笑ひたまへる御ありさまを、年のはじめの榮えに見たてまつる。われはと思ひあがれる中將の君ぞ、「かねてぞ見ゆるなどこそ、鏡の影にも語らひはんべりつれ。私の祈りは何ばかりのことをか」など聞こゆ。

あしたのほどは、人びと参り混みても騒がしかりけるを、夕つ方、御方々の参座したまはむとて、心ことにひきつくろひ、化粧じたまふ御影こそ、げに見るかひあめれ。「今朝この人びとの戯れ交はしつる、いとうらやましく見えつるを、上にはわれ見せたてまつらむ」とて、乱れたる事どもすこしうち混ぜつつ、祝ひきこえたまふ。

薄氷解けぬる池の鏡には世に曇りなき影ぞ並べる
げにめでたき御あはひどもなり。

初

音

ことわりなりや。

とぞあめる。

ぬ。いみじく、おのおのはささめき笑ひけり。かやうにわりなう古めかしう、かたはらいたきところのつきたまへるさかしらに、もてわづらひぬべう思す。恥づかしきまみなり。「古体の歌詠みは、唐衣、袂濡るるかこそ離れねな。まろもそのつらぞかし、さらに一筋にまつはれて、今めきたる言の葉にゆるぎたまはぬこそ、ねたきことははたあれ。人の中なることを、をりふし御前などの、わざとある歌詠みのなかにてはまとる離れぬ三文字ぞかし。昔の懸想のかしき挑みには、あだ人といふ五文字をやすめどころにうち置きて、言の葉の続きたよりある心地すべかめり」など笑ひたまふ。「よろづの草子、歌枕、よく案内知り見尽くして、そのうちの言葉を取り出づるに、詠みつきたる筋こそ強うは変はらざるべけれ。常陸の親王の書き置きたまへりける、紙屋紙の草子をこそ見よ、とておこせたりしか。和歌の髓脳いと所狭う、病去るべきところ多かりしかば、もとよりおくれたる方の、いとどなかなか動きすべくも見えざりしかば、むつかしくて返してき。よく案内知りたまへる人の口つきにては、目馴れてこそあれ」とて、をかしく思いたるさまぞいとほしきや。上、いとまめやかにて、「などで返したまひけむ。書きとどめて、姫君にも見せたてまつりたまふべかりけるものを。ここにも、ものなかなかりしも、虫みな損なひてければ、見ぬ人はた心ことにこそは遠かりけれ」とのたまふ。「姫君の御学問に、いと用なからむ。すべて女は、立てて好めることまうけてしみぬるは、さまよからぬことなり。何ごともいとつきなからむは口惜しからむ。ただ心の筋を漂はしからずもてしづめおきて、なだらかならむのみなむ、めやすかるべかりける」などのたまひて、返しは思しもかけねば、「返しやりてむとあめるに、これよりおし返したまはざらむも、ひがひがしからむ」とそそのかしきこえたまふ。情け捨てぬ御心にて、書きたまふ。いと心やすげなり。

返さむと言ふにつけても片敷の夜の衣を思ひこそやれ

ややかなる搔練取り添へては姫君の御料なり。浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれど匂ひやかならぬに、いと濃き搔練具して夏の御方に、曇りなく赤きに、山吹の花の細長は、かの西の対にたてまつれたまふを、上は見ぬやうにて思しあはず。内の大臣の、はなやかにあなきよげとは見えながら、なまめかしく見えたる方のまじらぬに似たるなめりと、げに推し量らるるを、色には出だしたまはねど、殿見やりたまへるに、ただならず。「いで、このかたちのよそへは、人、腹立ちぬべきことなり。よきとても物の色は限りあり、人のかたちは、おくれたるもまたなほ底ひあるものを」とて、かの末摘花の御料に、柳の織物の、よしある唐草を乱れ織れるもいとなまめきたれば、人知れずほほ笑まれたまふ。梅の折枝、蝶、鳥飛びちがひ、唐めいたる白き小桂に、濃きがつややかなる重ねて、明石の御方に、思ひやり気高きを、上はめざましと見たまふ。空蟬の尼君に青鈍の織物、いと心ばせあるを見つけたまひて、御料にある梶子の御衣、聴し色なる添へたまひて、同じ日着たまふべき御消息聞こえめぐらしたまふ。げに似ついたる見むの御心なりけり。

皆、御返りどもただならず。御使の禄心々なるに、末摘、東の院におはすれば、今すこしさし離れ、艶なるべきを、うるはしくものしたまふ人にて、あるべきことは違へたまはず、山吹の袿の袖口いたくすすけたるを、うつほにてうち掛けたまへり。御文には、いとかうばしき陸奥紙のすこし年経、厚きが黄ばみたるに、

いでや、賜へるは、なかなかこそ、

着てみれば恨みられけり唐衣返しやりてむ袖を濡らして

御手の筋、ことに奥よりにたり。いといたくほほ笑みたまひて、とみにもうち置きたまはねば、上、何ごとならむと見おこせたまへり。御使にかづけたる物を、いと侘しくかたはらいたしと思して、御けしき悪しければ、すべりまかで

ありがたきものに君も思し知り、右近も思ひ言ふ。おほぞうなるはことも怠りぬべしとて、こなたの家司ども定め、あるべきことどもおきてさせたまふ。豊後の介もなりぬ。年ごろ田舎び沈みたりし心地に、にはかに名残もなく、いかでか、仮にても立ち出で見るべきよすがなくおぼえし大殿のうちを、朝夕に出で入りならし、人を従へ、事行なふ身となれば、いみじき面目と思ひけり。大臣の君の御心おきての、こまかにありがたうおはしますこと、いとかたじけなし。

年の暮れに、御しつらひのこと、人びとの装束など、やむごとなき御つらに思しおきてたる、かかりとも田舎びたることやと、山賤の方にあなづり推し量りきこえたまひて、調じたるも、たてまつりたまふついでに、織物どもの、我も我もと手を尽くして織りつつ持て参れる細長、小桂の、色々さまさまなるを御覧するに、「いと多かりけるものどもかな。方々にうらやみなくこそものすべかりけれ」と、上に聞こえたまへば、御匣殿に仕うまつれるも、こなたにせさせたまへるも、皆取う出させたまへり。かかる筋、はたいとすぐれて、世になき色あひ、匂ひを染めつけたまへば、ありがたしと思ひきこえたまふ。ここかしこの擣殿より参らせたる擣物ども御覧じ比べて、濃き赤きなど、さまざまを選らせたまひつつ、御衣櫃、衣箱どもに入れさせたまうて、おとなびたる上臈どもさぶらひて、これはかれはと取り具しつつ入る。上も見たまひて、「いづれも劣りまさるけぢめも見えぬものどもなめるを、着たまはむ人の御かたに思ひよそへつつたてまつれたまへかし。着たる物のさまに似ぬは、ひがひがしくもありかし」とのたまへば、大臣うち笑ひて、「つれなくて、人の御かたち推し量らむの御心なめりな。さてはいづれをとか思す」と聞こえたまへば、「それも鏡にてはいかでか」と、さすが恥ぢらひておはす。紅梅のいと紋浮きたる葡萄染の御小桂、今様色のいとすぐれたるとはかの御料、桜の細長に、つ

まひけるを、あはれとも、今はまた誰れかは」とて、心ばへいふかひなくはあらぬ御いらへと思す。右近にあるべきことのたまはせて、渡りたまひぬ。

めやすくものしたまふをうれしく思して、上にも語りきこえたまふ。「さる山賤のなかに年経たれば、いかにいとほしげならむとあなづりしを、かへりて心恥づかしきまでなむ見ゆる。かかる者ありと、いかで人に知らせて、兵部卿宮などの、この籬のうち好ましようしたまふ心、乱りにしがな。好き者どものいとうるはしだちてのみ、このわたりに見ゆるも、かかる者のくさはひのなきほどなり。いたうもてなしてしがな。なほうちあはぬ人のけしき見集めむ」とのたまへば、「あやしの人の親や。まづ人の心励まさむことを先に思すよ。けしからず」とのたまふ。「まことに君をこそ、今の心ならましかば、さやうにもてなして見つべかりけれ、いと無心にしなしてしわざぞかし」とて笑ひたまふに、面赤みておはする、いと若くをかしげなり。硯引き寄せたまうて、手習に、

恋ひわたる身はそれなれど玉かづらいかなる筋を尋ね来つらむ

あはれ

と、やがて独りごちたまへば、げに深く思しける人の名残なめりと見たまふ。

中将の君にも、「かかる人を尋ね出でたるを、用意して、睦び訪らへ」とのたまひければ、こなたに参うでたまひて、「人数ならずとも、かかる者さぶらふと、まづ召し寄すべくなむはべりける。御渡りのほどにも、参り仕うまつらざりけること」と、いとまめまめしう聞こえたまへば、かたはらいたきまで心知れる人は思ふ。心の限り尽くしたりし御住まひなりしかど、あさましう田舎びたりしも、たとしへなくぞ思ひ比べらるるや。御しつらひよりはじめ、今めかしう気高くて、親はらからと睦びきこえたまふ御さまかたちよりはじめ、目もあやにおぼゆるに、今ぞ三条も大式をあなづらはしく思ひける。まして監が息ざし、けはひ、思ひ出づるもゆゆしきこと限りなし。豊後の介の心ばへを、

かるべきこと」になむのたまふ。殿のうちの人は、御むすめとも知らで、「何人、また尋ね出でたまへるならむ。むつかしき古者扱ひかな」と言ひけり。御車三つばかりして、人の姿どもなど、右近あれば、田舎びず仕立てたり。殿よりぞ、綾、何くれとたてまつれたまへる。

その夜、やがて大臣の君渡りたまへり。昔、光源氏などいふ御名は聞きわたりたてまつりしかど、年ごろのうひうひしさに、さしも思ひきこえざりけるを、ほのかなる大殿油に、御几帳のほころびよりはつかに見たてまつる、いとど恐ろしくさへぞおぼゆるや。渡りたまふ方の戸を、右近かい放てば、「この戸口に入るべき人は、心ことにこそ」と笑ひたまひて、廂なる御座についでたまひて、「灯こそいと懸想びたる心地すれ。親の顔はゆかしきものところ聞け、さも思さぬか」とて、几帳すこし押しやりたまふ。わりなく恥づかしければ、そばみておはする様体など、いとめやすく見ゆれば、うれしくて、「今すこし光見せむや。あまり心にくし」とのたまへば、右近かかけてすこし寄す。「おもなの人や」とすこし笑ひたまふ。げにとおぼゆる御まみの恥づかしげさなり。いささかもこと人と隔てあるさまにもたまひなさず、いみじく親めきて、「年ごろ御行方を知らで、心にかけてぬ隙なく嘆きはべるを、かうて見たてまつるにつけても、夢の心地して、過ぎにし方のことども取り添へ、忍びがたきに、えなむ聞こえられざりける」とて、御目おし拭ひたまふ。まことに悲しう思し出でらる。御年のほど数へたまひて、「親子の仲の、かく年経たるたぐひあらじものを、契りつらくもありけるかな。今はものうひうひしく若びたまふべき御ほどにもあらじを、年ごろの御物語など聞こえまほしきに、などかおぼつかなくは」と恨みたまふに、聞こえむこともなく恥づかしければ、「脚立たず、沈みそめはべりにけるのち、何ごともあるかなきかなむ」と、ほのかに聞こえたまふ声ぞ、昔人にいとよくおぼえて若びたりける。ほほ笑みて、「沈みた

なむ思ひ出でらるる。世にあらましかば、北の町にもものする人のなみにはなどか見ざらまし。人のありさま、とりどりになむありける。かどかどしう、をかしき筋などはおくれたりしかども、あてはかにらうたくもありしかな」などのたまふ。「さりとも明石のなみには、立ち並べたまはざらまし」とのたまふ。なほ北のおとどをばめざましと心置きたまへり。姫君のいとうつくしげにて、何心もなく聞きたまふがらうたければ、またことわりぞかしと思し返さる。

かくいふは九月のことなりけり。渡りたまはむこと、すがすがしくもいかでかはあらむ。よろしき童、若人など求めさす。筑紫にては、口惜しからぬ人びとも、京より散りぼひ来たるなどをたよりにつけて呼び集めなどしてさぶらはせしも、にはかに惑ひ出でたまひし騒ぎに皆おくらしてければ、また人もなし。京はおのづから広き所なれば、市女などやうのもの、いとよく求めつつ率て来。その人の御子などは知らせざりけり。右近が里の五条に、まづ忍びて渡したてまつりて、人びと選りとのへ、装束ととのへなどして、十月にぞ渡りたまふ。大臣、東の御方に聞こえつけたてまつりたまふ。「あはれと思ひし人のものうじして、はかなき山里に隠れるにけるを、幼き人のありしかば、年ごろも人知れず尋ねはべりしかども、え聞き出ででなむ、女になるまで過ぎにけるを、おぼえぬかたよりなむ聞きつけたる時にだにとて、移ろはしはべるなり」とて、「母も亡くなりけり。中将を聞こえつけたるに、悪しくやはある。同じごと後見たまへ。山賤めきて生ひ出でたれば、鄙びたること多からむ。さるべくこととにふれて教へたまへ」と、いとこまやかに聞こえたまふ。「げに、かかる人のおはしけるを、知りきこえざりけるよ。姫君の一所ものしたまふがさうさうしきに、よきことかな」と、おいらかにのたまふ。「かの親なりし人は、心なむありがたきまでよかりし。御心もうしろやすく思ひきこゆれば」などのたまふ。「つきづきしく後む人なども、こと多からでつれづれにはべるを、うれし

からめ、いかでか知らぬ人の御あたりには交じらはむ、とおもむけて、苦しげに思したれど、あるべきさまを右近聞こえ知らせ、人びとも、「おのづから、さて人だちたまひなば、大臣の君も尋ね知りきこえたまひなむ。親子の御契りは絶えて止まぬものなり。右近が、数にもはべらず、いかでか御覧じつけられむと思ひたまへしだに、仏神の御導きはべらざりけりや。まして誰れも誰れもたひらかにだにおはしまさば」と、皆聞こえ慰む。まづ御返りをと責めて書かせたてまつる。いとこよなく田舎びたらむものをと、恥づかしく思いたり。唐の紙のいと香ばしきを取り出でて書かせたてまつる。

数ならぬ三稜や何の筋なれば憂きにしもかく根をとどめけむ

とのみほのかなり。手は、はかなだち、よろぼはしけれど、あてはかにて口惜しからねば、御心落ちるにけり。

住みたまふべき御かた御覧するに、南の町には、いたづらなる対どもなどなし、勢ひことに住み満ちたまへれば、顕証に人しげくもあるべし、中宮おはします町は、かやうの人も住みぬべく、のどやかなれど、さてさぶらふ人の列にや聞きなさむと思して、すこし埋れたれど、丑寅の町の西の対、文殿にてあるを、異方へ移して、と思す。あひ住みにも、忍びやかに心よくものしたまふ御方なれば、うち語らひてもありなむ、と思しおきつ。

上にも、今ぞ、かのありし昔の世の物語聞こえ出でたまひける。かく御心に籠めたまふことありけるを、恨みきこえたまふ。「わりなしや。世にある人の上とてや、問はず語りは聞こえ出でむ。かかるついでに隔てぬこそは、人にはことには思ひきこゆれ」とて、いとあはれげに思し出でたり。「人の上にてもあまた見しに、いと思はぬなかも、女といふものの心深きをあまた見聞きしかば、さらに好き好きしき心はつかはじとなむ思ひしを、おのづからさるまじきをもあまた見しなかに、あはれとひたぶるにらうたきかたは、またたぐひなく

でつるに、いとうれしく聞き出でながら、今までおぼつかなきもかひなきことになむ。父大臣には何か知られむ。いとあまたもて騒がるめるが、数ならで今はじめ立ち交じりたらむが、なかなかなることこそあらめ。我はかうさうざうしきに、おぼえぬ所より尋ね出だしたるとも言はむかし。好き者どもの心尽くさするくさはひにて、いといたうもてなきむ」など語らひたまへば、かつがついとうれしく思ひつつ、「ただ御心になむ。大臣に知らせたてまつらむとも、誰れかは伝へほのめかしたまはむ。いたづらに過ぎものしたまひし代はりには、ともかくも引き助けさせたまはむことこそは、罪軽ませたまはめ」と聞こゆ。「いたうもかこちなすかな」と、ほほ笑みながら涙ぐみたまへり。「あはれにはかなかりける契りとなむ年ごろ思ひわたる。かくて集へる方々のなかに、かの折の心ざしばかり思ひとどむる人なかりしを、命長くて、わが心長さをも見はべるたぐひ多かめるなかに、いふかひなくて、右近ばかりを形見に見るは口惜しくなむ。思ひ忘るる時なきに、さてもものしたまはば、いとこそ本意かなふ心地すべけれ」とて、御消息たてまつれたまふ。かの末摘花のいふかひなかりしを思し出づれば、さやうに沈みて生ひ出でたらむ人のありさまうしろめたくて、まづ文のけしきゆかしく思さるるなりけり。ものまめやかに、あるべかく書きたまひて、端に、

かく聞こゆるを、

知らずとも尋ねて知らむ三島江に生ふる三稜の筋は絶えじを

となむありける。御文、みづからまかでて、のたまふさまなど聞こゆ。御装束、人びとの料などさまさまあり。上にも語らひきこえたまへるなるべし、御匣殿などにも設けの物召し集めて、色あひ、しざまなど、ことなるをと選らせたまへれば、田舎びたる目どもには、まして珍らしきまでなむ思ひける。

正身は、ただかことばかりにても、まことの親の御けはひならばこそうれし

苦しとてむつかるめり。なほ年経ぬるどちこそ、心交はして睦びよかりけれ」
 とのたまへば、人びと忍びて笑ふ。「さりや、誰かその使ひならいたまはむを
 ばむつからむ」、「うるさき戯れ事言ひかかりたまふを、わづらはしきに」など
 言ひあへり。「上も、年経ぬるどちうちとけ過ぎ、はたむつかりたまはむとや。
 さるまじき心と見ねば、危ふし」など、右近に語らひて笑ひたまふ。いと愛敬
 づき、をかしきけさへ添ひたまへり。今はおほやけに仕へ、忙しき御ありさま
 にもあらぬ御身にて、世の中のどやかに思さるるままに、ただはかなき御戯れ
 事をのたまひ、をかしく人の心を見たまふあまりに、かかる古人をさへぞ戯れ
 たまふ。「かの尋ね出でたりけむや、何さまの人ぞ。尊き修行者語らひて、率
 て来たるか」と問ひたまへば、「あな見苦しや。はかなく消えたまひにし夕顔
 の露の御ゆかりをなむ、見たまへついたりし」と聞こゆ。「げにあはれなりけ
 ることかな。年ごろはいづくにか」とのたまへば、ありのままには聞こえにく
 くて、「あやしき山里になむ。昔人もかたへは変はらではべりければ、その世
 の物語し出ではべりて、堪へがたく思ひたまへりし」など聞こえるたり。「よ
 し、心知りたまはぬ御あたりに」と、隠しきこえたまへば、上、「あなわづら
 はし。ねぶたきに、聞き入るべくもあらぬものを」とて、御袖して御耳塞ぎた
 まひつ。「かたちなどは、かの昔の夕顔と劣らじや」などのたまへば、「かなら
 ずさしもいかでかものしたまはむ、と思ひたまへりしを、こよなうこそ生ひま
 さりて見えたまひしか」と聞こゆれば、「をかしのことや。誰ばかりとおぼゆ。
 この君と」とのたまへば、「いかでか、さまでは」と聞こゆれば、「したり顔に
 こそ思ふべけれ。我に似たらばしも、うしろやすしかし」と、親めきてのたま
 ふ。

かく聞きそめてのちは、召し放ちつつ、「さらばかの人、このわたりに渡い
 たてまつらむ。年ごろものついでごとに、口惜しう惑はしつることを思ひ出

にはよろづ思ひ続けられて、人並々ならむこともありがたきことと思ひ沈みつるを、この人の物語のついでに、父大臣の御ありさま、腹々の何ともあるまじき御子ども、皆ものめかしなしたたまふを聞けば、かかる下草頼もしくぞ思しなりぬる。出づとても、かたみに宿る所も問ひ交はして、もしまた追ひ惑はしたらむ時と危ふく思ひけり。右近が家は、六条の院近きわたりなりければ、ほど遠からで、言ひ交はすもたつき出で来ぬる心地しけり。

右近は大殿に参りぬ。このことをかすめ聞こゆるついででもやとて急ぐなりけり。御門引き入るるより、けはひことに広々として、まかで参りする車多くまよふ。数ならで立ち出づるもまばゆき心地する玉の台なり。その夜は御前にも参らで思ひ臥したり。またの日、よべ里より参れる上臈、若人どものなかに、取り分きて右近を召し出づれば、おもだたくおぼゆ。大臣も御覧じて、「などこ里居は久しくしつるぞ。例ならずやまめ人の引き違へ、こまがへるやうもありかし。をかしきことなどありつらむかし」など、例のむつかしう戯れ事などのたまふ。「まかでて、七日に過ぎはべりぬれど、をかしきことははべりがたくなむ。山踏しはべりて、あはれなる人をなむ見たまへつけたりし」、「何人ぞ」と問ひたまふ。ふと聞こえ出でむも、まだ上に聞かせたてまつらで、取り分き申したらむを、のちに聞きたまうては、隔てきこえけりとや思さむ、など思ひ乱れて、「今聞こえさせはべらむ」とて、人びと参れば聞こえさしつ。大殿油など参りて、うちとけ並びおはします御ありさまども、いと見るかひ多かり。女君は二十七八にはなりたまひぬらむかし、盛りにきよらにねびまさりたまへり。すこしほど経て見たてまつるは、またこのほどにこそにほひ加はりたまひにけれと見えたまふ。かの人をいとめでたし、劣らじと見たてまつりしかど、思ひなしにや、なほこよなきに、幸ひのなきとあるとは隔てあるべきわがかな、と見合はせらる。大殿籠もるとて、右近を御脚参りに召す。「若き人は

言へば、「大臣の君はめでたくおはしますとも、さるやむごとなき妻どもおはしますなり、まづまことの親とおはする大臣にを知らせたてまつりたまへ」など言ふに、ありしさまなど語り出でて、「世に忘れがたく悲しきことになむ思して、かの御代はりに見たてまつらむ、子も少なきがさうざうしきに、わが子を尋ね出でたると人には知らせて、とそのかみよりのたまふなり。心の幼かりけることは、よろづにもものつつましかりしほどにて、え尋ねても聞こえて過ぎししほどに、少弐になりたまへるよしは、御名にて知りなき。まかり申しに、殿に参りたまへりし日、ほの見たてまつりしかども、え聞こえて止みにき。さりとも姫君をば、かのありし夕顔の五条にぞとどめたてまつりたまへらむとぞ思ひし。あないみじや、田舎人にておはしますましょ」などうち語らひつつ、日ひと日、昔物語、念誦などしつつ。

参り集ふ人のありさまども、見下さるる方なり。前より行く水をば初瀬川といふなりけり。右近、

「二本の杉のたちどを尋ねずは古川野辺に君を見ましやうれしき瀬にも」と聞こゆ。

初瀬川はやくのことは知らねども今日の逢ふ瀬に身さへ流れぬ

とうち泣きておはするさま、いとめやすし。かたちはいとかくめでたくきよげながら、田舎び、こちこちしうおはせましかば、いかに玉の瑕ならまし、いであはれ、いかでかく生ひ出でたまひけむ、とおとどをうれしく思ふ。母君は、ただいと若やかにおほどかにて、やはやはとぞたをやぎたまへりし、これは気高く、もてなしなど恥づかしげに、よしめきたまへり。筑紫を心にくく思ひなすに、皆見し人は里びにたるに、心得がたくなむ。暮るれば、御堂に上りて、またの日も行なひ暮らしたまふ。

玉鬘

秋風、谷より遙かに吹きのぼりていと肌寒きに、ものいとあはれなる心ども

似る人おはせじとなむ、年ごろ見たてまつるを、また生ひ出でたまふ姫君の御さま、いとことわりにめでたくおはします。かしづきたてまつりたまふさまも並びなかめるに、かうやつれたまへる御さまの、劣りたまふまじく見えたまふは、ありがたうなむ。大臣の君、父みかどの御時より、そこらの女御、后、それより下は残るなく見たてまつり集めたまへる御目にも、当代の御母后と聞こえしと、この姫君の御かたちとをなむ、よき人とはこれを言ふにやあらむとおぼゆる、と聞こえたまふ。見たてまつり並ぶるに、かの後の宮をば知りきこえず、姫君はきよらにおはしませど、まだ片なりにて、生ひ先ぞ推し量られたまふ。上の御かたちは、なほ誰か並びたまはむとなむ見たまふ。殿も、すぐれたりと思しためるを、言に出でては、何かは数へのうちには聞こえたまはむ。我に並びたまへるこそ君はおほけなけれ、となむ戯れきこえたまふ。見たてまつるに、命延ぶる御ありさまどもを、またさるたぐひおはしましなむやとなむ思ひはべるに、いづくか劣りたまはむ。ものは限りあるものなれば、すぐれたまへりとて、頂きを離れたる光やおはする。ただこれをすぐれたりとは聞こゆべきなめりかし」と、うち笑みて見たてまつれば、若い人もうれしと思ふ。「かかる御さまを、ほとほとあやしき所に沈めたてまつりぬべかりしに、あたらしく悲しうて、家かまどもを捨て、をとこ女の頼むべき子どもにも引き別れてなむ、かへりて知らぬ世の心地する京にまうで来し。あが御許、はやくよきさまに導ききこえたまへ。高き宮仕へしたまふ人は、おのづから行き交じりたるたよりものしたまふらむ。父大臣に聞こしめされ、数まへられたまふべきたばかり思し構へよ」と言ふ。恥づかしう思いて、うしろ向きたまへり。「いでや、身こそ数ならねど、殿も御前近く召し使ひたまへば、ものの折ごとに、いかにならせたまひにけむ、と聞こえ出づるを、聞こしめし置きて、われいかで尋ねきこえむと思ふを、聞き出でたてまつりたらば、となむのたまはする」と

は思ひのごと、大臣の君の尋ねたてまつらむの御心ざし深かめるに、知らせたてまつりて、幸ひあらせたとまつりたまへ」など申しけり。

国々より、田舎人多く詣でたりけり。この国の守の北の方も詣でたりけり。いかめしく勢ひたるをうらやみて、この三条が言ふやう、「大悲者には、異事も申し。あが姫君、大弐の北の方ならずは、当国の受領の北の方になしたてまつらむ。三条らも随分に榮えて、返り申しは仕うまつらむ」と、額に手を当てて念じ入りてをり。右近、いとゆゆしくも言ふかな、と聞きて、「いといたくこそ田舎びにけれな。中将殿は、昔の御おぼえだにいかがおはしました。まして今は天の下を御心にかけてたまへる大臣にて、いかばかりいつかしき御仲に、御方しも、受領の妻にて、品定まりておはしまさむよ」と言へば、「あなかま、たまへ。大臣たちもしばし待て。大弐の御館の上の清水の御寺、観世音寺に参りたまひし勢ひは、帝の行幸にやは劣れる。あなむくつけ」とて、なほさらに手をひき放たず拌み入りてをり。

筑紫人は、三日籠もらむと心ざしたまへり。右近は、さしも思はざりけれど、かかるついで、のどかに聞こえむとて、籠もるべきよし、大徳呼びて言ふ。御あかし文など書きたる心ばへなど、さやうの人はくくだしうわきまへければ、常のことにて、「例の藤原の瑠璃君といふが御ためにたてまつる。よく祈り申したまへ。その人、このころなむ見たてまつり出でたる。その願も果たしたてまつるべし」と言ふを、聞くもあはれなり。法師、「いとかしこきことかな。たゆみなく祈り申しはべる験にこそはべれ」と言ふ。いと騒がしう夜一夜行なふなり。

明けぬれば、知れる大徳の坊に下りぬ。物語心やすくとなるべし。姫君の、いたくやつれたまへる、恥づかしげに思したるさま、いとめでたく見ゆ。「おぼえぬ高き交じらひをして、多くの人をなむ見集むれど、殿の上の御かたちに

るもいと心憂けれど、うち捨てたてまつりたまへる若君の、らうたくあはれにておはしますを、よみぢのほだしにもてわづらひきこえてなむ、またたきはべる」と言ひ続ければ、昔その折、いふかひなかりしことよりも、いらへむ方なくわづらはしと思へども、「いでや、聞こえてもかひなし。御方ははや亡せたまひにき」と言ふままに、二三人ながらむせかへり、いとむつかしく、せきかねたり。

日暮れぬと急ぎたちて、御灯明の事どもしたため果てて急がせば、なかなかいと心あわたたしく立ち別る。「もろともにや」と言へど、かたみに供の人のあやしと思ふべければ、この介にもことのさままだに言ひ知らせあへず。われも人もことに恥づかしくはあらで、皆下り立ちぬ。右近は人知れず目とどめて見るに、なかにうつくしげなるうしろでの、いといたうやつれて、卯月の単衣めくものに着こめたまへる髪の透影、いとあたらしくめでたく見ゆ。心苦しう悲しと見たてまつる。

すこし足なれたる人はとく御堂に着きにけり。この君をもてわづらひきこえつつ、初夜行なふほどにぞ上りたまへる。いと騒がしく人詣で混みてののしる。右近が局は、仏の右の方に近き間にしたり。この御師は、まだ深からねばにや、西の間に遠かりけるを、「なほここにおはしませ」と、尋ね交はし言ひたれば、男どもをばとどめて、介にかうかうと言ひあはせて、こなたに移したてまつる。「かくあやしき身なれど、ただ今の大殿になむさぶらひはべれば、かくかすかなる道にても、らうがはしきことははべらじと頼みはべる。田舎びたる人をば、かやうの所には、よからぬなま者どもの、あなづらはしうするも、かたじけなきことなり」とて物語いとせまほしけれど、おどろおどろしき行なひの紛れ、騒がしきにもよほされて、仏拝みたてまつる。右近は心のうちに、「この人はいかで尋ねきこえむと申しわたりつるに、かつがつかうて見たてまつれば、今

ほどを見しに、太り黒みてやつれたれば、多くの年隔てたる目には、ふとしも見分かぬなりけり。「三条、ここに召す」と呼び寄する女を見れば、また見し人なり。故御方に、下人なれど、久しく仕うまつりなれて、かの隠れたまへりし御住みかまでありし者なりけり、と見なして、いみじく夢のやうなり。主とおぼしき人はいとゆかしけれど、見ゆべくも構へず。思ひわびて、この女に問はむ、兵藤太といひし人もこれにこそあらめ、姫君のおはするにや、と思ひ寄るに、いと心もとなくてこの中隔てなる三条を呼ばすれど、食ひ物に心入れて、とみにも来ぬ、いと憎しとおぼゆるもうちつけなりや。

からうして、「おぼえずこそはべれ。筑紫の国に二十年ばかり経にける下衆の身を知らせたまふべき京人よ。人違へにやはべらむ」とて寄り来たり。田舎びたる搔練に衣など着て、いといたう太りにけり。わが齢もいとどおぼえて恥づかしけれど、「なほさし覗け。われをば見知りたりや」とて顔さし出でたり。この女の手を打ちて、「あが御許にこそおはしましたしけれ。あなうれしともうれし。いづくより参りたまひたるぞ。上はおはしますや」と、いとおどろおどろしく泣く。若き者にて見なれし世を思ひ出づるに、隔て来にける年月数へられていとあはれなり。「まづおとどはおはすや。若君はいかがなりたまひにし。あてきと聞こえしは」とて、君の御ことは言ひ出でず。「皆おはします。姫君も大人になりておはします。まづおとどにかなむと聞こえむ」とて入りぬ。

皆驚きて、「夢の心地もするかな。いとつらく、言はむかたなく思ひきこゆる人に、対面しぬべきことよ」とて、この隔てに寄り来たり。気遠く隔てつる屏風だつもの、名残なくおし開けて、まづ言ひやるべき方なく泣き交はす。老人は、ただ、「わが君はいかがなりたまひにし。ここらの年ごろ、夢にてもおはしまさむ所を見むと大願を立つれど、遙かなる世界にて、風の音にてもえ聞き伝へたてまつらぬを、いみじく悲しと思ふに、老いの身の残りともまりた

とばかりの悲しさを、嘆きわたりたまへるに、かくさしあたりて身のわりなきままに、取り返しいみじくおぼえつつ、からうして椿市といふ所に、四日といふ巳の時ばかりに、生ける心地もせで行き着きたまへり。

歩むともなく、とかくつくろひたれど、足のうら動かれず、わびしければ、せむかたなくて休みたまふ。この頼もし人なる介、弓矢持ちたる人二人、さては下なる者、童など三四人、女ばらある限り三人、壺装束して、樋洗めく者、古き下衆女二人ばかりとぞある。いとかすかに忍びたり。大御灯明のことなど、ここにてし加へなどするほどに日暮れぬ。家あるじの法師、「人宿したてまつらむとする所に、何人のものしたまふぞ。あやしき女どもの心にまかせて」とむつかるを、めざましく聞くほどに、げに人びと来ぬ。

これも徒歩よりなめり。よろしき女二人、下人どもぞ、をとこ女、数多かむめる。馬四五牽かせて、いみじく忍びやつしたれど、きよげなるをとこどもなどあり。法師は、せめてここに宿さまほしくして、頭搔きありく。いとほしけれど、また宿り替へむもさま悪しく、わづらはしければ、人びとは奥に入り、他に隠しなどして、かたへは片つ方に寄りぬ。軟障などひき隔てておはします。この来る人も恥づかしげもなし。いたうかいひそめて、かたみに心づかひしたり。さるは、かの世とともに恋ひ泣く右近なりけり。年月に添へて、はしたなき交じらひのつきなくなりゆく身を思ひなやみて、この御寺になむたびたび詣でける。

例ならひにければ、かやすく構へたりけれど、徒歩より歩み堪へがたくて、寄り臥したるに、この豊後の介、隣の軟障のもとに寄り来て、参り物なるべし、折敷手づから取りて、「これは御前に参らせたまへ。御台などうちあはで、いとかたはらいたしや」と言ふを聞くに、わが並の人にはあらじと思ひて、物はさまより覗けば、この男の顔見し心地す。誰とはえおぼえず。いと若かりし

きて、都のうちといへど、はかばかしき人の住みたるわたりにもあらず、あやしき市女、商人のなかにて、いぶせく世の中を思ひつつ、秋にもなりゆくまゝに、来し方行く先悲しきこと多かり。豊後の介といふ頼もし人も、ただ水鳥の陸に惑へる心地して、つれづれに、ならはぬありさまのたづきなきを思ふに、帰らむにもはしたなく、心幼く出で立ちにけるを思ふに、従ひ来たりし者どもも、類に触れて逃げ去り、本の国に帰り散りぬ。

住みつくべきやうもなきを、母おとど、明け暮れ嘆きいとほしがれば、「何か、この身はいとやすくはべり。人一人の御身に代へたてまつりて、いづちもいづちもまかり失せなむに咎あるまじ。我らいみじき勢ひになりても、若君をさるものの中にはふらしたてまつりては、何心地かせまし」と語らひ慰めて、「神仏こそは、さるべき方にも導き知らせたてまつりたまはめ。近きほどに、八幡の宮と申すは、かしこにても参り祈り申したまひし松浦、笠崎同じ社なり。かの国を離れたまふとても、多くの願立て申したまひき。今都に帰りて、かくなむ御験を得てまかり上りたると、早く申したまへ」とて、八幡に詣でさせたまつる。そののわたり知れる人に言ひ尋ねて、五師とて、早く親の語らひし大徳残れるを呼びとりて、詣でさせたまつる。

「うち次ぎては、仏の御なかには、初瀬なむ日の本のうちにはあらたなる験現したまふと、唐土にだに聞こえあむなり。ましてわが国のうちにこそ、遠き国の境とても、年経たまへれば、若君をばまして恵みたまひてむ」とて、出だし立てたてまつる。ことさらに徒歩よりと定めたり。ならはぬ心地にとわびしく苦しけれど、人の言ふままにもおぼえて歩みたまふ。いかなる罪深き身にて、かかる世にさすらふらむ、わが親世に亡くなりたまへりとも、われをあはれと思さば、おはすらむ所に誘ひたまへ、もし世におはせば御顔見せたまへ、と仏を念じつつ、ありけむさまをだにおぼえねば、ただ親おはせましかば

浮島を漕ぎ離れても行く方やいづく泊りと知らずもあるかな
行く先も見えぬ波路に舟出して風にまかする身こそ浮きたれ

いとあとはかなき心地して、うつぶし臥したまへり。

かく逃げぬるよし、おのづから言ひ出で伝へば、負けじ魂にて追ひ来なむと思ふに、心も惑ひて、早舟といひて、さまことになむ構へたりければ、思ふ方の風さへ進みて、危ふきまで走り上りぬ。響の灘もなだらかに過ぎぬ。「海賊の舟にやあらむ、小さき舟の飛ぶやうにて来る」など言ふ者あり。海賊のひたぶるならむよりも、かの恐ろしき人の追ひ来るにやと思ふに、せむかたなし。

憂きことに胸のみ騒ぐ響きには響の灘もさはらざりけり

「川尻といふ所近づきぬ」と言ふにぞ、すこし生き出づる心地する。例の舟子ども、「唐泊より川尻おすほどは」と歌ふ声の情けなきも、あはれに聞こゆ。豊後の介、あはれになつかしう歌ひすきみて、「いとかなしき妻子も忘れぬ」とて、思へば、げにぞ皆うち捨ててける、いかなりぬらむ、はかばかしく身の助けと思ふ郎等どもは、皆率て来にけり、我をあしと思ひて追ひまどはして、いかがしなすらむ、と思ふに、心幼くも顧みせで出でにけるかな、とすこし心のどまりてぞあさましき事を思ひ続けるに、心弱くうち泣かれぬ。「胡の地の妻児をば虚しく棄て捐てつ」と誦ずるを、兵部の君聞きて、げにあやしのわざや、年ごろ従ひ来つる人の心にも、にはかに違ひて逃げ出でにしを、いかに思ふらむ、とさまさま思ひ続けらるる。帰る方とても、そこ所と行き着くべき故里もなし、知れる人と言ひ寄るべき頼もしき人もおぼえず、ただ一所の御ためにより、こちらの年つき住み馴れつる世界を離れて、浮べる波風にただよひて、思ひめぐらす方なし、この人をもいかにしたてまつらむとするぞ、とあきれておぼゆれど、いかがはせむとて急ぎ入りぬ。

九条に、昔知れりける人の残りたりけるを訪らひ出でて、その宿りを占め置

びて、うち思ひけるままに、

年を経て祈る心の違ひなば鏡の神をつらしとや見む

とわななかし出でたるを、「待てや。こはいかに仰せらるる」と、ゆくりかに寄り来たるけはひにおびえて、おとど色もなくなりぬ。娘たち、さはいへど心強く笑ひて、「この人のさまことにものしたまふを、引き違へはべらば、思はれむをなほほけほけしき人の、神かけて聞こえひがめたまふなめりや」と解き聞かす。「おい、さりさり」とうなづきて、「をかしき御口つきかな。なにがしら、田舎びたりといふ名こそはべれ、口惜しき民にははべらず。都の人とても何ばかりかあらむ。みな知りてはべり。な思しあなづりそ」とて、また詠まむと思へれども、堪へずやありけむ、往ぬめり。

次郎が語らひ取られたるも、いと恐ろしく心憂くて、この豊後の介を責むれば、いかがは仕まつるべからむ、語らひあはすべき人もなし、まれまれのほからは、この監に同じ心ならずとて仲違ひにたり、この監にあたまれては、いささかの身じろきせむも所狭くなむあるべき、なかなかなる目をや見む、と思ひわづらひにたれど、姫君の人知れず思いたるさまのいと心苦しくて、生きたらじと思ひ沈みたまへる、ことわりとおぼゆれば、いみじきことを思ひ構へて出で立つ。いもうとたちも、年ごろ経ぬるよるべを捨てて、この御供に出で立つ。あてきと言ひしは、今は兵部の君といふぞ、添ひて夜逃げ出でて舟に乗りける。大夫の監は、肥後に帰り行きて、四月二十日のほどに、日取りて来むとするほどに、かくて逃ぐるなりけり。

姉のおもとは、類広くなりてえ出で立たず。かたみに別れ惜しみて、あひ見むことの難きを思ふに、年経つる故里とて、ことに見捨てがたきこともなし。ただ松浦の宮の前の渚と、かの姉おもとの別るるをなむ顧みせられて、悲しかりける。

しく、荒らかなる振る舞ひなど見るもゆゆしくおぼゆ。色あひ心地よげに、声いたうかれてさへづりゐたり。懸想人は夜に隠れたるをこそよばひとは言ひけれ、さまかへたる春の夕暮なり。秋ならねども、あやしかりけりと見ゆ。心を破らじとて、祖母おとど出で会ふ。「故少弐のいと情けび、きらきらしくものしたまひしを、いかでかあひ語らひ申さむと思ひたまへしかども、さる心ざしをも見せ聞こえずはべりしほどに、いと悲しくて隠れたまひにしを、その代はりに一向に仕うまつるべくなむ、心ざしを励まして、今日は、いとひたぶるに強ひてさぶらひつる。このおはしますらむ女君、筋ことにうけたまはればいとかたじけなし。ただなにがしらが私の君と思ひ申して、いただきになむささげたてまつるべき。おとどもしぶしぶにおはしげなることは、よからぬ女どもあまたあひ知りてはべるを、聞こしめし疎むななり。さりとも、すやつばら人を並みにはしはべりなむや。わが君をば、後の位に落としたてまつらじものをや」など、いとよげに言ひ続く。「いかがは。かくのたまふを、いと幸ひありと思ひたまふるを、宿世つたなき人にやはべらむ、思ひ憚ることはべりて、いかでか人に御覧ぜられむと、人知れず嘆きはべるめれば、心苦しう見たまへわづらひぬる」と言ふ。「さらにな思し憚りそ。天下に目つぶれ、足折れたまへりとも、なにがしは仕うまつりやめてむ。国のうちの仏神は、おのれになむ靡きたまへる」など、誇りゐたり。その日ばかりと言ふに、「この月は季の果てなり」など、田舎びたることを言ひ逃る。

おりて行く際に、歌詠ままほしかりければ、やや久しう思ひめぐらして、

「君にもし心違はば松浦なる鏡の神をかけて誓はむ

この和歌は、仕うまつりたりとなむ思ひたまふる」とうち笑みたるも、世づかずうひうひしや。あれにもあらねば、返しすべくも思はねど、娘どもに詠ますれど、「まろは、ましてものもおぼえず」とてゐたれば、いと久しきに思ひわ

大夫監とて、肥後国に族広くて、かしこにつけてはおぼえあり、勢ひいかめしきつはものありけり。むくつけき心のなかに、いささか好きたる心混じりて、かたちある女を集めて見むと思ひける。この姫君を聞きつけて、「いみじきかたはありとも、我は見隠して持たらむ」といとねむごろに言ひかかると、いとむくつけく思ひて、「いかで、かかることを聞かで、尼になりなむとす」と言はせたりければ、いよいよあやふがりて、おしてこの国に越え来ぬ。

このをのこどもを呼びとりて語らふことは、「思ふさまになりなば、同じ心に勢ひを交はすべきこと」など語らふに、二人は赴きにけり。「しばしこそ似げなくあはれと思ひきこえけれ、おのおの我が身のよるべと頼まむに、いと頼もしき人なり。これに悪しくせられては、この近き世界にはめぐらひなむや。よき人の御筋といふとも、親に数まへられたてまつらず、世に知らでは、何かひかはあらむ。この人のかくねむごろに思ひきこえたまへるこそ、今は御幸ひなれ。さるべきにてこそは、かかる世界にもおはしけれ。逃げ隠れたまふとも、何のたけきことかはあらむ。負けじ魂に怒りなば、せぬことどもしてむ」と言ひおどせば、いとみじと聞きて、中のこのかみなる豊後の介なむ、「なほいとたいだしく、あたらしきことなり。故少弐ののたまひしこともあり。とかく構へて京に上げたてまつりてむ」と言ふ。

娘どもも泣きまどひて、「母君のかひなくてさすらへたまひて、行方をだに知らぬかはりに、人なみなみにて見たてまつらむとこそ思ふに、さるものの中に混じりたまひなむこと」と思ひ嘆くをも知らで、我はいとおぼえ高き身と思ひて、文など書きておこす。手などきたなげなう書きて、唐の色紙香ばしき香に入れしめつつ、をかしく書きたりと思ひたる、言葉ぞいとたみたりける。

みづからも、この家の次郎を語らひとりて、うち連れて来たり。三十ばかりなるをのこの、丈高くものものしく太りて、きたなげなけれど、思ひなし疎ま

思ひいそぎつるを、ここながら命堪へずなりぬること」とうしろめたがる。をこの子三人あるに、「ただこの姫君、京に率てたてまつるべきことを思へ。わが身の孝をばな思ひそ」となむ言ひ置きける。

その人の御子とは、館の人にも知らせず、ただ孫のかしづくべきゆゑあるとぞ言ひなしければ、人に見せず、限りなくかしづききこゆるほどに、にはかに亡せぬれば、あはれに心細くて、ただ京の出で立ちをすれど、この少弐の仲悪しかりける国の人多くなどして、とぎまかうぎまにおぢ憚りて、われにもあらで年を過ぐすに、この君ねびととのひたまふままに、母君よりもまさりてきよらに、父大臣の筋さへ加はればにや、品高くうつくしげなり。心ばせおほどかにあらまほしうものしたまふ。聞きついつつ、好いたる田舎人ども心かけ、消息がるいと多かり。ゆゆしくめぐましくおぼゆれば、誰も誰も聞き入れず、「かたちなどはさてもありぬべけれど、いみじかたはのあれば、人にも見せで尼になして、わが世の限りは持たらむ」と言ひ散らしたれば、「故少弐の孫はかたはなむあんなる。あたらしものを」と言ふなるを聞くもゆゆしく、「いかさまにして、都に率てたてまつりて、父大臣に知らせたてまつらむ。いとときなきほどを、いとらうたしと思ひきこえたまへりしかば、さりともおろかには思ひ捨てきこえたまはじ」など言ひ嘆くほど、仏神に願を立ててなむ念じける。

娘どももおのこどもも、所につけたるよすがども出で来て、住みつきにたり。心のうちにこそ急ぎ思へど、京のことはいや遠ざかるやうに隔たりゆく。もの思し知るままに、世をいと憂きものに思して、年三などしたまふ。二十ばかりになりたまふままに、生ひととのほりて、いとあたらしくめでたし。この住む所は肥前国とぞいひける。そのわたりにもいささか由ある人は、まづこの少弐の孫のありさまを聞き伝へて、なほ絶えず訪れ来るも、いといみじう耳かしかましきまでなむ。

出づるほどは、いとあはれになむおぼえける。幼き心地に母君を忘れず、折々に、「母の御もとへ行くか」と問ひたまふにつけて、涙絶ゆる時なく、娘どもも思ひこがるるを、「舟路ゆゆし」と、かつは諫めけり。

おもしろき所々を見つつ、心若うおはせしものを、かかる路をも見せたてまつるものにもがな、おはせましかばわれらは下らざらまし、と京の方を思ひやるるるに、帰る浪もうらやましく心細きに、舟子どもの荒々しき声にて、「うらがなくも遠く来にけるかな」と歌ふを聞くままに、二人さし向ひて泣きけり。

舟人もたれを恋ふとか大島のうらがなしげに声の聞こゆる

来し方も行方も知らぬ沖に出でてあはれいづくに君を恋ふらむ

鄙の別れに、おのがじし心をやりて言ひける。

金の岬過ぎて、「われは忘れず」など、世ともの言種になりて、かしこに到り着きては、まいて遙かなるほどを思ひやりて、恋ひ泣きて、この君をかしづきものにて明かし暮らす。夢などに、いとたまさかに見えたまふ時などもあり。同じさまなる女など添ひたまうて見えたまへば、名残心地悪しく悩みなどしければ、なほ世に亡くなりたまひにけるなめり、と思ひなるもいみじくのみなむ。

少弐、任果てて上りなどするに、遙けきほどに、ことなる勢ひなき人はたゆたひつつ、すがすがしくも出で立たぬほどに、重き病して死なむとする心地にも、この君の十ばかりにもなりたまへるさまの、ゆゆしきまでをかしげなるを見たてまつりて、「我さへうち捨てたてまつりて、いかなるさまにはふれたまはむとすらむ。あやしき所に生ひ出でたまふも、かたじけなく思ひきこゆれど、いつしかも京に率てたてまつりて、さるべき人にも知らせたてまつりて、御宿世にまかせて見たてまつらむにも、都は広き所なれば、いと心やすかるべしと

年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔をつゆ忘れたまはず、心々なる人のありさまどもを見たまひ重ぬるにつけても、あらましかばと、あはれに口惜しくのみ思し出づ。右近は何の人数ならねど、なほその形見と見たまひて、らうたきものに思したれば、古人の数に仕うまつり馴れたり。須磨の御移ろひのほどに、対の上の御方に皆人びと聞こえ渡したまひしほどより、そなたにさぶらふ。心よくかいひそめたるものに、女君も思したれど、心のうちには、故君ものしたまはましかば、明石の御方ばかりのおぼえには劣りたまはざらまし、さしも深き御心ざしなかりけるをだに、落としあぶさず、取りしたためたまふ御心長さなりければ、まいて、やむごとなき列にこそあらざらめ、この御殿移りの数のうちには交じらひたまひなまし、と思ふに、飽かず悲しくなむ思ひける。

かの西の京にとまりし若君をだに、行方も知らず、ひとへにものを思ひつみ、また、「今さらにかひなきことによりて、我が名漏らすな」と口がためたまひしを、憚りきこえて、尋ねても訪づれきこえざりしほどに、その御乳母の男、少式になりて行きければ、下りにけり。かの若君の四つになる年ぞ、筑紫へは行きける。

母君の御行方を知らむと、よろづの神仏に申して、夜昼泣き恋ひて、さるべき所々を尋ねきこえけれど、つひにえ聞き出でず。さらばいかがはせむ、若君をだにこそは御形見に見たてまつらめ、あやしき道に添へたてまつりて、遙かなるほどにおはせむことの悲しきこと、なほ父君にほのめかさむ、と思ひけれど、さるべきたよりもなきうちに、「母君のおはしけむ方も知らず、尋ね問ひたまはばいかが聞こえむ。まだよくも見なれたまはぬに、幼き人をとどめたてまつりたまはむも、うしろめたかるべし。知りながら、はた率て下りねと許したまふべきにもあらず」など、おのがじし語らひあはせて、いとうつくしう、ただ今から気高きよらなる御さまを、ことなるしつらひなき舟に乗せて漕ぎ

玉

鬘

と聞こえたり。あはれもつらさも忘れぬふしと思し置かれたる人なれば、折々はなほのたまひ動かしけり。

かかるほどに、この常陸守、老いの積もりにや、悩ましくのみしても心細かりければ、子どもに、ただこの君の御ことをのみ言ひ置きて、「よろづのこただこの御心にのみ任せて、ありつる世に変はらで仕うまつれ」とのみ明け暮れ言ひけり。女君、心憂き宿世ありて、この人にさへ後れて、いかなるさまにはふれ惑ふべきにかあらむ、と思ひ嘆きたまふを見るに、「命の限りあるものなれば、惜しみとどむべき方もなし。いかでかこの人の御ために残し置く魂もがな。わが子どもの心も知らぬを」と、うしろめたう悲しきことに言ひ思へど、心にえとどめぬものにて亡せぬ。しばしこそ、「さのたまひしものを」など情けつくれど、うはべこそあれ、つらきこと多かり。とあるもかかるも世のことわりなれば、身一つの憂きことにて嘆き明かし暮らす。ただこの河内守のみぞ、昔より好き心ありてすこし情けがりける。「あはれにのたまひ置きし、数ならずとも、思し疎までのたまはせよ」など追従し寄りて、いとあさましき心の見えければ、憂き宿世ある身に、かく生きとまりて、果て果てはめづらしきことどもを聞き添ふるかな、と人知れず思ひ知りて、人にさなむとも知らせで、尼になりにけり。ある人びといふかひなしと思ひ嘆く。守もいとつらう、「おのれを厭ひたまふほどに、残りの御齡は多くものしたまふらむ、いかでか過ぐしたまふべき」などぞ、あいなさかしらや、などぞはべるめる。

え知りたまはじかしと思ふに、いとかひなし。

石山より出でたまふ御迎へに右衛門佐参りてぞ、まかり過ぎしかしこまりな
ど申す。昔童にていとむつまじうらうたきものにしたまひしかば、かうぶりな
ど得しまで、この御徳に隠れたりしを、おぼえぬ世の騒ぎありしころ、もの
聞こえに憚りて常陸に下りしをぞ、すこし心置きて年ごろは思しけれど、色に
も出だしたまはず、昔のやうにこそあらねど、なほ親しき家人のうちには数へ
たまひけり。紀伊守といひしも、今は河内の守にぞなりにける。その弟の右近
の将監解けて御供に下りしをぞとりわきてなし出でたまひければ、それにぞ誰
も思ひ知りて、などですこしも世に従ふ心をつかひけむ、など思ひ出でける。
佐召し寄せて御消息あり。今は思し忘れぬべきことを、心長くもおはするかな、
と思ひるたり。

一日は契り知られしを、さは思し知りけむや。

わくらばに行き逢ふ道を頼みしもなほかひなしや潮ならぬ海

関守の、さもうらやましくめざましかりしかな。

とあり。「年ごろのとだえもうひうひしくなりにけれど、心にはいつとなくた
だ今の心地するならひになむ。好き好きしういとど憎まれむや」とて賜へれば、
かたじけなくて持て行きて、「なほ聞こえたまへ。昔にはすこし思しのくこと
あらむと思ひたまふるに、同じやうなる御心のなつかしさなむいとどありがた
き。すさびごとぞ用なきことと思へど、えこそすくよかに聞こえ返さね。女に
ては負けきこえたまへらむに、罪ゆるされぬべし」など言ふ。今はましていと
恥づかしうよろづのことうひうひしき心地すれど、めづらしきにや、え忍ばれ
ざりけむ、

逢坂の関やいかなる関なればしげき嘆きの仲を分くらむ

夢のやうになむ。

伊予介といひしは、故院崩れさせたまひてまたの年、常陸になりて下りしかば、かの帚木もいざなはれにけり。須磨の御旅居も遙かに聞きて、人知れず思ひやりきこえぬにしもあらざりしかど、伝へ聞こゆべきよすがだになくて、筑波嶺の山を吹き越す風も浮きたる心地して、いささかの伝へだになくて年月かさなりにけり。限れることもなかりし御旅居なれど、京に帰り住みたまひてまたの年の秋ぞ、常陸は上りける。

関入る日しも、この殿、石山に御願果しに詣でたまひけり。京よりの紀伊の守などいひし子ども、迎へに来たる人びと、この殿かく詣でたまふべしと告げければ、道のほど騒がしかりなむものぞとて、まだ暁より急ぎけるを、女車多く、所狭うゆるぎ来るに、日たけぬ。打出の浜来るほどに、「殿は粟田山越えたまひぬ」とて、御前の人びと、道もさりあへず来込みぬれば、関山に皆下りゐて、ここかしこの杉の下に車どもかき下ろし、木隠れに居かしこまりて過ぐしたてまつる。車などかたへは後らかし、先に立てなどしたれど、なほ類広く見ゆ。車十ばかりぞ、袖口、物の色あひなども漏り出でて見えたる、田舎びずよしありて、齋宮の御下りなにぞやうの折の物見車思し出でらる。殿もかく世に榮え出でたまふめづらしさに、数もなき御前ども、皆目とどめたり。九月つごもりなれば、紅葉の色々こきませ、霜枯れの草むらむらをかしう見えわたるに、関屋よりさとくづれ出でたる旅姿どもの、色々の襖のつきづきしき縫物、括り染めのさまもさるかたにをかしう見ゆ。御車は簾下ろしたまひて、かの昔の小君、今右衛門佐なるを召し寄せて、「今日の御関迎へは、え思ひ捨てたまはじ」などのたまふ。御心のうちいとあはれに思し出づること多かれど、おほぞうにてかひなし。女も、人知れず昔のこと忘れねば、とりかへしてもものあはれなり。

行くと来とせき止めがたき涙をや絶えぬ清水と人は見るらむ

関
屋

らはしげにもてなしきこえたまはず。かの大弐の北の方上りて驚き思へるさま、侍従がうれしきものの、今しばし待ちきこえざりける心浅さを恥づかしく思へるほどなどを、今すこし問はず語りもせまほしけれど、いと頭いたううるさくもの憂ければなむ。今またもついであらむ折に、思ひ出でて聞こゆべきとぞ。

かに思し寄りて、むつまじき人びとに仰せ言賜ひ、下部どもなど遣はして、蓬
払はせ、めぐりの見苦しきに板垣といふものうち堅め繕はせたまふ。かう尋ね
出でたまへりと聞き伝へむにつけても、わが御ため面目なければ渡りたまふこ
とはなし。御文いとこまやかに書きたまひて、二条院近き所を造らせたまふを、
「そこになむ渡したてまつるべき。よろしき童女など求めさぶらはせたまへ」
など、人びとの上まで思しやりつつ、訪らひきこえたまへば、かくあやしき蓬
のもとには置き所なきまで、女ばらも空を仰ぎてなむ、そなたに向きて喜びき
こえける。なげの御すさびにても、おしなべたる世の常の人をば目止め耳立て
たまはず、世にすこしこれと思ほえ、心地にとまる節あるあたりを尋ね寄り
たまふものと人の知りたるに、かく引き違へ、何ごともなのめにだにあらぬ御
ありさまをものめかし出でたまふは、いかなりける御心にかありけむ。これも
昔の契りなめりかし。今は限りとあなづり果てて、さまざまに迷ひ散りあかれ
し上下の人びと、我も我も参らむと争ひ出づる人もあり。心ばへなど、はた埋
もれいたきまでよくおはする御ありさまに心やすくならひて、ことなることな
きなま受領などやうの家にある人は、ならばはずはしたなき心地するもありて、
うちつけの心みえに参り帰り、君はいにしへにもまさりたる御勢のほどにて、
ものの思ひやりもまして添ひたまひにければ、こまやかに思しおきてたるに、
にほひ出でて宮の内やうやう人目見え、木草の葉もただすごくあはれに見えな
されしを、遣水かき払ひ、前裁のもとだちも涼しうしななどして、ことなる
おぼえなき下家司のことに仕へまほしきは、かく御心とどめて思さるることな
めりと見取りて、御けしき賜はりつつ追従し仕うまつる。

二年ばかりこの古宮に眺めたまひて、東の院といふ所になむ、後は渡したて
まつりたまひける。対面したまふことなどはいとかたけれど、近きしめのほど
にて、おほかたにも渡りたまふに、さしのぞきなどしたまひつつ、いとあなづ

む言ひしに違ふ罪も負ふべき」など、さしも思されぬことも、情け情けしう聞こえなしたまふことどもあむめり。立ちとどまりたまはむも、所のさまよりはじめまばゆき御ありさまなれば、つきづきしうのたまひすぐして出でたまひなむとす。引き植ゑしならねど、松の木高くなりにはける年月のほどもあはれに、夢のやうなる御身のありさまも思し続けらる。

「藤波のうち過ぎがたく見えつるは松こそ宿のしるしなりけれ

数ふればこよなう積もりぬらむかし。都に變はりにけることの多かりけるも、さまざまあはれになむ。今のどかにぞ鄙の別れに衰へし世の物語も聞こえ尽くすべき。年経たまへらむ春秋の暮らしがたさなども、誰にかは愁へたまはむとすらもなくおぼゆるも、かつはあやしうなむ」など聞こえたまへば、

年を経て待つしるしなきわが宿を花のたよりに過ぎぬばかりか

と忍びやかにうちみじろきたまへるけはひも、袖の香も、昔よりはねびまさりたまへるにやと思さる。月入り方になりて、西の妻戸の開きたるより、障はるべき渡殿だつ屋もなく、軒のつまも残りなければ、いとほなやかにさし入りたれば、あたりあたり見ゆるに、昔に變はらぬ御しつらひのさまなど、忍草にやつれたる上の見るめよりはみやびかに見ゆるを、昔物語に、塔こぼちたる人もありけるを思しあはするに、同じさまにて年古りにけるもあはれなり。ひたぶるにもものづつみしたるけはひのさすがにあてやかなるも、心にくく思されて、さる方にて忘れじと心苦しく思ひしを、年ごろさまさまのもの思ひにほればれしくて隔てつるほど、つらしと思はれつらむと、いとほしく思す。かの花散里も、あざやかに今めかしうなどは花やぎたまはぬ所にて、御目移しこよなからぬに、咎多う隠れにけり。

祭、御禊などのほど、御いそぎどもにことつけて、人のたてまつりたる物いろいろに多かるを、さるべき限り御心加へたまふ。中にも、この宮にはこまや

いと聞こえまほしけれど、見たまひしほどの口遅さもまだ変らずは、御使の立ちわづらはむもいとほしう、思しとどめつ。惟光も、「さらにえ分けさせたまふまじき蓬の露けさになむはべる。露すこし払はせてなむ入らせたまふべき」と聞こゆれば、

尋ねても我こそとはめ道もなく深き蓬のもとの心を

と独りごちて、なほ下りたまへば、御先の露を馬の鞭して払ひつつ入れたてまつる。雨そそきも、なほ秋の時雨めきてうちそそけば、「御傘さぶらふ。げに木の下露は雨にまさりて」と聞こゆ。御指貫の裾はいたうそほちぬめり。昔だにあるかなきかなりし中門など、まして形もなくなりて、入りたまふにつけてもいと無徳なるを、立ちまじり見る人なきぞ心やすかりける。

姫君は、さりととも待ち過ぐしたまへる心もしるくうれしけれど、いと恥づかしき御ありさまにて対面せむもいとつつましく思したり。大弐の北の方のたてまつり置きし御衣どもをも、心ゆかず思されしゆかりに、見入れたまはざりけるを、この人びとの香の御唐櫃に入れたりけるがいとつかしき香したるをたてまつりければ、いかがはせむに着替へたまひて、かの煤けたる御几帳引き寄せておはす。入りたまひて、「年ごろの隔てにも、心ばかりは変はらずなむ思ひやりきこえつるを、さしもおどろかいたまはぬ恨めしさに、今までこころみきこえつるを、杉ならぬ木立のしるさにえ過ぎでなむ負けきこえにける」とて、帷子をすこしかきやりたまへれば、例の、いとつつましげに、とみにもいらへきこえたまはず。かくばかり分け入りたまへるが浅からぬに、思ひ起こしてぞほのかに聞こえ出でたまひける。「かかる草隠れに過ぐしたまひける年月のあはれもおろかならず、また変はらぬ心ならひに、人の御心のうちもたどり知らずながら、分け入りはべりつる露けさなどをいかが思す。年ごろのおこたり、はた、なべての世に思しゆるすらむ。今よりのちの御心になはざらむな

り参るほどに、月明かくさし出でたるに見れば、格子二間ばかり上げて、簾動くけしきなり。わづかに見つけたる心地、恐ろしくさへおぼゆれど、寄りて声づくれば、いともの古りたる声にて、まづしはぶきを先にたてて、「かれは誰れぞ。何人ぞ」と問ふ。名のりして、「侍従の君と聞こえし人に対面賜はらむ」と言ふ。「それはほかになむものしたまふ。されど思しわくまじき女なむはべる」と言ふ声、いたうねび過ぎたれど、聞きし老人と聞き知りたり。内には、思ひも寄らず、狩衣姿なる男、忍びやかに、もてなしなごやかなれば、見ならばずなりにける目にて、もし狐などの変化にやとおぼゆれど、近う寄りて、「たしかになむうけたまはらまほしき。変はらぬ御ありさまならば尋ねきこえさせたまふべき御心ざしも絶えずなむおはしますめるかし。今宵も行き過ぎがてにとまらせたまへるを、いかが聞こえさせむ。うしろやすくを」と言へば、女どもうち笑ひて、「変はらせたまふ御ありさまならば、かかる浅茅が原を移ろひたまはでははべりなむや。ただ推し量りて聞こえさせたまへかし。年経たる人の心にも、たぐひあらじとのみ、めづらかなる世をこそは見たてまつり過ごしはべる」と、ややくづし出でて、問はず語りもしつべきがむつかしければ、「よしよし。まづかくなむ聞こえさせむ」とて参りぬ。

「などかいと久しかりつる。いかにぞ。昔のあとも見えぬ蓬のしげさかな」とのたまへば、「しかしかなむただり寄りてはべりつる。侍従が叔母の少将といひはべりし老い人なむ、変はらぬ声にてはべりつる」とありさま聞こゆ。いみじうあはれに、かかるしげき中に、何心地して過ぐしたまふらむ、今まで問はざりけるよ、とわが御心の情けなきも思し知らる。「いかがすべき。かかる忍びあるきも難かるべきを、かかるついでならではえ立ち寄らじ。変はらぬありさまならば、げにさこそはあらめと推し量らるる人さまになむ」とはのたまひながら、ふと入りたまはむこと、なほつつましう思さる。ゆゑある御消息も

さびしくもの悲しく思さる。かの殿には、めづらし人に、いとどもの騒がしき御ありさまにて、いとやむごとなく思されぬ所々には、わぎともえ訪れたまはず。まして、その人はまだ世にやおはすらむとばかり思し出づる折もあれど、尋ねたまふべき御心ざしも急がであり経るに、年変はりぬ。

卯月ばかりに、花散里を思ひ出できこえたまひて、忍びて、対の上に御暇聞こえて出でたまふ。日ごろ降りつる名残の雨いますこしそそきて、をかしきほどに月さし出でたり。昔の御ありき思し出でられて、艶なるほどの夕月夜に、道のほどよろづのこと思し出でておはするに、形もなく荒れたる家の木立しげく森のやうなるを過ぎたまふ。大きな松に藤の咲きかかりて、月影になよびたる、風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなき香りなり。橘に変はりてをかしければ、さし出でたまへるに、柳もいたうしだりて、築地も障はらねば乱れ伏したり。見し心地する木立かなと思すは、早うこの宮なりけり。いとあはれにておしとどめさせたまふ。例の惟光は、かかる御忍びありきに後れねばさぶらひけり。召し寄せて、「ここは常陸の宮ぞかしな」「しかはべる」と聞こゆ。「ここにありし人はまだや眺むらむ。訪らふべきを、わぎともものせむも所狭し。かかるついでに入りて消息せよ。よく尋ね入りてをうち出でよ。人違へしてはをこならむ」とのたまふ。ここには、いとど眺めまざるころにて、つくづくとおはしけるに、昼寝の夢に故宮の見えたまひければ、覚めていと名残悲しく思して、漏り濡れたる廂の端つ方おし拭はせて、ここかしこの御座引きつくろはせなどしつつ、例ならず世づきたまひて、

亡き人を恋ふる袂のひまなきに荒れたる軒のしづくさへ添ふも心苦しきほどになむありける。

惟光入りて、めぐるめぐる人の音する方やと見るに、いささかの人気もせず。さればこそ、往き来の道に見入るれど、人住みげもなきものを、と思ひて、帰

るも心苦しくなむ」と忍びて聞こゆ。この人さへうち捨ててむとするを、恨めしうもあはれにも思せど、言ひとどむべき方もなくて、いとど音をのみたけきことにてものしたまふ。形見に添へたまふべき身馴れ衣もしほなれたれば、年経ぬるしるし見せたまふべきものなくて、わが御髪の落ちたりけるを取り集めて鬘にしたまへるが、九尺余ばかりにていときよらなるを、をかしげなる箱に入れて、昔の薰衣香のいとかうばしき一壺具して賜ふ。

「絶ゆまじき筋を頼みし玉かづら思ひのほかにかけ離れぬる

故ままののたまひ置きしこともありしかば、かひなき身なりとも見果ててむとこそ思ひつれ、うち捨てらるるもことわりなれど、誰に見ゆづりてか、と恨めしうなむ」とて、いみじう泣いたまふ。この人も、ものも聞こえやらす。「ままの遺言はさらにも聞こえさせず、年ごろの忍びがたき世の憂さを過ぐしはべりつるに、かくおぼえぬ道にいぎなはれて、遙かにまかりあくがるること」とて、

「玉かづら絶えてもやまじ行く道の手向の神もかけて誓はむ

命こそ知りはべらね」など言ふに、「いづら、暗うなりぬ」とつぶやかれて、心も空にて引き出づれば、かへり見のみせられける。年ごろわびつつも行き離れざりつる人のかく別れぬることを、いと心細う思すに、世に用ゐらるまじき老い人さへ、「いでや、ことわりぞ。いかでか立ちとまりたまはむ。われらもえこそ念じ果つまじけれ」と、おのが身々につけたるたよりども思ひ出でて、とまるまじう思へるを、人わろく聞きおはす。

霜月ばかりになれば、雪霰がちにて、ほかには消ゆる間もあるを、朝日夕日をふせぐ蓬葎の蔭に深う積もりて、越の白山思ひやらるる雪のうちに、出で入る下人だになくて、つれづれと眺めたまふ。はかなきことを聞こえ慰め、泣きみ笑ひみ紛らはしつる人さへなくて、夜も塵がましき御帳のうちも、かたはら

御みづからこそあからさまにも渡らせたまはね、この人をだに許させたまへとてなむ。なかうあはれげなるさまには」とて、うちも泣くべきぞかし、されど、行く道に心をやりていと心地よげなり。「故宮おはせしとき、おのれをば面伏せなりと思し捨てたりしかば、疎々しきやうになりそめにしかど、年ごろも何かは。やむごとなきさまに思しあがり、大将殿などおはしまし通ふ御宿世のほどをかたじけなく思ひたまへられしかばなむ、むつびきこえさせむも憚ること多くて過ぐしはべるを、世の中のかく定めもなかりければ、数ならぬ身はなかなか心やすくはべるものなりけり。及びなく見たてまつりし御ありさまのいと悲しく心苦しきを、近きほどはおこたる折ものどかに頼もしくなむはべりけるを、かく遙かにまかりなむとすれば、うしろめたくあはれになむおぼえたまふ」など語らへど、心解けてもいらへたまはず。「いとうれしきことなれど、世に似ぬさまにて、何かは。かうながらこそ朽ちも失せめとなむ思ひはべる」とのみのたまへば、「げに、しかなむ思さるべけれど、生ける身を捨て、かくむくつけき住まひするたぐひははべらずやあらむ。大将殿の造り磨きたまはむにこそは、引きかへ玉の台にもなりかへらめとは頼もしいはべれど、ただ今は式部卿宮の御むすめよりほかに心分けたまふ方もなかなり。昔より好き好きしき御心にて、なほざりに通ひたまひける所々、皆思し離れにたなり。ましてかうものはかなきさまにて藪原に過ぐしたまへる人をば、心きよく我を頼みたまへるありさまと、尋ねきこえたまふこととかたくなむあるべき」など言ひ知らするを、げにと思すもいと悲しくて、つくづくと泣きたまふ。

されど動くべうもあらねば、よろづに言ひわづらひ暮らして、「さらば、侍従をだに」と日の暮るるままに急げば、心あわたたしくて、泣く泣く、「さらば、まづ今日は、かう責めたまふ送りばかりにまうではべらむ。かの聞こえたまふもことわりなり。また思しわづらふもさることにはべれば、中に見たまふ

側目などは、おぼろけの人の見たてまつりゆるすべきにもあらずかし。詳しくは聞こえじ。いとほしうもの言ひさがなきやうなり。

冬になりゆくままに、いとどかき付かむかたなく悲しげに眺め過ごしたまふ。かの殿には、故院の御料の御八講、世の中ゆすりてしたまふ。ことに僧などは、なべてのは召さず、才すぐれ行なひにしみ、尊き限りを選らせたまひければ、この禅師の君参りたまへりけり。帰りざまに立ち寄りたまひて、「しかしか。権大納言殿の御八講に参りてはべるなり。いとかしこう、生ける浄土の飾りに劣らず、いかめしうおもしろきことどもの限りをなむしたまひつる。仏菩薩の変化の身にこそものしたまふめれ。五つの濁り深き世に、などて生まれたまひけむ」と言ひて、やがて出でたまひぬ。言少なに、世の人に似ぬ御あはひにて、かひなき世の物語をだにえ聞こえ合はせたまはず。さても、かばかりつたなき身のありさまを、あはれにおぼつかなくて過ぐしたまふは、心憂の仏菩薩や、とつらうおぼゆるを、げに限りなめり、とやうやう思ひなりたまふに、大弐の北の方、にはかに来たり。

例はさしもむつびぬを、誘ひ立てむの心にて、たてまつるべき御装束など調じて、よき車に乗りて、面もちけしきほこりに、もの思ひなげなるさまして、ゆくりもなく走り来て、門開けさするより人わろく寂しきこと限りもなし。左の戸もみなよろほひ倒れにければ、男ども助けてとかく開け騒ぐ。いづれか、この寂しき宿にもかならず分けたる跡あなる三つの径、とたどる。わづかに南面の格子上げたる間に寄せたれば、いとどはしたなしと思したれど、あさましう煤けたる几帳さし出でて、侍従出で来たり。かたちなど衰へにけり。年ごろいたうつひえたれど、なほものきよげによしあるさまして、かたじけなくとも、取り変へつべく見ゆ。「出で立ちなむことを思ひながら、心苦しきありさまの見捨てたてまつりがたきを、侍従の迎へになむ参り来たる。心憂く思し隔てて、

に、さらに思ひ出でたまふけしき見えで月日経ぬ。今は限りなりけり、年ごろあらぬさまなる御さまを、悲しいみじきことを思ひながらも、萌え出づる春に逢ひたまはなむと念じわたりつれど、たびしかはらなどまで喜び思ふなる御位改まりなどするを、よそにのみ聞くべきなりけり、悲しかりし折のうれしさは、ただわが身一つのためになれるとおぼえし、かひなき世かな、と心くだけてつらく悲しければ、人知れず音をのみ泣きたまふ。大弐の北の方、さればよ、まさにかくたづきなく人わろき御ありさまを、数まへたまふ人はありなむや、仏、聖も罪軽きをこそ導きよくしたまふなれ、かかる御ありさまにて、たけく世を思し、宮、上などのおはせし時のままにならひたまへる御心おごりのいとほしきこと、といとどをこがましげに思ひて、「なほ思ほし立ちね。世の憂き時は見えぬ山路をこそは尋ぬなれ。田舎などはむつかしきものと思しやるらめど、ひたぶるに人わろげには、よももてなしきこえじ」など、いと言よく言へば、むげに屈んじにたる女ばら、「さもなびきたまはなむ。たけきこともあるまじき御身を、いかに思してかく立てたる御心ならむ」ともどきつぶやく。

侍従も、かの大弐の甥だつ人語らひつきて、とどむべくもあらざりければ、心よりほかに出で立ちて、「見たてまつり置かむが、いと心苦しきを」とてそのかしきこゆれど、なほかくかけ離れて久しうなりたまひぬる人に頼みをかけたまふ。御心のうちに、さりとも、あり経ても思し出づるついであらじやは、あはれに心深き契りをしたまひしに、わが身は憂くて、かく忘られたるにこそあれ、風の一つにてても、我かくいみじきありさまを聞きつけたまはば、かならず訪らひ出でたまひてむ、と年ごろ思しければ、おほかたの御家居も、ありしよりけにあさましけれど、わが心もて、はかなき御調度どもも取り失はせたまはず、心強く同じさまにて念じ過ごしたまふなりけり。音泣きがちに、いとど思し沈みたるは、ただ山人の赤き木の実一つを顔に放たぬと見えたまふ御

り。娘どもかしづきて、よろしき若人どももむげに知らぬ所よりは、親どもも
 まうで通ひしをと思ひて、時々行き通ふ。この姫君は、かく人疎き御癖なれば、
 むつましくも言ひ通ひたまはず。「おのれをばおとしめたまひて、面伏せに思
 したりしかば、姫君の御ありさまの心苦しげなるも、え訪らひきこえず」など、
 なま憎げなる言葉ども言ひ聞かせつつ、時々聞こえけり。もとよりありつきた
 るさやうの並々の人は、なかなかよき人の真似に心をつくろひ思ひ上がるも多
 かるを、やむごとなき筋ながらも、かうまで落つべき宿世ありければにや、心
 すこしなほなほしき御叔母にぞありける。わがかく劣りのさまにて、あなづら
 はしく思はれたりしを、いかでかかる世の末に、この君をわが娘どもの使ひ人
 になしてしがな、心ばせなどの古びたる方こそあれ、いとうしろやすき後見な
 らむ、と思ひて、「時々ここに渡らせたまひて、御琴の音もうけたまはらまほ
 しがる人なむはべる」と聞こえけり。この侍従も常に言ひもよほせど、人にい
 どむ心にはあらで、ただこちたき御ものづつみなれば、さもむつびたまはぬを、
 ねたしとなむ思ひける。

かかるほどに、かの家主、大弐になりぬ。娘どもあるべきさまに見置きて、
 下りなむとす。この君をなほも誘はむの心深くて、「はるかにかくまかりなむ
 とするに、心細き御ありさまの、常にしも訪らひきこえねど、近き頼みはべり
 つるほどこそあれ、いとあはれにうしろめたくなむ」など言よがるを、さらに
 受け引きたまはねば、「あな憎。ことごとしや。心一つに思し上がるとも、さ
 る藪原に年経たまふ人を、大将殿もやむごとなくしも思ひきこえたまはじ」な
 ど怨じうけひけり。さるほどに、げに世の中に赦されたまひて、都に帰りたま
 ふと天の下の喜びにて立ち騒ぐ。我もいかで人より先に深き心ざしを御覽ぜら
 れむとのみ思ひきほふをとこ女につけて、高きをも下れるをも、人の心ばへを
 見たまふに、あはれに思し知ることさまざまなり。かやうにあわたたしきほど

りの垣を馬牛などの踏みならしたる道にて、春夏になれば、放ち飼ふ総角の心さへぞめざましき。八月、野分荒かりし年、廊どもも倒れ伏し、下の屋どものはかなき板葺なりしなどは、骨のみわづかに残りて、立ちとまる下衆だになし。煙絶えて、あはれにしみじきこと多かり。盗人などいふひたぶる心ある者も、思ひやりの寂しければにや、この宮をば不要のものに踏み過ぎて寄り来ざりければ、かくいみじき野良藪なれども、さすがに寝殿のうちばかりは、ありし御しつらひ変らず、つややかに掻い掃きなどする人もなし。塵は積もれど、紛るることなきうるはしき御住まひにて明かし暮らしたまふ。

はかなき古歌、物語などやうのすさびごとにてこそ、つれづれをも紛らはし、かかる住まひをも思ひ慰むるわざなめれ、さやうのことにも心遅くものしたまふ。わざと好ましからねど、おのづからまた急ぐことなきほどは、同じ心なる文通はしなどうちしてこそ、若き人は本草につけても心を慰めたまふべけれど、親のもてかしづきたまひし御心掟のままに、世の中をつつましきものに思ひて、まれにも言通ひたまふべき御あたりをもさらに馴れたまはず、古りにたる御厨子開けて、唐守、藐姑射の刀自、かぐや姫の物語の絵にかきたるをぞ、時々のみまぎりものにしたまふ。古歌とても、をかしきやうに選り出で、題をもよみ人をもあらはし心得たるこそ見所もありけれ、うるはしき紙屋紙、陸奥国紙などのふくだめるに、古言どもの目馴れたるなどはいとすさまじげなるを、せめて眺めたまふ折々は、ひき広げたまふ。今の世の人のすめる、経うち読み、行なひなどいふことはいと恥づかしくしたまひて、見たてまつる人もなければ、数珠など取り寄せたまはず。かやうにうるはしくぞものしたまひける。

侍従などいひし御乳母子のみこそ、年ごろあくがれ果てぬ者にてさぶらひつれど、通ひ参りし齋院亡せたまひなどして、いと堪へがたく心細きに、この姫君の母北の方のはらから、世におちぶれて受領の北の方になりたまへるありけ

もとより荒れたりし宮の内、いとど狐の棲みかになりて、うとましう氣遠き木立に、ふくろふの声を朝夕に耳ならしつ、人氣にこそさやうのものもせかれて影隠しけれ、木霊などけしからぬものども、所得て、やうやう形を現はし、ものわびしきことのみ数知らぬに、まれまれ残りてさぶらふ人は、「なほいとわりなし。この受領どものおもしろき家造り好むが、この宮の木立を心につけて、「放ちたまはせてむや」と、ほとりにつきて案内し申さするを、さやうにせさせたまひて、いとかうもの恐ろしからぬ御住まひに、思し移ろはなむ。立ちとまりさぶらふ人も、いと堪へがたし」など聞こゆれど、「あないみじや。人の聞き思はむこともあり。生ける世に、しか名残なきわざいがせむ。かく恐ろしげに荒れ果てぬれど、親の御影とまりたる心地する古き住みかと思ふに慰みてこそあれ」とうち泣きつつ思しもかけず。御調度どもを、いと古体になれたるが昔やうにてうるはしきを、なまもののゆゑ知らむと思へる人、さるもの要じて、わざとその人かの人にせさせたまへると尋ね聞きて案内するも、おのづからかかる貧しきあたりと思ひあなづりて言ひ来るを、例の女ばら、「いかがはせむ。そこそは世の常のこと」とて、取り紛らはしつつ、目に近き今日明日の見苦しさを繕はむとする時もあるを、いみじう諫めたまひて、「見よと思ひたまひてこそしおかせたまひけめ。などでか軽々しき人の家の飾りとはなさむ。亡き人の御本意違はむがあらはれること」とのたまひて、さるわざはせさせたまはず。はかなきことにても、見訪らひきこゆる人はなき御身なり。ただ御兄の禅師の君ばかりぞ、まれにも京に出でたまふ時はさしのぞきたまへど、それも世になき古めき人にて、同じき法師といふなかにも、たづきなくこの世を離れたる聖にもものしたまひて、しげき草蓬をだにかき払はむものとも思ひ寄りたまはず。かかるままに、浅茅は庭の面も見えず、しげき蓬は軒を争ひて生ひのぼる。葎は西東の御門を閉ぢこめたるぞ頼もしけれど、崩れがちなるめぐ

藻塩垂れつつわびたまひしころほひ、都にもさまさまに思し嘆く人多かりしを、さてもわが御身の抛り所あるは、一方の思ひこそ苦しげなりしか、二条の上などものどやかにて、旅の御住みかをもおぼつかかなからず聞こえ通ひたまひつつ、位を去りたまへる仮の御よそひをも、竹の子の世の憂き節を、時々につけてあつかひきこえたまふに慰めたまひけむ、なかなかその数と人にも知られず、立ち別れたまひしほどの御ありさまをもよそのことに思ひやりたまふ人びとの、下の心くだきたまふたぐひ多かり。

常陸の宮の君は、父親王の亡せたまひにし名残に、また思ひあつかふ人もなき御身にていみじう心細げなりしを、思ひかけぬ御ことの出で来て、訪らひきこえたまふこと絶えざりしを、いかめしき御勢にこそ、ことにもあらずはかなきほどの御情けばかりと思したりしかど、待ち受けたまふ袂の狭きに、大空の星の光を鹽の水に映したる心地して過ぐしたまひしほどに、かかる世の騒ぎ出で来て、なべての世憂く思し乱れしまぎれに、わぎと深からぬ方の心ざしはうち忘れたるやうにて、遠くおはしましにしのち、ふりはへてもえ尋ねきこえたまはず。その名残にしはしは泣く泣くも過ぐしたまひしを、年月经るままに、あはれにさびしき御ありさまなり。古き女ばらなどは、「いでや、いと口惜しき御宿世なりけり。おぼえず神仏の現はれたまへらむやうなりし御心ばへに、かかるよすがも人は出でおはするものなりけり、とありがたう見たてまつりしを、おほかたの世の事といひながら、また頼む方なき御ありさまこそ悲しけれ」とつぶやき嘆く。さる方にありつきたりしあなたの年ごろは、いふかひなきさびしさに目なれて過ぐしたまふを、なかなかすこし世づきてならひにける年月に、いと堪へがたく思ひ嘆くべし。すこしもさてありぬべき人びとは、おのづから参りつきてありしを、皆次々に従ひて行き散りぬ。女ばらの命堪へぬもありて、月日に従ひては、上下人数少なくなりゆく。

蓬

生

いみじく笑ひたまふ。「まろがかくかたはになりなむ時、いかならむ」とのたまへば、「うたてこそあらめ」とて、さもや染みつかむとあやふく思ひたまへり。そら拭ごひをして、「さらにこそ白まね。用なきすさびわざなりや。内にいかにのたまはむとすらむ」と、いとまめやかにのたまふを、いといとほしと思して、寄りて拭ごひたまへば、「平中がやうに色どり添へたまふな。赤からむはあへなむ」と戯れたまふさま、いとをかしき妹背と見えたまへり。日のいとうらかなるに、いつしかと霞みわたれる梢どもの心もとなきなかにも、梅はけしきばみほほ笑みわたれる、とりわきて見ゆ。階隠のもと紅梅、いととく咲く花にて、色づきにけり。

「くれなるの花ぞあやなくうとまるる梅の立ち枝はなつかしけれど

いでや」と、あいなくうちうめかれたまふ。かかる人びとの末々いかなりけむ。

すこしさし出でて、かたはら臥したまへる頭つき、こぼれ出でたるほど、いとめでたし。生ひなほりを見出でたらむ時と思されて、格子引き上げたまへり。いとほしかりしもの懲りに、上げも果てたまはで、脇息をおし寄せて、うちかけて、御鬢ぐきのしどけなきをつくろひたまふ。わりなう古めきたる鏡台の、唐櫛笥、搔上の箱など取り出でたり。さすがに男の御具さへほのぼのあるを、されてをかしと見たまふ。女の御装束、今日は世づきたりと見ゆるは、ありし箱の心葉をさながらなりけり。さも思しよらず、興ある紋つきてしるき表着ばかりぞ、あやしと思しける。「今年だに声すこし聞かせたまへかし。侍たるるものはさし置かれて、御けしきの改まらむなむゆかしき」とのたまへば、「さへづる春は」と、からうしてわななかし出でたり。「さりや。年経ぬるしるしよ」とうち笑ひたまひて、「夢かとぞ見る」とうち誦じて出でたまふを、見送りて添ひ臥したまへり。口おほひの側目より、なほかの末摘花、いとにほひやかにさし出でたり。見苦しのわざやと思さる。

二条の院におはしたれば、紫の君、いともうつくしき片生ひにて、紅はかうなつかしきもありけりと見ゆるに、無紋の桜の細長なよらかに着なして、何心もなくてもものしたまふさま、いみじうらうたし。古体のをば君の御なごりにて、齒黒めもまだしかりけるを、ひきつくろはせたまへれば、眉のけぎやかになりたるも、うつくしうきよらなり。心から、なかかう憂き世を見あつかふらむ、かく心苦しきものをも見てゐたらで、と思しつつ、例の、もろともに雛遊びしたまふ。絵などかきて、色どりたまふ。よろづにをかしうすさび散らしたまひけり。我もかき添へたまふ。髪いと長き女をかきたまひて、鼻に紅をつけて見たまふに、かたにかきても見ま憂きさましたり。わが御影の鏡台にうつれるが、いときよらなるを見たまひて、手づからこの赤鼻をかきつけ、にははして見たまふに、かくよき顔だに、さてまじれらむは見苦しかるべかりけり。姫君見て、

と、歌ひすさびて出でたまひぬるを、命婦はいとをかしと思ふ。心知らぬ人びとは、「なぞ、御ひとりゑみは」ととがめあへり。「あらず。寒き霜朝に、搔練好める花の色あひや見えつらむ。御つづしり歌のいとほしき」と言へば、「あながちなる御ことかな。このなかには、にほへる花もなかめり。左近の命婦、肥後の采女や混じらひつらむ」など心も得ず言ひしろふ。御返りたてまつりたれば、宮には女房つどひて見めでけり。

逢はぬ夜をへだつるなかの衣手に重ねていとど見もし見よとや
白き紙に捨て書いたまへるしもぞ、なかなかをかしげなる。

つごもりの日、夕つ方、かの御衣箱に、御料とて人のたてまつれる御衣一くだり、葡萄染の織物の御衣、また山吹か何ぞいろいろ見えて、命婦ぞたてまつりたる。ありし色あひをわろしとや見たまひけむと思ひ知らるれど、「かれはた、紅の重々しかりしをや。さりとも消えじ」と、ねび人どもは定むる。「御歌も、これよりのは、ことわり聞こえてしたたかにこそあれ。御返りは、ただをかしき方にこそ」など口々に言ふ。姫君も、おぼろけならでし出でたまひつるわざなれば、ものに書きつけて置きたまへりけり。

ついたちのほど過ぎて、今年、男踏歌あるべければ、例の、所々遊びののしりたまふにも騒がしけれど、寂しき所のははれに思しやられるれば、七日日の節会果てて、夜に入りて御前よりまかだたまひけるを、御宿直所にやがてとまりたまひぬるやうにて、夜更かしておはしたり。例のありさまよりは、けはひうちそよめき世づいたり。君も、すこしたをやぎたまへるけしきもてつけたまへり。いかにぞ、改めてひき変へたらむ時、とぞ思しつづけらるる。日さし出づるほどに、やすらひなして出でたまふ。東の妻戸おし開けたれば、向ひたる廊の、上もなくあばれたれば、日の脚、ほどなくさし入りて、雪すこし降りたる光に、いとけぎやかに見入れらる。御直衣などたてまつるを見出だして、

らず。ひとり引き籠めはべらむも、人の御心違ひはべるべければ、御覽せさせてこそは」と聞こゆれば、「引き籠められなむは、からかりなまし。袖まきほさむ人もなき身に、いとうれしき心ざしにこそは」とのたまひて、ことにもの言はれたまはず。さてもあさましの口つきや、これこそは手づからの御ことの限りなめれ、侍従こそとり直すべかめれ、また筆のしりとりる博士ぞなかべき、と言ふかひなく思す。心を尽くして詠み出でたまひつらむほどを思すに、「いともかしこき方とは、これをも言ふべかりけり」と、ほほ笑みて見たまふを、命婦、面赤みて見たてまつる。今様色の、えゆるすまじく艶なう古めきたる直衣の、裏表ひとしうこまやかなる、いとなほなほしう、つまづまぞ見えたる、あさましと思すに、この文をひろげながら、端に手習ひすさびたまふを、側目に見れば、

なつかしき色ともなしに何にこのすゑつむ花を袖に触れけむ

色濃き花と見しかども。

など書きけがしたまふ。花のとがめを、なほあるやうあらむと思ひ合はする折々の月影などを、いとほしきものからをかしう思ひなりぬ。

「紅のひと花衣うすくともひたすら朽す名をし立てずは

心苦しの世や」と、いといたう馴れてひとりごつを、よきにはあらねど、かうやうのかいなでにだにあらましかば、と返す返す口惜し。人のほどの心苦しきに、名の朽ちなむはさすがなり。人びと参れば、「取り隠さむや。かかるわざは人のするものにやあらむ」とうちうめきたまふ。何に御覽せさせつらむ、我さへ心なきやうにと、いと恥づかしくてやをら下りぬ。

またの日、上にさぶらへば、台盤所にさしのぞきたまひて、「くはや、昨日の返り事、あやしく心ばみ過ぎる」とて投げたまへり。女房たち、何ごとならむとゆかしがる。「ただ梅の花の色のごと、三笠の山のをとめをば捨てて」

だかに見たまひて後は、なかなかあはれにいみじくて、まめやかなるさまに常に訪れたまふ。黒貂の皮ならぬ絹、綾、綿など、若い人どもの着るべきものたぐひ、かの翁のためまで、上下思しやりてたてまつりたまふ。かやうのまめやかごとも恥づかしげならぬを、心やすく、さる方の後見にて育まむと思ほしとりて、さまことにさならぬうちとけわざもしたまひけり。かの空蟬の、うちとけたりし宵の側目には、いとわろかりしかたちざまなれど、もてなしに隠されて口惜しうはあらざりきかし、劣るべきほどの人なりやは、げに品にもよらぬわざなりけり、心ばせのなだらかにねたげなりしを、負けて止みにしかな、ともの折ごとには思し出づ。

年も暮れぬ。内の宿直所におはしますに、大輔の命婦参れり。御梳櫛などは、懸想だつ筋なく心やすきものの、さすがにのたまひたはぶれなどして、使ひならしたまへれば、召しなき時も聞こゆべき事ある折は参う上りけり。「あやしきことのはべるを、聞こえさせざらむもひがひがしう、思ひたまへわづらひて」と、ほほ笑みて聞こえやらぬを、「何さまのことぞ。我にはつつむことあらじとなむ思ふ」とのたまへば、「いかがは。みづからの愁へは、かしこくともまづこそは。これはいと聞こえさせにくくなむ」と、いたう言籠めたれば、「例の、艶なる」と憎みたまふ。「かの宮よりはべる御文」とて取り出でたり。「ましてこれは取り隠すべきことかは」とて取りたまふも、胸つぶる。陸奥国紙の厚肥えたるに、匂ひばかりは深うしめたまへり。いとよう書きおほせたり。歌も、

唐衣君が心のつらければ袂はかくぞそぼちつつのみ

心得ずうちかたぶきたまへるに、包みに、衣箱の重りかに古体なる、うち置きしておし出でたり。「これを、いかでかはかたはらいたく思ひたまへざらむ。されど、ついたちの御よそひとてわざとはべるめるを、はしたなうはえ返しはべ

とのたまへど、ただ「むむ」とうち笑ひて、いと口重げなるもいとほしければ、出でたまひぬ。

御車寄せたる中門の、いといたうゆがみよろぼひて、夜目にこそしるきながらもよろづ隠ろへたること多かりけれ、いとあはれにさびしく荒れまどへるに、松の雪のみ暖かげに降り積める、山里の心地してもあはれなるを、かの人びとの言ひし葎の門は、かうやうなる所なりけむかし、げに心苦しくうたげならむ人をここに据ゑて、うしろめたう恋しと思はばや、あるまじきもの思ひは、それに紛れなむかし、と、思ふやうなる住みかに合はぬ御ありさまは取るべきかたなし、と思ひながら、我ならぬ人はまして見忍びてむや、わがかうて見馴れけるは、故親王のうしろめたしとたぐへ置きたまひけむ魂のしるべなめり、とぞ思さるる。橘の木の埋もれたる、御隨身召して払はせたまふ。うらやみ顔に松の木のおのれ起きかへりて、さとこぼるる雪も、名に立つ末のと見ゆるなごを、いと深からずとも、なだらかなるほどにあひしらはむ人もがなと見たまふ。御車出づべき門はまだ開けざりければ、鍵の預かり尋ね出でたれば、翁のいといみじきぞ出で来たる。娘にや、孫にや、はしたなる大ききの女の、衣は雪にあひて煤けまどひ、寒しと思へるけしき深うて、あやしきものに火をただほのかに入れて、袖ぐくみに持たり。翁、門をえ開けやらねば、寄りてひき助くる、いとかたくななり。御供の人、寄りてぞ開けつる。

「降りにける頭の雪を見る人も劣らず濡らす朝の袖かな

幼き者は形蔽れず」とうち誦じたまひても、花の色に出でて、いと寒しと見えつる御面影、ふと思ひ出でられて、ほほ笑まれたまふ。頭中將にこれを見せたらむ時、いかなることをよそへ言はむ、常にうかがひ来れば、今見つけられなむと、術なう思す。

世の常なるほどの、異なることなさならば、思ひ捨てても止みぬべきを、さ

れしからむと思すも、あながちなる御心なりや。まづ居丈の高く、を背長に見えたまふに、さればよと胸つぶれぬ。うちつぎて、あなかたはと見ゆるものは鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色づきたること、ことのほかにうたてあり。色は雪恥づかしく白うてさをに、額つきこよなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、おほかたおどろおどろしう長きなるべし。痩せたまへること、いとほしげにさらぼひて、肩のほどなどは、いたげなるまで衣の上まで見ゆ。何に残りなう見あらはしつらむと思ふものから、めづらしきさまのしたれば、さすがにうち見やられたまふ。頭つき髪のかかりはしもうつくしげに、めでたしと思ひきこゆる人びともをさをさ劣るまじう、桂の裾にたまりて引かれたるほど、一尺ばかりあまりたらむと見ゆ。着たまへるものどもをさへ言ひたつるも、もの言ひさがなきやうなれど、昔物語にも人の御装束をこそまづ言ひたためれ。聴し色のわりなう上白みたる一襲、なごりなう黒き桂重ねて、表着には黒貂の皮衣、いとよきに香ばしきを着たまへり。古体のゆゑづきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御よそひには似げなうおどろおどろしきこと、いともてはやされたり。されど、げにこの皮なうては寒からましと見ゆる御顔ざまなるを、心苦しと見たまふ。何ごとも言はれたまはず、我さへ口閉ぢたる心地したまへど、例のしじまも心みむと、とかう聞こえたまふに、いたう恥ぢらひて、口おほひしたまへるさへひなび古めかしう、ことごとしく儀式官の練り出でたる肘もちおぼえて、さすがにうち笑みたまへるけしき、はしたなうすずろびたり。いとほしくあはれにて、いとど急ぎ出でたまふ。「頼もしき人なき御ありさまを、見そめたる人には、疎からず思ひむつびたまはむこそ本意ある心地すべけれ、ゆるしなき御けしきなれば、つらう」などことつけて、

朝日さす軒の垂氷は解けながらなかつららの結ぼほるらむ

所のほどに、かかる者どもあるはや、とをかし。かけても、人のあたりに近うふるまふ者とも知りたまはざりけり。「あはれ、さも寒き年かな。命長ければ、かかる世にもあふものなりけり」とてうち泣くもあり。「故宮おはしましし世を、などてからしと思ひけむ。かく頼みなくても過ぐるものなりけり」とて、飛び立ちぬべくふるふもあり。さまざまに人わろきことどもを愁へあへるを、聞きたまふもかたはらいたければ、たちのきて、ただ今おはするやうにてうちたたきたまふ。「そそや」など言ひて、火とり直し、格子放ちて入れたてまつる。侍従は齋院に参り通ふ若人にて、この頃はなかりけり。いよいよあやしう、ひなびたる限りにて、見ならはぬ心地ぞする。いとど愁ふなりつる雪、かきたれいみじう降りけり。空の気色はげしう、風吹き荒れて、大殿油消えにけるを、ともしつくる人もなし。かのものに襲はれし折思し出でられて、荒れたるさまは劣らざるを、ほどの狭う、人氣のすこしあるなどに慰めたれど、すごう、うたていざとき心地する夜のさまなり。をかしうもあはれにも、やうかへて心とまりぬべきありさまを、いと埋れすくよかにて、何の栄えなきをぞ口惜しう思す。

からうして明けぬるけしきなれば、格子手づから上げたまひて、前の前裁の雪を見たまふ。踏みあげたる跡もなく、はるばると荒れわたりて、いみじう寂しげなるに、ふり出でて行かむこともあはれにて、「をかしきほどの空も見たまへ。尽きせぬ御心の隔てこそわりなけれ」と恨みきこえたまふ。まだほの暗けれど、雪の光にいとどきよらに若う見えたまふを、若い人ども笑みさかえて見たてまつる。「はや出でさせたまへ。あぢきなし。心うつくしきこそ」など教へきこゆれば、さすがに人の聞こゆることをえいなびたまはぬ御心にて、とかう引きつくろひてみざり出でたまへり。見ぬやうにて、外の方を眺めたまへれど、しり目はただならず、いかにぞ、うちとけまさりのいささかもあらばう

来しかひなくて過ぎゆく。

行幸近くなりて、試楽などののしるころぞ命婦は参れる。「いかにぞ」など問ひたまひて、いとほしとは思したり。ありさま聞こえて、「いとかうもて離れたる御心ばへは、見たまふる人さへ心苦しく」など、泣きぬばかり思へり。心にくくもてなして止みなむと思へりしことをくたいてける、心もなくこの人の思ふらむをさへ思す。正身の、ものは言はで思しうづもれたまふらむさま、思ひやりたまふもいとほしければ、「いとまなきほどぞや。わりなし」とうち嘆いたまひて、「もの思ひ知らぬやうなる心ざまを、懲らさむと思ふぞかし」とほほ笑みたまへる、若ううつくしげなれば、我もうち笑まるる心地して、わりなの、人に恨みられたまふ御齡や、思ひやり少なう、御心のままならむもことわりと思ふ。この御いそぎのほど過ぐしてぞ、時々おはしける。

かの紫のゆかり尋ねとりたまひて、そのうつくしみに心入りたまひて、六条わたりにだに離れまさりたまふめれば、まして荒れたる宿は、あはれに思しおこたらずながら、もの憂きぞわりなかりけると、ところせき御もの恥ぢを見あらはさむの御心もことになうて過ぎゆくを、またうちかへし、見まさりするやうもありかし、手さぐりのたどたどしきに、あやしう心得ぬこともあるにや、見てしがな、と思ほせど、けぎやかにとりなさむもまばゆし、うちとけたる宵居のほど、やをら入りたまひて、格子のはさまより見たまひけり。されど、みづからは見えたまふべくもあらず。几帳など、いたく損なはれたるものから、年経にける立ちど変はらず、おしやりなど乱れねば、心もとなくて、御達四五人あたり。御台、秘色やうの唐土のものなれど、人わろきに、何のくさはひもなくあはれげなる、まかでて人びと食ふ。隅の間ばかりにぞ、いと寒げなる女ばら、白き衣のいひしらず煤けたるに、きたなげなる褶引き結ひつけたる腰つき、かたくなしげなり。さすがに櫛おし垂れて挿したる額つき、内教坊、内侍

かしこには文をだにといとほしく思し出でて、夕つ方ぞありける。雨降り出でてところせくもあるに、笠宿りせむとはた思されずやありけむ。かしこには、待つほど過ぎて、命婦も、いといとほしき御さまかなと心憂く思ひけり。正身は、御心のうちに恥づかしう思ひたまひて、今朝の御文の暮れぬれど、なかなか咎とも思ひわきたまはざりけり。

夕霧の晴るるけしきもまだ見ぬにいぶせさそふる宵の雨かな

雲間待ち出でむほど、いかに心もとなう。

とあり。おはしますまじき御けしきを人びと胸つぶれて思へど、「なほ聞こえさせたまへ」とそそのかしあへれど、いとど思ひ乱れたまへるほどにて、えかたのやうにも続けたまはねば、夜更けぬとて、侍従ぞ例の教へきこゆる。

晴れぬ夜の月待つ里を思ひやれ同じ心に眺めせずとも

口々に責められて、紫の紙の、年経にければ灰おくれ古めいたるに、手はさすがに文字強う、中さだの筋にて、上下等しく書いたまへり。見るかひなううち置きたまふ。いかに思ふらむと思ひやるも安からず。かかることを悔しなどは言ふにやあらむ、さりとていかがはせむ、

我はさりと心長く見果ててむと思しなす御心を知らねば、かしこにはいみじうぞ嘆いたまひける。

大臣夜に入りてまかでたまふに引かれたてまつりて、大殿におはしましぬ。

行幸のことを興ありと思ほして、君たち集りてのたまひ、おのおの舞ども習ひたまふを、そのころのことにて過ぎゆく。ものの音ども常よりも耳かしかましくて、かたがたいどみつ、例の御遊びならず、大箏篋、尺八の笛などの大声を吹き上げつつ、太鼓をさへ高欄のもとにまろばし寄せて、手づからうち鳴らし、遊びおはさうず。御いとまなきやうにて、せちに思す所ばかりにこそ盗まはれたまへれ、かのわたりにはいとおぼつかなくて、秋暮れ果てぬ。なほ頼み

言はぬをも言ふにまさると知りながらおしこめたるは苦しかりけり」

何やかやとはかなきことなれど、をかきさまにも、まめやかにものたまへど、何のかひなし。いとかかるも、さまかはり思ふ方ことにものしたまふ人にやとねたくて、やをら押し開けて入りたまひにけり。命婦、あなうたて、たゆめたまへる、といとほしければ、知らず顔にてわが方へ往にけり。この若人ども、はた、世にたぐひなき御ありさまの音聞きに、罪ゆるしきこえて、おどろおどろしうも嘆かれず、ただ思ひもよらずにはかにて、さる御心もなきをぞ思ひける。正身は、ただ我にもあらず、恥づかしくつつましきよりほかのことまたなければ、今はかかるぞあはれなるかし、まだ世馴れぬ人、うちかしづかれたると思ゆるしたまふものから、心得ずなまいとほしとおぼゆる御さまなり。何ごとにつけてかは御心のとまらむ、うちうめかれて、夜深う出でたまひぬ。命婦は、いかならむと、目覚めて聞き臥せりけれど、知り顔ならじとて、御送りにとも声づくらず。君も、やをら忍びて出でたまひにけり。

二条院におはして、うち臥したまひても、なほ思ふにかなひがたき世にこそと思しつづけて、軽らかならぬ人の御ほどを心苦しとぞ思しける。思ひ乱れておはするに、頭中将おはして、「こよなき御朝寝かな。ゆゑあらむかしとこそ思ひたまへらるれ」と言へば、起き上がりたまひて、「心やすき独り寝の床にてゆるびにけりや。内よりか」とのたまへば、「しか、まかではべるままなり。朱雀院の行幸、今日なむ、楽人、舞人定めらるべきよし、よべうけたまはりしを、大臣にも伝へ申さむとてなむまかではべる。やがて帰り参りぬべうはべり」といそがしげなれば、「さらば、もろともに」とて、御粥、強飯召して、客人にも参りたまひて、引き続きたれど、一つにたてまつりて、「なほいとねぶたげなり」ととがめ出でつつ、「隠いたまふこと多かり」とぞ恨みきこえたまふ。事ども多く定めらるる日にて、内にさぶらひ暮らしたまひつ。

御茵うち置きひきつくろふ。いとつつましげに思したれど、かやうの人にも
 言ふらむ心ばへなども、夢に知りたまはざりければ、命婦のかう言ふを、ある
 やうこそはと思ひてものしたまふ。乳母だつ老い人などは、曹司に入り臥して、
 夕まどひしたるほどなり。若き人二三人あるは、世にめでられたまふ御ありさ
 まをゆかしきものに思ひきこえて、心げさうしあへり。よろしき御衣たてまつ
 り変へ、つくろひきこゆれば、正身は、何の心げさうもなくしておはす。男はい
 と尽きせぬ御さまを、うち忍び用意したまへる御けはひ、いみじうなまめきて、
 見知らむ人にこそ見せめ、栄えあるまじきわたりを、あないとほし、と命婦は
 思へど、ただおほどかにもしたまふをぞ、うしろやすう、さし過ぎたること
 は見えたてまつりたまはじ、と思ひける。わが常に責められたてまつる罪さり
 ごとに、心苦しき人の御もの思ひや出でこむなど、やすからず思ひゐたり。君
 は人の御ほどを思せば、されくつがへる今様のよしばみよりは、こよなう奥ゆ
 かしうと思さるるに、いたうそそのかさされて、ゐざり寄りたまへるけはひ忍び
 やかに、えひの香いとなつかしう薫り出でて、おほどかなるを、さればよと思
 す。年ごろ思ひわたるさまなどいとよくのたまひつづくれど、まして近き御い
 らへは絶えてなし。わりなのわざやとうち嘆きたまふ。

「いくそたび君がしじまにまけぬらむものな言ひそと言はぬ頼みに
 のたまひも捨ててよかし。玉だすき苦し」とのたまふ。女君の御乳母子、侍従
 とてはやりかなる若人、いと心もとなうかたはらいたしと思ひて、さし寄りて
 聞こゆ。

鐘つきてとぢめむことはさすがにて答へまうきぞかつはあやなき

いと若びたる声のことに重りかならぬを、人伝てにはあらぬやうに聞こえなせ
 ば、ほどよりはあまえてと聞きたまへど、めづらしきが、「なかなか口ふたが
 るわざかな。

けり。命婦は、さらばさりぬべからむ折に、物越しに聞こえたまはむほど、御心につかずはさても止みねかし、またさるべきにて、仮にもおはし通はむをとがめたまふべき人なし、などあだめきたるはやり心はうち思ひて、父君にもかかる事なども言はざりけり。

八月二十余日、宵過ぐるまで待たるる月の心もとなきに、星の光ばかりさやけく、松の梢吹く風の音心細くて、いにしへの事語り出でてうち泣きなどしたまふ。いとよき折かなと思ひて、御消息や聞こえつらむ、例のいと忍びておはしたり。月やうやう出でて、荒れたる籬のほどとましくうち眺めたまふに、琴そそのかさされて、ほのかにかき鳴らしたまふほど、けしうはあらず。すこしけ近う今めきたる気をつけばやとぞ、乱れたる心には心もとなく思ひるたる。人目しなき所なれば、心やすく入りたまふ。命婦を呼ばせたまふ。今しもおどろき顔に、「いとかたはらいたきわざかな。しかしかこそおはしましたなれ。常にかう恨みきこえたまふを、心かなはぬ由をのみいなびきこえはべれば、「みづからことわりも聞こえ知らせむ」とのたまひわたるなり。いかが聞こえ返さむ。なみなみのたはやすき御ふるまひならねば心苦しきを。物越しにて聞こえたまはむこと聞こしめせ」と言へば、いと恥づかしと思ひて、「人にも聞こえむやうも知らぬを」とて奥さまへるざり入りたまふさま、いとうひうひしげなり。うち笑ひて、「いと若々しうおはしますこそ心苦しけれ。限りなき人も、親などおはしてあつかひ後見きこえたまふほどこそ、若びたまふもことわりなれ、かばかり心細き御ありさまに、なほ世を尽きせず思し憚るはつきなうこそ」と教へきこゆ。さすがに人の言ふことは強うもいなびぬ御心にて、「いらへきこえで、ただ聞けとあらば、格子など鎖してはありなむ」とのたまふ。「簀子などは便なうはべりなむ。おしたちてあはあはしき御心などは、よも」などいによく言ひなして、二間の際なる障子、手づからいと強く鎖して、

人知れぬもの思ひの紛れも、御心のいとまなきやうにて、春夏過ぎぬ。

秋のころほひ、静かに思しつづけて、かの砧の音も、耳につきて聞きにくかりしきへ、恋しう思し出でらるるままに、常陸の宮にはしばしば聞こえたまへど、なほおぼつかなうのみあれば、世づかず心やましう、負けては止まじの御心さへ添ひて、命婦を責めたまふ。「いかなるやうぞ。いとかかる事こそまだ知らね」と、いとものしと思ひてのたまへば、いとほしと思ひて、「もて離れて、似げなき御事とおもむけはべらず。ただおほかたの御ものづつみのわりなきに、手をえさし出でたまはぬとなむ見たまふる」と聞こゆれば、「それこそは世づかぬ事なれ。物思ひ知るまじきほど、独り身をえ心にまかせぬほどこそことわりなれ、何事も思ひしづまりたまへらむと思ふこそ。そこはかとなつれづれに心細うのみおぼゆるを、同じ心にいらへたまはむは、願ひかなふ心地なむすべき。何やかやと世づける筋ならで、その荒れたる簀子にたたずまほしきなり。いとうたて心得ぬ心地するを、かの御許しなくともたばかれかし。心苛られし、うたてあるもてなしにはよもあらじ」など語らひたまふ。なほ世にある人のありさまを、おほかたなるやうにて聞き集め、耳とどめたまふ癖のつきたまへるを、さうざうしき宵居などはかなきついでに、さる人こそとばかり聞こえ出でたりしに、かくわざとがましうのたまひわたれば、なまわづらはしく、女君の御ありさまも世づかはしくよしめきなどもあらぬを、なかなかの導きに、いとほしき事や見えむなむ、と思ひけれど、君のかうまめやかにのたまふに、聞き入れざらむもひがひがしかるべし、父親王おはしける折にだに、旧りにたるあたりとて、おとなひきこゆる人もなかりけるを、まして今は浅茅分くる人も跡絶えたるに、かく世にめづらしき御けはひの漏りにほひくるをば、なま女ばらなども笑み曲げて、「なほ聞こえたまへ」とそそのかしたてまつれど、あさましうものづつみしたまふ心にて、ひたぶるに見も入れたまはぬなり

む、などさへ中将は思ひけり。この君のかう気色ばみありきたまふを、まさにさては過ぐしたまひてむやと、なまねたう危ふがりけり。

その後、こなたかなたより文などやりたまふべし。いづれも返り事見え、おぼつかなく心やましきに、あまりうたてもあるかな、さやうなる住まひする人は、もの思ひ知りたるけしき、はかなき木草、空のけしきにつけてもとりなしなどして、心ばせ推し測らるる折々あらむこそあはれなるべけれ、重しとて、いとかうあまり埋もれたらむは心づきなく悪びたり、と中将はまいて心焦られしけり。例の隔てきこえたまはぬ心にて、「しかしかの返り事は見たまふや。試みにかすめたりしこそ、はしたなくて止みにしか」と憂ふれば、さればよ、言ひ寄りにけるをや、とほほ笑まれて、「いさ、見むとしも思はねばにや、見るとしもなし」といらへたまふを、人わきしけると思ふに、いとねたし。君は、深うしも思はぬことのかう情けなきを、すさまじく思ひなりたまひにしかど、かうこの中将の言ひありきけるを、言多く言ひなれたらむ方にぞ靡かむかし、したり顔にて、もとのことを思ひ放ちたらむけしきこそ憂はしかるべけれ、と思して、命婦をまめやかに語らひたまふ。「おぼつかなくもて離れたる御けしきなむいと心憂き。好き好きしき方に疑ひ寄せたまふにこそあらめ。さりとも短き心ばへつかはぬものを。人の心のどやかなることなくて、思はずにのみあるになむ、おのづからわがあやまちにもなりぬべき。心のどかにて、親はらからのもてあつかひ恨むるもなう心やすからむ人は、なかなかなむらうたかるべきを」とのたまへば、「いでや、さやうにをかしき方の御笠宿りにはえしもやと、つきなげにこそ見えはべれ。ひとへにものづつみし、ひき入りたる方はしもありがたうものしたまふ人になむ」と、見るありさま語りきこゆ。「らうらうじうかどめきたる心はなきなめり。いと子めかしうおほどかならむこそ、らうたくはあるべけれ」と思し忘れずのたまふ。わらは病みにわづらひたまひ、

たまへるつらさに、御送り仕うまつりつるは。

もろともに大内山は出でつれど入る方見せぬいさよひの月」

と恨むるもねたけれど、この君と見たまふ、すこしをかしうなりぬ。「人の思ひよらぬことよ」と憎む憎む、

里わかぬかげをば見れどゆく月のいるさの山を誰れか尋ぬる

「かう慕ひありかば、いかにせさせたまはむ」と聞こえたまふ。「まことは、かやうの御歩きには、隨身からこそはかばかしきこともあるべけれ。後らさせたまはでこそあらめ。やつれたる御歩きは軽々しき事も出で来なむ」とお返しさいさめたてまつる。かうのみ見つけらるるをねたしと思せど、かの撫子はえ尋ね知らぬを、重き功に、御心のうちに思し出づ。

おのおの契れる方にもあまえて、え行き別れたまはず、一つ車に乗りて、月のかしきほどに雲隠れたる道のほど、笛吹き合せて大殿におはしぬ。前駆なども追はせたまはず、忍び入りて、人見ぬ廊に御直衣ども召して着替へたまふ。つれなう、今来るやうにて、御笛ども吹きすさびておはすれば、大臣、例の聞き過ぐしたまはで、高麗笛取り出でたまへり。いと上手におはすれば、いともしろう吹きたまふ。御琴召して、内にも、この方に心得たる人びとに弾かせたまふ。中務の君、わざと琵琶は弾けど、頭の君心かけたるをもて離れて、ただこのたまさかなる御けしきのなつかしきをばえ背ききこえぬに、おのづから隠れなくて、大宮などもよろしからず思しなりたれば、もの思はしくはしたなき心地して、すさまじげに寄り臥したり。絶えて見たてまつらぬ所にかき離れなむも、さすがに心細く思ひ乱れたり。君たちは、ありつる琴の音を思し出でて、あはれげなりつる住まひのさまなども、やう変へてをかしう思ひつづけ、あらましごとに、いとをかしうらうたき人の、さて年月を重ねるたらむ時、見そめていみじう心苦しうは、人にももて騒がるばかりやわが心もさま悪しから

とはべりつる、いとひ顔にもこそ。いま心のどかにを。御格子参りなむ」とて、いたうもそそのかさで帰りたれば、「なかなかなるほどにても止みぬるかな。もの聞き分くほどにもあらで、ねたう」とのたまふけしき、をかしと思したり。「同じくは、け近きほどの立ち聞きせさせよ」とのたまへど、心にくくてと思へば、「いでや、いとかすかなるありさまに思ひ消えて、心苦しげにものしたまふめるを、うしろめたきさまにや」と言へば、げにさもあること、にはかに我も人もうちとけて語らふべき人の際は際とこそあれ、などあはれに思さるる人の御ほどなれば、「なほさやうのけしきをほのめかせ」と語らひたまふ。また契りたまへる方やあらむ、いと忍びて帰りたまふ。「上の、まめにおはしますともてなやみきこえさせたまふこそ、をかしう思うたまへらるる折々はべれ。かやうの御やつれ姿を、いかでかは御覧じつけむ」と聞こゆれば、たち返り、うち笑ひて、「異人の言はむやうに、咎なあらはされそ。これをあだあだしきふるまひと言はば、女のありさま苦しからむ」とのたまへば、あまり色めいたりと思して、折々かうのたまふを恥づかしと思ひて、ものも言はず。

寝殿の方に、人のけはひ聞くやうもやと思して、やをら立ち退きたまふ。透垣のただすこし折れ残りたる隠れの方に立ち寄りたまふに、もとより立てる男ありけり。誰れならむ、心かけたる好き者ありけり、と思して、蔭につきて立ち隠れたまへば、頭中将なりけり。この夕つ方、内よりもろともにまかでたまひける、やがて大殿にも寄らず、二条院にもあらで引き別れたまひけるを、いづちならむとただならで、我も行く方あれど、後につきてうかがひけり。あやしき馬に、狩衣姿のないがしろにて来ければ、え知りたまはぬに、さすがに、かう異方に入りたまひぬれば、心も得ず思ひけるほどに、ものの音に聞きついて立てるに、帰りや出でたまふと、下待つなりけり。君は、誰ともえ見分きたまはで、我と知られじと抜き足に歩みたまふに、ふと寄りて、「ふり捨てさせ

しなべての手にはあらずとなむ思ふ」とのたまへば、「さやうに聞こし召すばかりにはあらずやはべらむ」と言へど、御心とまるばかり聞こえなすを、「いたうけしきばましや。このころのおぼろ月夜に忍びてもものせむ。まかでよ」とのたまへば、わづらはしと思へど、内わたりものどやかなる春のつれづれにまかでぬ。父の大輔の君は他にぞ住みける。ここには時々ぞ通ひける。命婦は、継母のあたりは住みもつかず、姫君の御あたりをむつびて、ここには来るなりけり。

のたまひしもしるく、十六夜の月をかしきほどにおはしたり。「いとかたはらいたきわざかな。ものの音澄むべき夜のさまにもはべらぎめるに」と聞こゆれど、「なほあなたにわたりて、ただ一声もよほしきこえよ。むなしくて帰らむがねたかるべきを」とのたまへば、うちとけたる住みかに据ゑたてまつりて、うしろめたうかたじけなしと思へど、寝殿に参りたれば、まだ格子もさながら、梅の香をかしきを見出だしたまふ。よき折かなと思ひて、「御琴の音いかにまさりはべらむ、と思ひたまへらるる夜のけしきに誘はれはべりてなむ。心あわたたしき出で入りに、えうけたまはらぬこそ口惜しけれ」と言へば、「聞き知る人こそあなれ、百敷に行き交ふ人の聞くばかりやは」とて召し寄するも、あいなう、いかが聞きたまはむと胸つぶる。ほのかに掻き鳴らしたまふ、をかしう聞こゆ。何ばかり深き手ならねど、ものの音がらの筋ことなるものなれば、聞きにくくも思されず。いといたう荒れわたりて寂しき所に、さばかりの人の、古めかしうところせくかしづき据ゑたりけむ名残なく、いかに思ほし残すことなからむ、かやうの所にこそは、昔物語にもあはれなることどもありけれ、など思ひ続けても、ものや言ひ寄らましと思せど、うちつけにや思さむと心恥づかしくて、やすらひたまふ。命婦、かどある者にて、いたう耳ならさせたてまつらじと思ひければ、「曇りがちにはべるめり。客人の来む

思へどもなほ飽かざりし夕顔の露に後れし心地を、年月経れど思し忘れず、ここもかしこも、うちとけぬ限りの、気色ばみ心深きかたの御いどましさに、け近くうちとけたりしあはれに似るものなう恋しく思ほえたまふ。いかで、こことしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人のつつましきことなからむ、見つけてしがな、とこりずまに思しわたれば、すこしゆゑづきて聞こゆるわたりは御耳とどめたまはぬ隈なきに、さてもやと思し寄るばかりのけはひあるあたりにこそ一くだりをもほのめかしたまふめるに、なびききこえずもて離れたるはをさをさあるまじきぞいと目馴れたるや。つれなう心強きは、たとしへなう情けおくるるまめやかさなど、あまりもののほど知らぬやうに、さてしも過ぐしはてず、名残なくくづほれて、なほなほしき方に定まりなどするもあれば、のたまひさしつるも多かりける。かの空蟬を、ものの折々にはねたう思し出づ。萩の葉も、さりぬべき風のたよりある時は、おどろかしたまふ折もあるべし。火影の乱れたりしさまはまたさやうにても見まほしく思す。おほかた名残なきもの忘れをぞえしたまはざりける。

左衛門の乳母とて大武のさしつぎに思いたるがむすめ、大輔の命婦とて内にさぶらふ、わかむどほりの兵部の大輔なるむすめなりけり。いといたう色好める若人にてありけるを、君も召し使ひなどしたまふ。母は筑前守の妻にて下りにければ、父君のもとを里にて行き通ふ。故常陸の親王の、末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御むすめ、心細くて残りゐたるを、ものついでに語りきこえければ、あはれのことや、とて御心とどめて問ひ聞きたまふ。「心ばへかたちなど深き方はえ知りはべらず。かいひそめ人疎うもてなしたまへば、さべき宵など、物越しにてぞ語らひはべる。琴をぞなつかしき語らひ人と思へる」と聞こゆれば、「三つの友にて、今一種やうたてあらむ」とて、「我に聞かせよ。父親王の、さやうの方にいとよしづきてものしたまうければ、お

未
摘
花

せさせたまふ。また内々にもわざとしたまひて、こまやかにをかきさまなる櫛、扇多くして、幣などわざとがましくて、かの小桂も遣はず。

逢ふまでの形見ばかりと見しほどにひたすら袖の朽ちにけるかな
こまかなることどもあれど、うるさければ書かず。御使帰りにけれど、小君して小桂の御返りばかりは聞こえさせたり。

蟬の羽もたちかへてける夏衣かへすを見てもねは泣かれけり
思へど、あやしう人に似ぬ心強さにもふり離れぬるかな、と思ひ続けたまふ。
今日ぞ冬立つ日なりけるもしるくうちしぐれて、空の気色いとあはれなり。眺め暮らしたまひて、

過ぎにしも今日別るるも二道に行く方知らぬ秋の暮かな
なほかく人知れぬことは苦しかりけりと、思し知りぬらむかし。

かやうのくだくだしきことは、あながちに隠ろへ忍びたまひしもいとほしくて、みな漏らしとどめたるを、「など帝の御子ならむからに、見む人さへかたほならずものほめがちなる」と、作りごとめきてとりなす人ものしたまひければなむ。あまりもの言ひさがなき罪、さりどころなく。

に書き出でたまへれば、「ただかくながら、加ふべきことはべらざめり」と申す。忍びたまへど御涙もこぼれて、いみじく思したれば、「何人ならむ。その人と聞こえもなく、かう思し嘆かすばかりなりけむ宿世の高さ」と言ひけり。忍びて調ぜさせたまへりける装束の袴を取り寄せさせたまひて、

泣く泣くも今日は我が結ふ下紐をいづれの世にかとけて見るべき

このほどまでは漂ふなるを、いづれの道に定まりて赴くらむ、と思ほしやりつつ、念誦をいとあはれにしたまふ。頭中将を見たまふにも、あいなく胸騒ぎて、かの撫子の生ひ立つありさま、聞かせまほしけれど、かことに怖ぢてうち出でたまはず。

かの夕顔の宿りには、いづ方にと思ひ惑へど、そのままにえ尋ねきこえず。右近だに訪れねば、あやしと思ひ嘆きあへり。確かならねど、けはひをさばかりにやとささめきしかば、惟光をかこちけれど、いとかけ離れ、気色なく言ひなして、なほ同じごと好き歩きければ、いとど夢の心地して、もし受領の子どもの好き好きしきが頭の君に怖ぢきこえてやがて率て下りにけるにや、とぞ思ひ寄りける。この家あるじぞ西の京の乳母のむすめなりける。三人その子はありて、右近は異人なりければ、思ひ隔てて御ありさまを聞かせぬなりけり、と泣き恋ひけり。右近はた、かしかましく言ひ騒がむを思ひて、君も今さらに漏らさじと忍びたまへば、若君の上をだにえ聞かず、あさましく行方なくて過ぎゆく。

君は夢をだに見ばやと思しわたるに、この法事したまひてまたの夜、ほのかに、かのありし院ながら、添ひたりし女のさまも同じやうにて見えければ、荒れたりし所に住みけむもの我に見入れけむたよりにかくなりぬること、と思し出づるにもゆゆしくなむ。

夕 顔

伊予介、神無月のついたちごろに下る。女房の下らむにとてたむけ心ことに

空蟬の世は憂きものと知りにしをまた言の葉にかかる命よ

はかなしや。

と、御手もうちわななかるるに、乱れ書きたまへる、いとどうつくしげなり。なほかのもぬけを忘れたまはぬを、いとほしうもをかしうも思ひけり。かやうに憎からずは聞こえ交はせど、け近くとは思ひよらず、さすがに言ふかひなからずは見えたてまつりてやみなむと思ふなりけり。

かの片つ方は蔵人少将をなむ通はず、と聞きたまふ。あやしや、いかに思ふらむ、と少将の心のうちもいとほしく、またかの人の気色もゆかしければ、小君して、「死に返り思ふ心は知りたまへりや」と言ひ遣はず。

ほのかにも軒端の荻を結ばずは露のかことを何にかけまし高やかなる荻に付けて、「忍びて」とのたまへれど、取り過ちて少将も見つけて、我なりけりと思ひあはせば、さりとて罪ゆるしてむ、と思ふ御心おごりぞあいなかりける。少将のなき折に見すれば、心憂しと思へど、かく思し出でたるもさすがにて、御返り、口ときばかりをかことにて取らす。

ほのめかす風につけても下荻の半ばは霜にむすばほれつつ

手は悪しげなるを、紛らはしさればみて書いたるさま、品なし。火影に見し顔思し出でらる。うちとけで向ひるたる人はえ疎み果つまじきさまもしたりしかな、何の心ばせありげもなくさうどき誇りたりしよ、と思し出づるに、憎からず。なほこりずまにまたもあだ名立ちぬべき御心のすさびなめり。

かの人の四十九日、忍びて比叡の法華堂にて、事そがず、装束よりはじめてさるべきものどもこまかに、誦経などせさせたまひぬ。経、仏の飾りまでおろかならず、惟光が兄の阿闍梨いと尊き人にて、二なうしけり。御書の師にて睦しく思す文章博士召して、願文作らせたまふ。その人となくて、あはれと思ひし人のはかなきさまになりたるを、阿弥陀仏に譲りきこゆるよし、あはれげ

九にやなりたまひけむ。右近は亡くなりける御乳母の捨て置きてはべりければ、三位の君のらうたがりたまひて、かの御あたり去らず生ほしたてたまひしを、思ひたまへ出づれば、いかでか世にはべらむずらむ。いとしも人にと、悔しくなむ。ものはかなげにもものしたまひし人の御心を頼もしき人にて、年ごろならひはべりけること」と聞こゆ。「はかなびたるこそはらうたけれ。かしこく人になびかぬ、いと心づきなきわざなり。自らはかばかしくすぐよかならぬ心ならひに、女はただやはらかに、とりはづして人に欺かれぬべきがさすがにものづつみし、見む人の心には従はむなむあはれにて、我が心のままにとり直して見むに、なつかしくおぼゆべき」などのたまへば、「この方の御好みにはもて離れたまはざりけりと思ひたまふるにも、口惜しくはべるわざかな」とて泣く。空のうち曇りて、風冷やかなるに、いといたく眺めたまひて、

見し人の煙を雲と眺むれば夕べの空もむつまじきかな

と独りごちたまへど、えさしいらへも聞こえず。かやうにておはせましかばと思ふにも胸塞がりておぼゆ。耳かしかましかりし砧の音を思し出づるさへ恋しくて、「正に長き夜」とうち誦じて臥したまへり。

かの伊予の家の小君参る折あれど、ことにありしやうなる言伝てもしたまはねば、憂しと思し果てにけるをいとほしと思ふに、かくわづらひたまふを聞き、さすがにうち嘆きけり。遠く下りなどするを、さすがに心細ければ、思し忘れぬるか、試みに、

承り悩むを、言に出でてはえこそ、

問はぬをもなどかか問はでほどふるにいかばかりかは思ひ乱るる

益田はまことになむ。

と聞こえたり。めづらしきに、これもあはれ忘れたまはず。

生けるかひなきや、誰が言はましことにか、

の右の大殿よりいと恐ろしきことの聞こえ参で来しに、物怖ぢをわりなくしたまひし御心に、せむかたなく思し怖ぢて、西の京に御乳母住みはべる所になむはひ隠れたまへりし。それもいと見苦しきに住みわびたまひて、山里に移ろひなむと思したりしを、今年よりは塞がりける方にはべりければ、違ふとてあやしき所にもしたまひしを、見あらはされたてまつりぬることと思し嘆くめりし。世の人に似ずものづつみをしたまひて、人に物思ふ気色を見えむを恥づかしきものにしたまひて、つれなくのみもてなして御覽ぜられたてまつりたまふめりしか」と語り出づるに、さればよ、と思しあはせて、いよいよあはれまさりぬ。「幼き人惑はしたり、と中将の愁へしは、さる人や」と問ひたまふ。

「しか。おとしの春ぞものしたまへりし。女にていとらうたげになむ」と語る。「さていづこにぞ。人にさとは知らせで我に得させよ。あとはかなくいみじと思ふ御形見に、いとうれしかるべくなむ」とのたまふ。「かの中将にも伝ふべけれど、言ふかひなきかこと負ひなむ。とぎまかうぎまにつけて育まむに咎あるまじきを、そのあらむ乳母などにもことぎまに言ひなしてもものせよかし」など語らひたまふ。「さらばいとうれしくなむはべるべき。かの西の京にて生ひ出でたまはむは心苦しくなむ。はかばかしく扱ふ人なしとて、かしこに」など聞こゆ。

夕暮の静かなるに、空の気色いとあはれに、御前の前裁枯れ枯れに、虫の音も鳴きかれて、紅葉のやうやう色づくほど、絵にかきたるやうにおもしろきを見わたして、心よりほかにをかしき交じらひかなと、かの夕顔の宿りを思ひ出づるも恥づかし。竹の中に家鳩といふ鳥のふつつかに鳴くを聞きたまひて、かのありし院にこの鳥の鳴きしを、いと恐ろしと思ひたりしさまの面影にらうたく思し出でらるれば、「年はいくつにかものしたまひし。あやしく世の人に似ずあえかに見えたまひしも、かく長かるまじくてなりけり」とのたまふ。「十

なかなかいみじくなまめかしくて、ながめがちにねをのみ泣きたまふ。見たてまつりとがむる人もありて、御物の怪なめりなど言ふもあり。右近を召し出でて、のどやかなる夕暮に物語などしたまひて、「なほいとなむあやしき。などでその人と知られじとは隠いたまへりしぞ。まことに海人の子なりとも、さばかりに思ふを知らで隔てたまひしかばなむつらかりし」とのたまへば、「などでか深く隠しきこえたまふことははべらむ。いつのほどにてかは何ならぬ御名のりを聞こえたまはむ。初めより、あやしうおぼえぬさまなりし御ことなれば、「現ともおぼえずなむある」とのたまひて、「御名隠しもさばかりにこそは」と聞こえたまひながら、なほざりにこそ紛らはしたまふらめ、となむ憂きことに思したりし」と聞こゆれば、「あいなかりける心比べどもかな。我はしか隔つる心もなかりき。ただかやうに人に許されぬ振る舞ひをなむまだ慣らはぬことなる。内に諫めのたまはするをはじめ、つつむこと多かる身にて、はかなく人にたはぶれごとを言ふも所狭う、取りなしうるさき身のありさまになむあるを、はかなかりし夕べよりあやしう心にかかりて、あながちに見たてまつりしも、かかるべき契りこそはものしたまひけめ、と思ふもあはれになむ。またうち返しつらうおぼゆる。かう長かるまじきにては、などさしも心に染みてあはれとおぼえたまひけむ。なほ詳しく語れ。今は何ごとを隠すべきぞ。七日七日に仏かかせても、誰が為とか心のうちにも思はむ」とのたまへば、「何か隔てきこえさせはべらむ。自ら忍び過ぐしたまひしことを、亡き御うしろに口さがなくやはと思うたまふばかりになむ。親たちははや亡せたまひにき。三位の中將となむ聞こえし。いとらうたきものに思ひきこえたまへりしかど、我が身のほどの心もとなさを思すめりしに、命さへ堪へたまはずなりにしのち、はかなきものたよりにて、頭中將なむまだ少將にものしたまひし時見初めたてまつらせたまひて、三年ばかりは志あるさまに通ひたまひしを、こぞの秋ごろ、か

嘆きあへり。

まことに臥したまひぬるままに、いといたく苦しがりたまひて、二三日になりぬるにむげに弱るやうにしたまふ。内にも聞こしめし嘆くこと限りなし。御祈り方々にひまなくののしる。祭、祓、修法など言ひ尽くすべくもあらず。世にたぐひなくゆゆしき御ありさまなれば、世に長くおはしますまじきにや、と天の下の人の騒ぎなり。苦しき御心地にも、かの右近を召し寄せて、局など近くたまひてさぶらはせたまふ。惟光心地も騒ぎ惑へど、思ひのどめて、この人のたづきなしと思ひたるをもてなし助けつつさぶらはす。君はいささかひまありて思さるる時は、召し出でて使ひなどすれば、ほどなく交じらひつきたり。服いと黒くして、かたちなどよからねど、かたはに見苦しからぬ若人なり。

「あやしう短かかりける御契りにひかされて、我も世にえあるまじきなめり。年ごろの頼み失ひて心細く思ふらむ慰めにも、もしながらへばよろづに育まむとこそ思ひしか、ほどなくまたたち添ひぬべきが口惜しくもあるべきかな」と忍びやかにのたまひて、弱げに泣きたまへば、言ふかひなきことをばおきて、いみじく惜しと思ひきこゆ。殿のうちの人の、足を空にて思ひ惑ふ。内より御使、雨の脚よりもけにしげし。思し嘆きおはしますを聞きたまふに、いとかたじけなくてせめて強く思しなる。大殿も経営したまひて、大臣日々に渡りたまひつつ、さまざまのことをせさせたまふしるしにや、二十余日いと重くわづらひたまひつれど、ことなる名残のこらずおこたるさまに見えたまふ。穢らひ忌みたまひしもひとへに満ちぬる夜なれば、おぼつかながらせたまふ御心わりなくて、内の御宿直所に参りたまひなす。大殿、我が御車にて迎へたてまつりたまひて、御物忌なにやとむつかしう慎ませたてまつりたまふ。我にもあらず、あらぬ世によみがへりたるやうに、しばしはおぼえたまふ。

九月二十日のほどにぞおこたり果てたまひて、いといたく面瘦せたまへれど、

たまふこと限りなし。大徳たちも、誰とは知らぬに、あやしと思ひて皆涙落としけり。右近を、「いざ二条院へ」とのたまへど、「年ごろ、幼くはべりしより片時たち離れたてまつらず馴れきこえつる人に、にはかに別れたてまつりて、いづこにか帰りはべらむ。いかになりたまひにきとか人にも言ひはべらむ。悲しきことをばさるものにて、人に言ひ騒がれはべらむがいみじきこと」と言ひて、泣き惑ひて、「煙にたぐひて慕ひ参りなむ」と言ふ。「ことわりなれど、さなむ世の中はある。別れと言ふもの悲しからぬはなし。とあるもかかるも、同じ命の限りあるものになむある。思ひ慰めて、我を頼め」とのたまひこしらへて、「かく言ふ我が身こそは生きとまるまじき心地すれ」とのたまふも頼もしげなしや。惟光、「夜は明け方になりはべりぬらむ。はや帰らせたまひなむ」と聞こゆれば、返りみのみせられて、胸もつと塞がりて出でたまふ。

道いと露けきに、いとどしき朝霧に、いづこともなく惑ふ心地したまふ。ありしながらうち臥したりつるさま、うち交はしたまへりしが、我が御紅の御衣の着られたりつるなど、いかなりけむ契りにかと道すがら思さる。御馬にもかばかしく乗りたまふまじき御さまなれば、また惟光添ひ助けておはしまさするに、堤のほどにて御馬よりすべり下りて、いみじく御心地惑ひければ、「かかる道の空にてはふれぬべきにやあらむ。さらにえ行き着くまじき心地なむする」とのたまふに、惟光心地惑ひて、我がはかばかしくはさのたまふともかかる道に出で率てたてまつるべきかはと思ふに、いと心あわたたしければ、川の水に手を洗ひて、清水の観音を念じたてまつりても、すべなく思ひ惑ふ。君もしひて御心を起こして、心のうちに仏を念じたまひて、またとかく助けられたまひてなむ二条院へ帰りたまひける。あやしう夜深き御歩きを、人びと「見苦しきわざかな。このごろ例よりも静心なき御忍び歩きのしきるなかにも、昨日の御気色のいと悩ましう思したりしに、いかでかくたどり歩きたまふらむ」と

あやしがる。

「さらに事なくしなせ」と、そのほどの作法のたまへど、「何か、ことごとしくすべきにもはべらず」とて立つが、いと悲しく思さるれば、「便なしと思ふべけれど、今一たびかの亡骸を見ざらむがいといふせかるべきを、馬にてものせむ」とのたまふを、いとたいだいしきこととは思へど、「さ思されむはいかがせむ。はやおはしまして、夜更けぬ先に帰らせおはしませ」と申せば、このごろの御やつれにまうけたまへる狩の御装束着替へなどして出でたまふ。御心地かきくらし、いみじく堪へがたければ、かくあやしき道に出で立ちても、あやふかりし物懲りに、いかにせむと思しわづらへど、なほ悲しさのやる方なく、ただ今の骸を見ではまたいつの世にかありしかたちをも見む、と思し念じて、例の大夫、隨身を具して出でたまふ。道遠くおぼゆ。十七日の月さし出でて、河原のほど、御前駆の火もほのかなるに、鳥辺野の方など見やりたるほどなど、ものむつかしきも何ともおぼえたまはず、かき乱る心地したまひておはし着きぬ。あたりさへすごきに、板屋のかたはらに堂建てて行へる尼の住まひいとあはれなり。御灯明の影ほのかに透きて見ゆ。その屋には女一人泣く声のみして、外の方に法師ばら二三人物語しつつ、わざとの声立てぬ念仏ぞする。寺々の初夜もみな行ひ果てていとしめやかなり。清水の方ぞ光多く見え人のけはひもしげかりける。この尼君の子なる大徳の声尊くて経うち読みたるに、涙の残りなく思さる。

入りたまへれば、火取り背けて、右近は屏風隔てて臥したり。いかにわびしからむと見たまふ。恐ろしきけもおぼえず、いとらうたげなるさまして、まだいささか変りたるところなし。手をとらへて、「我に今一たび声をだに聞かせたまへ。いかなる昔の契りにかありけむ、しばしのほどに心を尽くしてあはれに思ほえしを、うち捨てて惑はしたまふがいみじきこと」と声も惜しまず泣き

はあらで、ただおぼえぬ穢らひに触れたるよしを奏したまへ。いとこそたいだ
いしくはべれ」とつれなくのたまへど、心のうちには、言ふかひなく悲しきこ
とを思すに、御心地も悩ましければ、人に目も見合せたまはず。蔵人の弁を召
し寄せて、まめやかにかかるよしを奏せさせたまふ。大殿などにも、かかるこ
とありてえ参らぬ御消息など聞こえたまふ。

日暮れて惟光参れり。かかる穢らひありとのたまひて、参る人びとも皆立ち
ながらまかづれば、人しげからず。召し寄せて、「いかにぞ。今はと見果てつ
や」とのたまふままに、袖を御顔に押しあてて泣きたまふ。惟光も泣く泣く、
「今は限りにこそはものしたまふめれ。長々と籠もりはべらむも便なきを、明
日なむ日よろしくはべれば、とかくの事、いと尊き老僧のあひ知りてはべるに、
言ひ語らひつけはべりぬる」と聞こゆ。「添ひたりつる女はいかに」とのたま
へば、「それなむまたえ生くまじくはべるめる。我も後れじと惑ひはべりて、
今朝は谷に落ち入りぬとなむ見たまへつる。「かの故里人に告げやらむ」と申
せど、しばし思ひしづめよと、ことのさま思ひめぐらしてとなむこしらへおき
はべりつる」と語りきこゆるままに、いといみじと思して、「我もいと心地悩
ましく、いかなるべきにかとなむおぼゆる」とのたまふ。「何か、さらに思ほ
しものせさせたまふ。さるべきにこそよろづのことはべらめ。人にも漏らさじ
と思うたまふれば、惟光おり立ちてよろづはものしはべる」など申す。「さか
し。さみな思ひなせど、浮かびたる心のすさびに人をいたづらになしつるかご
と負ひぬべきがいとからきなり。少将の命婦などにも聞かすな。尼君ましてか
やうのことなど諫めらるるを、心恥づかしくなむおぼゆべき」と口かためたま
ふ。「さらぬ法師ばらなどにもみな言ひなすさま異にはべる」と聞こゆるにぞ
かかりたまへる。ほの聞く女房など、「あやしく、何ごとならむ。穢らひのよ
しのたまひて内にも参りたまはず、またかくささめき嘆きたまふ」とほのぼの

えたまはず、我かのさまにておはし着きたり。

人びと、「いづこよりおはしますにか。なやましげに見えさせたまふ」など言へど、御帳の内に入りたまひて、胸をおさへて思ふに、いといみじければ、などて乗り添ひて行かざりつらむ、生き返りたらむ時いかなる心地せむ、見捨てて行きあかれにけりとつらくや思はむ、と心惑ひのなかにも思ほすに、御胸せきあぐる心地したまふ。御頭も痛く、身も熱き心地して、いと苦しく惑はれたまへば、かくはかなくて我もいたづらになりぬるなめりと思す。

日高くなれど、起き上がりたまはねば、人びとあやしがりて、御粥などそそのかしきこゆれど、苦しくて、いと心細く思さるるに、内より御使あり。昨日え尋ね出でたてまつらざりしより、おぼつかながらせたまふ。大殿の君達参りたまへど、頭中将ばかりを、「立ちながらこなたに入りたまへ」とのたまひて、御簾の内ながらのたまふ。「乳母にてはべる者の、この五月のころほひより重くわづらひはべりしが、頭剃り忌むこと受けなどして、そのしるしにやよみがへりたりしを、このごろまたおこりて、弱くなむなりにたる、今一たびとぶらひ見よと申したりしかば、いときなきよりなづさひし者の、今はのきぎみにつらしとや思はむと思うたまへてまかれりしに、その家なりける下人の病しけるが、にはかに出であへで亡くなりけるを、怖ぢ憚りて、日を暮らしてなむ取り出ではべりけるを、聞きつけはべりしかば、神事なるころいと不便なることと思うたまへかしまりて、え参らぬなり。この暁より、しはぶき病みにやはべらむ、頭いと痛くて苦しきはべれば、いと無礼にて聞こゆること」などのたまふ。中将、「さらば、さるよしをこそ奏しはべらめ。よべも御遊びにかしく求めたてまつらせたまひて、御気色悪しくはべりき」と聞こえたまひて、立ち返り、「いかなる行き触れにかからせたまふぞや。述べやらせたまふことこそまことと思うたまへられね」と言ふに、胸つぶれたまひて、「かくこまかに

なむある。かかるとみの事には誦経などをこそはすなれとて、その事どももせさせむ、願なども立てさせむとて、阿闍梨ものせよと言ひつるは」とのたまふに、「昨日、山へまかり上りにけり。まづいとめづらかなることにもはべるかな。かねて例ならず御心地ものせさせたまふことやはべりつらむ」「さることもなかりつ」とて泣きたまふさま、いとをかしげにらうたく、見たてまつる人もいと悲しくて、おのれもよよと泣きぬ。さいへど、年うちねび、世の中のあることとしほじみぬる人こそものをりふしは頼もしかりけれ、いづれもいづれも若きどちにて、言はむ方もなけれど、「この院守などに聞かせむことはいと便なかるべし。この人一人こそ睦しくもあらめ、おのづから物言ひ漏らしつべき眷属も立ちまじりたらむ。まづこの院を出でおはしましね」と言ふ。

「さてこれより人少ななる所はいかでかあらむ」とのたまふ。「げにさぞはべらむ。かの故里は女房などの悲しびに堪へず泣き惑ひはべらむに、隣しげく、とがむる里人多くはべらむに、おのづから聞こえはべらむを、山寺こそなほかやうのことおのづから行きまじり物紛るることはべらめ」と思ひまはして、

「昔見たまへし女房の尼にてはべる、東山の辺に移したてまつらむ。惟光が父の朝臣の乳母にはべりし者のみづはぐみて住みはべるなり。あたりは人しげきやうにはべれど、いとかがかにはべり」と聞こえて、明けはなるほどの紛れに御車寄す。この人をえ抱きたまふまじければ、上蓆におしくくみて、惟光乗せてまつる。いとささやかにて、疎ましげもなくらうたげなり。したたかにしもえせねば、髪はこぼれ出でたるも、目くれ惑ひてあさましう悲しと思せば、なり果てむさまを見むと思せど、「はや御馬にて二条院へおはしまさむ。人騒がしくなりはべらぬほどに」とて、右近を添へて乗すれば、徒歩より、君に馬はたてまつりて、くくり引き上げなどして、かつはいとあやしくおぼえぬ送りなれど、御気色のいみじきを見たてまつれば身を捨てて行くに、君は物もおぼ

なり」など物のたまふやうなれど、胸塞がりて、この人を空しくしなしてむことのみじく思さるるに添へて、大方のむくむくしきたとへむ方なし。夜中も過ぎにけむかし、風のやや荒々しう吹きたるは。まして松の響き木深く聞こえて、気色ある鳥のから声に鳴きたるも、ふくろうはこれにやとおぼゆ。うち思ひめぐらすに、こなたかなたけどほく疎ましきに、人声はせず、などてかくはかなき宿りは取りつるぞ、と悔しさもやらむ方なし。右近は物もおぼえず、君につと添ひたてまつりて、わななき死ぬべし。またこれもいかならむと心そらにて捉へたまへり。我一人さかしき人にて、思しやる方ぞなきや。火はほのかにまたたきて、母屋の際に立てたる屏風の上、ここかしこの隈々しくおぼえたまふに、物の足音ひしひしと踏み鳴らしつつ後ろより寄り来る心地す。惟光とく参らなむと思す。ありか定めぬ者にて、ここかしこ尋ねけるほどに、夜の明くるほどの久しきは千夜を過ぎさむ心地したまふ。からうして鳥の声はるかに聞こゆるに、命をかけて何の契りにかかる目を見るらむ、我が心ながらかかる筋におほけなくあるまじき心の報いに、かく来し方行く先の例となりぬべきこととはあるなめり、忍ぶとも世にあること隠れなくて、内に聞こし召さむをはじめ、人の思ひ言はむこと、よからぬ童べの口ずさびになるべきなめり、ありありてをこがましき名をとるべきかな、と思しめぐらす。

からうして惟光の朝臣参れり。夜中、暁といはず御心に従へる者の、今宵しもさぶらはで召しにさへおこたりつるを、憎しと思すものから、召し入れてのたまひ出でむことのおへなきに、ふとも物言はれたまはず。右近、大夫のけはひ聞くに、初めよりのことうち思ひ出でられて泣くを、君もえ堪へたまはで、我一人さかしがり抱き持たまへりけるに、この人に息をのべたまひてぞ悲しきことも思されける、とばかり、いといたくえもとどめず泣きたまふ。ややためらひて、「ここに、いとあやしきことのあるを、あさましと言ふにもあまりて

つぶし臥してはべるや。御前にこそわりなく思さるらめ」と言へば、「そよ、
などかうは」とてかい探りたまふに、息もせず。引き動かしたまへど、なよな
よとして我にもあらぬさまなれば、いといたく若びたる人にて、物にけどられ
ぬるなめり、とせむかたなき心地したまふ。紙燭持て参れり。右近も動くべき
さまにもあらねば、近き御几帳を引き寄せて、「なほ持て参れ」とのたまふ。
例ならぬことにて、御前近くもえ参らぬつつましさに、長押にもえ上らず。

「なほ持て来や。所に従ひてこそ」とて召し寄せて見たまへば、ただこの枕上
に、夢に見えつるかたちしたる女、面影に見えてふと消え失せぬ。昔の物語な
どにこそかかることは聞け、といとめづらかにむくつけけれど、まづこの人い
かになりぬるぞと思ほす心騒ぎに、身の上も知られたまはず添ひ臥して、「や
や」とおどろかしたまへど、ただ冷えに冷え入りて、息はとく絶え果てにけり。
言はむかたなし。頼もしくいかにと言ひ触れたまふべき人もなし。法師などを
こそはかかる方の頼もしきものには思すべけれど、さこそ強がりたまへど、若
き御心にて、いふかひなくなりぬるを見たまふに、やるかたなくて、つと抱き
て、「あが君、生き出でたまへ。いとみじき目な見せたまひそ」とのたまへ
ど、冷え入りにたれば、けはひものうとくなりゆく。右近は、ただあなむつか
しと思ひける心地みな冷めて、泣き惑ふさまいといみじ。南殿の鬼のなにがし
の大臣おびやかしかけるたとひを思し出でて、心強く、「さりともしたづらにな
り果てたまはじ。夜の声はおどろおどろし。あなかま」と諫めたまひて、いと
あわたたしきにあきれたる心地したまふ。

この男を召して、「ここに、いとあやしう、物に襲はれたる人のなやましげ
なるを、「ただ今惟光朝臣の宿る所にまかりて、急ぎ参るべきよし言へ」と仰
せよ。なにがし阿闍梨そこにもものするほどならば、ここに来べきよし忍びて言
へ。かの尼君などの聞かむに、おどろおどろしく言ふな。かかる歩き許さぬ人

きたまへれば、火も消えにけり。うたて思さるれば、太刀を引き抜きて、うち置きたまひて、右近を起こしたまふ。これも恐ろしと思ひたるさまにて参り寄れり。「渡殿なる宿直人起こして、「紙燭さして参れ」と言へ」とのたまへば、「いかでかまからむ。暗うて」と言へば、「あな若々し」とうち笑ひたまひて、手をたたきたまへば、山彦の答ふる声いとうとまし。人え聞きつけで参らぬに、この女君いみじくわななきまどひて、いかさまにせむと思へり。汗もしとどになりて、我かの気色なり。「物怖ぢをなむわりなくせさせたまふ本性にて、いかに思さるるにか」と右近も聞こゆ。いと弱くて、昼も空をのみ見つるものを、いとほし、と思して、「我人を起こさむ。手たたけば山彦の答ふる、いとうるさし。ここに、しばし、近く」とて、右近を引き寄せたまひて、西の妻戸に出でて、戸を押し開けたまへれば、渡殿の火も消えにけり。風すこしうち吹ききたるに、人は少なくて、さぶらふ限りみな寝たり。この院の預りの子、むつましく使ひたまふ若き男、また上童一人、例の隨身ばかりぞありける。召せば御答へして起きたれば、「紙燭さして参れ。「隨身も弦打ちして絶えず声づくれ」と仰せよ。人離れたる所に心とけて寝ぬるものか。惟光の朝臣の来たりつらむは」と問はせたまへば、「さぶらひつれど仰せ言もなし、暁に御迎へに参るべきよし申してなむまかではべりぬる」と聞こゆ。このかう申す者は、滝口なりければ、弓弦いとつきづきしくうち鳴らして、「火あやふし」と言ふ言ふ預りが曹司の方に去ぬなり。内を思しやりて、名対面は過ぎぬらむ、滝口の宿直申今こそ、と推し量りたまふは、まだいたう更けぬにこそは。返入りて探りたまへば、女君はさながら臥して、右近はかたはらにうつぶし臥したり。「こはなぞ。あなもの狂ほしの物怖ぢや。荒れたる所は狐などやうのものの人をおどびやかさむとてけ恐ろしう思はするならむ。まろあればさやうのものにはおどされじ」とて引き起こしたまふ。「いとうたて乱り心地の悪しうはべれば、う

からまいてゆゆしきまで見えたまふ。「尽きせず隔てたまへるつらさに、あらはさじと思ひつるものを。今だに名のりしたまへ。いとむくつけし」とのたまへど、「海人の子なれば」とてさすがにうちとけぬさま、いとあいだれたり。

「よし、これも我からなめり」と怨み、かつは語らひ暮らしたまふ。

惟光尋ねきこえて、御くだものなど参らす。右近が言はむこと、さすがにとほしければ、近くもえさぶらひ寄らず。かくまでたどり歩きたまふをかしう、さもありぬべきありさまにこそは、と推し量るにも、我がいとよく思ひ寄りぬべかりしことを譲りきこえて、心ひろさよ、などめざましう思ひをる。

たとしへなく静かなる夕べの空を眺めたまひて、奥の方は暗うものむつかし、と女は思ひたれば、端の簾を上げて添ひ臥したまへり。夕映えを見交はして、女もかかるありさまを思ひのほかにあやしき心地はしながら、よろづの嘆き忘れてすこしうちとけゆく気色、いとらうたし。つと御かたはらに添ひ暮らして、物をいと恐ろしと思ひたるさま、若う心苦し。格子とく下ろしたまひて、大殿油参らせて、「名残りなくなりたる御ありさまにて、なほ心のうちの隔て残したまへるなむつらき」と恨みたまふ。

内にいかに求めさせたまふらむを、いづこに尋ぬらむと思しやりて、かつは、あやしの心や、六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらむ、恨みられむに苦しうことわりなり、いとほしき筋はまづ思ひきこえたまふ。何心もなきさしむかひをあはれと思すまみに、あまり心深く、見る人も苦しき御ありさまをすこし取り捨てばや、と思ひ比べられたまひける。

宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに、御枕上にいとをかしげなる女ゐて、「おがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思ほさで、かくことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそいとめざましくつらけれ」とて、この御かたはらの人をかき起こさむとす、と見たまふ。物に襲はるる心地しておどろ

慣らひたまへりや」とのたまふ。女、恥ぢらひて、

「山の端の心も知らで行く月はうはの空にて影や絶えなむ

心細く」とて、もの恐ろしうすぐげに思ひたれば、かのさし集ひたる住まひの慣らひならむ、とをかしく思す。御車入れさせて、西の対に御座などよそふほど、高欄に御車ひきかけて立ちたまへり。右近艶なる心地して、来し方のことなども人知れず思ひ出でけり。預りいみじく経営しありく気色に、この御ありさま知りはてぬ。ほのぼのと物見ゆるほどに下りたまひぬめり。かりそめなれど清げにしつらひたり。「御供に人もさぶらはざりけり。不便なるわざかな」とて、むつまじき下家司にて、殿にも仕うまつる者なりければ、参りよりて、「さるべき人召すべきにや」など申さすれど、「ことさらに人来まじき隠れ家求めたるなり。さらに心よりほかに漏らすな」と口がためさせたまふ。御粥など急ぎ参らせたれど、取り次ぐ御まかなひうち合はず。まだ知らぬことなる御旅寝に息長川と契りたまふことよりほかのことなし。

日たくるほどに起きたまひて、格子手づから上げたまふ。いといたく荒れて人目もなく、はるばると見渡されて、木立いとうとましくものふりたり。け近き草木などはことに見所なく、みな秋の野らにて、池も水草に埋もれたれば、いとけうとげになりにける所かな。別納の方にぞ曹司などして人住むべかめれど、こなたは離れたり。「けうとくもなりにける所かな。さりとも鬼なども我をば見許してむ」とのたまふ。顔はなほ隠したまへれど、女のいとつらしと思へれば、げにかばかりにて隔てあらむもことのさまに違ひたりと思して、

「夕露に紐とく花は玉銚のたよりに見えし縁にこそありけれ

露の光やいかに」とのたまへば、後目に見おこせて、

「光ありと見し夕顔のうは露はたそかれ時のそら目なりけり

とほのかに言ふ。をかしと思しなす。げにうちとけたまへるさま世になく、所

たり近き所に心安くて明かさむ。かくてのみはいと苦しかりけり」とのたまへば、「いかでか。にはかならむ」といとおいらかに言ひてゐたり。この世のみならぬ契りなどまで頼めたまふに、うちとくる心ばへなどあやしくやう変はりて、世馴れたる人もおぼえねば、人の思はむ所もえ憚りたまはで、右近を召し出でて、隨身を召させたまひて、御車引き入れさせたまふ。このある人びともかかる御心ざしのおろかならぬを見知れば、おぼめかしながら頼みかけきこえたり。明け方も近うなりにけり。鳥の声などは聞こえて、御嶽精進にやあらむ、ただ翁びたる声にぬかづくぞ聞こゆる。立ち居のけはひ堪へがたげに行ふ、いとあはれに、朝の露に異ならぬ世を、何をむさぼる身の祈りにか、と聞きたまふ。「南無当来導師」とぞ拝むなる。「かれ聞きたまへ。この世とのみは思はざりけり」とあはれがりたまひて、

優婆塞が行ふ道をしるべにて来む世も深き契り違ふな

長生殿の古き例はゆゆしくて、翼を交さむとは引きかへて、弥勒の世をかねたまふ。行く先の御頼めいとこちたし。

前の世の契り知らるる身の憂さに行く末かねて頼みがたさよ

かやうの筋なども、さるは心もとなかめり。

いさよふ月に、ゆくりなくあくがれむことを女は思ひやすらひ、とかくのたまふほど、にはかに雲隠れて、明け行く空いとをかし。はしたなきほどにならぬ先にと、例の急ぎ出でたまひて、軽らかにうち乗せたまへれば、右近ぞ乗りぬる。そのわたり近きなにがしの院におはしまし着きて、預り召し出づるほど、荒れたる門の忍ぶ草茂りて見上げられたる、たとしへなく木暗し。霧も深く露けきに、簾をさへ上げたまへれば、御袖もいたく濡れにけり。「まだかやうなることを慣らはざりつるを、心尽くしなることにもありけるかな。

いにしへもかくやは人の惑ひけむ我がまだ知らぬしののめの道

八月十五夜、隈なき月影、隙多かる板屋残りなく漏り来て、見慣らひたまはぬ住まひのさまも珍しきに、暁近くなりけるなるべし、隣の家々、あやしきしづのをの声々、目覚まして、「あはれ、いと寒しや」「今年こそなりはひにも頼むところすくなく、田舎の通ひも思ひかけねば、いと心細けれ。北殿こそ、聞きたまふや」など言ひ交はすも聞こゆ。いとあはれなるおのがじしの営みに起き出でてそそめき騒ぐもほどなきを、女いと恥づかしく思ひたり。艶だち気色ばまむ人は消えも入りぬべき住まひのさまなめりかし。されど、のどかに、つらきも憂きもかたはらいたきことも思ひ入れたるさまならで、我がもてなしありさまはいとあてはかにこめかしくて、またなくらうがはしき隣の用意なきをいかなる事とも聞き知りたるさまならねば、なかなか恥ぢかかやかむよりは罪許されてぞ見えける。ごほごほと鳴る神よりもおどろおどろしく踏み轟かす唐臼の音も枕上とおぼゆる、あな耳かしかましとこれにぞ思さるる。何の響きとも聞き入れたまはず、いとあやしうめざましき音なひとのみ聞きたまふ。くだくだしきことのみ多かり。白妙の衣うつ砧の音もかすかにこなたかなた聞きわたされ、空飛ぶ雁の声、取り集めて忍びがたきこと多かり。端近き御座所なりければ、遣戸を引き開けてもろともに見出だしたまふ。ほどなき庭に、されたる呉竹、前栽の露はなほかかる所も同じごときらめきたり。虫の声々乱りがはしく、壁のなかの蟋蟀だに、間遠に聞き慣らひたまへる御耳にさし当てたるやうに鳴き乱るるを、なかなかさまかへて思さるるも、御心ざし一つの浅からぬによるづの罪許さるるなめりかし。白き袷、薄色のなよやかなるを重ねて、はなやかならぬ、姿いとらうたげにあえかなる心地して、そこと取り立ててすぐれたることもなければ、細やかにたをたをとして、ものうち言ひたるけはひ、あな心苦しと、ただいとらうたく見ゆ。心ばみたる方をすこし添へたらば、と見たまひながら、なほうちとけて見まほしく思さるれば、「いぎ、ただこのわ

変へ、顔をもほの見せたまはず、夜深きほどに、人をしづめて出で入りなどしたまへば、昔ありけむものの変化めきて、うたて思ひ嘆かるれど、人の御けはひはた手さぐりもしるべきわざなりければ、誰ればかりにかはあらむ、なほこの好き者のし出でつるわざなめり、と大夫を疑ひながら、せめてつれなく知らず顔にて、かけて思ひよらぬさまにたゆまずあざれありけば、いかなることにかと心得がたく、女方もあやしうやう違ひたるもの思ひをなむしける。

君も、かくうらなくたゆめてはひ隠れなば、いづこをはかりとか我も尋ねむ、かりそめの隠れがとはた見ゆめれば、いづ方にもいづ方にも移ろひゆかむ日をいつとも知らじ、と思すに、追ひまどはしてなのめに思ひなしつべくは、ただかばかりのすさびにても過ぎぬべきことを、さらにさて過ぐしてむと思されず。人目を思して隔ておきたまふ夜な夜などは、いと忍びがたく苦しきまでおぼえたまへば、なほ誰れとなくて二条院に迎へてむ、もし聞こえありて便なかるべきことなりともさるべきにこそは、我が心ながらいとかく人にしむことはなきを、いかなる契りにかはありけむ、など思ほしよる。

「いざ、いと心安き所にて、のどかに聞こえむ」など語らひたまへば、「なほあやしう、かくのたまへど、世づかぬ御もてなしなれば、もの恐ろしくこそあれ」といと若びて言へば、げに、とほほ笑まれたまひて、「げにいづれか狐なるらむな。ただはかられたまへかし」となつかしげにのたまへば、女もいみじくなびきて、さもありぬべく思ひたり。世になくかたはなることなりとも、ひたぶるに従ふ心はいとあはれげなる人と見たまふに、なほかの頭中将の常夏疑はしく、語りし心ざままづ思ひ出でられたまへど、忍ぶるやうこそは、とあながちにも問ひ出でたまはず。気色ばみて、ふと背き隠るべき心ざまなどはなければ、かれがれにとだえ置かむ折こそはさやうに思ひ変ることもあらめ、心ながらもすこし移ろふことあらむこそあはれなるべけれ、ときへ思しけり。

にても、宿れる住ひのほどを思ふに、これこそかの人の定めあなづりし下の品ならぬ、その中に思ひの外にをかきこともあらば、など思すなりけり。惟光いささかのことも御心に違はじと思ふに、おのれも隈なき好き心にて、いみじくたばかりまどひ歩きつつ、しひておはしまさせ初めてけり。このほどのことくだくだしければ、例のもらしつ。

女、さしてその人と尋ね出でたまはねば、我も名のりをしたまはで、いとわりなくやつれたまひつつ、例ならず下り立ちありきたまふは、おろかに思されぬなるべしと見れば、我が馬をばたてまつりて、御供に走りありく。「懸想人のいともものげなき足もとを見つけられてはべらむ時、からくもあるべきかな」とわぶれど、人に知らせたまはぬままに、かの夕顔のしるべせし隨身ばかり、さては顔むげに知るまじき童一人ばかりぞ率ておはしける。もし思ひよる気色もやとて、隣に中宿りをだにしたまはず。女も、いとあやしく心得ぬ心地のみして、御使に人を添へ、暁の道をうかがはせ、御ありか見せむと尋ぬれど、そこはかとなくまどはしつつ、さすがにあはれに見ではえあるまじくこの人の御心にかかりたれば、便なく軽々しきことと思ほし返しわびつつ、いとしばしばおはします。

かかる筋はまめ人の乱るる折もあるを、いとめやすくしづめたまひて、人のとがめきこゆべき振る舞ひはしたまはざりつるを、あやしきまで、今朝のほど昼間の隔てもおぼつかなくなど思ひわづらはれたまへば、かつは、いとももの狂ほしくさまで心とどむべきことのさまにもあらず、といみじく思ひさましたまふに、人のけはひ、いとあさましくやはらかにおほどきて、もの深く重き方はおくれて、ひたぶるに若びたるものから世をまだ知らぬにもあらず、いとやむごとなきにはあるまじ、いづくにいとかうしもとまる心ぞ、と返す返す思す。

いとことさらめきて、御装束をもやつれたる狩の御衣をたてまつり、さまを

きにてなほこの御あたりにさぶらはせむと思ひ寄らぬはなかりけり。まして、さりぬべきついでの御言の葉もなつかしき御気色を見たてまつる人の、すこし物の心思ひ知るは、いかがはおろかに思ひきこえむ。明け暮れうちとけてしもおはせぬを心もとなきことに思ふべかめり。

まことや、かの惟光が預かりのかいま見は、いとよく案内見とりて申す。

「その人とはさらにえ思ひえはべらず。人にいみじく隠れ忍ぶる気色になむ見えはべるを、つれづれなるままに、南の半蔀ある長屋にわたり来つつ、車の音すれば、若き者どもの覗きなどすべかめるに、この主とおぼしきものはひわたる時はべかめる。かたちなむほのかなれどいとらうたげにはべる。一日、前駆追ひて渡る車のはべりしを覗きて、童女の急ぎて、「右近の君こそ、まづ物見たまへ。中将殿こそこれより渡りたまひぬれ」と言へば、またよろしき大人出で来て、「あなかま」と手かくものから、「いかでさは知るぞ、いで見む」とてはひ渡る。打橋だつものを道にてなむ通ひはべる。急ぎ来るものは、衣の裾を物に引きかけて、よろぼひ倒れて、橋よりも落ちぬべければ、「いで、この葛城の神こそさがしうしおきたれ」とむつかりて、物覗きの心も冷めぬめりき。

「君は御直衣姿にて、御隨身どももありしなにがし、くれがし」と数へしは、頭中将の隨身、その小舎人童をなむしるしに言ひはべりし」など聞こゆれば、「たしかにその車をぞ見まし」とのたまひて、もしかのあはれに忘れざりし人にや、と思ほしよるも、いと知らまほしげなる御気色を見て、私の懸想もいとよくしおきて、「案内も残るところなく見たまへおきながら、ただ我れどちと知らせて物など言ふ若きおもとのはべるを、そらおぼれしてなむ隠れまかり歩く。いとよく隠したりと思ひて、小さき子どもなどはべるが言誤りしつべきも言ひ紛らはして、また人なきさまを強ひてつくりはべる」など語りて笑ふ。

「尼君の訪ひにもせむついでに、かいま見せさせよ」とのたまひけり。かり

秋にもなりぬ。人やりならず心づくしに思し乱るることどもありて、大殿には絶え間置きつつ、恨めしくのみ思ひ聞こえたまへり。六条わたりにも、とけがたかりし御気色をおもむけ聞こえたまひて後、ひき返しなのめならむはいとほしかし。されど、よそなりし御心惑ひのやうにあながちなる事はなきも、いかなることにかと見えたり。女は、いとものをあまりなるまで思ししめたる御心ぎまにて、齡のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜がれの寝覚め寝覚め、思ししをるることいとさまざまなり。霧のいと深きあした、いたくそそのかされたまひて、ねぶたげなる気色にうち嘆きつつ出でたまふを、中将のおもと、御格子一間上げて、見たてまつり送りましたまへとおぼしく御几帳引きやりたれば、御頭もたげて見出だしたまへり。前裁の色々乱れたるを、過ぎがてにやすらひたまへるさま、げにたぐひなし。廊の方へおはするに、中将の君、御供に参る。紫苑色の折にあひたる、薄物の裳鮮やかに引き結ひたる腰つき、たをやかになまめきたり。見返りたまひて、隅の間の高欄にしばしひき据ゑたまへり。うちとけたらぬもてなし、髪の下がりば、めざましくもと見たまふ。

「咲く花に移るてふ名はつつめども折らで過ぎ憂き今朝の朝顔

いかがすべき」とて、手をとらへたまへれば、いと馴れてとく、

朝霧の晴れ間も待たぬ気色にて花に心を止めぬとぞ見る

とおほやけごとにぞ聞こえなす。をかしげなる侍童の、姿このましようことさrameきたる、指貫の裾露けげに花の中に混りて朝顔折りて参るほどなど、絵にかまほしげなり。大方にうち見たてまつる人だに心とめたてまつらぬはなし。物の情け知らぬ山がつも、花の蔭にはなほやすらはまほしきにや、この御光を見たてまつるあたりは、ほどほどにつけて、我がかなしと思ふむすめを仕うまつらせばやと願ひ、もしは口惜しからずと思ふいもうとなど持たる人は、卑し

さて、かの空蟬のあさましくつれなきを、この世の人には違ひて思すに、おいらかならましかば心苦しき過ちにてもやみぬべきを、いとねたく負けてやみなむを、心にかからぬ折なし。かやうの並々までは思ほしかからざりつるを、ありし雨夜の品定めの後いぶかしく思ほしなる品々あるに、いとど隈なくなりぬる御心なめりかし。うらもなく待ちきこえ顔なる片つ方人を、あはれと思さぬにしもあらねど、つれなくて聞きゐたらむことの恥づかしければ、まづこなたの心見果ててと思すほどに、伊予の介上りぬ。まづ急ぎ参れり。舟路のしわざとて、すこし黒みやつれたる旅姿、いとふつつかに心づきなし。されど人もいやしからぬ筋に、かたちなどねびたれどきよげにて、ただならず気色よしづきてなどぞありける。国の物語など申すに、湯桁はいくつ、と問はまほしく思せど、あいなくまばゆくて、御心のうちに思し出づることもさまざまなり。ものまめやかなる大人をかく思ふもげにをこがましく、うしろめたきわざなりや。げにこれぞなのめならぬ片はなべかりける、と馬の頭の諫め思し出でていとほしきに、つれなき心はねたけれど、人のためはあはれと思しなきる。娘をばさるべき人に預けて、北の方をば率て下りぬべし、と聞きたまふに、ひとかたならず心あわたたしくて、今一度はえあるまじきことにや、と小君を語らひたまへど、人の心を合せたらむことにてだに軽らかにえしも紛れたまふまじきを、まして似げなきことに思ひて、今さらに見苦しかるべしと思ひ離れたり。さすがに絶えて思ほし忘れなむこともいと言ふかひなく憂かるべきことに思ひて、さるべき折々の御いらへなどなつかしく聞こえつつ、なげの筆づかひにつけたる言の葉、あやしくらうたげに目とまるべきふし加へなどして、あはれと思しぬべき人のけはひなれば、つれなくねたきものの、忘れがたきに思す。いま一方は、主強くなるとも、変らずうちとけぬべく見えしさまなるを頼みて、とかく聞きたまへど、御心も動かずぞありける。

垣根思ほし出でらるべくもあらずかし。つとめて、すこし寝過ぐしたまひて、日さし出づるほどに出でたまふ。朝けの姿はげに人のめできこえむもことわりなる御さまなりけり。今日もこの薮の前渡りしたまふ。来し方も過ぎたまひけむわたりなれど、ただはかなき一ふしに御心とまりて、いかなる人の住み処ならむとは行き来に御目とまりたまひけり。

惟光、日頃ありて参れり。「わづらひはべる人、なほ弱げにはべれば、とかく見たまへあつかひてなむ」など聞こえて、近く参り寄りて聞こゆ。「仰せられしのちなむ隣のこと知りてはべる者呼びて問はせはべりしかど、はかばかしくも申しはべらず。「いと忍びて五月のころほひよりものしたまふ人なむあるべけれど、その人とはさらに家の内の人にだに知らせず」となむ申す。時々中垣のかいま見しはべるに、げに若き女どもの透影見えはべり。褶だつものかことばかり引きかけて、かしづく人はべるなめり。昨日、夕日のなごりなくさし入りてはべりしに、文書くとてみてはべりし人の顔こそいとよくはべりしか。もの思へるけはひして、ある人びとも忍びてうち泣くさまなどなむしるく見えはべる」と聞こゆ。君うち笑みたまひて、知らばやと思ほしたり。おぼえこそ重かるべき御身のほどなれど、御よはひのほど、人のなびきめできこえたるさまなど思ふには、好きたまはざらむも情けなくさうぎうしかるべしかし、人のうけひかぬほどにてだになほさりぬべきあたりのことはこのましようおぼゆるものを、と思ひをり。「もし見たまへ得ることもやはべると、はかなきついで作り出でて消息など遣はしたりき。書き馴れたる手して、口とく返り事などしはべりき。いと口惜しうはあらぬ若人どもなむはべるめる」と聞こゆれば、「なほ言ひ寄れ。尋ね寄らではさうぎうしかりなむ」とのたまふ。かの下が下と人の思ひ捨てし住まひなれど、その中にも思ひのほか口惜しからぬを見つけたらば、とめづらしく思ほすなりけり。

なつかしくて、をかしうすき書きたり。

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

そこはかたなく書き紛らはしたるもあてはかにゆゑづきたれば、いと思ひのほかにをかしうおぼえたまふ。惟光に、「この西なる家は何人の住むぞ。問ひ聞きたりや」とのたまへば、例のうるさき御心とは思へども、えさは申さで、

「この五六日ここにはべれど、病者のことを思うたまへ扱ひはべるほどに、隣のことはえ聞きはべらず」などはしたなやかに聞こゆれば、「憎しとこそ思ひたれな。されど、この扇の尋ぬべきゆゑありて見ゆるを、なほこのわたりの心知れらむ者を召して問へ」とのたまへば、入りてこの宿守なる男を呼びて問ひ聞く。「揚名の介なる人の家になむはべりける。「男は田舎にまかりて、妻なむ若く事好みて、はらからなど宮仕人にて来通ふ」と申す。詳しくことは下人のえ知りはべらぬにやあらむ」と聞こゆ。さらばその宮仕人なり、したり顔にももの馴れて言へるかなと、めざましかるべき際にやあらむと思せど、さして聞こえかかれる心の憎からず過ぐしがたきぞ例のこの方には重からぬ御心なめるかし。御畳紙にいたうあらぬさまに書き変へたまひて、

寄りてこそそれかとも見めたそかれにほのぼの見つる花の夕顔

ありつる御隨身して遣はす。まだ見ぬ御さまなりけれど、いとしく思ひあてられたまへる御側目を、見過ぐさでさしおどろかしけるを、いらへたまははほど経ければ、なまはしたなきに、かくわざとめかしければ、あまえて、「いかに聞こえむ」など言ひしろふべかめれど、めざましと思ひて隨身は参りぬ。御前駆の松明ほのかにて、いと忍びて出でたまふ。半蔀は下ろしてけり。隙々より見ゆる灯の光、螢よりけにほのかにあはれなり。

御心ざしの所には、木立、前栽などなべての所に似ず、いとどのかに心にくく住みなしたまへり。うちとけぬ御ありさまなどの気色ことなるに、ありつる

惟光が兄の阿闍梨、婿の三河守、娘など渡り集ひたるほどに、かくおはしましたる喜びをまたなきことにかしこまる。尼君も起き上がりて、「惜しげなき身なれど、捨てがたく思うたまへつることは、ただかく御前にさぶらひ御覽ぜらるることの、変りはべりなむことを口惜しく思ひたまへたゆたひしかど、忌むことのしるしによみがへりてなむ。かく渡りおはしますを見たまへはべりぬれば、今なむ阿弥陀仏の御光も心清く待たればべき」など聞こえて、弱げに泣く。「日ごろおこたりがたくものせらるるを、安からず嘆きわたりつるに、かく世を離るるさまにもしたまへば、いとあはれに口惜しうなむ。命長くなほ位高くなど見なしたまへ。さてこそ九品の上にも障りなく生まれたまはめ。この世にすこし恨み残るはわろきわざとなむ聞く」など涙ぐみてのたまふ。かたほなるをだに乳母やうの思ふべき人はあさましようまほに見なすものを、ましていと面立たしう、なづさひ仕うまつりけむ身もいたはしう、かたじけなく思ほゆべかめれば、すずろに涙がちなり。子どもはいと見苦しと思ひて、背きぬる世の去りがたきやうにみづからひそみ御覽ぜられたまふ、とつきしろひ目くはす。君はいとあはれと思ほして、「いはけなかりけるほどに、思ふべき人びとのうち捨ててものしたまひにけるなごり、育む人あまたあるやうなりしかど、親しく思ひ睦ぶる筋はまたなくなむ思ほえし。人となりて後は限りあれば、朝夕にしもえ見たてまつらず、心のままに訪らひ参うづることはなけれど、なほ久しう対面せぬ時は心細くおぼゆるを、さらぬ別れはなくもがな」となむこまやかに語らひたまひて、おし拭ひたまへる袖のほひも、いと所狭きまで薫り満ちたるに、げによに思へばおしなべたらぬ人の御宿世ぞかすと、尼君をもどかしと見つる子ども皆うちしほたれけり。

修法などまたまた始むべきことなど掟てのたまはせて、出でたまふとて、惟光に紙燭召して、ありつる扇御覧ずれば、もて馴らしたる移り香いと染み深う

六条わたりの御忍び歩きのところ、内よりまかでたまふ中宿りに、大武の乳母のいたくわづらひて尼になりにけるとぶらはむとて、五条なる家尋ねておはしたり。御車入るべき門は鎖したりければ、人して惟光召させて待たせたまひけるほど、むつかしげなる大路のさまを見わたしたまへるに、この家のかたはらに、桧垣といふもの新しうして、上は半葎四五間ばかり上げわたして、簾などもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの透影あまた見えて覗く。立ちさまよふらむ下つ方思ひやるに、あながちに丈高き心地ぞする。いかなる者の集へるならむとやうかはりて思さる。御車もいたくやつしたまへり、前駆も追はせたまはず、誰れとか知らむとうちとけたまひて、すこしさし覗きたまへれば、門は葎のやうなる押し上げたる、見入れのほどなくものはかなき住まひを、あはれに何処かさしてと思ほしなせば、玉の台も同じことなり。切懸だつ物に、いと青やかなる葛の心地よげに這ひかかれるに、白き花ぞおのれひとり笑みの眉開けたる、「遠方人にももの申す」と独りごちたまふを、御隨身ついで、「かの白く咲けるをなむ夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になむ咲きはべりける」と申す。げにいと小家がちにむつかしげなるわたりの、このもかのも、あやしきうちよろぼひてむねむねしからぬ軒のつまなどに這ひまつはれたるを、「口惜しの花の契りや。一房折りて参れ」とのたまへば、この押し上げたる門に入りて折る。さすがにされたる遣戸口に、黄なる生絹の单袴長く着なしたる童のをかしげなる出で来て、うち招く。白き扇のいたうこがしたるを、「これに置いて参らせよ。枝も情けなげなめる花を」とて取らせたれば、門開けて惟光朝臣出で来たるして、奉らす。「鍵を置きまどはしはべりて。いと不便なるわざなりや。ものあやめ見たまへ分くべき人もはべらぬわたりなれど、らうがはしき大路に立ちおはしまして」とかしこまり申す。引き入れて下りたまふ。

夕

顔

なれば、人知れずうちながめてゐたり。小君の渡り歩くにつけても胸のみ塞がれど、御消息もなし。あさましと思ひ得る方もなくて、されたる心にもものあはれなるべし。つれなき人もさこそしづむれ、いとあさはかにもあらぬ御気色を、ありしながらのわが身ならばと、取り返すものならねど、忍びがたければ、この御畳紙の片つ方に、

空蟬の羽に置く露の木隠れて忍び忍びに濡るる袖かな

みて、いとわりなければ下にはべりつるを、人少ななりとて召ししかば、よべ参う上りしかど、なほえ堪ふまじくなむ」と憂ふ。いらへも聞かで、「あな腹々。今聞こえむ」とて過ぎぬるに、からうして出でたまふ。なほかかる歩きは軽々しくあやしかりけりといよいよ思し懲りぬべし。

小君御車の後にて、二条院におはしましぬ。ありさまのたまひて、「幼かりけり」とあはめたまひて、かの人の心を爪弾きをしつつ恨みたまふ。いとほしうてもものもえ聞こえず。「いと深う憎みたまふべかめれば、身も憂く思ひ果てぬ。などかよそにてもなつかしきいらへばかりはしたまふまじき。伊予の介に劣りける身こそ」など、心づきなしと思ひてのたまふ。ありつる小桂をさすがに御衣の下に引き入れて大殿籠もれり。小君を御前に臥せて、よろづに恨み、かつは語らひたまふ。「あこはらうたけれど、つらきゆかりにこそえ思ひ果つまじけれ」とまめやかにのたまふを、いとわびしと思ひたり。しばしうち休みたまへど、寝られたまはず。御硯急ぎ召して、さしはへたる御文にはあらで、畳紙に手習のやうに書きすさびたまふ。

空蟬の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな

と書きたまへるを、懐に引き入れて持たり。かの人もいかに思ふらむといとほしけれど、かたがた思ほしかへして、御ことつけもなし。かの薄衣は小桂のいとなつかしき人香に染めるを、身近くならして見ろたまへり。小君かしこに行きたれば、姉君待ちつけていみじくのたまふ。「あさましかりしに、とかう紛らはしても、人の思ひけむことさりとどころなきに、いとなむわりなき。いとかう心幼きをかつはいかに思ほすらむ」とて恥づかしめたまふ。左右に苦しう思へど、かの御手習取り出でたり。さすがに取りて見たまふ。かのもぬけを、いかに伊勢をの海人のしほなれてやなど思ふもただならず、いとよろづに乱れて、西の君もの恥づかしき心地してわたりたまひにけり。また知る人もなきこと

ど、まだいと若き心地に、さこそさし過ぎたるやうなれど、えしも思ひ分かず。憎しとはなけれど、御心とまるべきゆゑもなき心地して、なほかのうれたき人の心をいみじく思す。いづくにはひ紛れてかたくなしと思ひらむ、かく執念き人はありがたきものを、と思すしも、あやにくに紛れがたう思ひ出でられたまふ。この人のなま心なく若やかなるけはひもあはれなれば、さすがに情け情けしく契りおかせたまふ。「人知りたることよりも、かやうなるはあはれも添ふこととなむ昔人も言ひける。あひ思ひたまへよ。つつむことなきにしもあらねば、身ながら心にもえまかすまじくなむありける。またさるべき人びとも許されじかすと、かねて胸いたくなむ。忘れて待ちたまへよ」などなほなほしく語らひたまふ。「人の思ひはべらむことの恥づかしきになむ、え聞こえさすまじき」とうらもなく言ふ。「なべて人に知らせばこそあらめ、この小さき上人に伝へて聞こえむ。気色なくもてなしたまへ」など言ひおきて、かの脱ぎすべしたると見ゆる薄衣を取りて出でたまひぬ。

小君近う臥したるを起こしたまへば、うしろめたう思ひつつ寝ければ、ふとおどろきぬ。戸をやをら押し開くるに、老いたる御達の声にて、「あれは誰ぞ」とおどろおどろしく問ふ。わづらはしくて、「まろぞ」といらふ。「夜中に、こはなぞ外歩かせたまふ」とさかしがりて外さまへ来。いと憎くて、「あらず。ここもとへ出づるぞ」とて君を押し出でたてまつるに、暁近き月隈なくさし出でて、ふと人の影見えければ、「またおはするは誰ぞ」と問ふ。「民部のおもとなめり。けしうはあらぬおもとの丈だちかな」と言ふ。丈高き人の常に笑はるるを言ふなりけり。老人、これを連れて歩きけると思ひて、「今、ただ今立ちならびたまひなむ」と言ふ言ふ、我もこの戸より出でて来。わびしければ、えはた押し返さで、渡殿の口にかい添ひて隠れ立ちたまへれば、このおもとさし寄りて、「おもとは今宵は上にやさぶらひたまひつる。おととひより腹を病

つる。いかにぞ、をこがましきこともこそ、と思すに、いとつつましかれど、導くままに、母屋の几帳の帷子引き上げて、いとやをら入りたまふとすれど、皆静まれる夜の御衣のけはひ、やはらかなるしもいとしかりけり。女は、さこそ忘れたまふをうれしきに思ひなせど、あやしく夢のやうなることを、心に離るる折なきころにて、心とけたる寝だに寝られずなむ、昼はながめ、夜は寝覚めがちなれば、春ならぬ木の芽もいとなく嘆かしきに、碁打ちつる君、今宵はこなたに、と今めかしくうち語らひて寝にけり。若き人は何心なくいとようまどろみたるべし。かかるけはひのいと香ばしくうち匂ふに、顔をもたげたるに、単衣うち掛けたる几帳の隙間に、暗けれども身じろき寄るけはひいとしるし。あさましくおぼえて、ともかくも思ひ分かれず、やをら起き出でて、生絹なる単衣を一つ着てすべり出でにけり。

君は入りたまひて、ただひとり臥したるを心やすく思す。床の下に二人ばかりぞ臥したる。衣を押しやりて寄りたまへるに、ありしけはひよりはものものしくおぼゆれど、思ほしも寄らずかし。いぎたなきさまなどぞあやしく変はりて、やうやう見あらはしたまひて、あさましく心やましけれど、人違へとたどりて見えむもをこがましく、あやしと思ふべし、本意の人を尋ね寄らむも、かばかり逃るる心あめれば、かひなうをこにこそ思はめ、と思す。かのをかしかりつる火影ならばいかかはせむに思しなるもわろき御心浅さなめりかし。やうやう目覚めて、いとおぼえずあさましきに、あきれたる気色にて、何の心深くいとほしき用意もなし。世の中をまだ思ひ知らぬほどよりはさればみたる方にて、あえかにも思ひまどはず。我とも知らせじと思ほせど、いかにしてかかることぞと後に思ひめぐらさむも、わがためには事にもあらねど、あのつらき人のあながちに名をつつむもさすがにいとほしければ、たびたびの御方違へにこにつけたまひしさまを、いとよう言ひなしたまふ。たどらむ人は心得つべけれ

いよいよほこりにうちとけて、笑ひなどそぼるれば、にほひ多く見えて、さる方にいとをかしき人ざまなり。あはつけしとは思しながら、まめならぬ御心はこれもえ思し放つまじかりけり。見たまふかぎりの人は、うちとけたる世なく、ひきつくろひ側めたるうはべをのみこそ見たまへ、かくうちとけたる人のありさまかいま見などはまだしたまはざりつることなれば、何心もなうさやかなるはいとほしながら、久しう見たまはまほしきに、小君出で来る心地すれば、やをら出でたまひぬ。

渡殿の戸口に寄りゐたまへり。いとかたじけなしと思ひて、「例ならぬ人はべりてえ近うも寄りはべらず」「さて今宵もや帰してむとする。いとあさましうからうこそあべけれ」とのたまへば、「などでか。あなたに帰りはべりなば、たばかりはべりなむ」と聞こゆ。さもなびかしくつべき気色にこそはあらめ、童なれど、ものの心ばへ、人の気色見つべくしづまれるを、と思すなりけり。暮打ち果てつるにやあらむ、うちそよめく心地して、人びとあかるるけはひなどすなり。「若君はいづくにおはしますならむ。この御格子は鎖してむ」とて、鳴らすなり。「静まりぬなり。入りて、さらばたばかれ」とのたまふ。この子も、いもうとの御心はたわむところなくまめだちたれば、言ひあはせむ方なくて、人少なならむ折に入れたてまつらむと思ふなりけり。「紀伊の守のいもうともこなたにあるか。我にかいま見せさせよ」とのたまへど、「いかでかさはべらむ。格子には几帳添へてはべり」と聞こゆ。さかし、されども、とをかしく思せど、見つとは知らせじ、いとほし、と思して、夜更くることの心もとなさをのたまふ。こたみは妻戸を叩きて入る。皆人びと静まり寝にけり。「この障子口にまろは寝たらむ。風吹きとほせ」とて畳広げて臥す。御達、東の廂にいとあまた寝たるべし。戸放ちつる童もそなたに入りて臥しぬれば、とばかり空寝して、火明かき方に屏風を広げて、影ほのかなるに、やをら入れたてま

をら歩み出でて、簾のはさまに入りたまひぬ。この入りつる格子はまだ鎖さねば、隙見ゆるに寄りて、西さまに見通したまへば、この際に立てたる屏風、端の方おし畳まれたるに、紛るべき几帳なども、暑ければにやうち掛けて、いとよく見入れらる。火近う灯したり。母屋の中柱に側める人やわが心かくると、まづ目とどめたまへば、濃き綾の単襲なめり、何にかあらむ表に着て、頭つき細やかに小さき人のものげなき姿ぞしたる、顔などは差し向かひたらむ人などにもわざと見ゆまじうもてなしたり。手つき痩せ痩せにて、いたうひき隠しためり。いま一人は東向きにて、残るところなく見ゆ。白き薄物の単襲、二藍の小桂だつものないがしろに着なして、紅の腰ひき結へる際まで胸あらはに、ばうぞくなるもてなしなり。いと白うをかしげにつぶつぶと肥えてそぞろかなる人の、頭つき額つきものあざやかに、まみ、口つきいと愛敬づき、はなやかなるかたちなり。髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、下り端肩のほどきよげに、すべていとねぢけたるところなくをかしげなる人と見えたり。むべこそ親の世になくは思ふらめとをかしく見たまふ。心地ぞなほ静かなる氣を添へばやと、ふと見ゆる。かどなきにはあるまじ。碁打ち果てて、けちさすわたり、心とげに見えてきはぎはとさうどけば、奥の人はいと静かにのどめて、「待ちたまへや。そこは持にこそあらめ、このわたりの劫をこそ」など言へど、「いで、このたびは負けにけり。隅のところ、いでいで」と指をかがめて、「十、二十、三十、四十」などかぞふるさま、伊予の湯桁もただどしかるまじう見ゆ。すこし品おくれたり。たとしへなく口おほひてさやかにも見せねど、目をしつめたまへれば、おのづから側目も見ゆ。目すこし腫れたる心地して、鼻などもあざやかなるところなうねびれて、にははしきところも見えず。言ひ立つればわろきによれるかたちを、いといたうもてつけて、このまされる人よりは心あらむと目とどめつべきさましたり。にぎははしう愛敬づきをかしげなるを、

寝られたまはぬままには、「我はかく人に憎まれてもならはぬを、今宵なむ初めて憂しと世を思ひ知りぬれば、恥づかしくてながらふまじうこそ思ひなりぬれ」などのたまへば、涙をさへこぼして臥したり。いとらうたしと思す。手さぐりの細く小さきほど、髪の毛いと長からざりしけはひのさまかよひたるも、思ひなしにや、あはれなり。あながちにかかづらひたどり寄らむも人わろかるべく、まめやかにめざましと思し明かしつつ、例のやうにもものたまひまつはさず。夜深う出でたまへば、この子はいといとほしくさうさうしと思ふ。女も並々ならずかたはらいたしと思ふに、御消息も絶えてなし。思し懲りにけると思ふにも、やがてつれなくて止みたまひなましかば憂からまし、しひていとほしき御振る舞ひの絶えざらむもうたてあるべし、よきほどにかくて閉ぢめてむ、と思ふものから、ただならずながめがちなり。

君は心づきなしと思しながら、かくてはえ止むまじう御心にかかり、人わろく思ほしわびて、小君に、「いとつらうもうれたうもおぼゆるに、しひて思ひ返せど、心にしも従はず苦しきを。さりぬべきを見て対面すべくたばかれ」とのたまひわたれば、わづらはしけれど、かかる方にもものたまひまつはすはうれしうおぼえけり。おさなき心地に、いかならんおりと待ちわたるに、紀伊の守、国に下りなどして、女どちのどやかなる夕闇の、道たどどしげなる紛れに、わが車にて率てたてまつる。この子も幼きをいかならむと思せど、さのみもえ思しのどむまじければ、さりげなき姿にて、門など鎖さぬ先にと急ぎおはす。人見ぬ方より引き入れて降ろしたてまつる。童なれば、宿直人などもことに見入れ追従せず、心やすし。東の妻戸に立てたてまつりて、我は南の隅の間より格子叩きののしりて入りぬ。御達、「あらはなり」と言ふなり。「なぞ、かう暑きにこの格子は下ろされたる」と問へば、「昼より西の御方の渡らせたまひて、碁打たせたまふ」と言ふ。さて向かひるたらむを見ばやと思ひて、や

空

蝉

こゆれば、あさましくめづらかなりける心のほどを、「身もいと恥づかしくこそなりぬれ」と、いといとほしき御気色なり。とばかりものものたまはず。いたくうめきて憂しと思したり。

「帚木の心を知らで園原の道にあやなく惑ひぬるかな

聞こえむ方こそなけれ」とのたまへり。女も、さすがにまどろまざりければ、

数ならぬ伏屋に生ふる名の憂さにあるにもあらず消ゆる帚木

と聞こえたり。小君、いといとほしきに、眠たくもあらでまどひ歩くを、人あやしと見るらむとわびたまふ。例の、人びとはいぎたなきに、一所すずろにすさまじく思し続けらるれど、人に似ぬ心ぎまのなほ消えず立ち上れりける、とねたく、かかるにつけてこそ心もとまれとかつは思しながら、めざましくつらければ、さばれと思せども、さも思し果つまじく、「隠れたらむ所になほ率て行け」とのたまへど、「いとむつかしげにさし籠められて、人あまたはべるめれば、かしこげに」と聞こゆ。いとほしと思へり。「よし、あこだにな捨てそ」とのたまひて、御かたはらに臥せたまへり。若くなつかしき御ありさまをうれしくめでたしと思ひたれば、つれなき人よりはなかなかあはれに思さる、とぞ。

まはむも、人目しげからむ所に便なき振る舞ひやあらはれむと、人のためもとほしくと思しわづらふ。

例の、内に日数経たまふころ、さるべき方の忌み待ち出でたまふ。にはかにまかでたまふまねして、道のほどよりおはしましたり。紀伊守おどろきて、遣水の面目とかしこまり喜ぶ。小君には、昼より、「かくなむ思ひよれる」とのたまひ契れり。明け暮れまつはし馴らしたまひければ、今宵もまづ召し出でたり。女も、さる御消息ありけるに、思したばかりつらむほどは浅くしも思ひなされねど、さりとてうちとけ人げなきありさまを見えたてまつりても、あぢきなく夢のやうにて過ぎにし嘆きをまたや加へむ、と思ひ乱れて、なほさて待ちつけきこえさせむことのまばゆければ、小君が出でて往ぬるほどに、「いとけ近ければかたはらいたし。なやましければ、忍びてうち叩かせなどせむに、ほど離れてを」とて、渡殿に、中将といひしが局したる隠れに移ろひぬ。さる心して、人とく静めて、御消息あれど、小君は尋ねあはず。よろづの所求め歩き、渡殿に分け入りて、からうしてたどり来たり。いとあさましくつらしと思ひて、「いかにかひなしと思さむ」と泣きぬばかり言へば、「かくけしからぬ心ばへはつかふものか。幼き人のかかること言ひ伝ふるはいみじく忌むなるものを」と言ひおどして、「心地悩まなければ、人びと避けずおさへさせてなむ」と聞こえさせよ。あやしと誰も誰も見るらむ」と言ひ放ちて、心の中には、いとかく品定まりぬる身のおぼえならで、過ぎにし親の御けはひとまれるふるさとながらたまさかにも待ちつけたてまつらば、をかしうもやあらまし、しひて思ひ知らぬ顔に見消つも、いかにほど知らぬやうに思すらむ、と心ながらも胸いたく、さすがに思ひ乱る。とてもかくても、今は言ふかひなき宿世なりければ、無心に、心づきなくて止みなむ、と思ひ果てたり。君は、いかにたばかりなさむと、まだ幼きをうしろめたく待ち臥したまへるに、不用なるよしを聞

うち添へりける身を思ひ続けて臥したまへり。

またの日、小君召したれば、参るとて御返り乞ふ。「かかる御文見るべき人もなしと聞こえよ」とのたまへば、うち笑みて、「違ふべくものたまはざりしものを、いかがさは申さむ」と言ふに、心やましく、残りなくのたまはせ知らせてける、と思ふに、つらきこと限りなし。「いで、およすけたることは言はぬぞよき。さは、な参りたまひそ」とむつかられて、「召すにはいかでか」とて参りぬ。紀伊守、好き心に、この継母のありさまをあたらしきものに思ひて追従しありけば、この子をもてかしづきて率てありく。君、召し寄せて、「昨日待ち暮らししを。なほあひ思ふまじきなめり」と怨じたまへば、顔うち赤めてゐたり。「いづら」とのたまふに、しかしかと申すに、「言ふかひなのことや。あさまし」とて、またも賜へり。「あこは知らじな。その伊予の翁よりは先に見し人ぞ。されど頼もしげなく頸細しとて、ふつつかなる後見まうけて、かく悔りたまふなめり。さりとも、あこはわが子にてをあれよ。この頼もし人は行く先短かりなむ」とのたまへば、さもやありけむ、いみじかりけることかな、と思へる、をかしと思す。この子をまつはしたまひて、内にも率て参りなごしたまふ。わが御匣殿にのたまひて装束などもせさせ、まことに親めきてあつかひたまふ。

御文は常にあり。されど、この子もいと幼し、心よりほかに散りもせば軽々しき名さへとり添へむ身のおぼえを、いとつきなかるべく思へば、めでたきこともわが身からこそ、と思ひて、うちとけたる御いらへも聞こえず。ほのかなりし御けはひありさまは、げになべてにやはと思ひ出できこえぬにはあらねど、をかしきさまを見えたてまつりても何にかはなるべき、など思ひ返すなりけり。君は思しおこたる時の間もなく、心苦しくも恋しくも思し出づ。思へりし気色などのいとほしさも晴るけむ方なく思しわたる。軽々しく這ひ紛れ立ち寄りた

いたく、ことつてやらむよすがだになきを、とかへりみがちにて出でたまひぬ。殿に帰りたまひても、とみにもまどろまれたまはず。またあひ見るべき方を、ましてかの人の思ふらむ心のうちいかならむと心苦しく思ひやりたまふ。すぐれたることはなけれど、めやすくもてつけてもありつる中の品かな、隈なく見集めたる人の言ひしことはげに、と思し合はせられけり。このほどは大殿にのみおはします。なほいとかき絶えて、思ふらむことのいとほしく御心にかかりて、苦しく思しわびて、紀伊守を召したり。「かの、ありし中納言の子は得させてむや。らうたげに見えしを。身近く使ふ人にせむ。上にも我奉らむ」とのたまへば、「いとかしこき仰せ言にはべるなり。姉なる人にのたまひむ」と申すも、胸つぶれて思せど、「その姉君は朝臣の弟や持たる」「さもはべらず。この二年ばかりぞかくてもものはべれど、親のおきてに違へりと思ひ嘆きて、心ゆかぬやうになむ聞きたまふる」「あはれのことや。よろしく聞こえし人ぞかし。まことによしや」とのたまへば、「けしうははべらざるべし。もて離れてうとうとしくはべれば、世のたとひにて睦びはべらず」と申す。

さて、五六日ありてこの子率て参れり。こまやかにをかしとはなけれど、なまめきたるさましてあて人と見えたり。召し入れていとなつかしく語らひたまふ。童心地にいとめでたくうれしと思ふ。いもうとの君のことも詳しく問ひたまふ。さるべきことはいらへ聞こえなどして、恥づかしげにしづまりたれば、うち出でにくし。されどいとよく言ひ知らせたまふ。かかることこそはとほの心得るも思ひの外なれど、幼な心地に深くしもたどらず。御文を持て来たれば、女、あさましきに涙も出で来ぬ。この子の思ふらむこともはしたなくて、さすがに御文を面隠しに広げたり。いと多くて、

「見し夢を逢ふ夜ありやと嘆くまに目さへあはでどころも経にける

寝る夜なければ」など、目も及ばぬ御書きざまも、霧り塞がりて、心得ぬ宿世

ひはべるに、たぐひなく思うたまへ惑はるるなり。よし、今は見きとなかけそ」とて、思へるさまげにいとことわりなり。おろかならず契り慰めたまふこと多かるべし。

鳥も鳴きぬ。人びと起き出でて、「いといぎたなかりける夜かな。御車ひき出でよ」など言ふなり。守も出でて来て、女などの、「御方違へこそ。夜深く急がせたまふべきかは」など言ふもあり。君は、またかやうのついであらむこともいとかたく、さしはへてはいかでか、御文なども通はむことのいとわりなきを思すに、いと胸いたし。奥の中将も出でていと苦しければ、許したまひても、また引きとどめたまひつつ、「いかでか聞こゆべき。世に知らぬ御心のつらさもあはれも浅からぬ世の思ひ出ではさまざまめづらかなるべき例かな」とて、うち泣きたまふ気色いとなまめきたり。鳥もしばしば鳴くに、心あわたたしくて、

つれなきを恨みも果てぬしののめにとりあへぬまでおどろかすらむ

女、身のありさまを思ふに、いとつきなくまばゆき心地して、めでたき御もてなしも何ともおぼえず、常はいとすくすくしく心づきなしと思ひあなづる伊予の方の思ひやられて、夢にや見ゆらむとそら恐ろしくつつまし。

身の憂さを嘆くにあかで明くる夜はとり重ねてぞ音もなかけける

ことと明くなれば、障子口まで送れたまふ。内も外も人騒がしければ、引き立てて別れたまふほど、心細く隔つる関と見えたり。御直衣など着たまひて、南の高欄にしばしうち眺めたまふ。西面の格子そそき上げて、人びと覗くべかめる。簀子の中のほどに立てたる小障子の上より仄かに見えたまへる御ありさまを、身にしむばかり思へる好き心どもあめり。月は有明にて光をさまれるものから、かげけぎやかに見えて、なかなかをかしき曙なり。何心なき空のけしきもただ見る人から艶にもすぐくも見ゆるなりけり。人知れぬ御心には、いと胸

があらむ、心も騒ぎて慕ひ来たれど、動もなくて奥なる御座に入りたまひぬ。障子をひきたてて、「暁に御迎へにものせよ」とのたまへば、女は、この人の思ふらむことさへ死ぬばかりわりなきに、流るるまで汗になりて、いと悩ましげなる、いとほしけれど、例のいづこより取う出たまふ言の葉にかあらむ、あはれ知らるばかり情け情けしくのたまひ尽くすべかめれど、なほいとあさましきに、「現ともおぼえずこそ。数ならぬ身ながらも、思しくたしける御心ばへのほどもいかが浅くは思うたまへざらむ。いとかやうなる際は際とこそはべなれ」とて、かくおし立ちたまへるを深く情けなく憂しと思ひ入りたるさまも、げにいとほしく心恥づかしきはひなれば、「その際々をまだ知らぬ初事ぞや。なかなかおしなべたる列に思ひなしたまへるなむうたてありける。おのづから聞きたまふやうもあらむ。あながちなる好き心はさらにならぬを。さるべきにや、げにかくあはめられたてまつるもことわりなる心まどひを、みづからもあやしきまでなむ」などまめだちてよろづにのたまへど、いとたぐひなき御ありさまの、いよいようちとけきこえむことわびしければ、すくよかに心づきなしとは見えたてまつるとも、さる方の言ふかひなきにて過ぐしてむ、と思ひて、つれなくのみもてなしたり。人柄のたをやぎたるに、強き心をしひて加へたれば、なよ竹の心地して、さすがに折るべくもあらず。まことに心やましくて、あながちなる御心ばへを言ふ方なしと思ひて泣くさまなど、いとあはれなり。心苦しきはあれど、見ざらましかば口惜しからましと思す。慰めがたく憂しと思へれば、「などかく疎ましきものにしも思すべき。おぼえなきさまなるしこそ契りあるとは思ひたまはめ。むげに世を思ひ知らぬやうにおぼほれたまふなむいとつらき」と恨みられて、「いとかく憂き身のほどの定まらぬ、ありしながらの身に、かかる御心ばへを見ましかば、あるまじき我が頼みにて、見直したまふ後瀬をも思ひたまへ慰めましを、いとかう仮なる浮き寝のほどを思

思す。「まろは端に寝はべらむ。あな暗」とて、火かかげなどすべし。女君はただこの障子口、筋交ひたるほどにぞ臥したるべき。「中将の君はいづくにぞ。人げ遠き心地して、もの恐ろし」と言ふなれば、長押の下に人びと臥していらへすなり。「下に湯におりて、ただ今参らむとはべる」と言ふ。

皆静まりたるけはひなれば、掛金を試みに引きあけたまへれば、あなたよりは鎖さざりけり。几帳を障子口には立てて、火はほの暗きに見たまへば、唐櫃だつ物どもを置きたれば、乱りがはしき中を分け入りたまへれば、けはひしつる所に入りたまへれば、ただ一人いとささやかにて臥したり。なまわづらはしけれど、上なる衣押しやるまで、求めつる人と思へり。「中将召しつればなむ。人知れぬ思ひのしるしある心地して」とのたまふを、ともかくも思ひ分かれず、物に襲はるる心地して、「や」とおびゆれど、顔に衣のさはりて音にも立てず。

「うちつけに、深からぬ心のほどと見たまふらむ、ことわりなれど、年ごろ思ひわたる心のうちも聞こえ知らせむとてなむ。かかるをりを待ち出でたるもさらに浅くはあらじと思ひなしたまへ」といとやはらかにのたまひて、鬼神も荒だつまじきけはひなれば、はしたなく、「ここに人」ともえののしらず。心地はたわびしく、あるまじきことと思へば、あさましく、「人違へにこそはべるめれ」と言ふも息の下なり。消えまどへる気色いと心苦しくうたげなれば、をかしと見たまひて、「違ふべくもあらぬ心のしるべを、思はずにもおぼめいたまふかな。好きがましきさまにはよに見えたてまつらじ。思ふことすこし聞こゆべきぞ」とて、いと小さやかなればかき抱きて障子のもと出でたまふにぞ求めつる中将だつ人来あひたる。「やや」とのたまふにあやしくて、探り寄りたるにぞいみじく匂ひみちて、顔にもくゆりかかる心地するに、思ひ寄りぬ。あさましよう、こはいかなることぞと思ひまどはるれど、聞こえむ方なし。並々の人ならばこそ荒らかにも引きかなぐらめ、それだに人のあまた知らむはいか

人のよすがにかくてはべるなり。才などもつきぬべく、けしうははべらぬを、殿上なども思ひたまへかけながら、すがすがしうはえ交じらひはべらざめる」と申す。「あはれのことや。この姉君やまうとの後の親」「さなむはべる」と申すに、「似げなき親をもまうけたりけるかな。上にも聞こし召しおきて、「宮仕へに出だし立てむと漏らし奏せし、いかになりにけむ」と、いつぞやのたまはせし。世こそ定めなきものなれ」といとおよすけのたまふ。「不意にかくてもものはべるなり。世の中といふもの、さのみこそ今も昔も定まりたることはべらね。中についても、女の宿世は浮かびたるなむあはれにはべる」など聞こえさす。「伊予介はかしづくや。君と思ふらむな」「いかがは。私の主とこそは思ひてはべるめるを、好き好きしきことと、なにがしよりはじめてうけひきはべらずなむ」と申す。「さりとも、まうとたちのつきづきしく今めきたらむにおろしたてむやは。かの介はいとよしありて気色ばめるをや」など物語したまひて、「いづかたにぞ」「皆下屋におろしはべりぬるを、えやまかりおりあへざらむ」と聞こゆ。酔ひすすみて、皆人びと簀子に臥しつつ、静まりぬ。君はとけても寝られたまはず、いたづら臥しと思さるるに御目覚めて、この北の障子のあなたに人のけはひするを、こなたやかくいふ人の隠れたる方ならむ、あはれや、と御心とどめて、やをら起きて立ち聞きたまへば、ありつる子の声にて、「ものけたまはる。いづくにおはしますぞ」と、かれたる声のをかしきにて言へば、「ここにぞ臥したる。客人は寝たまひぬるか。いかに近からむと思ひつるを、されどけ遠かりけり」と言ふ。寝たりける声のしどけなき、いとよく似通ひたれば、いもうとと聞きたまひつ。「廂にぞ大殿籠もりぬる。音に聞きつる御ありさまを見たてまつりつる、げにこそめでたかりけれ」とみそかに言ふ。「昼ならましかば、覗きて見たてまつりてまし」とねぶたげに言ひて顔ひき入れつる声す。ねたう、心とどめても問ひ聞けかし、とあぢきなく

出でたる泉にのぞきみて酒呑む。あるじも肴求むとこゆるぎのいそぎありくほど、君はのどやかに眺めたまひて、かの中の品に取り出でて言ひし、この並ならむかしと思し出づ。思ひ上がれる気色に聞きおきたまへるむすめなれば、ゆかしくて、耳とどめたまへるに、この西面にぞ人のけはひする。衣の音なひはらはらとして、若き声どもにくからず。さすがに忍びて笑ひなどするけはひこときらびたり。格子を上げたりけれど、守、「心なし」とむつかりて下しつれば、火灯したる透影、障子の上より漏りたるに、やをら寄りたまひて、見ゆやと思せど、隙もなければ、しばし聞きたまふに、この近き母屋に集ひるたるなるべし、うちささめき言ふことどもを聞きたまへば、わが御上なるべし。「いといたうまめだちて、まだきにやむごとなきよすが定まりたまへるこそさうぎうしかめれ」「されど、さるべき隈にはよくこそ隠れ歩きたまふなれ」など言ふにも、思すことのみ心にかかりたまへば、まづ胸つぶれて、かやうのついでにも人の言ひ漏らさむを聞きつけたらむ時などおぼえたまふ。ことなることなれば聞きさしたまひつ。式部卿の宮の姫君に朝顔奉りたまひし歌などをすこしほほゆがめて語るも聞こゆ。くつろぎがましく歌誦じがちにもあるかな、なほ見劣りはしなむかし、と思す。守出で来て、灯笼掛け添へ、火明かくかかげなどして、御くだものばかり参れり。「とばり帳もいかにぞは。さる方の心もなくてはめざましきあるじならむ」とのたまへば、「何よけむともえうけたまはらず」とかしこまりてさぶらふ。端つ方の御座に、仮なるやうにて大殿籠もれば、人びとも静まりぬ。

あるじの子どもをかしげにてあり。童なる、殿上のほどに御覧じ馴れたるもあり。伊予の介の子もあり。あまたある中に、いとけはひあてはかにて十二三ばかりなるもあり。「いづれかいづれ」など問ひたまふに、「これは故衛門督の末の子にていとかなくしはべりけるを、幼きほどに後れはべりて、姉なる

しくて、中納言の君、中務などやうのおしなべたらぬ若人どもに戯れ言などのたまひつつ、暑さに乱れたまへる御ありさまを、見るかひありと思ひきこえたり。大臣も渡りたまひて、かくうちとけたまへれば、御几帳隔てておはしまして、御物語聞こえたまふを、「暑きに」とにがみたまへば、人びと笑ふ。「あなかま」とて脇息に寄りおはす。いとやすらかなる御振る舞ひなりや。

暗くなるほどに、「今宵、中神、内よりは塞がりてはべりけり」と聞こゆ。

「さかし、例は忌みたまふ方なりけり。二条の院にも同じ筋にて、いづくにか違へむ。いと悩ましきに」とて大殿籠もれり。「いと悪しきことなり」とこれかれ聞こゆ。「紀伊守にて親しく仕うまつる人の、中川のわたりなる家なむ、このころ水せき入れて、涼しき蔭にはべる」と聞こゆ。「いとよかなり。悩ましきに、牛ながら引き入れつべからむ所を」とのたまふ。忍び忍びの御方違へ所はあまたありぬべけれど、久しくほど経て渡りたまへるに、方塞げてひき違へ他ざまへと思さむはいとほしきなるべし。紀伊守に仰せ言賜へば、承りながら退きて、「伊予守の朝臣の家に慎むことはべりて、女房なむまかり移れるころにて、狭き所にはべれば、なめげなることやばらむ」と、下に嘆くを聞きたまひて、「その、人近からむなむうれしかるべき。女遠き旅寝はもの恐ろしき心地すべきを、ただその几帳のうしろに」とのたまへば、「げに。よろしき御座所にも」とて人走らせやる。いと忍びて、ことさらに、ことごとしからぬ所をと急ぎ出でたまへば、大臣にも聞こえたまはず、御供にも睦ましき限りしておはしましぬ。

「にはかに」とわぶれど、人も聞き入れず。寝殿の東面払ひあけさせて、かりそめの御しつらひしたり。水の心ばへなどさる方にをかしくしなしたり。田舎家だつ柴垣して、前栽など心とめて植ゑたり。風涼しくて、そこはかとなき虫の声々聞こえ、螢しげく飛びまがひてをかしきほどなり。人びと、渡殿より

あらむ人の、耳にも目にもとまること自然に多かるべし。さるままには真名を走り書きて、さるまじきどちの女文になかば過ぎて書きすすめたる、あなうたて、この人のたをやかならましかば、と見えたり。心地にはさしも思はざらめど、おのづからこはごはしき声に読みなされなどしつ、ことさらびたり。上臈の中にも、多かることぞかし。歌詠むと思へる人の、やがて歌にまつはれ、をかしき古言をも初めより取り込みつつ、すさまじき折々詠みかけたるこそものしきことなれ。返しせねば情けなし、えせざらむ人ははしたなからむ。さるべき節会など、五月の節に急ぎ参る朝、何のあやめも思ひしづめられぬに、えならぬ根を引きかけ、九日の宴に、まづ難き詩の心を思ひめぐらして暇なき折に、菊の露をかこち寄せなどやうの、つきなき営みにあはせ、さならでも、おのづから、げに後に思へばをかしくもあはれにもあべかりけることの、その折につきなく目にとまらぬなどを、推し量らず詠み出でたる、なかなか心後れて見ゆ。よろづのことに、などかは、さても、とおぼゆる折から、時々思ひわかぬばかりの心にては、よしばみ情け立たざらむなむ目やすかるべき。すべて心に知れらむことをも知らず顔にもてなし、言はまほしからむことをも一つ二つのふしは過ぐすべくなむあべかりける」と言ふにも、君は人一人の御ありさまを心の中に思ひつづけたまふ。これに足らずまたさし過ぎたることなくものしたまひけるかな、とありがたきにもいとど胸ふたがる。いづ方により果つともなく、果て果てはあやしきことどもになりて明かしたまひつ。

からうして今日は日のけしきも直れり。かくのみ籠もりさぶらひたまふも大殿の御心いとほしければ、まかでたまへり。おほかたの気色、人のけはひもけざやかにけ高く、乱れたるところまじらず、なほこれこそはかの人びとの捨てがたく取り出でしめ人には頼まれぬべけれ、と思すものから、あまりうるはしき御ありさまのとけがたく恥づかしげに思ひしづまりたまへるを、さうざう

かりける女かな」とすかいたまふを、心は得ながら、鼻のわたりをこづきて語りなす。「さていと久しくまからざりしに、もののたよりに立ち寄りてはべれば、常のうちとけるたる方にははべらで、心やましき物越しにてなむ逢ひてはべる。ふすぶるにやと、をこがましくも、またよきふしなりとも思ひたまふるに、このさかし人はた軽々しきもの怨じすべきにもあらず、世の道理を思ひとりて恨みざりけり。声もはやりかにて言ふやう、「月ごろ、風病重きに堪へかねて、極熱の草葉を服して、いと臭きによりなむえ対面賜はらぬ。目のあたりならずとも、さるべからむ雑事らは承らむ」と、いとあはれにむべむべしく言ひはべり。いらへに何とかは。ただ、「承りぬ」とて立ち出ではべるに、さうざうしくやおぼえけむ、「この香失せなむ時に立ち寄りたまへ」と高やかに言ふを、聞き過ぎさむもいとほし、しばしやすらふべきにはたはべらねば、げにそのにほひさへはなやかにたち添へるも術なくて、逃げ目をつかひて、

「ささがにのふるまひしるき夕暮れにひるま過ぐせといふがあやなき
いかなることつけぞや」と言ひも果てず走り出ではべりぬるに、追ひて、

逢ふことの夜をし隔てぬ仲ならばひる間も何かまばゆからまし

さすがに口疾くなどははべりき」と、しづしづと申せば、君達あさましと思ひて、「そら言」とて笑ひたまふ。「いづこのさる女かあるべき。おいらかに鬼とこそ向かひるたらめ。むくつけきこと」と爪弾きをして、言はむ方なしと式部をあはめ憎みて、「すこしよろしからむことを申せ」と責めたまへど、「これよりめづらしきことはさぶらひなむや」とてをり。

「すべて男も女も、わろ者はわづかに知れる方のことを残りなく見せ尽くさむと思へるこそいとほしけれ。三史五経、道々しき方を、明らかに悟り明かさむこそ愛敬なからめ、なかは女といはむからに、世にあることの公私につけて、むげに知らずいたらずしもあらむ。わざと習ひまねばねど、すこしもかど

に思ひ定めずなりぬるこそ。世の中や、ただかくこそ。とりどりに比べ苦しかるべき。このさまさまのよき限りをとり具し難ずべきくさはひませぬ人はいつこにかはあらむ。吉祥天女を思ひかけむとすれば法気づきくすしからむこそまたわびしかりぬべけれ」とて皆笑ひぬ。

「式部がところにぞけしきあることはあらむ。すこしづつ語り申せ」と責めらる。「下が下の中にはなでふことか聞こし召しどころはべらむ」と言へど、頭の君、まめやかに「遅し」と責めたまへば、何事をとり申さむと思ひめぐらすに、「まだ文章生にはべりし時、かしこき女の例をなむ見たまへし。かの馬頭の申したまへるやうに、公事をも言ひあはせ、私さまの世に住まふべき心おきてを思ひめぐらさむ方もいたり深く、才の際、なまなまの博士恥づかしく、すべて口あかすべくなむはべらざりし。それは、ある博士のもとに、学問などしはべるとてまかり通ひしほどに、あるじのむすめども多かりと聞きたまへて、はかなきついでに言ひ寄りてはべりしを、親聞きつけて、盃持て出でて、「わが両つの途歌ふを聴け」となむ聞こえごちはべりしかど、をさをさうちとけてもまからず、かの親の心を憚りてさすがにかかづらひはべりしほどに、いとあはれに思ひ後見、寢覚の語らひにも身の才つき、おほやけに仕うまつるべき道々しきことを教へて、いとよげに、消息文にも仮名といふもの書きませず、むべむべしく言ひまはしはべるに、おのづからえまかり絶えで、その者を師としてなむわづかなる腰折文作ることなど習ひはべりしかば、今にその恩は忘れはべらねど、なつかしき妻子とうち頼まむには、無才の人なまわるならむ振る舞ひなど見えむに、恥づかしくなむ見えはべりし。まいて、君達の御ため、はかばかしくしたたかなる御後見は、何にかせさせたまはむ。はかなし、口惜しとかつ見つつも、ただわが心につき、宿世の引く方はべるめれば、男しもなむ仔細なきものははべめる」と申せば、残りを言はせむとて、「さてきてをかし

て、撫子の花を折りておこせたりし」とて涙ぐみたり。「さてその文の言葉は」と問ひたまへば、「いさや、ことなることもなかりきや。

山がつの垣ほ荒るとも折々にあはれはかけよ撫子の露

思ひ出でしままにまかりたりしかば、例のうらもなきものから、いと物思ひ顔にて、荒れたる家の露しげきを眺めて虫の音に競へるけしき、昔物語めきておぼえはべりし。

咲きまじる色はいづれと分かねどもなほ常夏にしくものぞなき

大和撫子をばさしおきて、まづ「塵をだに」など親の心をとる。

うち払ふ袖も露けき常夏にあらし吹きそふ秋も来にけり

とはかなげに言ひなして、まめまめしく恨みたるさまも見えず、涙をもらし落としても、いと恥づかしくつつましげに紛らはし隠して、つらきをも思ひ知りけりと見えむはわりなく苦しきものと思ひたりしかば、心やすくて、またとだえ置きはべりしほどに、跡もなくこそかき消ちて失せにしか。まだ世にあらばはかなき世にぞさすらふらむ。あはれと思ひしほどに、わづらはしげに思ひまとはすけしき見えましかば、かくもあくがらさざらまし。こよなきとだえおかず、さるものにしなして、長く見るやうもはべりなまし。かの撫子のらうたくはべりしかば、いかで尋ねむと思ひたまふるを、今もえこそ聞きつけはべらね。これこそそのたまへるはかなき例なめれ。つれなくて、つらしと思ひけるも知らで、あはれ絶えざりしも、益なき片思ひなりけり。今やうやう忘れゆく際に、かれはたえしも思ひ離れず、折々人やりならぬ胸焦がるる夕べもあらむとおぼえはべり。これなむえ保つまじく頼もしげなき方なりける。されば、かのさかな者も、思ひ出である方に忘れがたけれど、さしあたりて見むにはわづらはしく、よくせずは飽きたきこともありなむや。琴の音すすめけむかどかどしさも好きたる罪重かるべし。この心もとなきも、疑ひ添ふべければ、いづれとつひ

と思ひたまへむには、頼もしげなくさし過ぐいたり心おかれて、その夜のことにことつけてこそまかり絶えにしか。この二つのことを思うたまへあはするに、若き時の心にだに、なほさやうにもて出でたることはいとあやしく頼もしげなくおぼえはべりき。今より後はましてさのみなむ思ひたまへらるべき。御心のままに、折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見る玉笹の上の霰などの、艶にあえかなる好き好きしさのみこそをかしく思さるらめ、今さりとも七年あまりがほどに思し知りはべなむ。なにがしがいやしき諫めにて、好きたわめらむ女に心おかせたまへ。過ちして、見む人のかたくななる名をも立てつべきものなり」と戒む。中将、例のうなづく。君すこしかた笑みて、さることとは思すべかめり。「いづ方につけても人わろくはしたなかりける身物語かな」とてうち笑ひおはさうず。

中将、「なにがしは痴者の物語をせむ」とて、「いと忍びて見そめたりし人の、さても見つべかりしけはひなりしかば、ながらふべきものとしも思ひたまへざりしかど、馴れゆくままにあはれとおぼえしかば、絶え絶え忘れぬものと思ひたまへしを、さばかりになればうち頼めるけしきも見えき。頼むにつけては恨めしと思ふこともあらむと心ながらおぼゆるをりもはべりしを、見知らぬやうにて、久しきとだえをも、かうたまさかなる人とも思ひたらず、ただ朝夕にもてつけたらむありさまに見えて心苦しかりしかば、頼めわたることなどもありきかし。親もなく、いと心細げにて、さらばこの人こそはと事にふれて思へるさまもらうたげなりき。かうのどけきにおだしくて、久しくまからざりしころ、この見たまふるわたりより、情けなくうたてあることをなむ、さるたよりありてかすめ言はせたりける、後にこそ聞きはべりしか。さる憂きことやあらむとも知らず、心には忘れずながら、消息などもせで久しくはべりしに、むげに思ひしをれて、心細かりければ、幼き者などもありしに、思ひわづらひ

ぬるはかひなくて、しばしばまかり駢るるには、すこしまばゆく、艶に好ま
 きことは目につかぬ所あるに、うち頼むべくは見えず、かれがれにのみ見せは
 べるほどに、忍びて心交はせる人ぞありけらし。神無月のころほひ、月おもし
 ろかりし夜、内よりまかではべるに、ある上人来あひて、この車にあひ乗りて
 はべれば、大納言の家にまかり泊まらむとするに、この人言ふやう、「今宵人
 待つらむ宿なむあやしく心苦しき」とて、この女の家はた避きぬ道なりければ、
 荒れたる崩れより池の水かげ見えて、月だに宿る住処を過ぎむもさすがにて、
 下りはべりぬかし。もとよりさる心を交はせるにやありけむ、この男いたくす
 ずろきて、門近き廊の簀子だつものに尻かけてとばかり月を見る。菊いとおも
 しろく移ろひわたり、風に競へる紅葉の乱れなど、あはれとげに見えたり。懐
 なりける笛取り出でて吹き鳴らし、「影もよし」などつづしり謡ふほどに、よ
 く鳴る和琴を調べととのへたりける、うるはしく掻き合はせたりしほど、けし
 うはあらずかし。律の調べは、女のものやはらかに掻き鳴らして、簾の内より
 聞こえたるも、今めきたる物の声なれば、清く澄める月に折つきなからず。男
 いたくめでて、簾のもとに歩み来て、「庭の紅葉こそ踏み分けたる跡もなけれ
 などねたます。菊を折りて、

「琴の音も月もえならぬ宿ながらつれなき人をひきやとめける
 わろかめり」など言ひて、「今ひと声。聞きはやすべき人のある時、手な残り
 たまひそ」など、いたくあざれかかれれば、女、いたう声つくろひて、

木枯に吹きあはすめる笛の音をひきとどむべき言の葉ぞなき

となまめき交はすに、憎くなるをも知らで、また、箏の琴を盤渉調に調べて今
 めかしく掻い弾きたる爪音、かどなきにはあらねど、まばゆき心地なむしはべ
 りし。ただ時々うち語らふ宮仕へ人などの、あくまでさればみ好きたるは、さ
 ても見る限りはをかしくもありぬべし。時々にて、さる所にて忘れぬよすが

や籠もりに情けなかりしかば、あへなき心地して、さがなく許しなかりしも我を疎みねと思ふ方の心やありけむと、さしも見たまへざりしことなれど、心やましきままに思ひはべりしに、着るべき物、常よりも心とどめたる色あひ、しざま、いとあらまほしくて、さすがにわが見捨ててむ後をさへなむ思ひやり後見たりし。さりとも絶えて思ひ放つやうはあらじと思うたまへて、とかく言ひはべりしを、背きもせずと、尋ねまどはさむとも隠れ忍びず、かかやかしからずいらへつつ、ただ、「ありしながらはえなむ見過ぐすまじき。あらためてのどかに思ひならばなむあひ見るべき」など言ひしを、さりともえ思ひ離れじと思ひたまへしかば、しばし懲らさむの心にて、「しかあらためむ」とも言はず、いたく綱引きて見せしあひだに、いといたく思ひ嘆きてはかなくなりはべりしかば、戯れにくくなむおぼえはべりし。ひとへにうち頼みたらむ方はさばかりにてありぬべくなむ思ひたまへ出でらるる。はかなきあだ事をもまことの大事をも言ひあはせたるにかひなからず、龍田姫と言はむにもつきなからず、たなばたの手にも劣るまじくその方も具して、うるさくなむはべりし」とて、いとあはれと思ひ出でたり。中将、「そのたなばたの裁ち縫ふ方をのどめて、長き契りにぞあえまし。げにその龍田姫の錦にはまたしくものあらじ。はかなき花紅葉といふも、をりふしの色あひつきなくはかばかしからぬは露のはえなく消えぬるわぎなり。さあるにより難き世とは定めかねたるぞや」と言ひはやすたまふ。

「さて、また同じころ、まかり通ひし所は、人も立ちまさり、心ばせまことにゆゑありと見えぬべく、うち詠み、走り書き、搔い弾く爪音、手つき口つき、みなたどたどしからず見聞きわたりはべりき。見る目もこともなくはべりしかば、このさがな者をうちとけたる方にて、時々隠ろへ見はべりしほどは、こよなく心とまりはべりき。この人亡せて後、いかがはせむ、あはれながらも過ぎ

思ひたまへて、われたけく言ひそしはべるに、すこしうち笑ひて、「よろづに見立てなく、ものげなきほどを見過ぐして、人数なる世もやと待つ方はいとどかに思ひなされて、心やましくもあらず。つらき心を忍びて、思ひ直らむ折を見つけむと年月を重ねむあいな頼みはいと苦しくなむあるべければ、かたみに背きぬべききざみになむある」とねたげに言ふに、腹立たしくなりて、憎げなることどもを言ひはげまはべるに、女もえをさめぬ筋にて、指ひとつを引き寄せて喰ひてはべりしを、おどろおどろしくかこちて、「かかる疵さへつきぬれば、いよいよ交じらひをすべきにもあらず。辱めたまふめる官位、いとどしく何につけてかは人めかむ。世を背きぬべき身なめり」など言ひ脅して、「さらば、今日こそは限りなめれ」とこの指をかがめてまかでぬ。

「手を折りてあひ見しことを数ふればこれひとつやは君が憂きふしえうらみじ」など言ひはべれば、さすがにうち泣きて、

憂きふしを心ひとつに数へきてこや君が手を別るべきをり

など言ひしろひはべりしかど、まことには変るべきこととも思ひたまへずながら、日ごろ経るまで消息も遣はさず、あくがれまかり歩くに、臨時の祭の調楽に、夜更けていみじう霽降る夜、これかれまかりあかるる所にて、思ひめぐらせばなほ家路と思はむ方はまたなかりけり。内わたりの旅寝すさまじかるべく、気色ばめるあたりはそぞろ寒くやと思ひたまへられしかば、いかが思へると気色も見がてら、雪をうち払ひつつ、なま人わろく爪喰はるれど、さりとも今宵日ごろの恨みは解けなむと思うたまへしに、火ほのかに壁に背け、萎えたる衣どもの厚肥えたる、大いなる籠にうち掛けて、引き上ぐべきものの帷子などうち上げて、今宵ばかりやと待ちけるさまなり。さればよと、心おごりするに、正身はなし。さるべき女房どもばかりとまりて、「親の家にこの夜さりなむ渡りぬる」と答へはべり。艶なる歌も詠まず、気色ばめる消息もせで、いとひた

めずなむありける。

「はやう、まだいと下臈にはべりし時、あはれと思ふ人はべりき。聞こえさせつるやうに、かたちなどいとまほにもはべらざりしかば、若きほどの好き心には、この人をとまりにとも思ひとどめはべらず、よるべとは思ひながら、さうぎうしくて、とかく紛れはべりしを、もの怨じをいたくしはべりしかば、心づきなく、いとかからでおいらかならましかばと思ひつつ、あまりいと許しなく疑ひはべりしもうるさくて、かく数ならぬ身を見も放たでなどかくしも思ふらむ、と心苦しき折々もはべりて、自然に心をさめらるるやうになむはべりし。この女のあるやう、もとより思ひいたらざりけることにも、いかでこの人のためにはと、なき手を出だし、後れたる筋の心をもなほ口惜しくは見えじと思ひはげみつつ、とにかくにつけてものまめやかに後見、つゆにても心に違ふこととはなくもがなと思へりしほどに、進める方と思ひしかど、とかくになびきてなよびゆき、醜きかたちをもこの人に見や疎まれむとわりなく思ひつくろひ、疎き人に見えれば面伏せにや思はむと憚り恥ぢて、みさをもてつけて、見馴るるままに心もけしうはあらずはべりしかど、ただこの憎き方一つなむ心をさめずはべりし。そのかみ思ひはべりしやう、かうあながちに従ひ怖ぢたる人なめり、いかで懲るばかりのわざしておどして、この方もすこしよろしくもなり、さがなさもやめむと思ひて、まことに憂しなども思ひて絶えぬべき気色ならば、かばかり我に従ふ心ならば思ひ懲りなむと思うたまへ得て、ことさらに情けなくつれなきさまを見せて、例の腹立ち怨ずるに、かくおぞましくはいみじき契り深くとも絶えてまた見じ、限りと思はばかくわりなきもの疑ひはせよ、行く先長く見えむと思はばつらきことありとも念じて、なのめに思ひなりて、かかる心だに失せなばいとあはれとなむ思ふべき、人並々にもなり、すこしおとなびむに添へてもまた並ぶ人なくあるべきやうなど、かしこく教へたつるかなと

ぬを、さうざうしく心やましと思ふ。馬の頭、物定め博士になりてひひらき
るたり。中將はこのことわり聞き果てむと心入れてあへしらひるたまへり。

「よろづのことによそへて思せ。木の道の匠のよろづの物を心にまかせて作
り出だすも、臨時のもてあそび物のその物と跡も定まらぬは、そばつきされば
みたるも、げにかうもしつべかりけりと、時につけつつさまを変へて今めかし
きに目移りて、をかしきもあり。大事として、まことにうるはしき人の調度の
飾りとする、定まれるやうある物を難なくし出づることなむ、なほまことの物
の上手は、さまことに見え分かれはべる。また、絵所に上手多かれど、墨がき
に選ばれて、次々にさらに劣りまさるけぢめふとしも見え分かれず。かかれど、
人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の怒れる魚の姿、唐国のはげしき獣の形、目に見
えぬ鬼の顔などのおどろおどろしく作りたる物は、心にまかせてひとときは目驚
かして、実には似ざらめどさてありぬべし。世の常の山のたたずまひ、水の流
れ、目に近き人の家居ありさま、げにと見え、なつかしくやはらいだる形など
を静かに描きまぜて、すくよかならぬ山の景色、木深く世離れて畳みなし、け
近き籬の内をば、その心しらひおきてなどをなむ、上手はいと勢ひことに、わ
ろ者は及ばぬ所多かめる。手を書きたるにも、深きことはなくて、ここかしこ
の、点長に走り書き、そこはかとなく気色ばめるは、うち見るにかどかどしく
気色だちたれど、なほまことの筋をこまやかに書き得たるは、うはべの筆消え
て見ゆれど、今ひとたびとり並べて見ればなほ実になむよりける。はかなきこ
とだにかくこそはべれ。まして人の心の時にあたりて気色ばめらむ、見る目の
情けをばえ頼むまじく思うたまへ得てはべる。そのはじめのこと、好き好きし
くとも申しはべらむ」とて近くみ寄れば、君も目覚ましたまふ。中將いみじく
信じて頬杖をつきて向かひるたまへり。法の師の世のことわり説き聞かせむ所
の心地するもかつはをかしけれど、かかるついではおのおの睦言もえ忍びとど

るやうにて世に返り見すべくも思へらず。「いで、あな悲し、かくはた思しな
りにけるよ」などやうに、あひ知れる人来とぶらひ、ひたすらに憂しとも思ひ
離れぬ男聞きつけて涙落とせば、使ふ人、古御達など、「君の御心はあはれな
りけるものを。あたら御身を」など言ふ。みづから額髪をかきさぐりて、あへ
なく心細ければ、うちひそみぬかし。忍ぶれど涙こぼれそめぬれば、折々ごと
にえ念じえず、悔しきこと多かめるに、仏もなかなか心ぎたなしと見たまひつ
べし。濁りにしめるほどよりも、なま浮かびにてはかへりて悪しき道にも漂ひ
ぬべくぞおぼゆる。絶えぬ宿世浅からで、尼にもなきて尋ね取りたらむも、や
がてその思ひ出でうらめしきふしあらざらんや。あしくもよくもあひ添ひて、
とあらむ折もかからむきざみをも見過ぐしたらむ仲こそ契り深くあはれならめ、
我も人もうしろめたく心おかれじやは。また、なのめに移ろふ方あらむ人を恨
みて気色ばみ背かむ、はたをこがましかりなむ。心は移ろふ方ありとも、見そ
めし心ざしいとほしく思はば、さる方のよすがに思ひてもありぬべきに、さや
うならむたぢろきに絶えぬべきわざなり。すべて、よろづのことなだらかに、
怨ずべきことをば見知れるさまにほのめかし、恨むべからむふしをも憎からず
かすめなさば、それにつけてあはれもまさりぬべし。多くは、わが心も、見る
人からをさまりもすべし。あまりむげにうちゆるべ見放ちたるも、心安くらう
たきやうなれど、おのづから軽き方にぞおぼえはべるかし。繋がぬ舟の浮きた
る例もげにあやなし。さははべらぬか」と言へば、中将うなづく。「さしあた
りてをかしともあはれとも心に入らむ人の、頼もしげなき疑ひあらむこそ大事
なるべけれ。わが心あやまちなくて見過ぐさば、さし直してもなどか見ざらむ
とおぼえたれど、それさしもあらじ。ともかくも、違ふべきふしあらむを、の
どやかに見忍ばむよりほかにますことあるまじかりけり」と言ひて、わが妹の
姫君はこの定めにかなひたまへりと思へば、君のうちねぶりて言葉まぜたまは

れて、人知れぬ思ひ出で笑ひもせられ、「あはれ」ともうち独りごたるるに、「何ごとぞ」などあはつかにさし仰ぎみたらむは、いかがは口惜しからぬ。ただひたふるに子めきて柔らかならむ人をとかくひきつくろひてはなどか見ざらむ。心もとなくとも直し所ある心地すべし。げにさし向ひて見むほどは、さてもらうたき方に罪ゆるし見るべきを、立ち離れてさるべきことをも言ひやり、をりふしにし出でむわざの、あだ事にもまめ事にもわが心と思ひ得ることなく、深きいたりなからむは、いと口惜しく頼もしげなき咎やなほ苦しからむ。常はすこしそばそばしく心づきなき人の、をりふしにつけて出でばえするやうもありかし」など、隈なきもの言ひも定めかねていたくうち嘆く。

「今は、ただ品にもよらじ、かたちをばさらにも言はじ、いと口惜しくねぢけがましきおぼえだになくは、ただひとへにもまめやかに静かなる心のおもむきならむよるべをぞつひの頼み所には思ひおくべかりける。あまりのゆゑよし心ばせうち添へたらむをばよろこびに思ひ、すこし後れたる方あらむをもあながちに求め加へじ。うしろやすくのどけき所だに強くは、うはべの情けはおのづからもてつけつべきわざをや。艶にももの恥ぢして、恨み言ふべきことをも見知らぬさまに忍びて、上はつれなくみさをづくり、心一つに思ひあまる時は、言はむかたなくすぎき言の葉、あはれなる歌を詠みおき、しのぼるべき形見をとどめて、深き山里、世離れたる海づらなどにはひ隠れぬるをりかし。童にはべりし時、女房などの物語読みしを聞きて、いとあはれに悲しく心深きことかな、と涙をさへなむ落としはべりし。今思ふには、いと軽々しくことさらびたることなり。心ざし深からむ男をおきて、見る目の前につらきことありとも人の心を見知らぬやうに逃げ隠れて、人をまどはし、心を見むとするほどに、長き世のもの思ひになる、いとあぢきなきことなり。「心深しや」などほめたてられて、あはれ進みぬればやがて尼になりぬかし。思ひ立つほどはいと心澄め

に輔けられ、下は上になびきて、こと広きに譲るふらむ。狭き家の内のあるじとすべき人一人を思ひめぐらすに、足らはで悪しかるべき大事どもなむかたがた多かる。とあればかかりあふさきるさにて、なのめにさてもありぬべき人の少なきを、好き好きしき心のすさびにて人のありさまをあまた見合はせむの好みならねど、ひとへに思ひ定むべきよるべとすばかりに、同じくはわが力入りをし、直しひきつくろふべき所なく、心にかなふやうにもやと選りそめつる人の、定まりがたきなるべし。かならずしもわが思ふにかなはねど、見そめつる契りばかりを捨てがたく思ひとまる人はものまめやかなりと見え、さて保たるる女のためも心にくく推し量らるるなり。されど、何か。世のありさまを見たまへ集むるままに、心に及ばず、いとゆかしきこともなしや。君達の上なき御選びにはましていかがばかりの人かは足らひたまはむ。かたちきたなげなく若やかなるほどの、おのがじしは塵もつかじと身をもてなし、文を書けどおほどかに言選りをし、墨つきほのかに心もとなく思はせつつ、またさやかにも見てしがなとすべなく待たせ、わづかなる声聞くばかり言ひ寄れど息の下にひき入れ、言少ななるがいとよくもて隠すなりけり。なよびかに女しと見れば、あまり情けにひきこめられて、とりなせばあだめく。これをはじめの難とすべし。事が中に、なのめなるまじき人の後見の方は、もののはれ知り過ぐし、はかなきついで的情けあり、をかしきに進める方なくてもよかるべしと見えたるに、またまめまめしき筋を立てて、耳はさみがちに美さうなき家刀自の、ひとへにうちとけたる後見ばかりをして、朝夕の出で入りにつけても、公私の人のたたずまひ、善き悪しきことの目にも耳にもとまるありさまを、疎き人にわざとうちまねばむやは、近くて見む人の聞きわき思ひ知るべからむに、語りも合はせばやとうちも笑まれ、涙もさしぐみ、もしはあやなきおほやけ腹立たしく、心ひとつに思ひあまることなど多かるを、何にかは聞かせむと思へば、うちそむか

にぎははしきによるべきななり」とて笑ひたまふを、「異人の言はむやうに心得ず仰せらる」と中将憎む。

「元の品、時世のおぼえうち合ひ、やむごとなきあたりの、内々のもてなしけはひ後れたらむはさらにも言はず、何をしてかく生ひ出でけむと言ふかひなくおぼゆべし。うち合ひてすぐれたらむもことわり、これこそはさるべきこととおぼえて、めづらかなることと心も驚くまじ。なにがしが及ぶべきほどならねば上が上はうちおきはべりぬ。さて、世にありと人に知られず、さびしくあらばれたらむ葎の門に、思ひの外にらうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ限りなくめづらしくはおぼえぬ。いかではたかかりけむと、思ふより違へることなむ、あやしく心とまるわざなる。父の年老い、ものむつかしげに太りすぎ、兄の顔憎げに、思ひやりことなることなき閨の内に、いといたく思ひあがり、はかなくし出でたることわざもゆゑなからず見えたらむ、片かどにてもいかが思ひの外にをかしからざらむ。すぐれて疵なき方の選びにこそ及ばざらぬ、さる方にて捨てがたきものをは」とて式部を見やれば、わが妹どものよろしき聞こえあるを思ひてのたまふにや、とや心得らむ、ものも言はず。いでや、上の品と思ふにだに難げなる世をと、君は思すべし。白き御衣どものなよらかなるに、直衣ばかりをしどけなく着なしたまひて、紐などもうち捨てて添ひ臥したまへる御火影いとめでたく、女にて見たてまつらまほし。この御ためには上が上を選り出でてもなほ飽くまじく見えたまふ。

さまさまの人の上どもを語り合はせつつ、「おほかたの世につけて見るには咎なきも、わがものとうち頼むべきを選らむに、多かる中にもえなむ思ひ定むまじかりける。をのこのおほやけに仕うまつり、はかばかしき世のかためとなるべきも、まことの器ものとなるべきを取り出ださむにはかたかるべしかし。されど、賢しとても、一人二人世の中をまつりごちしるべきならねば、上は下

「その片かどもなき人はあらむや」とのたまへば、「いとさばかりならむあたりには誰れかはすかされ寄りはべらむ。取るかたなく口惜しき際と、優なりとおぼゆばかりすぐれたるとは、数等しくこそはべらめ。人の品高く生まれぬれば、人にもてかしづかれて隠るること多く、自然にそのけはひこよなかるべし。中の品になむ、人の心々、おのがじしの立てたるおもむきも見えて、分かるべきことかたがた多かるべき。下のきざみといふ際になれば、ことに耳たたずかし」とていと隈なげなる気色なるもゆかしくて、「その品々やいかに。いづれを三つの品に置いてか分くべき。元の品高く生まれながら身は沈み、位みじかくて人げなき、またなほ人の上達部などまでなり上り我は顔にて家の内を飾り、人に劣らじと思へる、そのけぢめをばいかが分くべき」と問ひたまふほどに、左の馬の頭、藤式部の丞、御物忌に籠もらむとて参れり。世の好き者にて物よく言ひとほれるを、中将待ちとりて、この品々をわきまへ定め争ふ。いと聞きにくきこと多かり。

「なり上れどももとよりさるべき筋ならぬは、世人の思へることもさは言へどなほことなり。また元はやむごとなき筋なれど、世に経るたづき少なく、時世に移ろひておぼえ衰へぬれば、心は心としてこと足らずわろびたることども出でくるわざなめれば、とりどりにことわりて中の品にぞ置くべき。受領と言ひて、人の国のことにかかづらひ営みて、品定まりたる中にも、またきざみきざみありて、中の品のけしうはあらぬ選り出でつべきころほひなり。なまなまの上達部よりも非参議の四位どもの、世のおぼえ口惜しからず、もとの根ざし卑しからぬ、やすらかに身をもてなしふるまひたる、いとかはらかなりや。家の内に足らぬことなどはたなかめるままに、省かずまばゆきまでもてかしづけるむすめなどの、おとしめがたく生ひ出づるもあまたあるべし。宮仕へに出で立ちて、思ひかけぬ幸ひとり出づる例ども多かりかし」など言へば、「すべて

ば、「そのうちとけてかたはらいたしと思されむこそゆかしけれ。おしなべた
るおほかたのは、数ならねど、程々につけて書き交はしつとも見はべりなむ。
おのがじし恨めしき折々、待ち顔ならむ夕暮れなどのこそ見所はあらめ」と怨
ずれば、やむごとなくせちに隠したまふべきなどはかやうにおほぞうなる御厨
子などにうち置き散らしたまふべくもあらず、深くとり置きたまふべかめれば、
二の町の心安きなるべし、片端づつ見るに、「かくさまざまなる物どもこそは
べりけれ」とて、心あてにそれかかれかなど問ふなかに、言ひ当つるもあり、
もて離れたることをも思ひ寄せて疑ふもをかしと思せど、言少なにてとかく紛
らはしつとり隠したまひつ。

「そこにこそ多く集へたまふらめ。すこし見ばや。さてなむこの厨子も心よ
く開くべき」とのたまへば、「御覧じ所あらむこそ難くはべらめ」など聞こえ
たまふついでに、「女のこれはしもと難つくまじきは難くもあるかな、とやう
やうなむ見たまへ知る。ただうはべばかりの情けに手走り書き、をりふしのい
らへ心得てうちしなどばかりは随分によろしきも多かりと見たまふれど、そも
まことにその方を取り出でむ選びにかならず漏るまじきはいと難しや。わが心
得たることばかりを、おのがじし心をやりて、人をば落としめなど、かたはら
いたきこと多かり。親など立ち添ひもてあがめて、生ひ先籠れる窓の内なるほ
どは、ただ片かどを聞き伝へて心を動かすこともあめり。かたちをかしくうち
おほどき若やかにて紛るることなきほど、はかなきすさびをも人まねに心を入
るることもあるに、おのづから一つゆゑづけてし出づることもあり。見る人、
後れたる方をば言ひ隠し、さてありぬべき方をばつくろひてまねび出だすに、
それしかあらじとそらにいかかは推し量り思ひくたさむ。まことかとも見もてゆ
くに見劣りせぬやうはなくなむあるべき」とうめきたる気色も恥づかしげなれ
ば、いとなべてはあらねど、われ思し合はすることやあらむ、うちほほ笑みて、

光源氏名のみこととしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかる好きごとどもを末の世にも聞き伝へて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひける隠ろへごとをさへ語り伝へけむ人のもの言ひさがなきよ。さるは、いといたく世を憚りまめだちたまひけるほど、なよびかにをかしきことはなくて、交野の少将には笑はれたまひけむかし。

まだ中将などにものしたまひし時は、内へのみさぶらひようしたまひて、大殿には絶え絶えまかでたまふ。忍ぶの乱れやと疑ひきこゆることもありしかど、さしもあだめき目馴れたるうちつけの好き好きしさなどは好ましからぬ御本性にて、まれには、あながちに引き違へ、心尽くしなることを御心に思しとどむる癖なむあやにくにて、さるまじき御振る舞ひもうち混じりける。

長雨晴れ間なきころ、内の御物忌さし続きて、いとど長居さぶらひたまふを、大殿にはおぼつかなく恨めしく思したれど、よろづの御よそひ何くれとめづらしきさまに調じ出でたまひつつ、御息子の君たち、ただこの御宿直所の宮仕へを勤めたまふ。宮腹の中将はなかに親しく馴れきこえたまひて、遊び戯れをも人よりは心安くなれなれしく振る舞ひたり。右大臣のいたはりかしづきたまふ住み処はこの君もいとも憂くして、好きがましきあだ人なり。里にても、わが方のしつらひまばゆくして、君の出で入りしたまふにうち連れきこえたまひつつ、夜昼、学問をも遊びをももろともにして、をさをさ立ちおくれず、いくにてもまつはれきこえたまふほどに、おのづからかしこまりもえおかず、心のうちに思ふことをも隠しあへずなむ睦れきこえたまひける。

つれづれと降り暮らしてしめやかなる宵の雨に、殿上にもをさをさ人少なに、御宿直所も例よりはのどやかなる心地するに、大殿油近くて文どもなど見たまふ。近き御厨子なる色々の紙なる文どもを引き出でて、中将わりなくゆかしがれば、「さりぬべきすこしは見せむ。かたはなるべきもこそ」と許したまはね

帚

木

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文
(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

「新日本古典文学体系」版にて改行・読点修正
(<http://sksrsg.blog82.fc2.com>)

桐壺

帚木 三 (248)

空蟬 三一 (220)

夕顔 三九 (212)

若紫

末摘花 六八 (183)

紅葉賀 花宴 葵 賢木 花散里 須磨 明石 濔標

蓬生 八八 (163)

関屋 一〇三 (148)

絵合 松風 薄雲 朝顔 少女

玉鬘 一〇七 (144)

初音 一三三 (118)

胡蝶 一四三 (108)

蛍 一五七 (94)

常夏 一七〇 (81)

篝火 一八四 (67)

野分 一八七 (64)

行幸 一九九 (52)

藤袴 二二七 (34)

真木柱 二二七 (24)

梅枝 藤裏葉